熊本県文化財調査報告第 286 集

新屋敷遺跡2

－国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

熊本県教育委員会

２０１３.３

新屋敷遺跡２

－国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

熊本県教育委員会

２０１３．３

新屋敷遺跡遠景（東から）

６区南部古代面完掘状況（南西から）

７区古代面完掘状況（南東から）

６区溝跡ＳＤ２川原石出土状況（東から）

６区竪穴建物跡ＳＩ１０２かまど内遺物出土状況

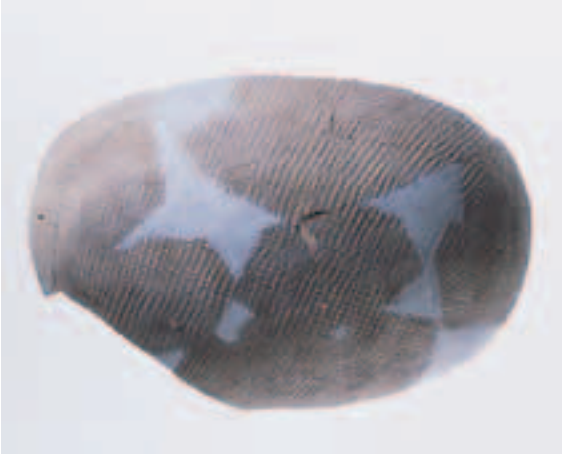
７区ＳＤ８道路使用状況（北西から）

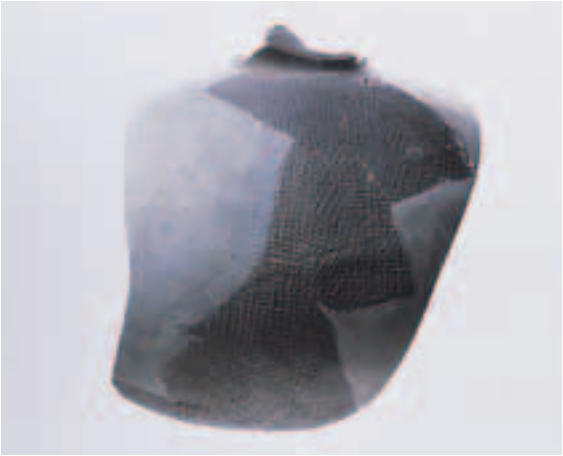
６区土層断面

６区溝跡ＳＤ２出土遺物１

６区溝跡ＳＤ２出土遺物２

６区出土鉄製品





６区溝跡出土遺物ＳＤ２（１、３、４）ＳＤ４（２）

序文

熊本県教育委員会は、白川河川改修工事に伴い、新屋敷１丁目、白川左岸側の埋蔵文化財調査を実施してまいりました。

新屋敷遺跡は、大江遺跡群に近接し、奈良時代から平安時代にかけて、西海道駅路の西、託麻国府が存在したと推定されている出水国府跡の北に位置する遺跡です。このあと、国府は二本木へ遷っていくと考えられています。

このような立地から、新屋敷遺跡は奈良、平安時代の政治的中心地の近隣の集落の様子を垣間見ることができる遺跡です。主に８世紀から９世紀にかけての建物、畑畝、道路、水路などの集落跡が見つかりました。

今回の調査によって出土した遺構、遺物により、その当時の人々の生活の様子の一端を知ることができた反面、地下に保存されていた貴重な遺構等が姿を消し、図面や写真等での記録保存となりました。

この報告が今までの周辺調査や今後調査される発掘資料と併せて、この地域における歴史的資料の一つとして活用され、皆様の埋蔵文化財に対する理解と保護のために役立てれば幸いと存じます。今後とも、皆様のご指導・ご助言を賜りますよう、お願い申し上げます。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力をいただきました国土交通省熊本河川国道事務所、熊本市教育委員会及び地元の方々、また御指導・御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成２５年３月３１日

熊本県教育長　田崎　龍一

例言

1　本書は、白川河川改修工事に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2　発掘調査は、上記工事に伴い、国土交通省熊本河川国道事務所の依頼を受けて熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、全額国土交通省熊本河川国道事務所が負担した。

3　現地調査は、６区、７区は平成２１年５月１４日～平成２２年３月３１日に実施し、水上正孝が担当した。（調査区の名称については、本文中に記載）現地での写真撮影は水上・宮本千恵子・遠山宏・吉留広・福田拓也、図面作成は左記の者と現場作業員が行った。６Ｄ区は平成２３年１１月８日～２９日に実施し、上村龍馬が担当した。現地での写真撮影は上村・横田光智・福田、図面作成は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

4　世界測地系での測量基準杭の設定は、（株）十八測量設計に委託した。

5　空中写真撮影は、九州航空（株）に委託した。

6　整理作業・報告書作成は、熊本県文化財資料室において実施した。

7　出土遺物の整理作業は、前田佳代子が担当した。

8　遺構トレースは、前田・坂本貴美子・村田千穂・立石美代子・結城あけみが行い、一部を（株）有明測量開発社、（株）九州文化財研究所に委託した。

9　遺物実測・トレースは、坂本・村田・立石・結城が行い、一部を（株）有明測量開発社に委託した。

10　鉄製品の処理は、今田里枝・大塚トシ子・小野美香・花田美佳が行った。

11　出土遺物の写真撮影は、村田百合子・上田佳奈子・蓮池千恵が行い、前田・坂本・村田（千）・立石・結城が補助した。

12　本書の執筆を水上が行い、文化財資料室長後藤克弘の指導のもとに編集を行った。編集で前田・坂本・村田（千）が補助した。

13　遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目１６６７）に保管している。

14　本書中での人名はすべて敬称を省略させていただいた。

凡例

1　発掘遺構は遺構の種別を示す以下の記号と一連の番号の組み合わせにより表記した。

ＳＡ：塀、柵列　ＳＢ：建物　ＳＣ：畑畝　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＦ：道路　ＳＧ：池

ＳＩ：竪穴建物跡　ＳＫ：土坑　ＳＰ：柱穴　ＳＳ：足場　ＳＴ：墓　ＳＸ：その他、不明遺構等

（本書で使用していない記号も含んでいる）

2　遺構名称は、６区ＳＩ１というように、区の名称の後に遺構記号と番号で表記した。以下の注意点がある。

(1)　６区は諸般の都合で遺構番号を南側は１から、北側は１０１からとした。７区は遺構番号を１から表記した。調査区を渡って残存している遺構に関しては、初出で６区ＳＤ６（７区ＳＤ１０）というように先の区の遺構名称の後に括弧書きで後の区の遺構名称を表記し、次からは６区ＳＤ６とした。

(2)　調査全体をとおして、一度遺構番号を付けたものの、調査の過程において遺構と認められないと判断した番号については空き番としている。

3　現地における土層・遺物（土器類）の色調表記は「新版標準土色帖 2004 年版」（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。

4　本書で使用している方位は、方眼北を示す。

5　本書に掲載した地図・遺構実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。

6　出土遺物実測図において以下の注意点がある。

(1)　縮尺は土器類が３分の１、３分の１で収まらない遺物については図に明記した。

(2)　出土遺物の実測図において、須恵器については、断面を黒で塗色し、その他のものは白抜きにした。

(3)　赤彩及び黒色Ａについては、実測図には表記せず、観察表に表記した。

(4)　土師器甕等の内面の調整で、ヘラケズリは矢印で方向を示した。

本文目次

巻頭図版
序文
例言・凡例
目次

第１章　序章
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の契機となる白川河川改修工事について …… 1
第３節　調査組織 …… 2
第４節　発掘調査の経過 …… 4

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 15
第２節　歴史的環境 …… 15

第３章　調査の方法
第１節　調査区・グリッド設定 …… 23
第２節　基本土層概略 …… 23
第３節　調査方法 …… 23
第４節　調査の概要 …… 23

第４章　調査の成果
第１節　基本土層 …… 29
第２節　遺構・遺物 …… 30
１．６区 …… 30
（1）古代
（2）近現代
２．７区 …… 101
（1）古代
（2）近現代
第３節　遺物観察表 …… 124

第５章　自然科学分析調査報告 …… 140
―　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム　松下孝幸・松下真実　―

第６章　まとめ …… 155

写真図版
あとがき
報告書抄録

挿図目次

第１図　新屋敷遺跡周辺遺跡地図（1/25000）　17
第２図　新屋敷遺跡内調査地点図（縮尺任意）　19
第３図　新屋敷遺跡全調査区位置図（縮尺任意）　24
第４図　６区古代主要遺構配置図（1/300）　25
第５図　６区中世以降主要遺構配置図（1/300）　26
第６図　７区古代主要遺構配置図（1/200）　27
第７図　７区中世以降主要遺構配置図（1/200）　28
第８図　調査区土層断面図及び土層模式図　29
第９図　６区古代遺構配置図１（1/100）　31
第10図　６区古代遺構配置図２（1/100）　32
第11図　６区古代遺構配置図３（1/100）　33
第12図　６区古代遺構配置図４（1/100）　34
第13図　６区古代遺構配置図５（1/100）　35
第14図　ＳＩ１平面・断面図　36
第15図　ＳＩ１かまど平面・断面図　37
第16図　ＳＩ１０１平面・断面図　38
第17図　ＳＩ１０２・１０４・１０６平面・断面図　39
第18図　ＳＩ１０２・１０４かまど平面・断面図　40
第19図　ＳＩ１０３平面・断面図　41
第20図　６Ｄ区ＳＩ０１・ＳＩ０２平面・断面図　42
第21図　６区出土遺物実測図（1）　44
第22図　ＳＡ１平面・断面図　45
第23図　ＳＤ３・ＳＫ５～９・１１平面・断面図　47
第24図　ＳＫ４・１６・１７平面・断面図　48
第25図　ＳＫ１・１８・１９平面・断面図　49
第26図　ＳＫ１１２・１１３・１０５平面・断面図　49
第27図　６区出土遺物実測図（2）　50
第28図　ＳＤ１土層断面図（1/100）　53
第29図　ＳＤ２道路状遺構配置図及び最下点断面図　55
第30図　ＳＤ２土層断面図（1/100）　56
第31図　ＳＤ２・ＳＦ１平面・断面図　57
第32図　６区出土遺物実測図（3）　58
第33図　ＳＴ１平面・断面図　59
第34図　６区出土遺物実測図（4）　59
第35図　ＳＤ２獣骨出土分布図及び状況図　60
第36図　６区出土遺物実測図（5）　61
第37図　６区出土遺物実測図（6）　62
第38図　６区出土遺物実測図（7）　64
第39図　６区出土遺物実測図（8）　66
第40図　６区出土遺物実測図（9）　67
第41図　６区出土遺物実測図（10）　68
第42図　６区出土遺物実測図（11）　70
第43図　６区出土遺物実測図（12）　71
第44図　６区出土遺物実測図（13）　72
第45図　６区出土遺物実測図（14）　74
第46図　６区出土遺物実測図（15）　75
第47図　ＳＤ４平面・断面図　77
第48図　ＳＤ６平面・断面図　80
第49図　７区ＳＤ１０平面・断面図　81
第50図　ＳＤ７・ＳＤ８平面・断面図　83
第51図　６区出土遺物実測図（16）　84
第52図　６区出土遺物実測図（17）　85
第53図　ＳＣ１・ＳＣ２平面・断面図　87
第54図　６区出土遺物実測図（18）　88
第55図　ＳＸ１・２・３・４平面・断面図　89
第56図　６区出土遺物実測図（19）　91
第57図　６区出土遺物実測図（20）　92
第58図　ＳＢ２平面・断面図（1/60）　95
第59図　ＳＢ１平面図（1/100）　96
第60図　ＳＢ１断面図（1/100）　97
第61図　ＳＢ４平面図（1/60）　98
第62図　ＳＢ４断面図（1/60）　99
第63図　６区防空壕跡平面・断面図　100
第64図　７区古代遺構配置図１（1/100）　102
第65図　７区古代遺構配置図２（1/100）　103
第66図　ＳＩ１平面・断面図　104
第67図　ＳＩ２・ＳＩ１２平面・断面図　105
第68図　ＳＩ３～６・８・11・13平面・断面図　107
第69図　ＳＩ３かまど平面・断面図　108
第70図　ＳＩ６かまど平面・断面図　108
第71図　ＳＩ４・ＳＩ１１かまど平面・断面図　109
第72図　ＳＩ８かまど平面・断面図　110
第73図　ＳＩ９平面・断面図　112
第74図　７区出土遺物実測図（1）　112
第75図　ＳＢ３平面・断面図　113
第76図　ＳＫ２９・ＳＫ３４平面・断面図　114
第77図　７区出土遺物実測図（2）　114
第78図　ＳＤ７・ＳＤ８平面・断面図　116

第79図　ＳＤ８内硬化面移行範囲図（1/150）　…… 117
第80図　ＳＤ９平面・断面図　…… 119
第81図　７区出土遺物実測図（3）　…… 120
第82図　７区出土遺物実測図（4）　…… 121
第83図　７区出土遺物実測図（5）　…… 121

表目次

第１表　新屋敷遺跡周辺遺跡一覧　…… 18
第２表　新屋敷遺跡内調査地一覧　…… 20
第３表　６区出土遺物観察表　…… 124
第４表　７区出土遺物観察表　…… 136

巻頭目次

1　新屋敷遺跡遠景（東から）
2　６区南部古代面完掘状況（南西から）
3　７区古代面完掘状況（南東から）
4　６区溝跡ＳＤ２川原石出土状況（東から）
5　６区竪穴建物跡ＳＩ１０２かまど内遺物出土状況
6　７区ＳＤ８道路使用状況（北西から）
7　６区土層断面
8　６区溝跡ＳＤ２出土遺物１
9　６区溝跡ＳＤ２出土遺物２
10　６区出土鉄製品
11　６区溝跡出土遺物（ＳＤ２、ＳＤ４）

写真目次

図版１　６区建物基礎地業跡ＳＢ２出土状況
６区ＳＩ１硬化面出土状況
６区ＳＩ１かまど粘土残存状況
６区ＳＩ１完掘状況
６区ＳＩ１０１完掘状況
６区ＳＩ１０２硬化面出土状況
６区ＳＩ１０２かまど内遺物・粘土出土状況
６区ＳＩ１０２完掘状況

図版２　６区ＳＩ１０４機能面完掘状況
６区ＳＩ１０４鉄製品出土状況
６区ＳＩ１０６硬化面出土状況
６区ＳＩ１０６完掘状況
６区ＳＩ１０３硬化面出土状況
６区ＳＩ１０３かまど粘土残存状況
６区ＳＩ１０３完掘状況

図版３　６区ＳＤ２内道路状遺構ＳＦ１出土状況（遠景）
６区ＳＤ２内道路状遺構ＳＦ１出土状況（近景）

図版４　６区ＳＤ２内土壙墓ＳＴ１人骨出土状況
６区ＳＤ２埋土内獣骨出土状況
６区ＳＤ２埋土内遺物出土状況
６区ＳＤ２内道路状遺構検出状況

図版５　６区ＳＤ４付近連続硬化面出土状況１
６区ＳＤ４付近連続硬化面出土状況２
６区ＳＤ４完掘状況

図版６　６区ＳＤ６鉄・マンガン層出土状況
７区ＳＤ１０（６区ＳＤ６）鉄・マンガン層出土状況
６区ＳＤ６内柵列完掘状況
７区ＳＤ１０（６区ＳＤ６）土層断面

図版７　６区畝状遺構ＳＣ１出土状況
６区畝状遺構ＳＣ２検出状況
６区建物基礎地業跡ＳＢ１出土状況
６区建物基礎地業跡ＳＢ３出土状況
６区建物基礎地業跡ＳＢ４出土状況
６区建物基礎地業跡ＳＢ４内井戸ＳＥ１出土状況
６区防空壕跡完掘状況
７区ＳＩ２硬化面出土状況

図版８　７区ＳＩ２機能面完掘状況
７区ＳＩ１２かまど土層断面
７区ＳＩ１２完掘状況
７区ＳＩ３かまど出土状況
７区ＳＩ１１かまど粘土出土状況

７区ＳＩ８完掘状況
７区ＳＩ４かまど粘土残存状況
７区ＳＩ５硬化面出土状況

図版９　７区ＳＩ３～６・ＳＩ８・ＳＩ１１・ＳＩ１３完掘状況
７区ＳＩ９硬化面出土状況
７区ＳＤ８内道路状遺構初期機能面出土状況
７区掘立柱建物ＳＢ３完掘状況
７区ＳＤ９完掘状況
７区建物基礎地業跡ＳＢ１出土状況
７区建物基礎地業跡ＳＢ２出土状況
７区井戸ＳＥ１出土状況

図版 10　６区出土遺物　1
図版 11　６区出土遺物　2
図版 12　６区出土遺物　3
図版 13　６区出土遺物　4
図版 14　６区出土遺物　5
図版 15　６区出土遺物　6
図版 16　６区出土遺物　7
図版 17　６区出土遺物　8
図版 18　６区出土遺物　9
図版 19　６区出土遺物　10
図版 20　６区出土遺物　11
図版 21　６区出土遺物　12
図版 22　６区出土遺物及び未掲載遺物　13
図版 23　７区出土遺物　1
図版 24　７区出土遺物　2
図版 25　７区出土遺物及び未掲載遺物　3

第１章　序章

本書は、白川河川改修工事に伴い、熊本県熊本市中央区新屋敷１丁目１－１１ほか６筆に所在する「新屋敷遺跡」を熊本県教育委員会が２００９年（平成２１年）から２０１０年（平成２２年）に発掘調査し、その成果を取りまとめたものである。

新屋敷遺跡の所在する熊本平野は白川の下流域にあたり、熊本市の中心地に位置する。白川は阿蘇中央火口丘の一つである根子岳を源として阿蘇カルデラの南の谷（南郷谷）を流下し、同じく阿蘇カルデラの北の谷（阿蘇谷）を流れる黒川と立野で合流した後、溶岩台地を西に流下し、熊本平野を貫流して有明海に注ぐ、流域面積４８０km²、幹川流路長７４kmの一級河川である。上流域には、これまで何度となく噴火を繰り返し、大量の火山灰を噴出して、時には流域に甚大な被害を及ぼしてきた阿蘇活火山が位置している。

流域はジョーロ型になっており、流域の約８０％を占める上流域の阿蘇カルデラは、外輪山と火口原及び中央火口丘群を形成して草原及び田畑が多く、また、細長い中流域は河岸段丘及び洪積台地上に田畑が多く、下流域は扇状地及び沖積平野で熊本市街地が広がり、河口域は水田地帯となっている。

流域の地質は、上流域では阿蘇の火山活動によって生成された阿蘇溶岩を基盤とし、地表にはヨナと呼ばれる火山灰土が厚く堆積しており、中流域は段丘砂礫層が黒色ロームで、下流域は沖積層で覆われている。

新屋敷遺跡は標高約１４～１５m、遺跡の北東で蛇行する白川の流れが南西に直進する流域の左岸側に位置する。白川下流域は現在河川堤防の整備が進んできているが、大雨の際には河川氾濫が心配される地域である。

第１節　調査に至る経緯

熊本市中央区新屋敷２丁目から１丁目の白川左岸において、国土交通省熊本河川国道事務所による河岸掘削工事と築堤工事が計画された。工事予定地は新屋敷遺跡の南西端側の白川沿いであり、主に、古代～中世の遺跡を包蔵することが予想されたため、平成１５年５月２７日、国土交通省熊本河川国道事務所から熊本県教育庁文化課に埋蔵文化財確認調査が依頼された。これを受けて平成１６年２月１７日から３月１０日にかけて確認調査を行ったところ、古代の埋蔵文化財の残存が確認された。よって、国土交通省熊本河川国道事務所と文化課の間で協議し、平成１７年より、工事によって遺跡が破壊される区域について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

その後、工事の進捗とともに平成１８年６月１３日、平成２１年１月２２日に埋蔵文化財確認調査が依頼された。これを受けて平成１８年９月１１日、１０月２４日、平成１９年２月２７日、２８日、平成２１年２月２日、平成２１年８月１８日に確認調査を行ったところ、建物基礎に破壊された範囲が一部あったが、古代の埋蔵文化財の残存が確認された。国土交通省熊本河川国道事務所と文化課の間での協議の結果、工事によって遺跡が壊される区域について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の契機となる白川河川改修工事について

白川上流域の阿蘇地方は全国的にも雨の多い豪雨地帯である。降雨は夏期に集中し、梅雨前線による洪水が多い。特に流域面積の約８０％を占める上流域（阿蘇カルデラ）の降水量が多いうえに、雨に流されやすい火山灰土（ヨナ）を多量に含んで濁流となりやすい。

また、中流部の河床勾配がおおむね１／１００～１／３００と他の河川と比べて急であり、扇状地である熊本平野まで一気に洪水が流下することや、熊本市街地を中心とする下流域では川幅が狭いことから、濁流によって多大な洪水被害が発生しやすいといった特徴がある。

昭和２８年６月２６日（１９５３．６．２６）の大洪水では、阿蘇地方各所で山崩れが起き、火山基層を覆う「ヨ

ナ」が洪水で流されてきて熊本市内で氾濫、堆積し、かつてない甚大な被害を被った。

この大水害を契機に、翌昭和２９年（１９５４）、「白川改修基本計画」が国により策定され、昭和３１年（１９５６）にはこの計画に基づき白川の改修工事が、左岸は熊本市大江町渡鹿より河口、右岸は熊本市黒髪町より河口に至る区間について始まった。主な改修工事は子飼、大江地区の特殊堤工事、洪水の阻害となった橋の改築工事、下流部における堆積土砂の浚渫、小島捷水路工事などである。この間、昭和４２年（１９６７）に「白川改修基本計画」に基づいた「白川水系工事実施基本計画」が策定され、さらに、熊本市を中心とする市街地の拡大、土地利用の高度化が進み、資産の集中が更に進んだことから、昭和５５年3月（１９８０．３）には、「白川水系工事実施基本計画」を全面的に改定した。

その後、昭和５５年（１９８０）８月３０日の洪水の激甚災害対策特別緊急事業により、左岸は十禅寺地区から世安地区を、右岸は蓮台寺地区から二本木地区を対象区間として３ヵ年の緊急的な改修が行われた。その後も築堤工事などを行いながら、流下能力の増大を図ってきたが、平成２年（１９９０）黒川で洪水・土石流が発生し、下流側の熊本市街部でも氾濫被害をもたらした。

熊本市街部での治水の問題点は、白川が天井川になっており、洪水時の水位は周辺の地盤より高い位置を流れ、十分な川幅も確保されていないため洪水氾濫の可能性が高く、一旦氾濫すると広範囲に氾濫水が流れ込み、都市部に壊滅的な被害をもたらす事である。

調査区が存在する明午橋から大甲橋間は、熊本の「森の都」にふさわしい景観を残す所で、樹木が両岸に繁茂しており、川面に映しだされる樹木や立田山などと相まった景観や公園が熊本市民らから親しまれているところである。しかし、この区間は特に川幅が狭く、堤防も整備されておらず、治水上非常に危険な区間となっており、熊本市中心部を浸水被害から守るうえで重要な箇所となっている。国土交通省は治水と環境の調和を図るべく、用地幅を小さくできる自立式構造の特殊堤を基本とし、堤防のデザインや水辺づくり、樹木の配置について住民の意向を採用しながら検討し、治水整備を進めているところである。

第３節　調査組織

本工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となり、熊本市教育委員会の協力を得て実施している。また、調査に伴い関係機関の方々より各種の助言、指導も得ている。

以下、当課の調査体制を記すとともに芳名を記し感謝申し上げたい。（敬称略、役職は当時）

平成１５年度（２００３）確認調査

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　成瀬烈大（文化課長）
島津義昭（教育審議員兼課長補佐）

調査統括　高木正文（主幹兼調査第１係長）

調査事務局　吉田　惠（課長補佐）
欄杭正義（主幹兼総務係長）
天野寿久（主任主事）
杉村輝彦（主事）

調査担当　岡本真也（参事）

平成１８年度（２００６）確認調査

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　梶野英二（文化課長）
江本　直（課長補佐）

調査統括　高木正文（課長補佐兼調査第１係担当）

調査事務局　吉田　惠（課長補佐）
高宮優美（主幹兼総務係長）
塚原健一（参事）
小谷仁志（主事）

調査担当　坂口圭太郎（参事）
水上正孝（文化財保護主事）
遠山　宏（非常勤嘱託職員）
手柴智晴（非常勤嘱託職員）

平成２０年度（２００８）確認調査

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　米岡正治（文化課長）
江本　直（課長補佐）
調査統括　高木正文（課長補佐兼調査第１係担当）
調査事務局　宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
川上勝美（主幹兼総務係長）
山田京子（参事）
高松克行（主任主事）
調査担当　坂口圭太郎（参事）
橋口剛士（非常勤嘱託職員）

平成２１年度（２００９）確認調査・本調査

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　米岡正治（文化課長）
木﨑康弘（課長補佐）
調査統括　村﨑孝宏（文化財調査第１係長）
調査事務局　宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
辛川雅弘（主幹兼総務係長）
山田京子（参事）
高松克行（主任主事）
調査担当　水上正孝（文化財保護主事）
宮本千恵子（非常勤嘱託職員）
吉留　広（非常勤嘱託職員）
遠山　宏（非常勤嘱託職員）
福田拓也（非常勤嘱託職員）

平成２３年度（２０１１）本調査・調査報告書作成

調査・整理主体　熊本県教育委員会
調査・整理責任者　小田信也（文化課長）
調査・整理統括　村﨑孝宏（文化財調査第１係長）
坂田和弘（参事・文化財資料室長）
調査・整理事務局　川上勝美（課長補佐）
水元敬浩(高校教育課主幹兼総務係長)
山田京子（高校教育課参事）
松島英二（高校教育課主任主事）
調査担当　上村龍馬（文化財保護主事）
横田光智（非常勤嘱託職員）
福田拓也（非常勤嘱託職員）
整理担当　水上正孝（文化財保護主事）
前田佳代子（非常勤嘱託職員）

平成２４年度（２０１２）調査報告書作成

整理主体　熊本県教育委員会
整理責任者　小田信也（文化課長）
西住欣一郎（課長補佐）
整理統括　村﨑孝宏（文化財調査第１係長）
後藤克弘(文化財保護主事･文化財資料室長)
整理事務局　川上勝美（課長補佐）
中津幸三（施設課課長補佐兼総務係長）
稲本尚子（施設課参事）
天草英子（施設課主任主事）
整理担当　水上正孝（文化財保護主事）
前田佳代子（非常勤嘱託職員）

調査助言・指導及び調査協力者

新屋敷１丁目の方々
国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所
熊本市教育委員会
熊本市立白川小学校

調査・整理に伴う業務委託先

４級基準点測量及びメッシュ杭設置業務
株式会社十八測量設計
空中写真撮影業務
株式会社九州航空
遺構実測業務（一部）
株式会社埋蔵文化財サポートシステム
出土遺物実測及びデジタルトレース業務（一部）
株式会社有明測量開発社
遺構実測図デジタルトレース業務（一部）
株式会社有明測量開発社

第４節　発掘調査の経過

現地調査は、６区は平成２１年５月１４日～１２月４日、平成２３年１１月８日～２９日、７区は平成２１年１２月７日～平成２２年３月３１日に実施した。その間の経過は以下のとおりである。（調査日誌より抜粋）

調査日誌

平成２１年度（2009 年）

６区

５月１４日　６Ａ区、表土剥ぎ開始。調査機材搬入、調査作業員召集。撹乱撤去と南西側調査区境界に６Ａトレンチ１、北西側調査区境界に６Ａトレンチ２掘削開始。

５月１５日　６Ａ区、表土剥ぎ２日目。表土下焼土層下面から近現代の建物基礎と思われる石列が出土したため、表土剥ぎの深度を石列の上面までにする。

５月１８日～２０日　６Ａ区、調査区の清掃を行い、撹乱を掘削、中央部の石列を検出する。

５月２１日　６Ａ区、撹乱掘削。村﨑係長、長谷部参事、坂田資料室長来跡。石列を見てもらい記録することに決定する。

５月２２日　６Ａ区、撹乱掘削。検出石列をＳＢ１とする。清掃後集石配置状況を写真撮影する。

５月２５日　６Ａ区、ＳＢ１個別の石列の出土状況を写真撮影する。撹乱掘削。

５月２６日　６Ａ区、ＳＢ１石列清掃、出土状況写真撮影。撹乱掘削。村﨑係長、文化係前川補佐、溝辺指導主事来跡。ＳＢ１石列を見られる。石の間の埋土に煉瓦の粉、焼土等が混じることから、戦後すぐの建物ではないかとの助言を頂いた。

５月２７日　雨のため調査中止。

５月２８日　６Ａ区、ＳＢ１の実測開始。北西側６Ａトレンチ２掘削で３層が出土しない場所があり、溝の残存の可能性が考えられる。

５月２９日　６Ａ区、ＳＢ１実測。平面図が終了した石列を半截し、断面を写真撮影する。調査区北西側で１層の下に残存する砂層を掘削する。

６月１日　６Ａ区、ＳＢ１実測、半截し、断面を写真撮影。溝辺指導主事、文化財保存整備委員の西島氏来跡。石列を見られる。明治初期、蔵の床一面に石を敷いてあった事例があり、防湿目的ではないかとのご意見頂く。白川小織田校長先生より、調査区に以前建っていた武田邸は幕末の国学者、中島広足の屋敷であり、広足の業績を伝えるレリーフが小学校に残っていることを教えて頂く。

６月２日　６Ｂ区、表土剥ぎ開始。焼土層下面から集石が出土したため、そのレベルで全体的に掘り下げていく。６Ａ区、ＳＢ１実測、半截し写真撮影する。

６月３日　雨のため調査中止。

６月４日　６Ｂ区、表土剥ぎ２日目。南西側は３層が出土し、その上面に集石が残存する。中央から北東側は３層が出土せず、焼土層の下で褐灰色の砂の塊が多く入る層の上面に石列、井戸等が出土する。

６月５日　６Ａ区、石列半截後写真撮影、断面実測。６Ｂ区、清掃後、撹乱掘削、石列を清掃する。

６月８日　６Ｂ区、石列清掃し、ＳＢ２、ＳＢ３、ＳＢ４のプランで写真撮影をする。

６月９日　６Ｂ区、石列清掃後、個別の集石を撮影する。ＳＢ２、ＳＢ３石列実測を始める。
ＳＢ２は石の間に瓦等は混じらないが、ＳＢ３、ＳＢ４は瓦、コンクリート塊が混じる。ＳＢ２に比べてＳＢ３、ＳＢ４は新しいと思われる。６Ａ区ＳＢ１半截後写真撮影し、断面実測する。

６月１０日　雨のため調査中止。

６月１１日　６Ａ区、ＳＢ１を半截し撮影する。断面図を取り終わった石列は石を外していく。６Ｂ区、撹乱掘削。ＳＢ２、ＳＢ３平面図実測する。ＳＢ４に伴う井戸、ＳＢ４石列個別の写真撮影をする。

６月１２日　６Ａ区、ＳＢ１石列を実測、半截し完掘する。６Ｂ区、撹乱掘削。ＳＢ２、ＳＢ３の石列を実測する。

６月１５日　６Ａ区、ＳＢ１石列の実測、半截、完掘する。６Ｂ区、中央から北東側は５区の近世の大

溝ＳＤ１４の延長と考え（ＳＤ１）、そのへりを確認するために、６Ｂトレンチ１、６Ｂトレンチ２を掘削する。６Ｂトレンチ１では地表面より７０㎝、トレンチ２では地表面より２ｍ程下から、へりと思われる暗オリーブ褐色土が出土する。ＳＢ２、ＳＢ３平面の実測が終了した石列は半截していき、半截状況を写真撮影する。

６月１６日　６Ａ区、ＳＢ１石列半截、写真撮影。断面を実測し完掘する。６Ｂ区、撹乱掘削、ＳＢ４石列実測、ＳＥ１内部掘削。

６月１７日　６Ａ区、ＳＢ１石列実測がほぼ終了し、完掘する。完掘状況撮影のため南東側壁面清掃。６Ｂ区、ＳＢ３、ＳＢ４石列を半截し写真撮影。

６月１８日　６Ａ区、清掃しＳＢ１完掘状況写真撮影をする。その後個別石列の完掘状況を撮影する。防空壕実測。６Ｂ区、ＳＢ２、ＳＢ４石列実測。

６月１９日　６Ａ区、防空壕完掘、清掃後写真撮影する。ＳＢ５全景完掘状況撮影。北西側壁断面実測。防空壕完掘で柱痕、側溝が検出される。６Ｂ区、ＳＢ３清掃後全景完掘状況写真撮影。ＳＢ３石列個別完掘状況撮影。

６月２２日　雨の予報のため調査中止する。

６月２３日　６Ａ区、焼土層下の砂層を掘り下げる。６Ｂ区、ＳＢ３、ＳＢ４実測。午後より雨のため調査中止。

６月２４日　６Ａ区、焼土層下の層を全体的に掘り下げる。調査区北側と調査区南側で３層土を確認しているが、６Ａトレンチ２で３層土が出土しない範囲があり、中央部やや北側（45、46ｋ・ℓ・ｍ・グリッド付近）で東西方向の溝（ＳＤ２）があると考える。６Ｂ区、ＳＢ２清掃後全景写真撮影。

６月２５日　６Ａ区、ＳＤ２範囲、1’－２層掘り下げ。調査区北西部断面、防空壕断面実測。６Ｂ区、ＳＢ３、ＳＢ４石列平面、断面実測。

６月２６日　６Ａ区、ＳＤ２範囲、1’－２層、1’－３層掘り下げ。６Ｂ区、撹乱範囲実測。

６月２９日～７月１日　雨のため調査中止。

７月２日　６Ａ区、ベルトコンベア設置。ＳＤ２、1’－３層の掘り下げ。防空壕実測。

７月３日　６Ａ区、ＳＤ２、1’－３層の掘り下げ。６Ｂ区、ＳＢ４石列の清掃と実測、ＳＢ４の石列は石を置いて突き固めたような感じで掘り込みが分からない。

７月６日　雨のため調査中止。

７月７日　６Ａ区、1’－３層上で検出を行うが、遺構は見当たらない。1’－４層掘り下げを行う。６Ｂ区、ＳＢ４実測。

７月８日　６Ａ区、45ℓ・グリッド付近にＳＤ２の東西と南北のベルトを残すようにする。1’－４層掘下げ。６Ｂ区、ＳＢ４石列実測。

７月９日　６Ａ区、1’－４層掘り下げ。その下の層が東側は２層黒褐色土で西側は１層暗褐色土である。土層の堆積が斜めになっているようである。南側は１層下が３層土で２層の堆積は見られない。６Ｂ区、ＳＢ４実測。

７月１０日　係会議のため調査中止。

７月１３日　６Ａ区、1’－５層上面で検出を行う。土坑３基検出する。調査区東半分は河川の氾濫と思われる堆積物が残存する。下層との境が不明であったため、東西ベルトに沿ってトレンチ４を掘削する。また、溝の埋土堆積状況の確認のため、トレンチ３を掘削する。６Ｂ区、ＳＤ１範囲43ｎ・グリッド付近を１５㎝程掘り下げる。

７月１４日　６Ａ区、２層45ℓ・グリッド付近を中心に掘り下げ。ＳＫ１、ＳＫ２、ＳＫ３を半截、実測。1’－５層下北西側に青灰色砂層が残存する。６Ｂ区、43ｎ・グリッド付近の焼土層を掘り下げ。撹乱断面から東側半分は溝などで３層が残っていない可能性あり。

７月１５日　６Ａ区、1’－５層掘り下げ。ＳＫ１、ＳＫ２、ＳＫ３実測、写真撮影。６Ｂ区、全面清掃、ＳＢ４全景完掘写真、ＳＢ４個別土坑撮影、焼土層掘削。

７月１６日　６Ａ区、1’－５層掘り下げ。45ℓ・ア・イ・グリッド付近で土師器、須恵器が多く出土する。６Ｂ区、中央部を横断する撹乱を延ばしてトレンチ５を掘る。断面からＳＤ１を埋めた後に溝を掘った形跡がある。北東部焼土層掘り下げ。

７月１７日　６Ａ区、1’－５層掘り下げ。北側の土層断面より土層の検討を行い、1’－４層を従来の基

本層序の１－２層、１’－５層を２層と訂正する。６Ｂ区、42ｎ・グリッド付近の焼土層の掘り下げを行う。ＳＢ４石列より２０㎝程掘り下げたレベルで集石が出土する。

７月２１日～２２日　雨のため調査中止。

７月２３日　６Ａ区、45、46ｍ・グリッド付近、２層と青灰色砂層の掘り下げ、トレンチ３を南側に拡張する。６Ｂ区、焼土層掘り下げ。ＳＥ１とＳＥ２付近の清掃後、出土状況の写真撮影を行う。元課長補佐高木正文氏来跡。

７月２４日　雨のため調査中止。

７月２７日　６Ａ区、２層の掘り下げ後、清掃し、遺構検出するが、特に遺構は検出できなかった。６Ｂ区、ＳＢ４付近、42、43ｏ・グリッド付近の焼土層の掘り下げ。木﨑補佐、熊本大学埋蔵文化財調査センター大坪志子氏来跡。

７月２８日　６Ａ区、３層直上まで掘り下げ、清掃、一部遺構検出。青灰色砂層を掘り下げると、46ｋ・グリッド付近で畑畝と思われる遺構が出土する。６Ｂ区、北東部清掃を行い溝の重なりを検出するが、あまりはっきりとはしない。

７月２９日　６Ａ区、45ℓ・ア・エ・グリッド付近の青灰色砂層を掘削、砂層からは遺物は出土しないが、その下の上層から土師器・須恵器の土器片が出土する。46ℓ・ア・エ・グリッドの２層を掘削する。長谷部参事来跡。先日検出した畑畝上部から出土した土器を見てもらう。８世紀後半とのことである。

７月３０日　６Ａ区、昨日と同様、青灰色砂層、２層掘削、その後清掃し、溝の立ち上がりを検出するがはっきりせず、６Ａトレンチ２を掘り下げ、立ち上がりの位置を確認する。６Ｂ区、全体的に焼土層を掘り下げる。宮崎参事来跡、畑畝を見てもらい、古代で間違いないとのことであった。今後畑畝のサンプリング、ウォーターフローテーションを行い、種子の検出を行う予定。

７月３１日　現場説明会準備のため周辺と調査区内清掃を行う。６Ａ区、北西部遺構検出状況、古代畑畝の写真撮影。６Ｂ区、溝検出状況写真撮影。

８月１日　夏休み体験発掘見学会。参加者６２名。

８月３日　係会議のため調査中止。

８月４日　６Ａ区、ＳＤ２の調査区南西側壁面にトレンチ８を掘削、トレンチ３を掘り下げ、溝の範囲を確認する。トレンチ８からは大量の遺物が出土する。６Ｂ区、ＳＤ１の範囲を確定するために南側にトレンチ９を掘削、中央部のトレンチ５の掘り下げを行う。

８月５日　６Ａ区、トレンチ３、トレンチ８掘り下げ。トレンチ８でＳＤ２の底を検出、トレンチ３は１５０㎝程掘り下げたが、底まで届かなかった。途中獣骨が出土する。６Ｂ区、42、43ｍ・グリッド付近を３層上面まで掘り下げる。ＳＤ１内の溝の切り合いを確かめるために、42ｎ・ア・イ・グリッドにトレンチ１０を掘削。切り合いは無いことを確認する。

８月６日　６Ａ区、ＳＤ２－１層埋土掘り下げ。２層より下の土層表記をＳＤ２－１層とする。畑畝（ＳＣ１）実測。６Ｂ区、北西部清掃、遺構検出。トレンチ５拡張。ＳＥ２実測。ＳＤ１土層断面（トレンチ５）、北西部検出状況写真撮影。坂田資料室長、熊本大学埋蔵文化財調査センター甲本眞之氏来跡。坂田室長には獣骨の取り扱い、甲本氏には畑畝のサンプリング法についてご教授頂く。

８月７日　６Ａ区、ＳＤ２－１を掘削し、ＳＤ２－２層上面で揃える。ＳＩ掘り下げ。６Ｂ区、ＳＥ２、トレンチ５、トレンチ１０断面実測。ＳＥ２半截状況、トレンチ１０（ＳＤ１）土層断面写真撮影。

８月１０日　６Ａ区、ＳＤ２－１層掘り下げ、畑畝のサンプリング、畑畝土層断面、ＳＩ１粘土塊拡散状況実測、写真撮影。６Ｂ区、ＳＤ１掘り下げ。ＳＥ２土層断面写真撮影。

８月１１日　６Ａ区、ピット半截、完掘。ＳＫ４、ＳＫ５、ＳＫ６、ＳＫ７、ＳＤ３掘削。ＳＤ３は幅８０㎝程の溝のような遺構で土師器杯の完形に近いものが２点出土している。トレンチ４を下方に拡張し基盤面を確認すると、トレンチ３付近で深くなる。溝の中心になるようにベルトを残したのだが、中心からずれている。

８月１２日　６Ａ区、ＳＤ２－２層掘り下げ。村﨑係長、長谷部参事来跡。６Ｂ区、ＳＤ１の調査の進め方

について、トレンチから流路であること、遺物は江戸期に埋まったものであることから、調査の期間を考えてトレンチの断面は取るが、無理に完掘しなくともよいとの指示を頂いた。

８月１３日～１４日　盆休

８月１７日　６Ａ区、45ℓ・グリッド付近、ＳＤ２－２層掘り下げ。土師器、須恵器が大量に出土する。６Ｂ区、ＳＫ１０１、ピット半截、土層断面実測し写真撮影する。ＳＥ２完掘状況写真撮影。（混乱を避けるため６Ｂ区の遺構は１０１から番号を付けるようにする。）

８月１８日　６Ａ区、ＳＤ２－２層掘り下げ。南側に細長い溝状の掘り込みで並ぶ遺構が検出され、畑畝（ＳＣ２）ではないかと思われる。ＳＤ３実測。ピット半截、土層断面写真撮影。

８月１９日　６Ａ区、ＳＤ２－２層掘り下げ、清掃、遺構検出。ＳＤ３、ＳＫ９平面図実測。遺物の点上げ。畑畝断面、ＳＤ２－３層上面検出状況、遺物出土状況、ＳＫ９断面、ＳＤ２ベルト写真撮影。ＳＤ２東側、46ｍ・エ・グリッド付近でＳＤ４を検出、大量の土器片が出土する。６Ｂ区、トレンチ５深掘部実測。

８月２０日　６Ａ区、ＳＤ２－３層、ＳＤ４掘り下げ、ＳＩ１埋土掘削、ＳＣ２完掘。ＳＤ２ベルト土層断面（南北、東西）、ＳＫ９、ＳＫ１０、ＳＫ１１土層断面、ＳＤ４実測。

８月２１日　６Ａ区、ＳＤ２－３層、45ℓ・イ・グリッドを局部的に掘り下げる。３層の堆積は５０㎝以上であるが、このグリッドだけであり、西から北へは浅くなる。ＳＤ４は東西方向を向き、土師器、須恵器の大きな破片が出土する。南側の立ち上がり部分には石が敷き詰められているように出土、北側立ち上がり部分には硬化面のような土の硬い部分が残っている。６Ｂ区、43ｍ・グリッド付近を遺構検出する。

８月２４日　６Ａ区、ＳＩ１、ＳＩ２、ＳＩ３、ＳＤ２、ＳＤ４掘り下げ。

８月２５日　６Ａ区、ＳＤ２に直行するようにトレンチ１５を入れる。１.３ｍ以上掘り下げるが下端はまだ見えてこない。獣骨が数点出土する。ＳＩ１かまど部分焼土取り外し。

８月２６日　村崎係長、宮崎参事来跡。６Ａ区、ＳＤ２の底部を目指し、側面に段を作りながらトレンチ１５の深掘を進める。トレンチ１５からは獣骨が出土する。村崎係長、宮崎参事に見てもらうと、ウシ、又はウマの骨とのこと。ＳＤ２－３層上面のＳＤ４両脇には、細長い硬化面が東西方向に２ヵ所出土する。この硬化面に向かって北側から延びる硬化面が出土する。６Ｂ区、ＳＩ１０１掘削、半分はＳＤ１から壊されている。

８月２７日　宮崎参事来跡。６Ａ区、ＳＤ２トレンチ３とトレンチ１５の間を半截し、南側を重点的にＳＤ２－４～７層掘り下げを行う。４～７層はトレンチ３より西側での堆積である。５層上面で獣骨が多く出土する。獣骨に関しては出土状況の実測を行う（骨１４～１７）。ＳＤ４脇の連続硬化面実測、宮崎参事は連続硬化面はＳＤ４機能時の道であると話された。ＳＩ１土層断面、かまど土層断面、焼土範囲、ＳＤ４脇の連続硬化面撮影。６Ｂ区、ＳＩ１０２、ＳＩ１０３掘り下げ。

８月２８日　６Ａ区、ＳＤ２の軸より南側を掘削。46ｋ・グリッド３層上面遺構検出。ピットらしき遺構を検出する。ＳＤ４川原石、ＳＤ２東西土層断面実測。トレンチ３では、ＳＤ２－４層下は無く、ＳＤ２縦断面、トレンチ１５と西へ向かうと５、６、７、８層と増え、下っていく。６Ｂ区、ＳＩ１０２、ＳＩ１０３を掘削、硬化面範囲撮影。

８月３１日　６Ａ区、ＳＩ１、ＳＰ１、ＳＤ３掘削、ＳＩ１、ＳＫ８、ＳＤ４川原石実測、ＳＩ１、ＳＰ１土層断面、ＳＤ３撮影。６Ｂ区、ＳＫ１０２、ＳＩ１０１、ＳＫ１０３掘削、ＳＰ１０１、ＳＰ１０２土層断面実測、ＳＫ１０２、ＳＩ１０１、ＳＩ１０２かまど粘土出土状況、ＳＩ１０３かまど粘土出土状況撮影。ＳＩ１０１には壁際溝があり、その下にはピットらしきものがある。

９月１日　６Ａ区、ＳＤ２南側半截でＳＤ２－５、６層を掘り下げる。ピット半截、ＳＩ４掘削、ＳＤ４川原石、ＳＩ１、ＳＩ２、ＳＩ３、ＳＫ８実測、ＳＫ６、ＳＫ８撮影。６Ｂ区、ＳＫ１０３、ＳＫ１０４、ＳＫ１０５、ＳＫ１０６掘削。ＳＩ１０２

硬化面範囲、焼土範囲、ＳＩ１０３、ＳＫ１０２実測、ＳＩ１０２土器出土状況、ＳＫ１０３、ＳＫ１０４、ＳＫ１０５、ＳＫ１０６撮影。

９月２日　６Ａ区、ＳＤ２南側半分は底近くまで掘り下げを進める。ＳＩ２、ＳＩ３、ピット完掘、ＳＩ１かまど完掘。ピット断面、ＳＩ１かまど、ＳＤ４断面、獣骨出土状況実測。ＳＩ２、ＳＩ３、ＳＫ５、ＳＫ８、ＳＫ９、ＳＫ１１完掘。ピット完掘。ＳＤ４土層断面、ＳＤ２獣骨出土状況撮影。６Ｂ区、ＳＫ１０３、ＳＫ１０５、ＳＫ１０６、ＳＫ１０８半截。ＳＫ１０３、ＳＫ１０６断面、ピット断面実測。ＳＫ１０４、ＳＫ１０６断面、ＳＫ１０２、ＳＫ１０５完掘撮影。

９月３日　６Ａ区、ＳＤ２北側掘り下げ中、６層付で人骨らしきものが出土する。下関市土井ヶ浜ミュージアム松下孝幸氏に連絡を取り、８日に実測と取り上げに来て頂けるよう手配する。ＳＤ２底部出土の遺物を長谷部参事に見てもらうと９世紀初頭にあたるとのことであった。ＳＤ４トレンチ、硬化面を外す。ＳＩ４、ＳＸ１完掘。ＳＤ２ベルト、ＳＩ４、ＳＫ１２実測。ＳＸ１、ＳＰ完掘撮影。６Ｂ区、ＳＫ１０３、ＳＫ１０５、ＳＫ１０７完掘。ＳＩ１０１Ｄ１実測。ＳＫ１０３、ピット、ＳＩ１０１Ｄ１断面撮影。

９月４日　６Ａ区、ＳＤ２掘り下げ、ＳＩ１、ＳＫ、ピット掘削。ＳＤ４南北ベルト外し。ＳＩ１炭化物、ＳＤ４ベルト、ＳＤ２東西断面実測。ＳＩ４、ＳＸ１完掘、ＳＤ２、ＳＤ４断面、ＳＩ１かまど粘土出土状況、ＳＤ２－４層検出状況、ＳＫ１２完掘撮影。ＳＤ２の東西断面の記録を行う。ＳＩ１のかまどはかなり深く掘り込んであり、炭土が厚く堆積する。６Ｂ区、ＳＩ１０２掘削。ＳＩ１０２、ＳＩ１０３かまど、建物断面実測。ＳＩ１０３断面、かまど断面、ＳＩ１０２かまど断面撮影。ＳＩ１０３のかまどは砂層が多く混じっており、底が未確認である。

９月７日　６Ａ区、45ℓ・グリッドのＳＤ２－５～７層掘り下げ、多くの獣骨が出土する。ＳＫ１３、ＳＫ１４、ピット、西壁断面実測。ＳＩ１かまど、粘土、硬化面出土状況、骨出土状況、ＳＫ１４断面、ＳＫ１３完掘、ＳＤ２人骨出土状況撮影。６Ｂ区、ＳＩ１０２、ＳＩ１０３ベルト外し。ＳＩ１０２かまど、粘土、硬化面出土状況、ＳＩ１０３かまど、粘土、硬化面出土状況撮影。

９月８日　６Ａ区、ＳＤ４硬化面、ＳＤ２内ＳＴ１、ＳＩ１、ＳＤ２ベルト外し。ＳＤ２内ＳＴ１人骨、ＳＩ１かまどピット実測。ＳＤ４完掘、連続硬化面完掘、ＳＩ１ピット検出状況撮影。ＳＤ２内ＳＴ１の人骨取り上げに下関市土井ヶ浜ミュージアム松下孝幸氏に来て頂く。人骨は男性、大腿骨の長さから身長１６４～１６５㎝位で仰臥葬。副葬品として刀子が骨盤あたりに埋まっていた。土壙墓とのことであった。かなり残りが良い事例のようである。６Ｂ区、ＳＩ１０２、ＳＩ１０３掘削、かまど実測、硬化面範囲、袖石出土状況、ＳＫ１０７、ＳＫ１０８完掘撮影。ＳＩ１０２のかまどは下に掘り込みが見られることから下の建物のかまどに作り直している可能性がある。

９月９日　６Ａ区、ＳＤ２ベルト外し、ＳＤ４両岸の硬化面外し、ＳＫ１４完掘、ＳＤ２獣骨検出、ＳＴ１半截。ＳＤ２－８層上面獣骨出土状況、ＳＴ１断面実測、ＳＩ１完掘、ＳＫ１４完掘、ＳＤ４周辺レンズ状堆積砂層検出状況、ＳＤ２－８層上面獣骨出土状況撮影。ＳＤ４下に固い砂層を検出する。ＳＤ２の底、岸に残存する石の上にも堆積していることから、ＳＤ２埋没後ＳＤ４が掘られたと思われる。６Ｂ区、ＳＫ１０９、ＳＫ１０４発掘、ＳＫ１０４断面実測、ＳＩ１０３完掘状況、ＳＫ１０４断面、ＳＫ１０９完掘状況撮影。

９月１０日　６Ａ区、ＳＤ２－８層掘り下げ、ＳＤ４の固い砂層を取り除く。ＳＤ２東西断面、ＳＴ１実測。ＳＴ１断面、完掘、ＳＤ４砂層完掘状況撮影。ＳＤ４下の砂層の厚さは全体的に２０㎝程度で、ＳＤ２の石を上から覆うような状態で堆積する。８層掘り下げでは獣骨が多く出土する。又、須恵器大甕の破片が出土する。６Ｂ区、ＳＩ１０４発掘。ＳＩ１０４断面実測、ＳＩ１０２完掘状況、ＳＩ１０４検出状況撮影。ＳＩ１０２とＳＩ１０４は生活面がほぼ同じレベルで重なって出土する。

９月１１日　６Ａ区、ＳＤ２、45ｍ・グリッド付近

ＳＤ２－６、８層の黒褐色土を掘り下げる。断面では埋土と思われる土が下部まであり、底部から５㎝位のところには砂や砂利など水生堆積と思われる埋土が残存する。ＳＤ２川原石、南北断面実測。ＳＤ２、３－４層硬化面出土範囲、ＳＤ２獣骨出土状況撮影。６Ｂ区、ＳＩ１０４掘削、ＳＩ１０４金属製品出土状況実測、撮影。ＳＩ１０４東側に曲がった鉄製品が出土する。

９月１４日　６Ａ区、ＳＤ２－８層掘削、両岸は溝の下部まで掘り下げる。東側を掘り進めると２０㎝大の大きな川原石が集中して出土し、その間から獣骨や鉄製品が出土している。川原石が左岸に偏っていることを不思議に思っていたが、多賀嘱託職員から、祭祀遺構の可能性があると指摘を受ける。断面はＶ字型の溝で白川への切り通しと思われる。６Ｂ区、ＳＩ１０４、ＳＩ１０５発掘、ＳＩ１０５内ピット実測、検出状況撮影。

９月１５日　６Ａ区、ＳＤ２－８～９層を掘り下げていく。獣骨が数多く出土する。頭部等も出土することから、祭祀的儀礼の可能性も考えられる。ＳＤ２集石遺構、獣骨、鉄器実測。獣骨、鉄器出土状況撮影。６Ｂ区、ＳＩ１０４、ＳＩ１０５発掘、ＳＩ１０５ピット撮影。

９月１６日　６Ａ区、６Ｂ区、空撮に向けての清掃。ＳＩ１０５、ＳＤ２集石遺構実測。ＳＩ１０５ピット、鉄器実測、写真撮影。熊本大学文学部史学科卒の中川氏、獣骨鑑定のため来跡。ＳＤ２南北ベルト６層より出土した獣骨はウシで、歯の減り方が少ないことから若いのではないか。ＳＤ２西側に出土している骨については、下顎骨、上腕骨、大腿骨などであり、人骨も混じっているかもしれないとのことである。いずれもある程度のまとまりは持つが、散布状況がバラバラであるために流れてきたものか、食されてバラバラになったものかもしれないとのことであった。宮崎参事来跡。獣骨が多く出土するが、これを直接祭祀と結びつけることはできない。集石遺構も護岸の施設かもしれないと話される。ＳＩ１０５は掘方部分直上から鉄製品が出土し、ピットも検出されている。

９月１７日　６Ａ区、６Ｂ区、午前中空撮に向けての清掃。午後から空撮。その後、ＳＤ２東側の掘削を進める。東側からＳＤ２に向かう溝（ＳＤ５）を検出する。ＳＤ２集石検出状況、ＳＤ２土層断面撮影。宮崎参事来跡。ＳＩ２から防空壕断面にかけて黒い木炭のようなものが半円状に連なっているものについて、掘り込みの可能性があるため掘る必要性があると話される。

９月１８日　６Ａ区、ＳＤ２北側立ち上がりまで掘削を進める。８層のボソボソした粘質が強い土から、９層の黒い砂質の粘質の強い土に変わる。獣骨が数多く出土し、撮影、実測を行うため、あまり掘削は進まなかった。ＳＤ５は立ち上がりのようである。ＳＤ２川原石、獣骨出土状況実測。ＳＤ２獣骨出土状況撮影。６Ｂ区、ＳＩ１０５完掘、ＳＩ１０６内ピット検出。ＳＩ１０６内Ｐ１、Ｐ２土層断面撮影。

９月２１日～２４日　作業員１ヵ月間休みに入るため取り上げた獣骨、鉄器の処理、図面の整理等を行う。

９月２５日　６Ａ区、ＳＤ２の東側にＳＤ５トレンチ１を掘り状況を確かめると、上部は砂層で、下部が黒色土であるため、水による堆積層だと思われる。遺物も見られないことから、ＳＤ１、ＳＤ２以前の旧河川ではないかと思われる。

９月２９日　６Ａ区、ＳＤ６内、ＳＰ４、ＳＰ５、ＳＰ６、ＳＰ７発掘、実測。ほぼ一列に並ぶ。ＳＤ２獣骨検出、実測。ＳＤ６内ＳＰ４、ＳＰ５、ＳＰ６、ＳＰ７検出、半截、完掘状況、獣骨出土状況、ＳＤ２内鉄製品出土状況撮影。

１０月８日　６Ａ区、南東側壁面の清掃、撮影。宮崎参事来跡。ＳＤ６について、木樋ということなら木の鑑定のためにセクションごとにサンプルを採っておく。桶の下部には高さ調節のための枕などがあると思われるのでその確認をすることと注意事項を述べられた。

１０月９日　６Ａ区、ＳＫ１２、南東壁面実測。台風養生で開けていたシートを、調査区に被せていった。

１０月１３日　６Ａ区、ＳＫ１２発掘、土層断面実測、南東側壁面実測、ＳＫ１２焼土範囲撮影、６Ｂ区、

ＳＫ１０９発掘、土層断面実測、完掘状況撮影。坂口装飾古墳館学芸課長来跡。

１０月１６日　６Ａ区、ＳＫ１８半截、ＳＤ２集石実測、ＳＩ１実測、６Ｂ区、ＳＩ１０２、ＳＩ１０３実測、ＳＣ１のウォーターフローテーションによる植物依存体の検出に入る。

１０月１９日　６Ａ区、ＳＫ１９半截、ＳＤ２集石実測、ＳＣ１のウォーターフローテーション。

１０月２０日　６Ａ区、ＳＫ１８、ＳＫ１９半截、土層断面撮影。ＳＰ１６、ＳＰ１７半截、土層断面撮影。ＳＤ２獣骨実測、出土状況撮影。ウォーターフローテーション終了、乾燥中。

１０月２２日　６Ａ区、ＳＫ１８、ＳＫ１９、ＳＰ１６、ＳＰ１７半截、土層断面撮影、実測、完掘、完掘状況撮影。遺物整理実施。

１１月４日　作業再開。６Ａ区、ＳＤ２壁清掃、掘り下げ。ＳＤ６、黒く硬くなっている表面まで掘り下げる。黒く硬くなる直上の埋土は、やや黄土色でしまりが弱く、まるでおがくずのようである。ＳＤ２の集石との関連で祭祀遺構の可能性があるが、滑石の玉、管玉、ミニチュア土器等の出土が無いため何とも言えない。

１１月５日　６Ａ区、ＳＤ２、ＳＤ６発掘、ＳＤ２獣骨、ＳＤ６土層断面実測、撮影。ＳＤ２－９層の下から石畳のように拳大の石が敷き詰められているものが検出された。岩盤を一定幅に掘り抜いて石を敷き詰めている。

１１月６日　６Ａ区、ＳＤ２掘り下げ、ウシと思われる大腿骨などの大きい部位の骨の出土が多い。獣骨出土状況写真撮影と実測。ＳＤ７検出。ＳＤ６を切り、ＳＤ２に向かっている。午後より７日の現場説明会に向けての準備と６Ａ区、６Ｂ区の全体清掃を行う。

１１月７日　午前中現場説明会。一般の来訪者、約４０名。職員、文化課ＯＢの方も来られたのでＳＤ２の集石、ＳＤ６の黒い底部について意見を伺った。元文化課課長補佐高木正文氏はＳＤ６の黒い底部については水分中の鉄分・マンガン等の沈着ではないかと言われた。木﨑補佐は木樋ならば、樹種同定とＣ１４で年代測定をすることを言われた。午後より通常の作業で、ＳＤ２に１ｍグリッドを設定し、１ｍごとに取り上げ、石を別の個所に移し、個数、被熱等の状況を調べるようにする。

１１月９日　６Ａ区、ＳＤ２集石外し、掘り下げ。石は下方へ１０～３０㎝まで深く入っており、石の隙間から刀子または鉄鏃と思われる鉄器が４点出土した。獣骨実測、ＳＤ７掘削する。ＳＤ６を切り、ほぼ砂層で非常に硬くしまる。水が流れた跡だろうと思われる。６Ｂ区、３層の掘り残しの土坑を半截する。土師器、須恵器の欠片が出土する。

１１月１０日　雨のため現場休止。

１１月１１日　雨のため現場休止。島津主幹、野田主幹来跡。ＳＤ６については、木樋ではないか、ＳＤ２との境の土器から平安末から中世くらいの水路ではないかとの見解を述べられた。ＳＤ２については下に隙間なく石が敷き詰められていることから切り通しの通路で、集石全体が墓の可能性があるとの見解を述べられた。

１１月１２日　６Ａ区、ＳＤ２集石外し、集石とＳＤ２－６～８層土が南側から崩落していると思われる。崩落土中に土器、鉄製品を多く含む。ＳＤ２の底にトレンチを入れ、道路状遺構（ＳＦ１）の下部の状況を調べる。石畳の下部はあと１０㎝程で岩盤に達する。溝壁面には上層部からの粘土の流れ込みで２０㎝程、掘方より上に土が乗っている。馬場文化財保護主事が来跡。ＳＤ２等の土層について見て頂く。ＳＤ２の左岸上部の砂岩の割れは地震等による災害の結果ではなく、人工的に砂岩を削ったためではないか。また、ＳＤ６下層の土は白い粘土でありＳＤ２壁面で見られる粘土層に起因すると思われる。（壁面のものはＳＤ６から流れてきたものかもしれない）水が流れた跡があるかもしれないと見解を述べられた。

１１月１３日　６Ａ区、ＳＤ２集石外し、並行して、ＳＦ１の石出しとトレンチを西壁側に開ける。集石中からまとまって炭化物が出土する所が見られた。ＳＦ１は東側に延びるにつれて、途中から石が見られなくなり、砂が硬くしまった埋土に変わる。西壁側トレンチは岩盤まで掘ると、南の崖面に階段状のものが見られた。岩盤下は粘土層と礫

層が交互に入る状況である。

１１月１６日　６Ａ区、ＳＤ６全体写真撮影。ＳＤ２集石を外しながら掘削を行っていく。途中で獣骨が出土し、図面を取って作業を進めていった。集石の下の土中から鉄製品が出土する。集石中に鉄製品は集中している。西壁側トレンチを拡張すると、昨日とは逆側も階段状のものが見られた。

１１月１７日　雨のため現場休止。

１１月１８日　６Ａ区、ＳＤ２の中央付近と東壁（道路側）にトレンチを開ける。それとともに西壁側のトレンチを拡張する。西側壁トレンチでは硬化した粘土と砂層が交互に重なるところがあるが、旧河川での層の重なりと思われる。この古代以前の旧河川が北東から南西の軸で存在していると推測できる。６Ｂ区、ＳＩ１０５、ＳＩ１０６を完掘、写真撮影。

１１月１９日　６Ａ区、ＳＤ２の壁面まで掘削する。南側は粘土が礫状になっているところまで掘削する。北側は底部の石敷きの横のテラスを掘削していくと灰色の粘土層が出土する。土器がその粘土層の下から出ているようだったので土器周辺を清掃すると、粘土が少し崩れているところが硬化していたため、当時、粘土層を一部掘り下げ、それが埋まった際に土器が入ったと考えられる。熊本大学埋蔵文化財調査センター大坪氏来跡。

１１月２４日　雨のため現場休止。６Ａ区、野田主幹と整理嘱託職員４名に来ていただき、ＳＤ６土層の剥ぎ取りを行う。ＳＤ２底部のＳＦ１の実測を行う。

１１月２５日　６Ａ区、ＳＤ２内道路状遺構実測終了後、土層断面撮影、土器点上げ、石外しを行う。ＳＤ８の掘り下げを行う。広範囲に渡るため、ベルトを４ヵ所残し掘り下げた。上下層で分けて遺物を取り上げた。そのうち上層で甑の把手のようなもので、漆が塗ってある遺物が出土した。ＳＤ６については黒色層を７ヵ所サンプリングし、取り上げ、ナンバーをふる。その後、黒色層を一枚除去した。一部下部に同じような黒色層が残るほか、枝のようなものが下方へ伸びるもの、側部へ突き刺さるものなどがあり、その状態で記録を取ることにした。炭化層については下部にところどころ赤くなったところがある。焼土のようだが鉄錆のようにも見える。また、マンガン等が沈着しているようだ。

１１月２６日　６Ａ区、ＳＤ６黒色層を外し、完掘する。資料室より野田主幹と整理嘱託３名、作業員１名に来て頂き、ＳＤ６土層断面の剥ぎ取りをやってもらう。ＳＤ２内ＳＦ１の石外しを行う。鉄分の沈澱層（がちがちになっている）から、花弁のような模様の瓦が出土した。石を外して上がってきたものであるため、出土状況、位置は記録できなかった。午後３時より、完掘状況撮影のための清掃を始める。

１１月２７日　６Ａ区、全体清掃。その後、高所作業車で完掘状況の写真撮影を行う。午後より、ＳＤ２出土の川原石を洗って、炭化物、燃えた痕跡などを探す。炭化物が付着した石、赤く被熱した石が多少あり、グリッド毎に記録し、個数から火を使った位置等を調べられるようにする。

１１月３０日　６Ａ区、ＳＤ２北西側土層断面記録。土のう崩し、グリッド杭抜き等、埋戻しの準備を行う。川原石洗いを２７日に引き続き行う。

１２月１日　６Ａ区、ＳＤ２、鉄分とマンガンで硬化した層を崩していく。土師器、須恵器が出土するが、柔らかいところからの出土であるため、鉄分、マンガン層が掘削されたところからの土器であると考えられる。

１２月２日～４日　６区の遺物等の整理を行う。それと並行して７区の表土剥ぎの準備を行う。

７区

１２月７日　表土剥ぎ開始。コンクリート基礎、電線等が多く残存する。

１２月８日　表土剥ぎ２日目。コンクリートが一面に張ってある場所があり、無理に剥がすと調査区外まで掘削してしまい、爪なしバックフォーでは歯が立たない状況のため、国交省熊本河川に連絡を取る。国交省は１０日からコンクリートカッターで切ることを返答される。

１２月９日～１２日　国交省熊本河川より、調査区内

のコンクリート張りの地面にカッターを入れコンクリートを剥いでいただく。

１２月１４日　表土剥ぎ再開。現代の撹乱が多い。撹乱壁面から幅約５ｍの溝が確認できた。また、６区のＳＤ６が延びていることが確認できた。

１２月１５日　前日に引き続き表土剥ぎを行う。近現代建物の基礎の下に敷いてあったと思われる栗石の集石が出土し、この高さで表土剥ぎを進める。

１２月１６日～１７日　表土剥ぎ。作業員を入れて大甲橋側から撹乱掘削を始める。

１２月１８日　係会議のため作業休止。

１２月２１日　先日と同様に撹乱掘削を進める。

１２月２２日　撹乱掘削し、栗石の集石を清掃し出土させる。石列は表土下の焼土層からのまじりも多く、新しいと思われる。コンクリート建物の基礎が石列の上にあるもので石列の伸びていく方向と直交するものもあり、一概に石列とコンクリート基礎が同一の建物とは言えないようである。

１２月２４日　調査区全体の石列の清掃を行い、栗石の出土状況を撮影する。調査区中央から大甲橋側の石の並びをＳＢ１、山下ビル側の石の並びをＳＢ２とする。どちらも栗石の間に瓦が入ったりしていて、古い物では無いと思われるが、武家屋敷の時期が幕末のため近現代の建物として記録していく。

１２月２５日　ＳＢ１、ＳＢ２の石列の個別の撮影を行う。

１２月２８日　調査区壁面にトレンチを入れ、土層の確認を行う。壁面から溝から確認できた。また、６区ＳＤ６の延長と思われる溝が出土している。

平成２２年度（2010 年）

1月4日～１２日　十八測量設計、4級基準点及びメッシュ杭設置作業開始。石列の実測。

1月１３日　雪のため現場休止。

1月１４日　ＳＢ１、ＳＢ２の石列の掘り込みを探すため、焼土層がある程度無くなるところまで掘削し、掘り込みラインを確定する。その後、半截、清掃を行い、撮影する。

1月１５日　先日に続き、ＳＢ１、ＳＢ２の石列を半截、撮影を行う。石列の掘り込みラインを探すため、焼土層を５㎝程掘削するがはっきりしない。掘り込みラインが見つけられないことから、栗石が小さく、厚さも薄い石列に関しては、直接突き固めている可能性がある。

1月１８日～１９日　ＳＢ１、ＳＢ２の石列断面実測を進める。熊本市職員の美濃口雅朗氏が来跡され、石列内の埋土中から出土した磁器を見て頂く。瀬戸物で新しいもののようである。いろいろと御教授頂いた。

1月２０日　ＳＢ１、ＳＢ２の石列で実測が終了したものから完掘を行っていく。だた、掘り込みがはっきりしないものも多いため、完掘が穴状にはならないものもある。

1月２１日　ＳＢ１、ＳＢ２の石列の完掘写真撮影のため清掃を行い、全体写真撮影、その後、個別写真を撮影する。

1月２２日～２７日　焼土層を全体的に掘削していく。大甲橋側の溝について、南西壁側にトレンチを掘り、土層を確認する。溝は１層下からの掘り込みのように思われる。

1月２８日　１層上面で遺構検出を行う。南北に入る溝は大きくなく、トレンチで確認できた落ち込みは別遺構と思われる。土坑が多い。

1月２９日　大甲橋側溝に対し、中央部に直交するトレンチを入れる。遺物に新しいものは出ず、古代のものが多い。また、トレンチの下層に硬化している部分があるため、溝は古代の道路の可能性がある。

2月２日～５日　１層での検出遺構掘削を開始。ピット、土坑を半截、断面撮影、断面実測、注記、完掘、撮影の手順で作業を進め、１層完掘全景写真撮影を行う。

2月８日　１層検出土坑を掘削していく。南東～北西に入る大溝について撹乱断面、南東壁トレンチ、溝中央部トレンチから埋土が水平またはレンズ状堆積のため、自然に埋まったと考える。１層からの掘り込みであるため、古代の溝よりも新しいのではないかと思われる。

2月９日　大溝を掘り下げる。溝が埋まる過程で、古

代の土で途中まで埋まっていて、その後、近世、近代の土で埋まっているようである。

２月１０日　雨のため現場休止。

２月１２日　調査区全体の清掃後、古代遺構の検出を行う。北東の隅にかまどらしき粘土と焼土が残存する。また、竪穴建物跡４軒、溝２条が残存しているようである。

２月１５日　大溝の褐色ブロックまじりの土の上まで掘削する。南西部の硬化面は大溝に切られている。また、６区から続いているＳＤ６も調査区を縦断するように続いているが、大溝によって切られている。大溝は近代まで使われていたものをＳＤ７とし、この面が近代での使用面と考えられる。その下は古代の溝ＳＤ８があると思われる。

２月１６日　古代遺構検出ピット上部を少し掘り下げ、柱痕の残存を探し、掘立柱建物を検討するが、今の状態では建たない。ＳＤ８の埋土２層を掘り下げていく。ＳＤ８中央部トレンチ断面には、ＳＤ８の側溝と思われる低まりが確認できた。ＳＤ１０（６区ＳＤ６の続き）は黒褐色土を掘削する。ＳＤ１０内に埋土が黒褐色土の土坑が残存していたため、半截する。

２月１７日　北東側隅の粘土と焼土が残存する地点の遺構の切り合いを検討する。ＳＤ８掘り下げ中に硬化面が出土する。トレンチ断面では下にまだ数面、硬化面が出土すると思われる。

２月１８日　村﨑係長、亀田学芸員来跡。現場の進捗状況を見て行かれる。先日出土した硬化面の写真撮影、実測を行い、ＳＤ８の掘り下げを進める。北東側隅の遺構の切り合いを再び検討する。

２月１９日　２層検出ピットを半截する。ＳＤ８－６層上面で、黄褐色土層が一部入る。低まりに客土して整地したと考えられる。桁行が２間以上、梁行が１間の掘立柱建物ＳＢ３を検出する。

２月２２日　ＳＤ８の低まりの黄褐色土層の掘り下げを進める。

２月２３日　ＳＤ８の低まりを掘り下げ、硬化面を出土させ撮影する。その後硬化面を外すと溝の両脇に側溝が出土する。

２月２４日　ＳＢ３ピット完掘状況を撮影する。ＳＤ８の硬化面を外すが、断面観察から硬化面下の整地が２度行われたようである。

２月２５日　調査区北東部の竪穴建物かまど跡の掘削を開始。ＳＩ３かまどベルトを残し、粘土範囲を確認する。ＳＩ４南側のかまどと思われる粘土跡にトレンチを入れ、状況を確かめる。トレンチ壁面では焼土チップが確認できたため、ＳＩ４を切る竪穴建物があると考えられる。

２月２６日　雨のため現場休止。

３月１日　雨のため現場休止。

３月２日　ＳＩ１、ＳＩ２生活面完掘。ＳＤ１０内のピットを実測し、黒色層まで掘削する。

３月３日　ＳＩ６を壊す土坑を半截しＳＩ４の立ち上がりを探すと、黄褐色土ブロックのまじりが薄くなるところに確認できた。西側にＳＩ４を壊す小型の住居ＳＩ８が残存するようである。ＳＩ１貼床まで外し、完掘する。ＳＤ７の側溝を検出し掘削する。

３月４日　ＳＤ１１、ＳＩ１完掘。ＳＩ９は当初、ＳＤ１０に壊される竪穴建物と考え調査を進めていたが、硬化面の広がりがＳＤ１０上にも認められた。

３月５日　ＳＤ８から２点獣骨が出土する。廃棄時に埋まったものであろうか、実測を行いＳＩ８完掘させる。

３月８日　ＳＫ３４、ＳＫ３６、ピットを半截し、断面実測、完掘を進めていく。ＳＩ２掘削。断面の実測。

３月９日～１０日　雨のため現場作業休止。

３月１１日　ＳＩ１０建物にベルトを設定し、脇にトレンチを掘り、土層確認をする。埋２層の上面に硬化面が残存し、掘方面まで埋土が２層残存する。トレンチでは埋３層上面には硬化面は確認できなかった。ＳＩ２、ＳＩ９完掘。

３月１２日　ＳＤ１０のベルトの土色を入れ、ＳＩ９完掘、写真撮影。その後ベルトを外し、ＳＤ１０の黒色のマンガン（?）の出土状況を撮影する。調査区南西側竪穴建物が密集している区域について、ＳＩ４の北東側にＳＩ４を壊すＳＩ８を想定していたが、１辺が約１．６ｍと小さいため、ＳＩ８は遺構ではないとして、ＳＩ４を発掘していくが、

ＳＩ４の３層が出土するレベルと、ＳＩ８の床レベルが違いすぎるため、ＳＩ８は遺構として掘らなければならないと思う。

３月１５日　雨のため現場休止。調査区が電車通りに近いため、調査区全景についてラジコンヘリ等での撮影は難しいため、調査区にいちばん近い三井住友生命ビルの屋上から撮影できるように手続きを進めていく。

３月１６日　ＳＤ９完掘。ＳＩ１０生活面２掘削。ＳＩ８かまど支柱、粘土散布状況から、ベルトを設定しトレンチを掘る。平面プランがかまどよりも右肩側が広くなる。

３月１７日　ＳＩ３、現状で硬化面が表出している状況であるので、ベルトを設定し、硬化面を掘削していくと粘土と硬化面が出土する。粘土は硬化面の上に残存している状態なので、廃棄の際の散らばりと思われる。ＳＩ８は小さいため、内柱は検出できなかった。外柱の可能性が高い。

３月１８日　ＳＤ１０黒色マンガン部、掘削。ＳＩ３、ＳＩ１１、ＳＩ８かまど部分で粘土、支脚を残し埋土を掘削する。かまどは崩されていて、残存の状況はあまり良くない。

３月１９日　ＳＩ１１、ＳＩ３、ＳＩ８のかまど粘土を外し、支脚などの残存状況を調査する。残存状況は悪く、支脚も原位置を保っていないようである。ＳＩ５は掘削を進めるとはっきりとした硬化面が出土する。黄土色粘土はかまどの残存ではないと思われる。ＳＩ６は残りが薄く、下の遺構とかまどの関連を考えていかなければならない。

３月２３日～２４日　雨のため現場休止。

３月２５日　ＳＩ３かまど崩壊状況を撮影、実測する。調査区土層断面の撮影、実測開始。

３月２６日　調査区全景写真撮影のため、朝より清掃を開始。午後より三井住友生命ビルの屋上から調査区全景の撮影を行う。

３月２９日～３１日　ＳＩ３、ＳＩ４、ＳＩ５、ＳＩ６、ＳＩ７、ＳＩ８、ＳＩ１１の調査を行う。切りあっていて、また、壊されたかまどが多いため、トレンチを掘り、その断面と平面から、建物の範囲を決めて掘削をする状態である。新旧関係は（新）ＳＩ８、ＳＩ１１→ＳＩ４→ＳＩ６→ＳＩ７（古）と考え、調査を進める。埋土ははっきりとした違いはなく、黄褐色粒のまざりの感じ、ちょっとした色調の違いである。図面、完掘写真等の記録を終了し、７区の調査を終了する。

６区調査時に調査区の西側に樹木が残っていたため本調査できなかった範囲があった。そこで樹木移設後、６Ｄ区の本調査を行った。

平成２３年度（2011 年）

６Ｄ区

１１月８日～１２日　撹乱、包含層掘削。

１１月１４日　全体精査を行う。遺構は溝の縁を検出できたが、南側が落ち込み等で下がっているため、包含層掘削を続けていく。

１１月１５日～１６日　包含層掘削、精査し遺構を検出する。

１１月１７日　ＳＫ０１、ＳＫ０２、ＳＫ０３、ＳＫ０４半截。ＳＤ０１、ＳＤ０２掘削。ＳＩ０１掘削。ＳＤ０１土層断面撮影。

１１月２１日　ＳＫ０１、ＳＫ０２、ＳＫ０３、ＳＫ０４土層断面撮影、実測、完掘。ＳＩ０１掘削、土層断面撮影。ＳＤ０１完掘状況撮影。ＳＤ０２掘削。

１１月２２日　旧河川掘り下げ。

１１月２４日　ＳＫ５半截。ＳＩ０１、ＳＫ０１、ＳＫ０２完掘状況撮影。包含層掘削。

１１月２８日　ＳＫ０５、ＳＫ０６土層断面撮影、実測、完掘、完掘状況撮影。ＳＩ０２土層断面撮影。

１１月２９日　ＳＫ０７掘削、ＳＤ０３、ＳＫ０５、ＳＫ０７、ＳＫ０１完掘状況撮影。全体清掃し、調査区全景の撮影を行い、６Ｄ区の調査を終了する。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

新屋敷遺跡は、熊本市のほぼ中央部に位置する。東には阿蘇外輪山を望み、市内北部には立田山、北西部は金峰山から連なる京町台地に挟まれ、三方を山に囲まれた半盆地的な地形である熊本平野北側の白川下流左岸に位置する。熊本市の北部から東部にかけ台地が分布する。この台地は、火砕流台地と河岸段丘からなる。火砕流台地は、ほとんどが約９万年前に阿蘇火山の大噴火の際発生した火砕流による堆積物（Ａｓｏ－４火砕流堆積物）である。これを取り囲むように分布するのが、河岸段丘の堆積物である。河岸段丘の堆積物は、託麻砂礫層と保田窪砂礫層に区分できる。託麻砂礫層は、約９万年前から３万年前の間に形成され、託麻台地一帯に分布し中心街の地下にも広く伏在している。また、保田窪砂礫層は、約２万５千年前から６千３百年前に形成され、託麻台地を縁取るように龍田付近から木山付近まで分布している。さらに、熊本市の中央を流れる白川地帯には、海抜２０ｍ以下の低地（沖積平野）が分布している。この低地には自然堤防と後背湿地が発達し、自然堤防は、源流路沿いのほか、離れたところ（①平田町から川尻方面、②南熊本から田迎方面、③八王子から画図町、④江津から下江津）でも見ることができる。このことは白川が現在の流路をとる以前に、過去に多方面に流れていたことを示唆している。これらの自然堤防の多くは、現在、市街地化して平坦な低地に見えるが、その中には集落等を形成するのに都合のよい自然堤防が伏在していることを意識しなければならない。しかし、これらの自然堤防の形成時期や白川の変遷等は十分解明されていない。

白川は、阿蘇カルデラを源にし、南阿蘇村立野において黒川と合流し、熊本市に向かって小刻みに蛇行を繰り返し、その両岸に河岸段丘を作っていく。子飼橋を過ぎるところからその蛇行は緩やかになり、その両岸はほぼ平坦な地形へと変わっていく。白川は豪雨時には上流の土砂を削り、多量の泥流となって氾濫し、河川流域に大量の泥土をもたらし、自然堤防と後背湿地を形成することもたびたびであった。その堆積の繰り返しで熊本平野の白川下流域は形成されている。

今回報告する調査区は、新屋敷遺跡の南西端に位置し、熊本市電が通っている大甲橋より上流の白川左岸緑地帯に隣接、またはその延長線上に位置している。

第２節　歴史的環境

新屋敷遺跡は、南東の江津湖にかけては大江遺跡群、北東は大江白川遺跡と接する。特に大江遺跡群は国府、国分寺、国分尼寺などの中央からの律令支配の広がりによる造営とそれに伴う巨大な周辺集落の様相を呈す。白川下流域の左岸から、江津湖にかけては多くの遺跡が分布しているが、いずれの遺跡も奈良時代から平安時代の遺構・遺物が多く出土し、元来はこの地域一帯が当時の大集落であったと考えられる。新屋敷遺跡と大江遺跡群、大江白川遺跡など現在別々の遺跡として取り扱っているが、これは現在の町名による区分に過ぎない。

周辺の遺跡について、時代毎に見ていく。

【旧石器時代】

龍田陳内遺跡、新南部遺跡群から石器が出土している。

【縄文時代】

早期は押型文、撚糸文、塞ノ神式土器などが、新屋敷遺跡、大江遺跡群、黒髪町遺跡群、カブト山遺跡、大江白川遺跡などから出土している。新屋敷遺跡では、遺跡範囲東端付近において、押型文土器を伴う集石遺構が検出されている。後期の資料では、渡鹿貝塚（渡鹿遺跡群）、北久根山遺跡（新南部遺跡群）が有名である。

新屋敷遺跡では、遺跡範囲南西付近で辛川式土器が出土している。その他の遺跡では後期末から晩期前半の土器が主体で、新屋敷遺跡、大江遺跡群、大江白川遺跡などに多い。

【弥生時代】

前期の資料は、江津湖遺跡群、新屋敷遺跡、黒髪町遺跡群で検出されている。新屋敷遺跡では、遺跡範囲北東側の調査区において前期の濠が検出されている。中期の資料は大江白川遺跡、黒髪町遺跡群、新南部遺跡群、神水遺跡などで集落、甕棺墓群が形成される。

【古墳時代】

立田山山麓に横穴群が形成され、辻遺跡、新南部遺跡群では集落が営まれている。６世紀後半になると、本庄遺跡、大江遺跡群南西部にも集落が形成され始めている。新屋敷遺跡では、中央付近の範囲において、６世紀末～７世紀代の竪穴建物群を検出している。

【歴史時代】

奈良時代から平安時代にかけては、託麻郡の政治的中心である託麻郡衙が大江遺跡群内の渡鹿Ａ遺跡、託麻郡寺が渡鹿Ｂ遺跡に存在したと推定されている。また、太宰府から肥後国府へと延びる西海道駅路も大江遺跡群内を通っている。これらの公的施設の周囲には大規模な溝や道路が意識して配置された。大江遺跡群の北西側に接する新屋敷遺跡でも大規模な溝が多数検出されている。それとともに集落域も大きく拡大し、７世紀前半から９世紀前半にかけて肥後国内におけるもっとも大規模な集落が形成されている。特に８世紀末に近づくと住居の数は急増する。新屋敷遺跡でもこの期の竪穴建物が多数検出される。９世紀中頃になると、大江遺跡群周辺では集落規模が縮小し、道路、溝等が維持管理されずに埋没していく。

その後、長らくはこの地帯がどのような土地利用がなされていたか不明な点が多い。

江戸時代、熊本城が築城され、幕藩体制の中で新屋敷一帯は農村落が形成される。江戸時代末、白川に安巳橋が架けられると新屋敷には武家屋敷が形成される。国学者中島広足の居地も置かれている。明治１３年に命名された町名も、新しく設置されたことから名づけられている。そして現在まで閑静な住宅街として発展しているところである。

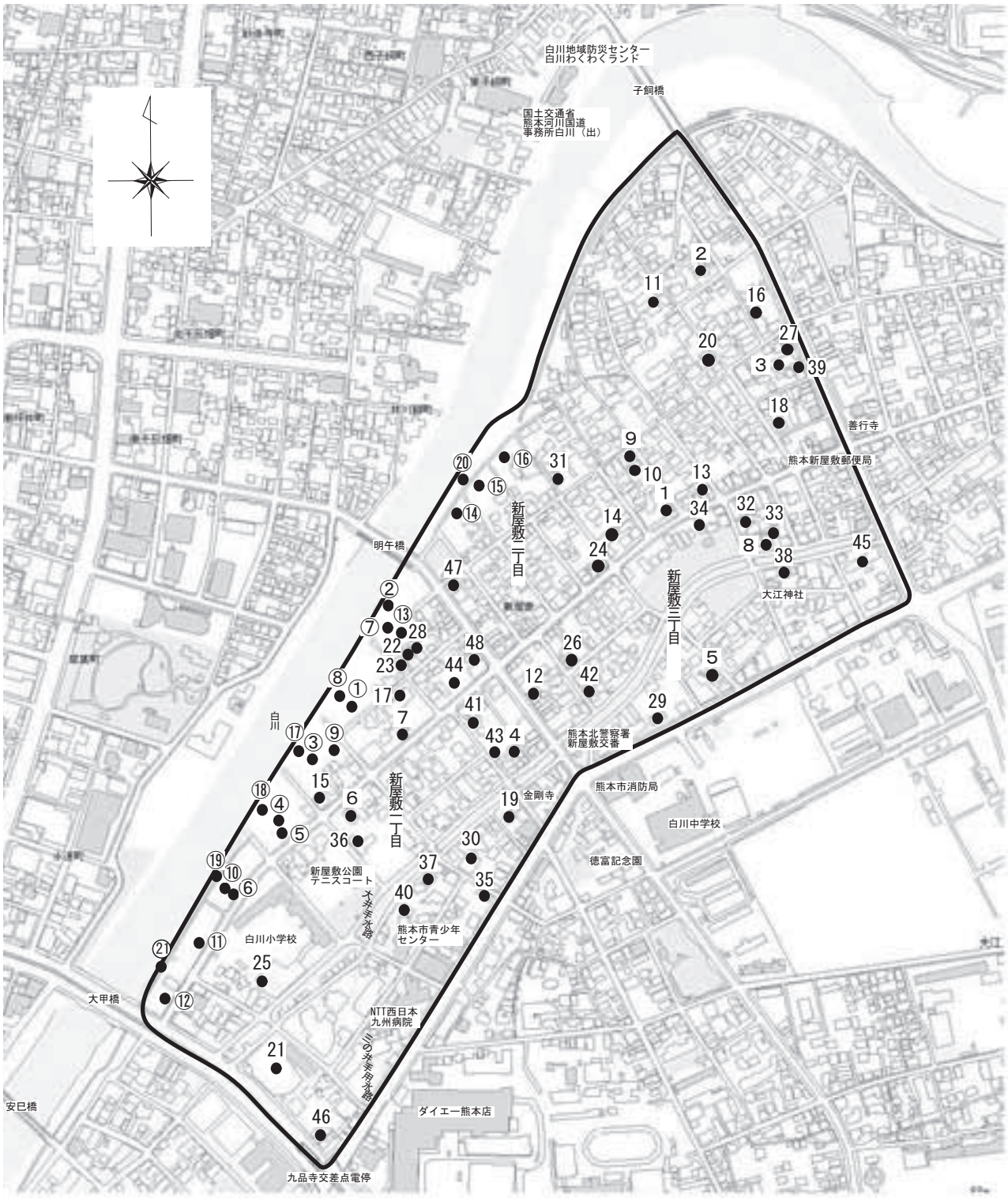
新屋敷遺跡は、平成２２年３月末現在、熊本市教育委員会事務局生涯学習部文化財課（当時、平成２３年度より熊本市観光文化交流局文化スポーツ交流部文化振興課）で計４８回、平成２４年３月末現在、熊本県文化課で計２１調査区の発掘調査が実施されている。熊本市の調査の大部分は個人住宅の建て替え又は、共同住宅の建設に伴うもので、比較的狭い面積の調査が多い。しかしながら遺跡の特徴を窺い知ることができる調査であり、成果を着々と積み重ねている。県の調査は白川河川改修事業に伴うものであり、古代の集落跡の様子を知ることができる。

第１図　新屋敷遺跡周辺遺跡地図　(1/25000)

第１表　新屋敷遺跡周辺遺跡一覧

熊本県（43）熊本市（201）

県地図遺跡番号	熊本市地図遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
201-225	8-32	池田山伏塚遺跡群	池田２丁目、清水町高平	弥生・古墳	包蔵地		電通石棺箱式珠文鏡、長迫横穴式石室
201-228	8-35	永浦遺跡群	清水町打越、永浦	古墳・中世	包蔵地		
201-230	8-37	池田町（池田小学校）	池田町１丁目	弥生～平安	包蔵地		池田小学校庭甕棺墓
201-231	8-38	津浦一ノ谷横穴群	清水町津浦字補迫	古墳	古墳		6 基以上
201-232	8-39	一ノ谷	清水町津浦字中寄	古墳・平安	包蔵地		
201-233	8-40	稗田横穴群	池田町稗田字猪迫	古墳	古墳		6 基以上
201-234	8-41	舟場	清水町津浦	縄文～中世	包蔵地		
201-235	8-42	舟場山古墳	清水町津浦	古墳	古墳		円墳、石棺
201-236	8-43	打越遺跡群	清水町打越	弥生・中世	包蔵地		
201-237	8-44	打越貝塚	清水町打越	縄文	貝塚		北久根山式
201-238	8-45	京町台遺跡群	京町	弥生～中世	包蔵地		
201-239	8-46	寺原横穴群	京町	古墳	古墳		多数の横穴
201-240	8-47	京町２丁目遺跡	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地		
201-241	8-48 伝大道寺跡遺跡群	伝大道寺遺跡群	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地		伝大道寺跡を含む
201-242	8-49	内坪井遺跡	内坪井町	弥生	包蔵地		
201-245	8-52	藤園中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	包蔵地		甕棺群あり
201-246	8-53	熊本城跡遺跡群	古城、古京、千葉城町	古墳～近世	包蔵地		
201-247	8-54	熊本城跡	古城・古京町・千葉城町	近世	城	国	国指定重要文化財・国指定特別史跡、加藤清正慶長 12 年
201-250	8-58（新町 2 丁目甕棺遺跡）	船場町遺跡	新町２丁目、鍛冶屋町	弥生	包蔵地		甕棺群
201-253	8-62	辛島町遺跡	辛島町	弥生・古墳	包蔵地		
201-254	8-63（中唐人町遺跡）	古町（旧唐人町）	唐人町、古町ほか	弥生～明治	包蔵地		
201-272	8-82	松崎遺跡群	清水町松崎	弥生～平安	包蔵地		
201-274	8-84	室園	清水町室園	縄文～中世	包蔵地		
201-275	8-85、9-10	黒髪町下立田遺跡群	黒髪町	古墳～江戸	包蔵地		
201-276	8-86、9-12 熊本藩主細川家墓所（泰勝寺跡）	泰勝寺細川家墓所・庭園	黒髪４丁目	江戸	寺社	国	細川家霊廟は国指定の史跡、寺跡を含む庭園は県指定
201-277	8-87、9-17	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	包蔵地		
201-278	8-88	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地		一帯に甕棺墓群
201-280	8-90	子飼遺跡	子飼町	縄文～中世	包蔵地		
201-281	8-91	大江白川遺跡	大江１丁目	縄文～平安	包蔵地		甕棺
201-282	8-92	新屋敷遺跡	新屋敷１丁目	古代	包蔵地		住居跡 2 基（古代 8c ～ 10c）ピット（古代：8c ～ 10c）須恵器（古墳）土師器･須恵器（古代：8c ～ 9c）緑釉陶器･黒色土器 A 類（古代：9c ～ 10c） H 16.4.21 範囲修正
201-283	8-93、9-55	大江遺跡群	大江３丁目	縄文～明治	包蔵地		
201-285	8-95	本庄（熊大病院敷地）	本荘２丁目	古墳～平安	包蔵地		熊本大学埋蔵文化財調査室調査
201-290	8-100	出水国府跡	九品寺、国府、国府本町	弥生～中世	包蔵地		
201-291	番号未記載	西水前寺町遺跡	水前寺１丁目	縄文～中世	包蔵地		
201-292	8-102、9-72	国分寺跡	出水１丁目	縄文～中世	包蔵地		県・市による多数の調査あり
201-293	8-103、9-75、13-1	江津湖遺跡群	神水町、画図町ほか	縄文～中世	包蔵地		H16.2.24 範囲修正
201-296	9-4	万石茶山	清水町万石	縄文・弥生	包蔵地		夜臼式土器
201-297	9-5	秣野	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵地		
201-300	9-8	立田山山頂	黒髪町	古墳～平安	包蔵地		
201-301	9-9	万石茶山古墳	清水町万石（通称）茶山	古墳	古墳		横穴式石室
201-302	9-13	立田山東中腹	黒髪町	古代・中世	包蔵地		
201-303	9-14	宇留毛浦山市営墓地	黒髪町７丁目	縄文～平安	墓地		
201-306	9-18	桜山中学校校庭遺跡	黒髪町５丁目	古墳～平安	包蔵地		
201-307	9-19	カブト山遺跡	黒髪町宇留毛字甲山	縄文	包蔵地		早期、轟 B、北久根山、黒川、山の寺
201-308	9-20	宇留毛Ａ遺跡	黒髪町６丁目	縄文	包蔵地		
201-309	9-21	宇留毛Ｂ遺跡	黒髪町６丁目	縄文～平安	包蔵地		
201-310	9-22	浦山第２横穴群	黒髪７丁目浦山	古墳	古墳	県	
201-316	9-28	宇留毛神社周辺遺跡群	黒髪町６・８丁目	古墳・中世	包蔵地		立田山南麓古墳円墳２基横穴式石室
201-332	9-48	新南部遺跡群	熊本市新南部町	旧石器～平安	包蔵地		県北バイパス調査、市マンション調査、田辺昭三調査などあり　H 16.2.24 範囲修正
201-335	9-51	渡鹿遺跡群	熊本市渡鹿５丁目	縄文・古代	包蔵地		縄文土器（後～晩期）弥生土器（中期後半）土師器・須恵器（古代：8c ～ 9c）陶磁器（近世以降）　H 16.4.21 範囲修正
201-336	9-52	渡鹿菅原神社境内遺跡	熊本市渡鹿６丁目		寺社	市	市指定史跡
201-337	9-53	辻遺跡	熊本市渡鹿７丁目	縄文～平安	包蔵地		縄文後晩期、へら描き土器・墨書土器
201-338	9-54	新南部西原遺跡	熊本市新南部町	縄文～平安	集落		
201-339	9-56	南平上遺跡	熊本市新大江３丁目南平上	奈良・平安	包蔵地		
201-340	9-57	帯山遺跡群	熊本市帯山１丁目	縄文～平安	包蔵地		布目瓦、曽畑、阿高、竹崎 H 21.7.22 範囲縮小
201-347	8-107、9-64	北水前寺遺跡	熊本市水前寺３丁目	奈良・平安	包蔵地		
201-348	9-66 水前寺廃寺（面）	水前寺廃寺跡	熊本市水前寺公園	奈良・平安	包蔵地		
201-350	9-68	水前寺成趣園	熊本市水前寺公園	江戸	庭園	国	国指定史跡及び名勝、細川忠利、山水式 H 21.7.22 範囲拡大
201-352	9-70 陳山廃寺	陳山廃寺跡	熊本市水前寺公園	奈良・平安	寺社		国分尼寺推定地
201-355	9-74	神水遺跡	熊本市神水本町・出水２丁目	縄文～平安	包蔵地		県・市調査、報告書あり
201-469	8-108	池田城跡	池田町岩立	中世	城		
201-481	8-106	お薬園跡	薬園町	近世	包蔵地		藩主重賢開園
201-556	8-111	水道町遺跡	熊本市　水道町	古代	包蔵地		H 20.10.1 新規記載（白川河川改修工事に伴う試掘調査結果による）



19ページ第２図の調査地点番号は20ページ～22ページ第２表の番号に対応する。

なお、

・数字は平成21年度末まで熊本市教育委員会文化財課による調査地点

・丸囲み数字は平成23年度末までの熊本県教育委員会文化課による調査地点を示す。

第２図　新屋敷遺跡内調査地点図　（縮尺任意）

第２表　新屋敷遺跡内調査地一覧

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
1	第 1 次調査区	1988	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居など	土師器・須恵器	1
2	第 2 次調査区	1989	熊本市教育委員会	弥生前期 奈良・平安	溝（弥生）・竪穴住居 道路など	弥生土器・石器 土師器・須恵器	3
3	第 3 次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑・溝 道路	土師器・須恵器 縄文土器	9
4	第 4 次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安 江戸	竪穴住居・土坑 水路など	土師器・須恵器 陶磁器・石器など	1
5	第 5 次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安	水田・溝	土師器・須恵器 白磁・青磁・緑釉陶器など	9
6	第 6 次調査区	1991	熊本市教育委員会	奈良・平安 中世	竪穴住居・土坑・溝	土師器・須恵器 白磁	9
7	第 7 次調査区	1994	熊本市教育委員会		竪穴住居・土坑 柱穴群	土師器・須恵器 緑釉陶器片・青磁 軒丸瓦など	10
8	第 8 次調査区	1995	熊本市教育委員会		柱穴		10
9	第 9 次調査区	1996	熊本市教育委員会		竪穴住居・溝	土師器・須恵器	10
10	第 10 次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安 中世	竪穴住居・溝	土師器・須恵器・青磁片・鉄製品・石鏃	10
11	第 11 次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居 掘立柱建物	土師器・須恵器 獣脚硯・墨書土器 ヘラ描き土器	2
12	第 12 次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安	溝など	土師器・須恵器	3
13	第 13 次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安 近世	柱穴列	土師器・須恵器	4
14	第 14 次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑 柱穴	土師器・須恵器 鉄製品	11
15	第 15 次調査区	1997	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	竪穴住居・土坑	縄文後期土器 土師器・須恵器	7
16	第 16 次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居 掘立柱建物	土師器・須恵器	4
17	第 17 次調査区	1999	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・掘立柱建物・土坑墓・小穴群 不明遺構	土師器・須恵器 鉄製品・銅製品 縄文土器	11
18	第 18 次調査区	1999	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 柱穴	土師器・須恵器	12
19	第 19 次調査区	1999	熊本市教育委員会	古代	溝	土師器・須恵器	12
20	第 20 次調査区	1999 ～ 00	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・柱穴	土師器・須恵器 縄文土器	12
21	第 21 次調査区	2000 ～ 01	熊本市教育委員会	古代	水田・竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝 柱穴	土師器・須恵器 青磁・白磁片・耳環	13
22	第 22 次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	柱穴・小穴・溝 道路	土師器	13
23	第 23 次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・柱穴群	土師器・須恵器 青磁水注片	13
24	第 24 次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴住居・土坑・溝 井戸・柱穴	土師器・須恵器 陶磁器	13
25	第 25 次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・柱穴	土師器・須恵器 馬の骨・歯	13
26	第 26 次調査区	2000	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居	土師器・須恵器	6
27	第 27 次調査区	2000	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居など	土師器・須恵器	3
28	第 28 次調査区	2001	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・溝	土師器・須恵器 金銅製耳環	13

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
29	第 29 次調査区	2001 ～ 02	熊本市教育委員会	古代・中世	水田・溝	土師器・須恵器 弥生土器・縄文土器	13
30	第 30 次調査区	2002 ～ 03	熊本市教育委員会	古墳 ～平安	竪穴住居・溝・小穴	土師器・須恵器 馬骨	14
31	第 31 次調査区	2003	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴住居・土坑・溝	土師器・須恵器 風字硯・縄文土器	15
32	第 32 次調査区	2003	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・柱穴	土師器・須恵器 黒色土器・鉄製品	15
33	第 33 次調査区	2003	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑	土師器・須恵器	6
34	第 34 次調査区	2004	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	掘立柱建物	縄文土器・土師器 須恵器	4
35	第 35 次調査区	2004	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	竪穴住居・溝	縄文土器・土師器 須恵器	4
36	第 36 次調査区	2004	熊本市教育委員会	奈良・平安 近世	竪穴住居・溝	土師器・須恵器 陶磁器	4
37	第 37 次調査区	2004	熊本市教育委員会	奈良・平安 近代	溝・道路・小穴 井戸	縄文土器・土師器 須恵器・鉄斧・獣骨	16
38	第 38 次調査区	2004	熊本市教育委員会	古代	土坑・柱穴など	土師器・須恵器など	16
39	第 39 次調査区	2005	熊本市教育委員会	縄文・古代	集石遺構・柱穴	縄文土器・石器 土師器・須恵器	17
40	第 40 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代・近代	竪穴住居・土坑・溝 柱穴・小穴	縄文土器・石器 土師器・須恵器 陶磁器	17
41	第 41 次調査区	2005	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑・溝 小穴	土師器・須恵器	5
42	第 42 次調査区	2005	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑	土師器・須恵器	6
43	第 43 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 小穴	縄文土器・土師器 須恵器・青磁片	17
44	第 44 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 小穴など	縄文土器・土師器 須恵器・石製紡錘車	17
①	１Ａ区	2005 ～ 06	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 道路状遺構など	土師器・須恵器	
②	２Ａ区	2005 ～ 06	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 柱穴など	土師器・須恵器	
45	第 45 次調査区	2006	熊本市教育委員会	古代・中世 近世	溝・柱穴・竪穴状遺構・掘立柱建物	土師器・須恵器 瓦質土器・陶磁器	18
③	３Ａ区	2006 ～ 07	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑 井戸・掘立柱建物	縄文土器・土師器 須恵器	
④	４Ａ区・４Ｂ区	2006 ～ 07	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・井戸 土坑・掘立柱建物	土師器・須恵器	21
46	第 46 次調査区	2007	熊本市教育委員会	古墳・古代 中世	水田・竪穴住居 土坑・柱穴群	土師器・須恵器	19
⑤	４Ｃ区	2007 ～ 08	熊本県教育委員会	縄文・古代 近代	竪穴建物・溝・井戸 土坑・掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	21
⑥	５Ａ区	2007 ～ 08	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・井戸 土坑・掘立柱建物	土師器・須恵器 陶磁器	21
⑦	２Ｂ区	2007 ～ 08	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器	
47	第 47 次調査区	2009	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑 小穴・不明遺構	土師器・須恵器 縄文土器 近世陶磁器	8
⑧	１Ｂ区・１Ｃ区	2009 ～ 10	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
⑨	３Ｂ区	2009 ～10	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑	縄文土器・土師器 須恵器	
⑩	５Ｂ区	2009 ～10	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器 陶磁器	21
48	第 48 次調査区	2010	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 柱穴群	土師器・須恵器	20
⑪	６Ａ区・６Ｂ区	2010 ～11	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・畝 土坑・掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	今回
⑫	７区	2010 ～11	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	今回
⑬	２Ｃ区	2010 ～11	熊本県教育委員会	近代	近代建物基礎	縄文土器・土師器 須恵器・石鏃・石斧	
⑭	８区	2010 ～11	熊本県教育委員会	古代・近世	溝・土坑	縄文土器・土師器 須恵器	
⑮	９区	2010 ～11	熊本県教育委員会	縄文・古代 近世	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	縄文土器・土師器 須恵器	
⑯	１０区	2010 ～11	熊本県教育委員会	縄文・古代	竪穴建物・土坑	縄文土器・土師器 須恵器・石鏃・石斧	
⑰	３Ｃ区	2011 ～12	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器 陶磁器	
⑱	４Ｄ区	2011 ～12	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	
⑲	５Ｃ区	2011 ～12	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	
⑳	１１区	2012 ～13	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器	
㉑	７Ｂ区	2012 ～13	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	

参考文献（番号は第２表　新屋敷遺跡内調査地一覧の参考文献番号と一致する）

1 網田龍生・美濃口雅朗1999　「新屋敷遺跡第１次調査区」「新屋敷遺跡第4次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成10年度－』　熊本市教育委員会

2 林田和人2003「新屋敷遺跡第11次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成13･14年度－』 熊本市教育委員会

3 網田龍生2004「新屋敷遺跡第2次調査区」「新屋敷遺跡第12次調査区」「新屋敷遺跡第27次調査区」「熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成15年度－』熊本市教育委員会

4 松村真紀子2005「新屋敷遺跡第13次調査区」「新屋敷遺跡第16次調査区」「新屋敷遺跡第34次調査区」「新屋敷遺跡第35次調査区」「新屋敷遺跡第36次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成16年度－』　熊本市教育委員会

5 岩谷史記2006「新屋敷遺跡第41次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成17年度－』　熊本市教育委員会

6 美濃口雅朗2007「新屋敷遺跡第26次調査」「新屋敷遺跡第33次調査」「新屋敷遺跡第42次調査」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成18年度－』　熊本市教育委員会

7 美濃口雅朗2008「新屋敷遺跡第15次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成19年度－』 熊本市教育委員会

8 美濃口雅朗2010「新屋敷遺跡第47次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成21年度－』 熊本市教育委員会

9 熊本市教育委員会編1995『熊本市埋蔵文化財年報第1号－昭和63年度～平成3年度－』熊本市教育委員会

10 熊本市教育委員会編1999『熊本市埋蔵文化財年報第2号－平成4年度～平成8年度－』熊本市教育委員会

11 熊本市教育委員会編2000『熊本市埋蔵文化財年報第3号－平成9年度～平成10年度－』熊本市教育委員会

12 熊本市教育委員会編2001『熊本市埋蔵文化財年報第4号－平成11年度－』熊本市教育委員会

13 熊本市教育委員会編2003『熊本市埋蔵文化財年報第5号－平成12年度～13年度－』熊本市教育委員会

14 熊本市教育委員会編2004『熊本市埋蔵文化財年報第6号－平成14年度－』熊本市教育委員会

15 熊本市教育委員会編2005『熊本市埋蔵文化財年報第7号－平成15年度－』熊本市教育委員会

16 熊本市教育委員会編2006『熊本市埋蔵文化財年報第8号－平成16年度－』熊本市教育委員会

17 熊本市教育委員会編2007『熊本市埋蔵文化財年報第9号－平成17年度－』熊本市教育委員会

18 熊本市教育委員会編2008『熊本市埋蔵文化財年報第10号－平成18年度－』熊本市教育委員会

19 熊本市教育委員会編2009『熊本市埋蔵文化財年報第11号－平成19年度－』熊本市教育委員会

20 豊崎晃一2011「新屋敷遺跡第48次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成23年度－』熊本市の文化財　第12集 熊本市教育委員会

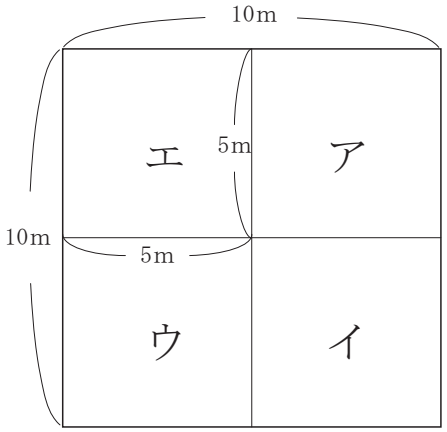
21 水上正孝2012「新屋敷遺跡１」熊本県文化財調査報告第270集　熊本県教育委員会

第３章　調査の方法

第１節　調査区・グリッド設定

６区、７区調査は、同一の建築工事を原因としている。したがって、両調査区は隣接・連続する。６区調査は平成２１年５月～１１月、７区調査は平成２１年１２月～平成２２年３月に行った。

各調査区の位置、１０ｍグリッドを第３図に記す。細長い調査区が多く、調査区にグリッド杭が設定しにくいため、１０ｍグリッドを５ｍ×５ｍを１単位に右図のように右上から時計回りにア・イ・ウ・エとした。グリッドの標記は２７ｘエ（南北軸の数字・東西軸のアルファベット・５ｍグリッドの記号）と表すようにした。



第２節　基本土層概略

層位について、遺構外と遺構内の層の区別を行うため遺構外の層については、算用数字で表土層（近現代の整地・撹乱層）の下の層から、０層、１層、２層と標記し、遺構内の層はそれと区別するため、算用数字の前に「埋」を付け、埋１層、埋２層 …と標記した。０層は、前年度調査の際には設定していなかったが、近代の整地層と思われるため新たに設定した。分層詳細は各調査区の成果において報告するが、本項では大略を記す。

０層：暗褐色土層　この面から近現代の栗石地業等が検出される。

１層：暗褐色土層　近世、古代遺物を含む。中世以降の整地層と思われる。

２層：黒褐色土層　古代遺物を含む。後世の削平を受けたのか総じて薄い。場所によっては堆積が見られない。

３層：褐色土層　この層位の上面で古代の遺構を確認した。

第３節　調査方法

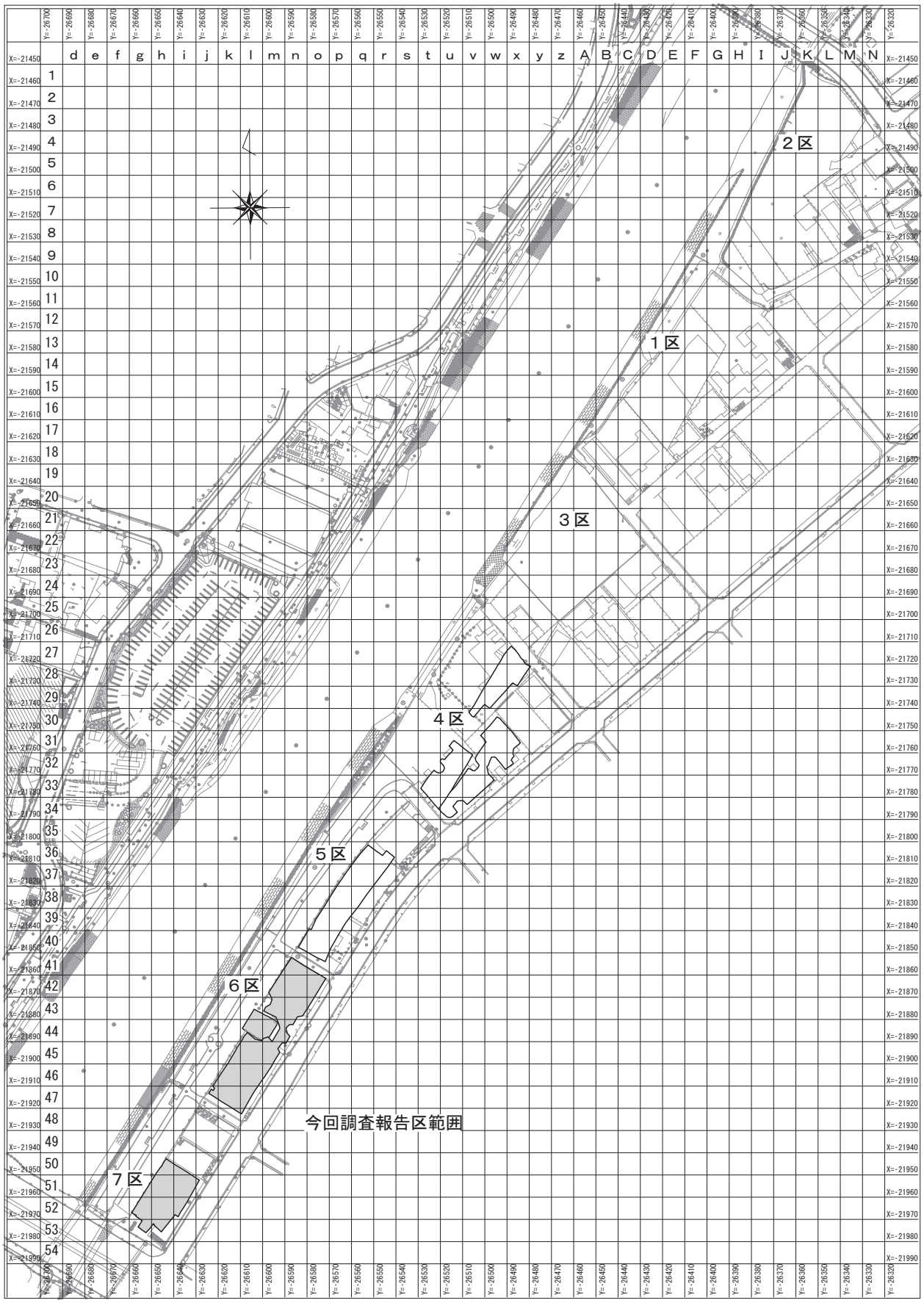
表土、０層、１層は重機により掘削し、２層、３層、遺構は手掘りしている。３層以下は未調査である。埋戻しは、派生土を用い重機にて行った。

実測は調査担当者・作業員で、１／２０の縮尺で断面図、平面図を作成した。遺物出土状況、かまどについては１／１０の縮尺で作成した。なお、遺構の実測図作成にあたっては、実測の迅速化を図るため光波測距儀を活用したデジタル図化を行った。デジタル図化にはＣＵＢＩＣ社製の遺構実測支援ソフト「遺構くん」を使用した。

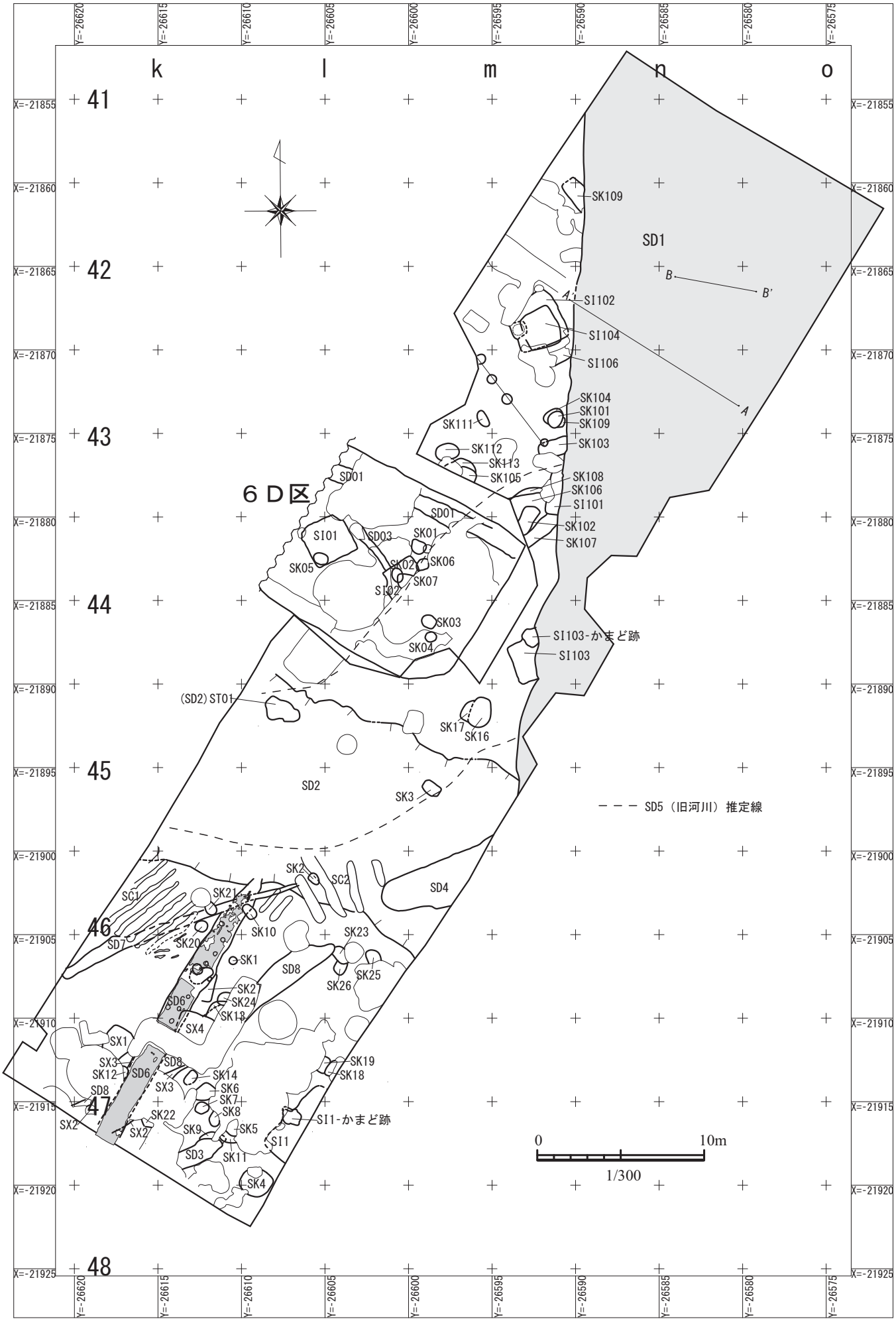
写真は、検出時、遺物出土時、使用時（使用当時の状態）、掘方時の各段階において、適宜、モノクロフイルムとリバーサルフイルムで、小型カメラ（３５㎜）と中型カメラ（６㎝×７㎝）を使用し、撮影した。

第４節　調査の概要

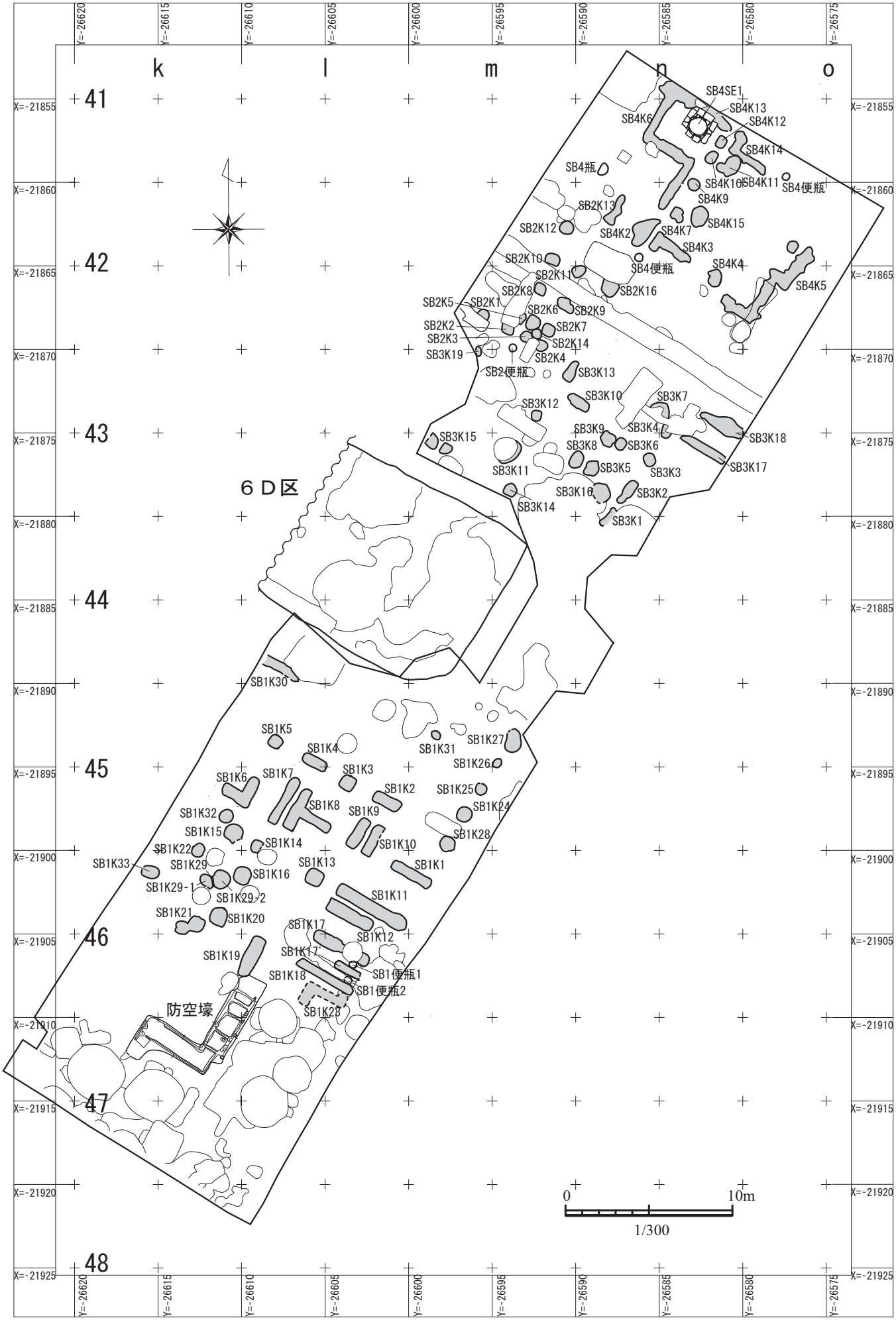
調査区には現代の撹乱に壊されながらも古代、近世以降の遺構が残存していた。６区を第４、５図、７区を第６、７図に主要遺構を記す。



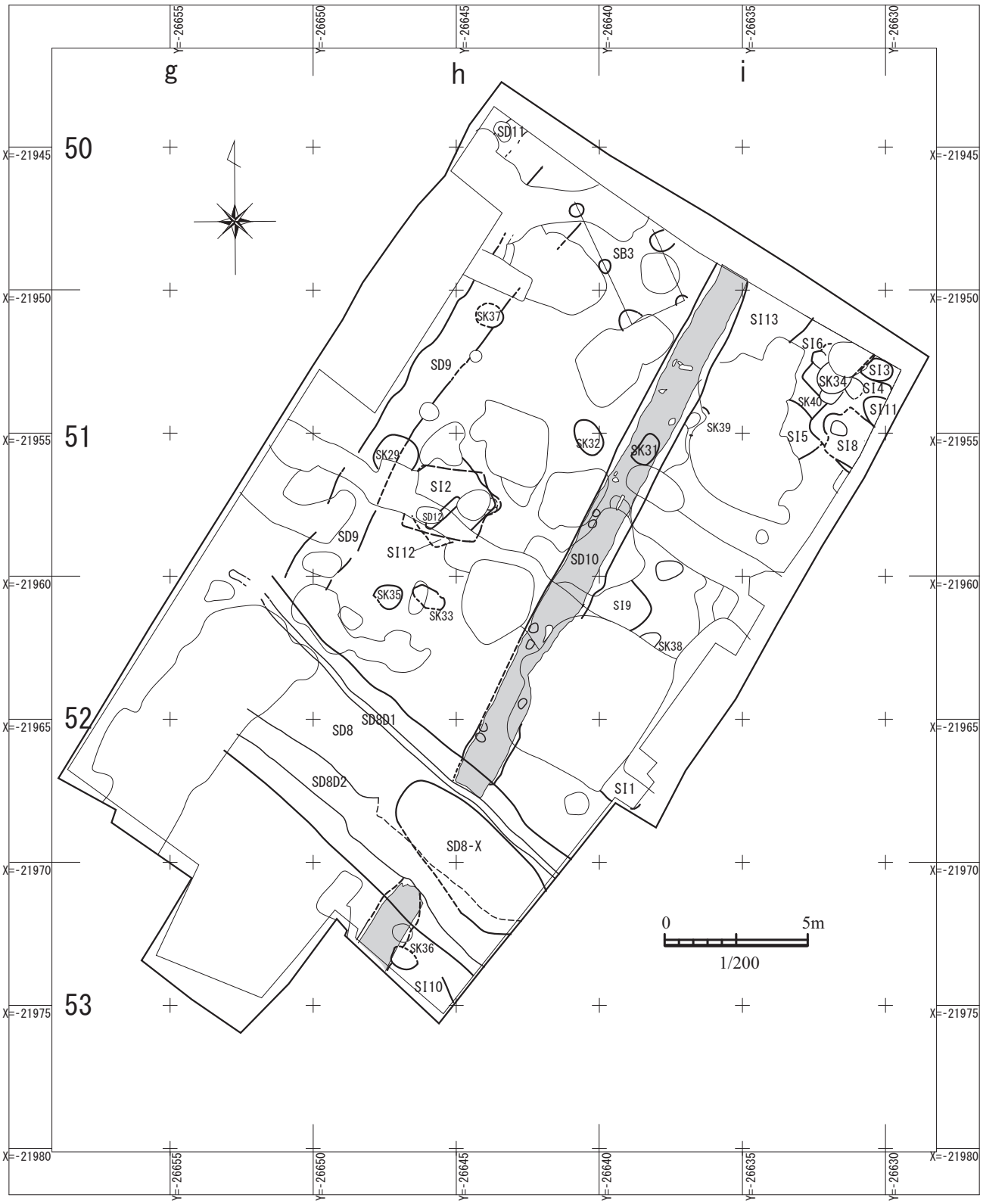
第３図　新屋敷遺跡全調査区位置図（縮尺任意）



第４図　６区古代主要遺構配置図（1/300）



第５図　６区中世以降主要遺構配置図（1/300）



第６図　７区古代主要遺構配置図（1/200）

第７図　７区中世以降主要遺構配置図（1/200）

第４章　調査の成果

第１節 基本土層

調査区の基本土層は、現代の整地層を除き、第８図に示したとおり、大きく７つの層に分けられる。０層は、前年度調査の際には設定していなかったが、近代の整地層と思われるため、今回新たに設定した。

この基本土層図は調査地区、地点によって層序が異なるところを含めたうえで再編したものである。

０層　：　**暗褐色**（１０ＹＲ　３／３）、粒子の細かい砂層。１～２㎜の小礫、２㎝大の炭化物、赤褐色焼土ブロック含む。しまりややあり。粘質ややあり。この面から近現代の建物の基礎である栗石等が検出される。１５～３５㎝程の厚さを持つ。

１層　：　**暗褐色**（１０ＹＲ　３／４）、極細砂混じりシルト層。１㎝大のオレンジ粒、赤色粒、炭化物を少量含む。しまりややあり。粘質ややあり。近世、古代遺物を含む。５～２０㎝程の厚さを持つ。

２層　：　**黒褐色**（１０ＹＲ　３／２）、極細砂混じりシルト層。１～２㎜大の赤色粒が少量混入する。しまりあり。粘質ややあり。場所によっては堆積が見られない。古代遺物を含む。５～１０㎝程の厚さを持つ。

３－１層：　**褐色**（１０ＹＲ　４／６）、細砂混じりシルト層、上層の黒褐色シルト層、下層のローム混じる。炭化物少量含む。しまりややあり。粘質あり。古代遺構検出面。５㎝程の厚さを持つ。

３－２層：　**褐色**（１０ＹＲ　４／４）、ローム層。微細なガラス粒子含む。しまりややあり。粘質なし。本層以下は未調査。

３－３層：　**褐色**（７．５ＹＲ　４／４）、細砂混じりシルト層。オレンジ粒、黄褐色土ブロック少し混じる。しまりややあり。粘質なし。

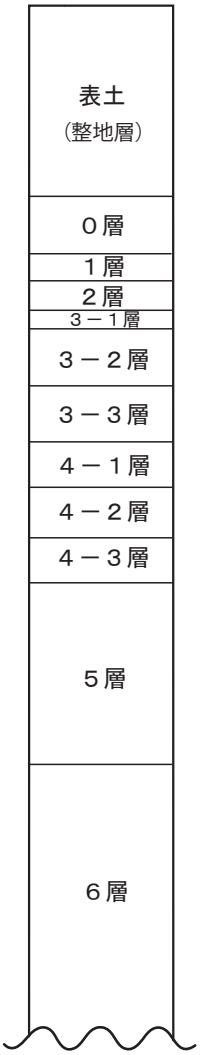
４－１層：　**極暗褐色**（７．５ＹＲ　３／４）、ローム層。暗色帯。しまりややあり。粘質あり。場所によっては堆積が見られない。

４－２層：　**オリーブ褐色**（２．５Ｙ　４／４）、ローム層。粒子はやや粗い。混入物なし。しまりなし。粘質なし。

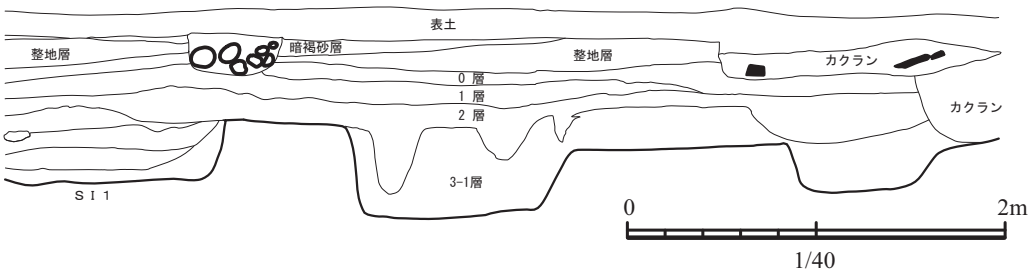
４－３層：　**にぶい黄褐色**（１０ＹＲ　４／３）、ローム層。ガチガチに固く、ブロック状になっている箇所もある。しまり強い。粘質なし。

５層　：　**暗オリーブ褐色**（２．５Ｙ　３／３）、砂質層。ところどころ硬化している。暗褐色土層（１０ＹＲ　３／４）が入るところもある。しまりあり。粘質なし。

６層　：　**黒褐色**（１０ＹＲ　３／１）、砂質層。上層は細かい礫が混じり、硬化し、ブロック状になっているところも見られる。下層は砂層でぼろぼろと崩れる。



（ 1/20 ）



第８図　調査区土層断面図及び土層模式図

第２節　遺構・遺物

１．６区

(1)　古代

調査区の遺構は、既存建物等により破壊を受けているものが多い。本来はもっと多くの遺構が存在していたと考えられ、検出した遺構も残存状況が悪いものが多い。

６区は調査面積約１．４７０㎡である。現状は標高約１５ｍで地形は平坦である。

古代の遺構を概観すると、６区は白川に向かう切り通しの道路状遺構を含む集落跡と言えよう。竪穴建物７軒、大きな溝（道路状遺構、祭祀遺構、水路）２条、畑畝跡、土壙墓を検出した。

以下、主要遺構について報告するが、他に土坑、小穴、柱穴など、これに漏れる遺構もある。その存在状況については古代遺構配置図（第９図～１３図）を参照していただきたい。

竪穴建物

ＳＩ１（第１４、１５図）

３層上面で検出した。４７ℓウ・エ・グリッドに位置する。北西部が撹乱に壊され、また、南東側が調査区外にかかるため、現況では南北約５．０ｍ、東西（主軸）の残存が約１．１ｍ、検出面から機能面までの深さは約２５㎝を測る。主軸はＮ－５０°－Ｗである。壊されたかまどが残存し、袖石も深く埋められていて原位置を保っている。

機能面は掘方面上に形成し、かまどの手前から建物中央部に硬化面が残存する。

柱穴は、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３を機能面上で検出した。主柱穴については、Ｐ１、Ｐ２はかまどの付く壁面に寄り過ぎており、配置がやや悪く、Ｐ３はＳＩ１が３分の１程しか調査区には無いため、配置からは考察が難しい。かまどは土層断面の埋土状況で、かまど埋５層の上面に、硬化面が出土することから、掘方時にかまどの穴を大きめに掘削し、かまど埋５層の土を入れ、かまど機能面の高さを調整していると思われる。

遺物は土師器甕の口縁部破片、外面にハケメ、内面はヘラケズリされた胴部破片等が少し出土した。また、磨石（第２１図８）、石皿（第２１図９）が出土した。これらは二次使用の遺物と思われる。

ＳＩ１０１（第１６図）

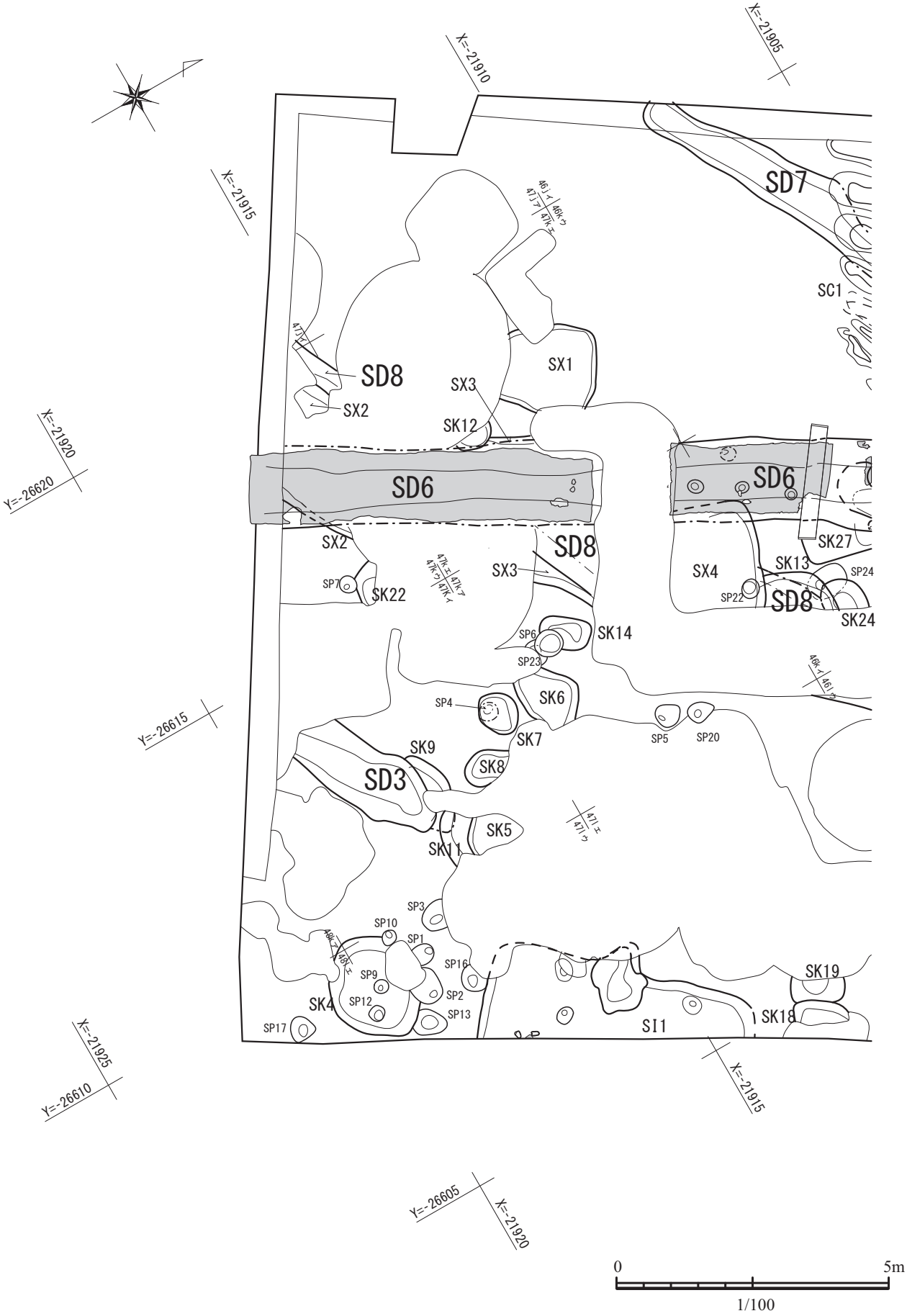
旧河川の黄褐色土層上面で検出した。４３ｍイ・グリッドに位置する。東側はＳＤ１、西側は撹乱に壊され、南西側はＳＫ１０６、ＳＫ１０７、ＳＫ１０８を壊す。南北約２．７ｍ、東西は、現況では約０．８ｍ、検出面から掘方面までの深さ約２０㎝を測る。長軸はＮ－６°－Ｅである。

埋土は単層で、硬化面、柱穴などは検出できなかったため機能面は分からない。掘方面は南方向に少し下がる。掘方面で壁際溝と思われる建物内遺構を検出したが、掘削すると底部近くで黒褐色の砂層が出土した。これまでピット等の建物内遺構の掘削で砂層が出ることはなかったため、ＳＩ１０１の下の土層は基本土層とは異なると思われる。その後の調査で、旧河川（ＳＤ５）の範囲を決定する際にＳＩ１０１はその範囲内の遺構とした。

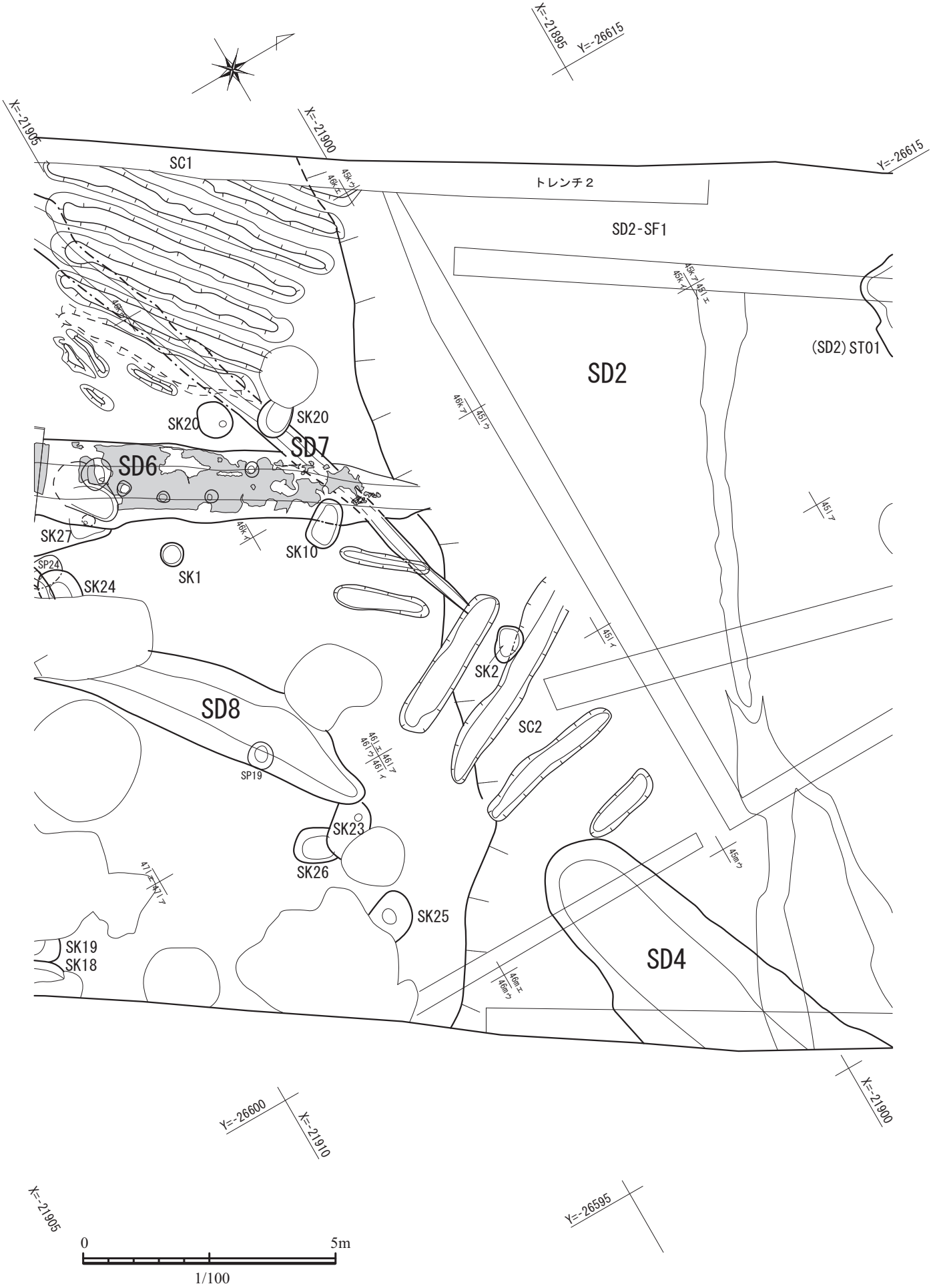
遺物はほとんど出土せず、土師器の破片がごく少量出土した。

ＳＩ１０２（第１７、１８図）

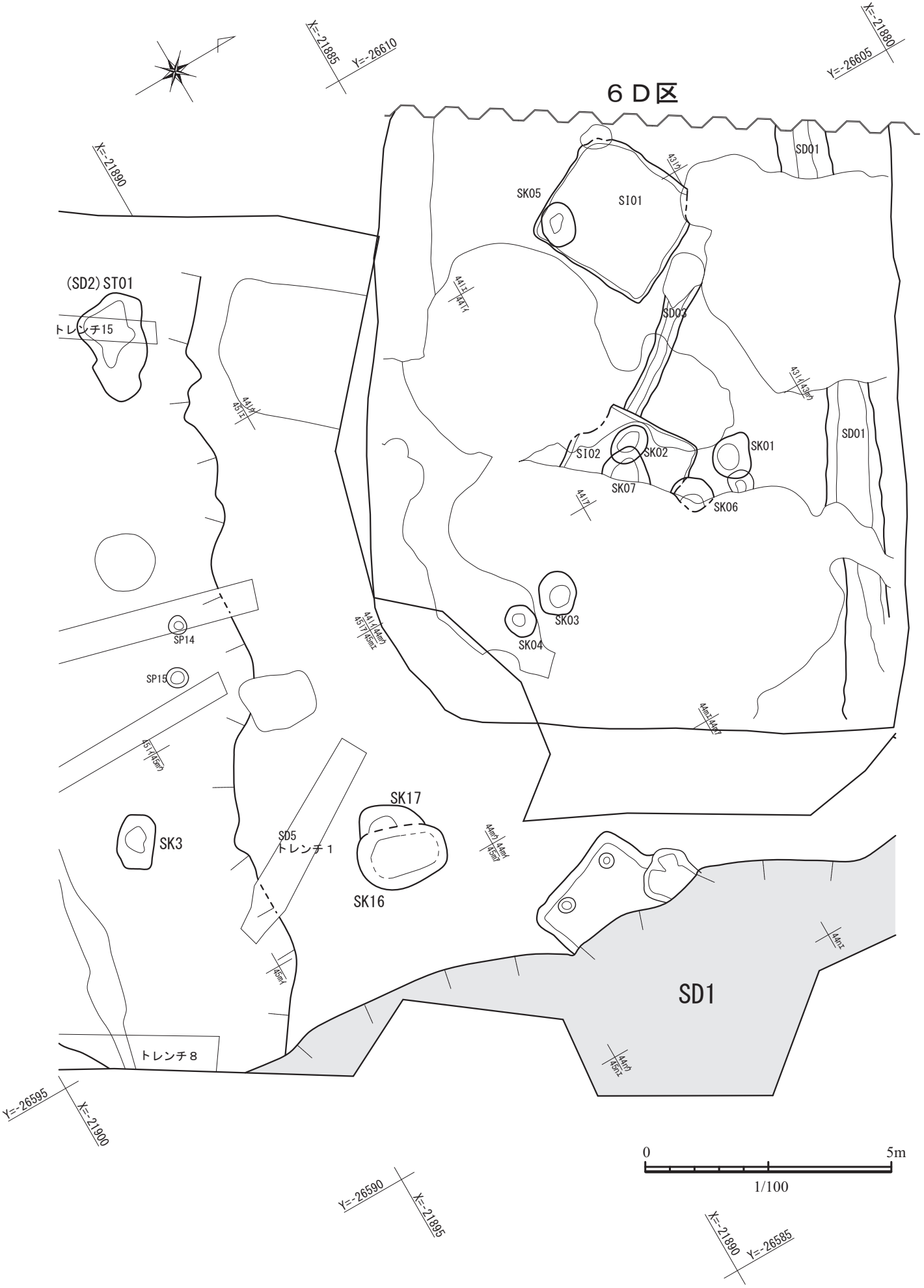
３層上面で検出した。４２ｍイ・グリッドに位置する。ＳＩ１０４、ＳＩ１０６を壊す。周辺竪穴建物との新旧関係は、ＳＩ１０６（古）→ＳＩ１０４→ＳＩ１０２（新）である。ＳＩ１０２とＳＩ１０４では、ＳＩ１０２掘方面上でＳＩ１０４を検出したことと、ＳＩ１０４の範囲を越えて、ＳＩ１０２の硬化面が広がっていたことからＳＩ１０４が古いと判断した。ＳＩ１０２とＳＩ１０６では、ＳＩ１０２掘方面上でＳＩ１０６



第９図　６区古代遺構配置図　１（1/100）

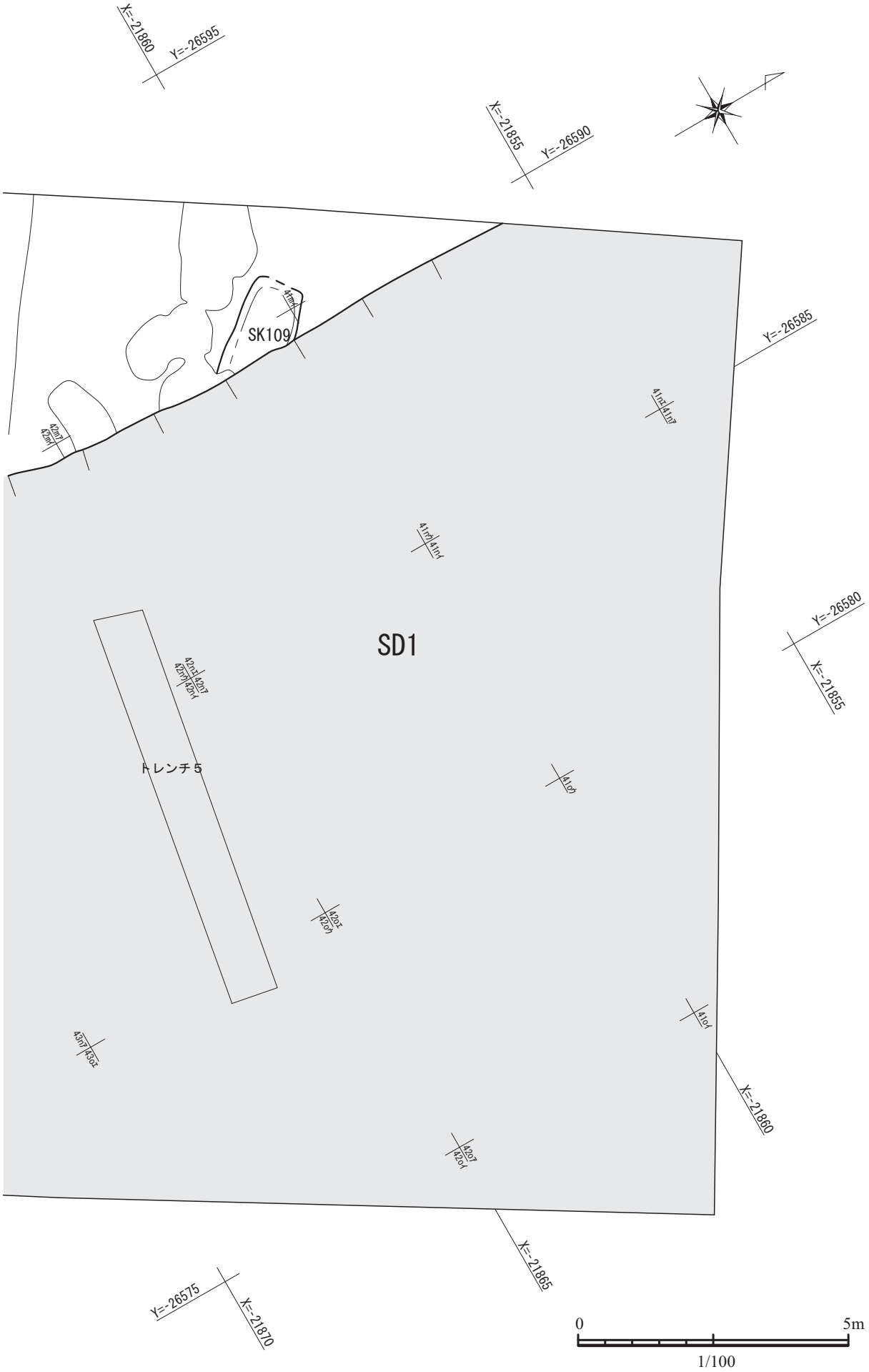


第１０図　６区古代遺構配置図　２（1/100）

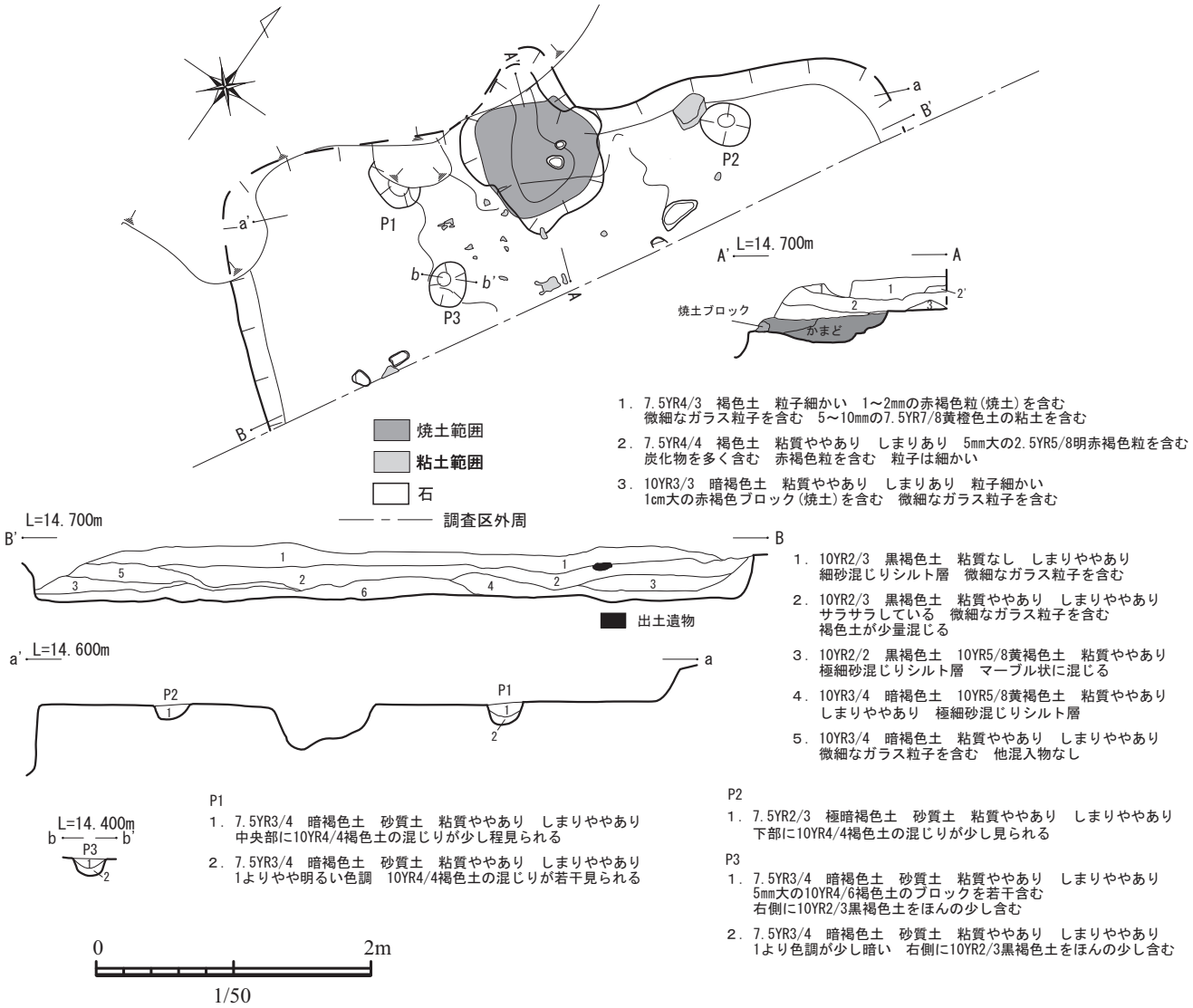


第１１図　６区古代遺構配置図　３（1/100）

第１２図　６区古代遺構配置図　４（1/100）



第１３図　６区古代遺構配置図　５（1/100）



第１４図　ＳＩ１平面・断面図

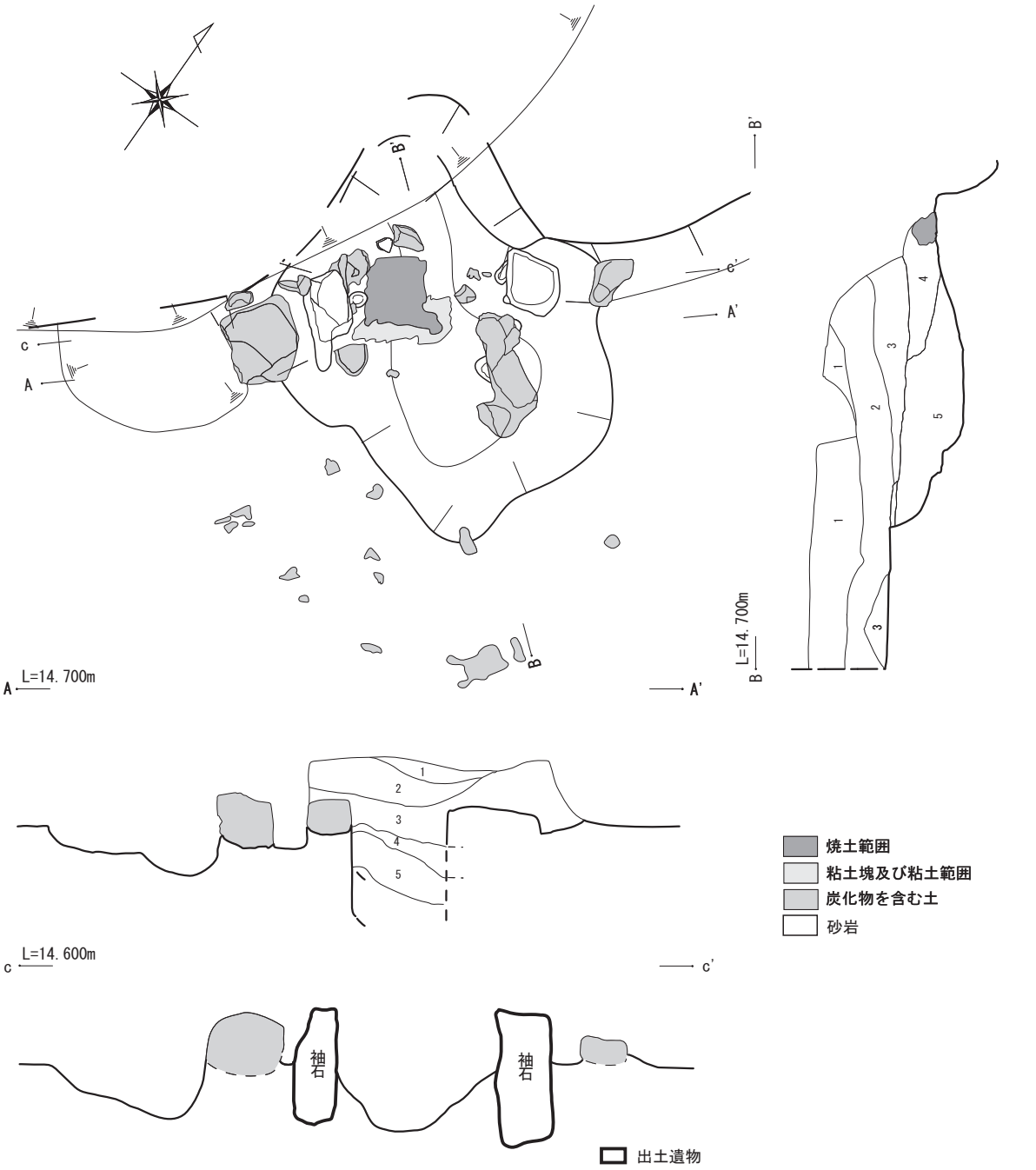
の一部を検出したことからＳＩ１０６が古いと判断した。

南北約３．２ｍ、東西約３．１ｍ、検出面から生活面までの深さ約１６㎝を測る。主軸はＮ－１１２°－Ｗである。

機能面は、埋５層上面で建物中央部に硬化面が残存する（注記は漏らした）。柱穴等は検出できなかった。

かまどが壊され、粘土、軟質砂岩等が散らばり、袖石は原位置を留めていない。その埋土内より土師器鉢（第２１図２）、土師器甕（第２１図４）が出土した。かまどの焼成部は、炭化物、焼土が混じるかまど埋３層部と思われる。

遺物は、壊されたかまど粘土中より土師器鉢（第２１図２）、土師器甕（第２１図４）、土師器杯（第２１図１）の破片が、上から甕、鉢、杯の順に重なるように出土した。２１－２は体部が立ち、口縁部は丸みを持ってほぼ直角に外反する。内外面にススが付着する。２１－４は、内面はヘラケズリされ、口縁部付近でヨコナデ調整をされる。外面はヨコナデ後ハケメ調整される。口縁部は貼付と思われ、その継ぎ目はヨコナデされている。はっきりとした屈曲を持つ。２１－１は口径が約１７㎝と大きめの杯で、底部から体部下位にかけて丸みを持ち、口縁部ではほんの少し外反する。



SI1かまど埋土

1．7.5YR4/3　褐色土　粒子細かく、1～2mmの赤褐色粒(焼土)を含む
　微細なガラス粒子を含む　5～10mm大の7.5YR7/8黄橙色の粘土を含む

2．7.5YR4/4　褐色土　粘質ややあり　しまりあり　粒子細かい
　5mm大の2.5YR5/8明褐色粒を含む　炭化物を多く含む　赤褐色粒を含む

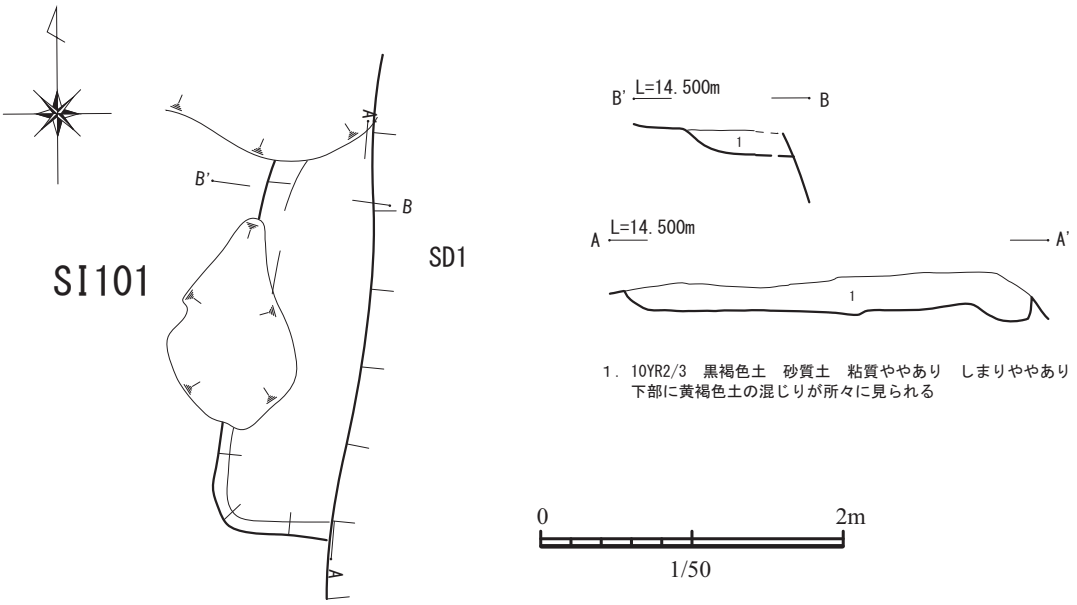
3．10YR3/3　暗褐色土　粘質ややあり　しまりあり　粒子細かい
　1cm大の赤褐色ブロック(焼土)を含む　微細ながらガラス粒子を含む

4．5YR4/8　赤褐色土　粘質なし　しまりややあり　粒子細かい
　かなり高い温度で焼けたであろう焼土

5．10YR2/3　黒褐色土　粘質ややあり　しまりややあり　粒子細かい
　上層の焼土の2cmブロックをまれに含む

0　1m
1/20

第１５図　ＳＩ１かまど平面・断面図



第１６図　ＳＩ１０１平面・断面図

ＳＩ１０４（第１７、１８図）

ＳＩ１０２掘方面で確認した。４２ｍイ・グリッドに位置する。ＳＩ１０２に壊され、ＳＩ１０６を壊す。ＳＩ１０４とＳＩ１０６では、ＳＩ１０４の掘方が、ＳＩ１０６の掘方よりも深く掘り込んでいることからＳＩ１０６が古いと判断した。しかし、ＳＩ１０４はＳＩ１０６と同一の建物として検出していたため、一緒に掘ってしまった。建物の機能面を表出させた際に、ＳＩ１０６の硬化面がＳＩ１０４上には広がらないことから、別の建物と気づいたため、出土した土器が混ざってしまった。土器についてはＳＩ１０６で記す。

南北約２．１ｍ、東西約２．３ｍ、検出面から生活面までの深さ約７㎝を測る。長軸はＮ－２２°－Ｗである。

機能面は埋２層上面で、硬化面はなかったが、ややしまりがある。

柱穴は埋２層上面でＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４を、掘方面でＰ５、Ｐ６を検出した。主柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４と思われる。主柱穴間はＰ１－Ｐ２間が約１．２ｍ、Ｐ２－Ｐ３間が約１．７ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が約１．１ｍ、Ｐ４－Ｐ１間が約１．６ｍを測る。南西辺に土坑Ｋ１を検出した。位置としてはかまどのようであるが、袖石、粘土等の残存もなく、その埋土中には焼土、炭化物等はないため、かまどとは言い切れない。

遺物はＰ５の埋土上面に、リング状の鉄製品（第２１図１２）が出土した。

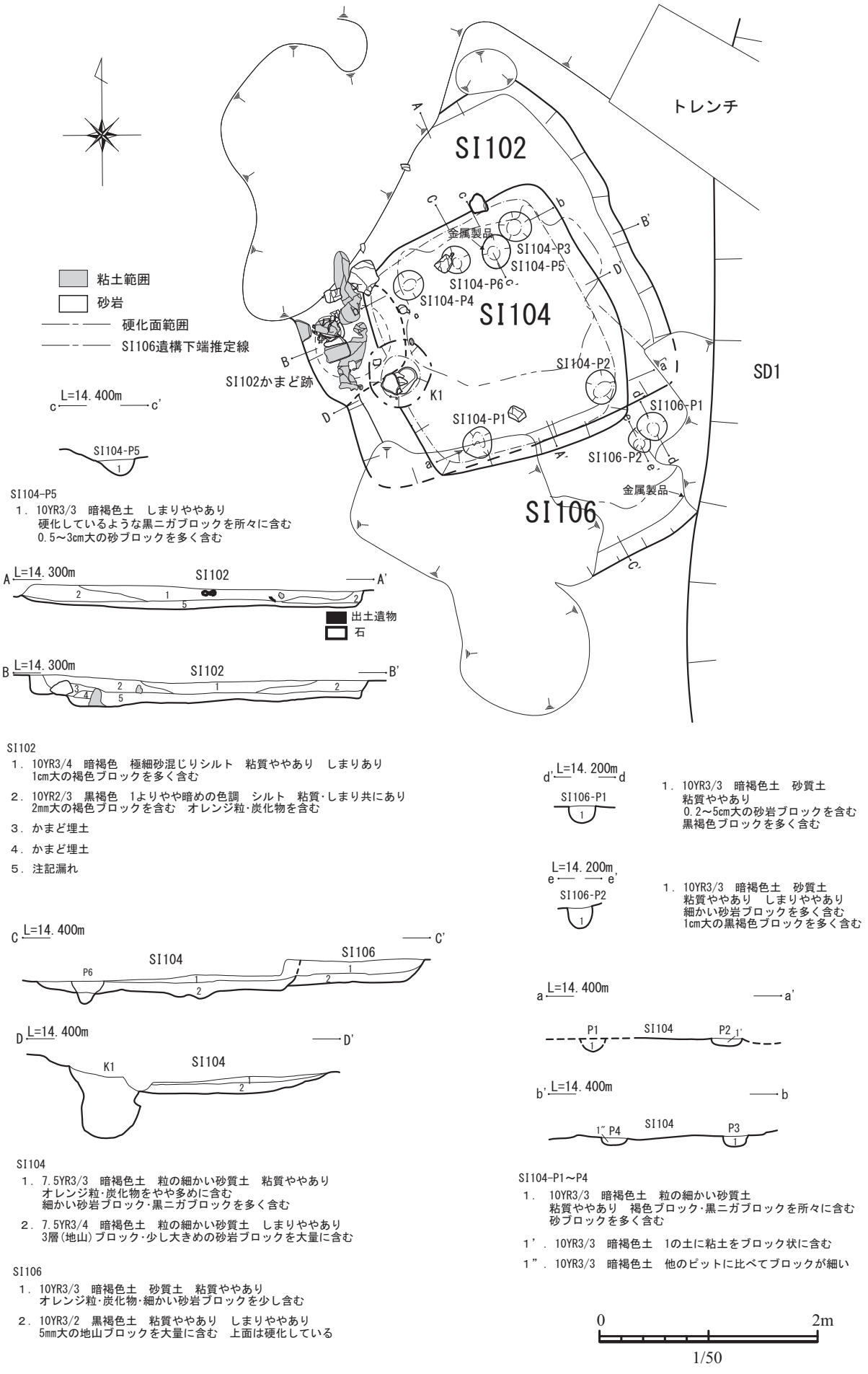
ＳＩ１０６（第１７図）

４２ｍイ・４３ｍア・グリッドに位置する。ＳＩ１０２、ＳＩ１０４に壊され、南側の一部が残存しているため規模は不明である。現況では南北約１．２ｍ、東西約１．４ｍ、検出面から生活面までの深さ約１５㎝を測る。長軸はＮ－５０°－Ｅである。

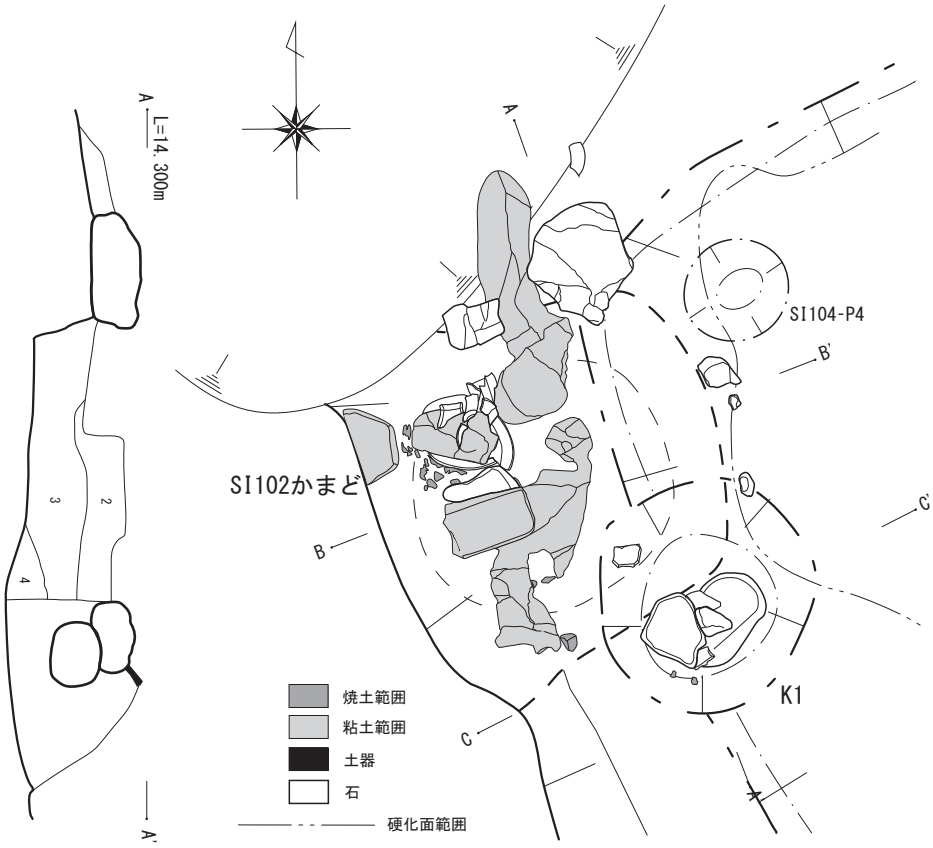
機能面は埋２層上面で、硬化面が残存する。

柱穴は掘方面上で壁面から離れた位置にＰ１、Ｐ２を検出した。Ｐ１が主柱穴と考えられるが、その他の主柱穴については、ＳＩ１０４や撹乱に壊されたと思われる。

遺物は南側壁面付近の貼床埋土内で鉄製品（第２１図１１）が出土した。この鉄製品は鎌と思われる。土器はＳＩ１０４と混ざってしまったが、土師器、須恵器の破片が少し出土した。破片のため実測できなかったが、須恵器蓋の破片で見受けの返りがつき、外面には自然釉がついているものが出土した。７世紀後半～８世紀初頭のものと思われるが１点のみの出土のため、何とも言えない。



第１７図　ＳＩ１０２・ＳＩ１０４・ＳＩ１０６平面・断面図



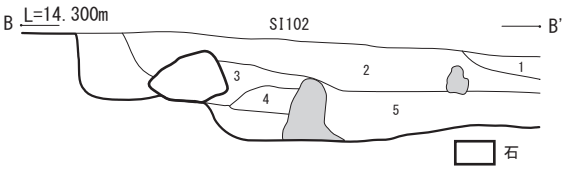
SI102かまど埋土

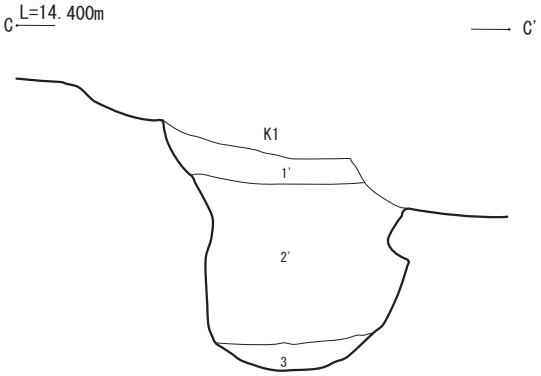
１．10YR3/4　暗褐色土　極細砂混じりシルト
　　粘質ややあり　しまりあり　1cm大の褐色ブロックを多く含む

２．10YR2/3　黒褐色土　1よりやや暗めの色調　シルト
　　粘質あり　しまりあり　2mm大の褐色ブロックを含む
　　オレンジ粒･炭化物を含む

３．10YR3/4　暗褐色土　シルト　粘質ややあり　しまりあり
　　2mm大の褐色ブロック粒を多く含む　オレンジ粒(焼土)･炭化物を含む

４．10YR3/3　暗褐色土　3よりやや暗めの色調　シルト　粘質あり
　　しまりあり　オレンジ粒(焼土)が混じる
　　3～5cm大の褐色ブロックを含む



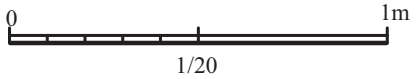


SI104K1埋土

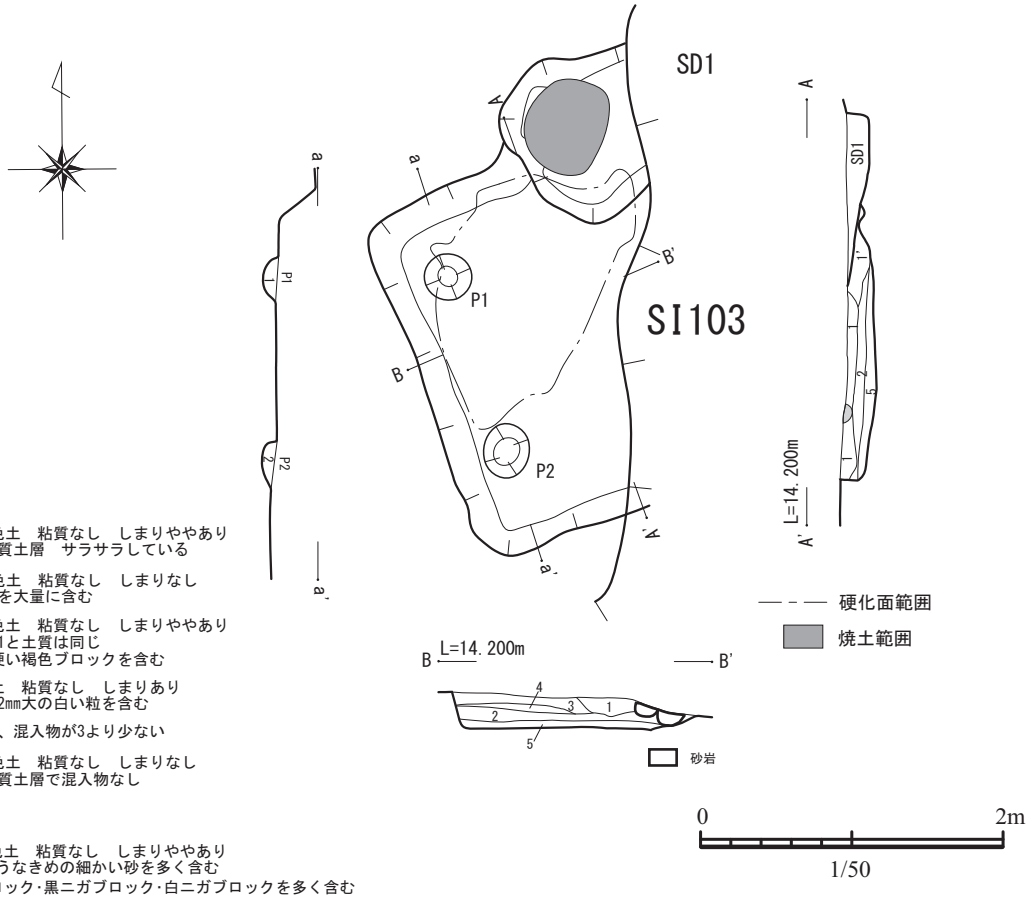
１'．7.5YR3/3　暗褐色土　粒の細かい砂質土　粘質ややあり
　　オレンジ粒･炭化物をやや多めに含む
　　砂岩ブロック･黒ニガブロック(硬化?)を大量に含む

２'．7.5YR3/4　暗褐色土　粒の細かい砂質土　しまりややあり
　　3層(地山)･少し大きめの砂岩ブロックを大量に含む
　　黒ニガブロックをところどころに含む
　　オレンジ粒を少し含む

３．10YR3/3　暗褐色土　少しざらつく中砂を大量に含む



第１８図　ＳＩ１０２・ＳＩ１０４かまど平面・断面図



SI103

1．10YR3/4　暗褐色土　粘質なし　しまりややあり
　きめが細かい砂質土層　サラサラしている

1'．10YR3/4　暗褐色土　粘質なし　しまりなし
　砂層オレンジ粒を大量に含む

2．10YR3/4　暗褐色土　粘質なし　しまりややあり
　褐色砂を含む　1と土質は同じ
　所々に5cm大の硬い褐色ブロックを含む

3．10YR4/4　褐色土　粘質なし　しまりあり
　シルト質土層　2mm大の白い粒を含む

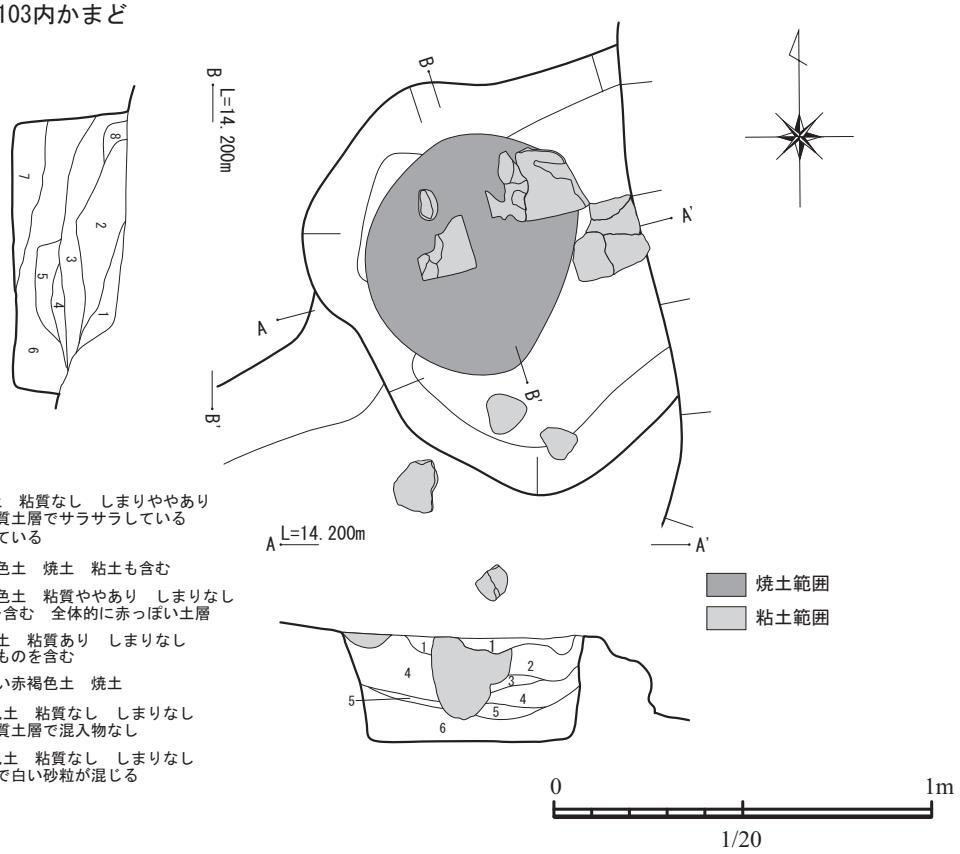
4．上層と同じだが、混入物が3より少ない

5．10YR3/4　暗褐色土　粘質なし　しまりなし
　きめの細かい砂質土層で混入物なし

Pit

1．10YR3/3　暗褐色土　粘質なし　しまりややあり
　砂岩を削ったようなきめの細かい砂を多く含む
　1cm大の褐色ブロック･黒ニガブロック･白ニガブロックを多く含む

SI103内かまど



SI103かまど

1．10YR4/6　褐色土　粘質なし　しまりややあり
　きめが細かい砂質土層でサラサラしている
　焼土粒が混入している

2．5YR5/6　明赤褐色土　焼土　粘土も含む

3．7.5YR3/4　暗褐色土　粘質ややあり　しまりなし
　5mm大の焼土粒を含む　全体的に赤っぽい土層

4．7.5YR4/4　褐色土　粘質あり　しまりなし
　白い灰のようなものを含む

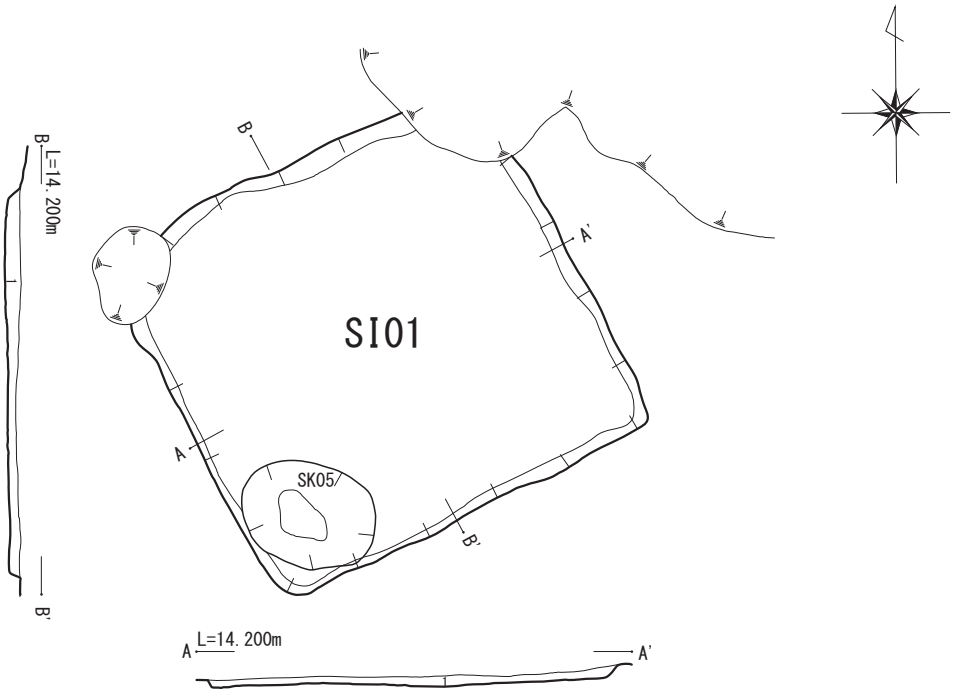
5．2.5YR4/3　にぶい赤褐色土　焼土

6．10YR3/4　暗褐色土　粘質なし　しまりなし
　きめの細かい砂質土層で混入物なし

7．10YR3/3　暗褐色土　粘質なし　しまりなし
　きめの粗い砂層で白い砂粒が混じる

第１９図　ＳＩ１０３平面・断面図

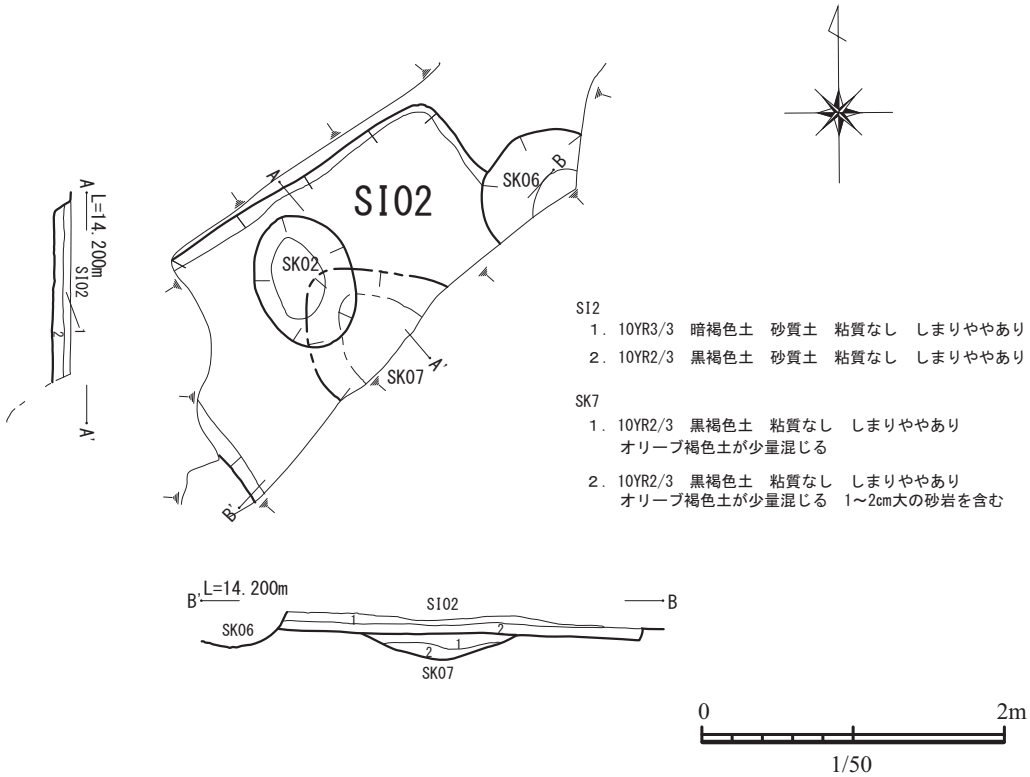
ＳＩ０１



SI1
１．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質なし　しまりややあり　黒褐色土が多く混じる

0　2m
1/50

ＳＩ０２



SI2
１．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質なし　しまりややあり
２．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質なし　しまりややあり

SK7
１．10YR2/3　黒褐色土　粘質なし　しまりややあり
オリーブ褐色土が少量混じる
２．10YR2/3　黒褐色土　粘質なし　しまりややあり
オリーブ褐色土が少量混じる　1～2cm大の砂岩を含む

0　2m
1/50

第２０図　６Ｄ区ＳＩ０１･ＳＩ０２平面・断面図

ＳＩ１０３（第１９図）

旧河川（ＳＤ５）の黄褐色土層上面で検出した。４４ｍイ・グリッドに位置する。ＳＤ１に壊され、東側半分は消失している。南北約２．５ｍ、東西は現況で１．９ｍ、検出面から生活面までの深さ約２０㎝を測る。主軸はＮ－１９°－Ｗである。

機能面は掘方面に硬化面が残存する。柱穴は掘方面での検出であるが、Ｐ１とＰ２を検出した。Ｐ１－Ｐ２間は約１．２ｍである。

壊されたかまどが残存し、袖石、粘土の散らばりが見られた。袖石は原位置を保っていない。かまど埋５層上面が焼成面と考えられる。

遺物は土師器壺の口縁部（第２１図３）が出土した。外面では口縁部はヨコナデ、体部上位はナデ後ハケメ調整される。内面では口縁部はヨコナデ、体部と口縁部の境はハケメ、体部上位はヘラケズリ調整である。他に赤彩を施された土師器甕の破片が出土した。

６Ｄ区ＳＩ０１（第２０図）

３層上面で４４ℓア・エ・グリッドに位置する。北側と西側を撹乱、南側をＳＫ０５に壊される。南北約２．６ｍ、東西約２．７ｍ、検出面からの深さ約１０㎝を測る。長軸はＮ－６１°－Ｅである。

機能面、柱穴等は検出できなかった。掘方面が若干南西側に下がる。

遺物は土師器甕（第２１図７）、土錘（第２１図５、６）が出土した。２１－７は外器面がヨコナデ後ハケメ調整、内器面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリ調整される。体部外面はオリーブ黒であるが、これがススなのか、黒色土器のような加工のものなのかは不明である。他に、土師器甕の口縁部、須恵器の破片等が出土した。

ＳＩ０１の上からの遺構ＳＫ０５は、平面形は楕円形を呈し、長軸約８９㎝、短軸約６７㎝、検出面からの深さ約２２㎝を測る。埋土は暗褐色砂質土で、底部に砂岩、褐色粒を含んでいる。遺物は土師器の破片が少し出土した。

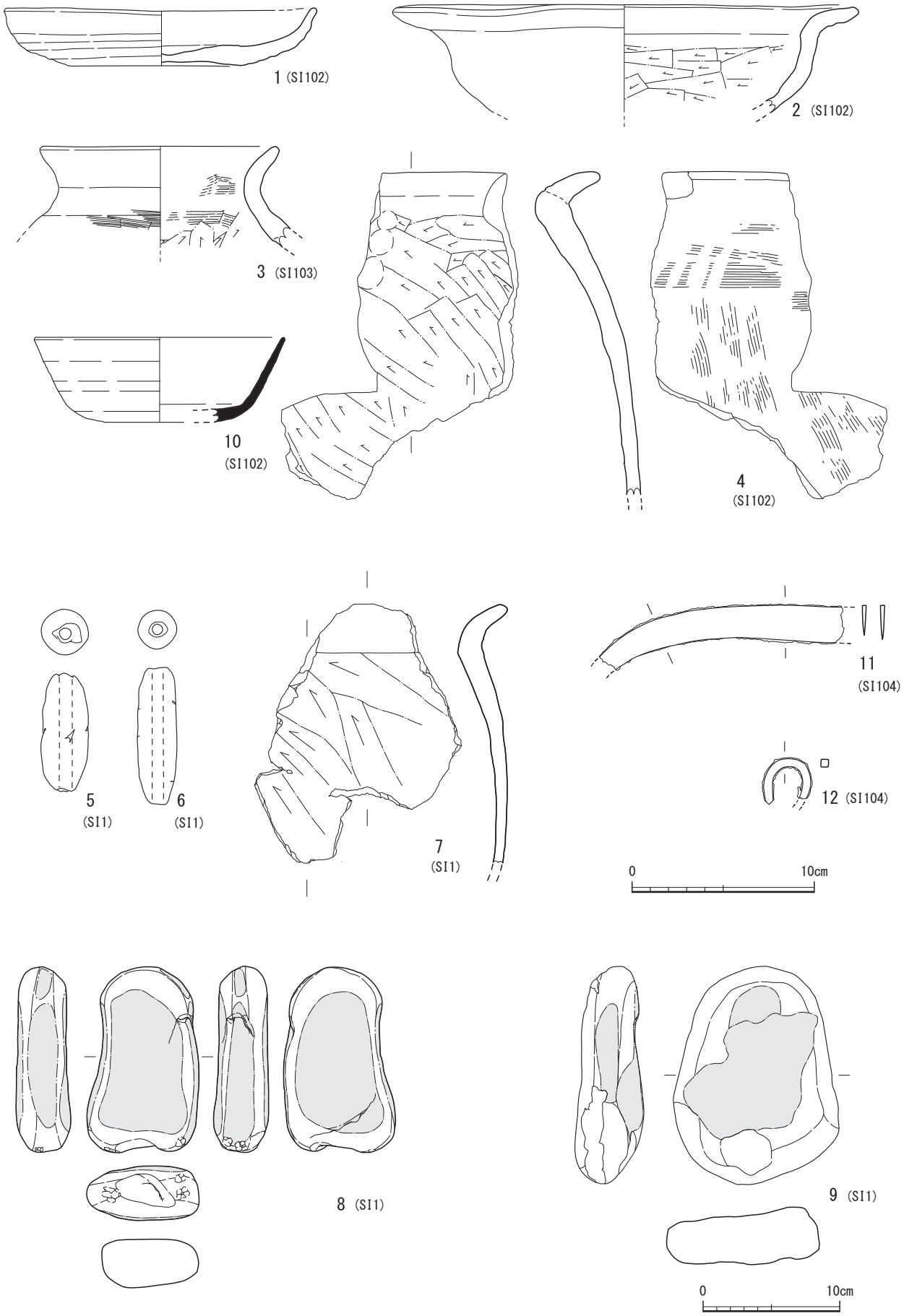
６Ｄ区ＳＩ０２（第２０図）

３層正面で検出した。南東側を撹乱、建物内をＳＫ０２で壊される。現況で南北約１．５ｍ、東西約２．６ｍ、検出面からの深さ約１２㎝を測る。長軸はＮ－４２°－Ｅである。

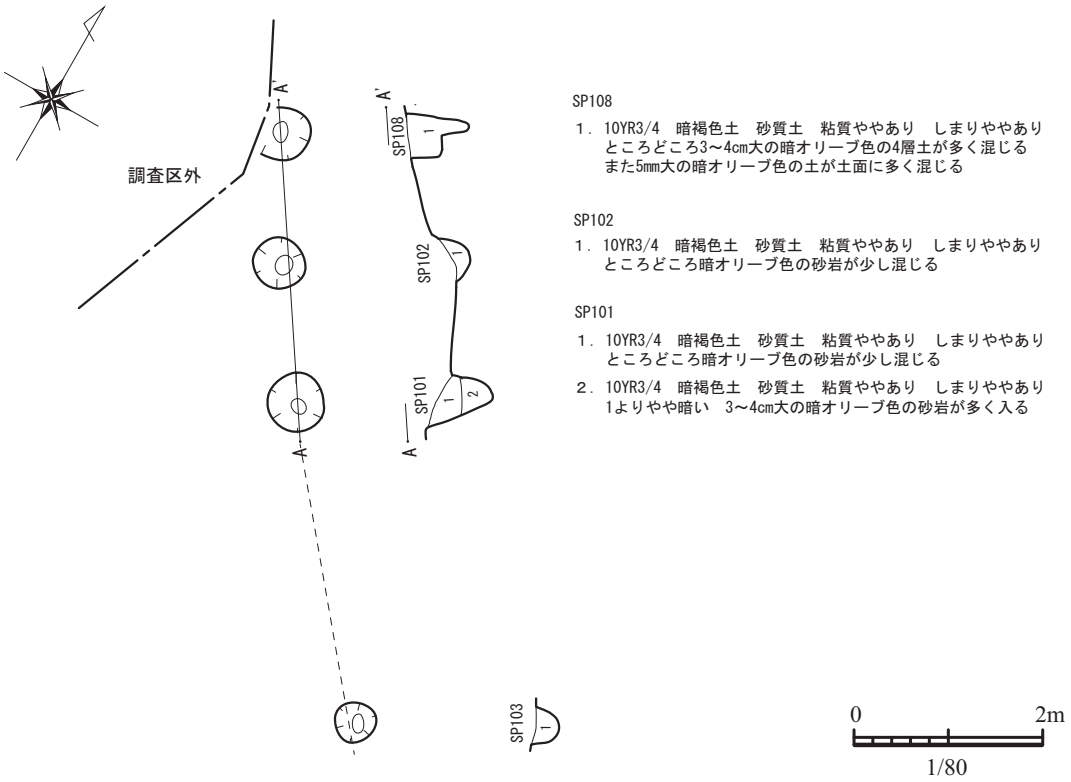
機能面、柱穴等は検出できなかった。また、遺物等も出土しなかった。

建物の上面からＳＫ０２、掘方面でＳＫ０７を検出した。ＳＫ０２は、平面形は楕円形を呈し、長軸約８７㎝、短軸約６５㎝、検出面からの深さ約１８㎝を測る。埋土は暗褐色砂質土である。遺物は土師器、須恵器の破片が多く、その中で比較的小型の須恵器甕の口縁部で、端が肥厚し、断面形は三角形に近く、外面端部下方に沈線が入るものが１点出土した。ＳＫ０７はＳＩ０２掘方面で検出した遺構で、南東側を撹乱で壊されているため推定ではあるが、平面形は楕円形を呈し、現況で長軸約１００㎝、短軸約７５㎝である。位置が建物の中央部に近く、埋土も建物の埋土と同じため、建物の機能時よりも古い遺構で建物貼床面形成の際に埋まったものと思われる。

遺物はＳＩ０２同様実測できるものは出土しなかった。



第２１図　６区出土遺物実測図（1）



第２２図　ＳＡ１平面・断面図

柵列

ＳＡ１（第２２図）

３層上面で検出した。４３ｍア・エ・グリッドに位置する。北西方向の柵列で、ＳＰ１０１－ＳＰ１０２間は約１４６㎝、ＳＰ１０２－ＳＰ１０８間は約１４２㎝を測る。やや軸はずれるがＰ１０１から約３３７㎝、南西にＳＰ１０３が出土する。柱掘方は平面円形で径５６～６２㎝、掘方面の深さは一定ではない。埋土はＳＰ１０１、ＳＰ１０２、ＳＰ１０３とも暗褐色土で暗オリーブ色の砂岩が混入していることから、埋まった時期はほぼ同時期と考えられる。柱痕等は見られなかった。

土坑

ＳＫ４（第２４図）

３層上面で検出した。４７ℓエ・４８ℓウ・グリッドに位置する。撹乱、ＳＰ２、ＳＰ１０に壊される。平面形は隅丸方形で長軸約１７８㎝、短軸約１６９㎝、検出面から掘方面までの深さ約３６㎝を測る。掘方面よりＳＰ１２、ＳＰ９を検出した。等間隔ではないが外側に位置するＳＰ１０を含め、ＳＰ１０－ＳＰ９－ＳＰ１２と一列に並ぶ。

遺物は埋２層中に土師器椀の底部（第２７図６）が出土した。高台は底部端につき、断面形は三角形の形状である。体部は下位の様子からやや立ち気味と思われ、９世紀中葉、後半のものと思われる。

ＳＫ５（第２３図）

３層上面で検出した。４７ｋイ・グリッドに位置する。大部分を撹乱に壊され、ＳＫ１１を壊す。平面形、規模は不明である。検出面からの深さ約２０㎝を測る。

遺物は須恵器の破片が出土した。

ＳＫ６（第２３図）

３層上面で検出した。４７ｋア・グリッドに位置する。東西を撹乱に壊される。平面形は不整楕円形を呈し、現況では長軸約１０８㎝、短軸１０３㎝、検出面から掘方面までの深さ約２６～３０㎝を測る。埋１層中に土師器甕（第２７図３）が出土した。外面はヨコナデ後ハケメ調整、内面は口縁部がヨコナデ、口縁部と胴部の境はハケメ、胴部はヘラケズリされる。ハケメ調整後ヘラケズリされているようである。

ＳＫ７（第２３図）

３層上面で検出した。４７ｋイ・グリッドに位置する。平面形は不整方形を呈し、長軸約７５㎝、短軸７１㎝、検出面からの深さは深いところで約２８㎝を測る。基底は南西側に（ＳＰ４に向けて）傾斜する。

ＳＫ８（第２３図）

３層上面で検出した。４７ｋイ・グリッドに位置する。北東側を撹乱で壊されるため、平面形、規模は不明である。現況では、長軸約８３㎝、短軸約６０㎝、検出面からの深さ約１０㎝を測る。

ＳＫ９（第２３図）

３層上面で検出した。４７ｋイ・グリッドに位置する。ＳＤ３、ＳＫ１１に壊されるため、平面形、規模は不明である。検出面からの深さ約２４㎝を測る。

遺物は埋２層中から土師器椀（第２７図１）が出土した。高台は底部端につき、高台高は高く、端部は丸い。体部は底部端から直線的に伸びる。９世紀中葉、後半のものと思われる。

ＳＫ１１（第２３図）

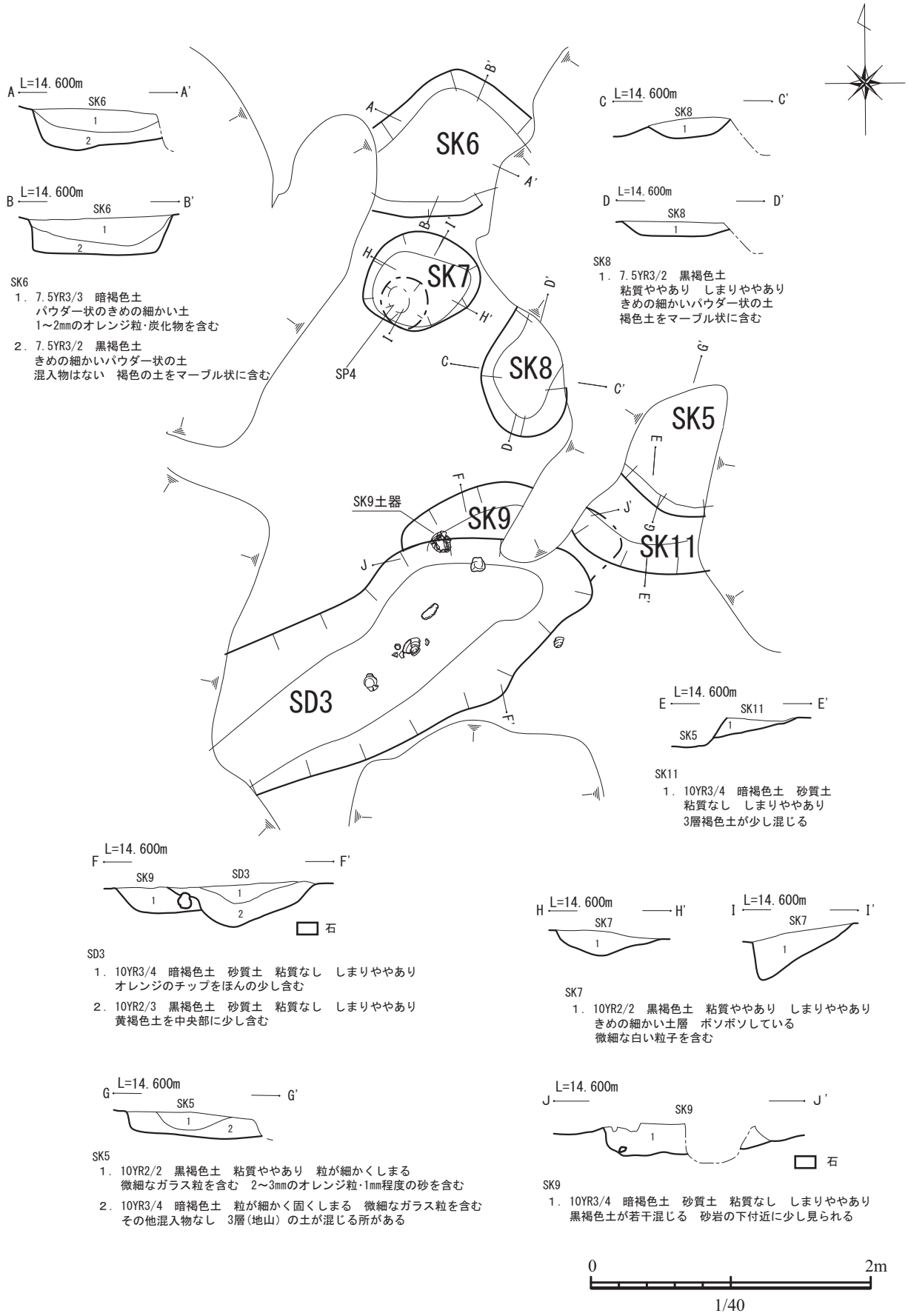
３層上面で検出した。４７ｋイ・グリッドに位置する。ＳＫ９を壊す。ＳＫ５、撹乱に壊されるため、平面形、規模は不明である。

ＳＫ１６（第２４図）

３層上面で検出した。４５ｍエ・グリッドに位置する。ＳＫ１７を壊す。平面形はやや崩れた隅丸長方形を呈し、長軸約１８３㎝、短軸約１１５㎝、検出面からの深さ約４０㎝を測り、基底は南側にやや傾斜する。埋３層で焼土や炭化物が出土した。これは西側の一部の層であるので、ＳＫ１７埋２層の残存の可能性がある。

遺物は埋１層より土師器杯（第２７図７）、（第２７図１２）、（第２７図１０）、（第２７図８）、（第２７図９）、土師器椀（第２７図４）、土師器の底部（第２７図１３）、須恵器杯（第２７図１５）、須恵器皿（第２７図１６）、埋３層より土師器甑の把手（第２７図１７）が出土した。

２７－７は内外面ともに赤彩を施され、体部は下位よりやや丸みを持って立ち上がる。２７－１２は口径１８．４㎝（推定）、器高７．１㎝と大型の杯である。内外面ともに赤彩を施され、体部は直線的に伸びる。２７－１０も内外面に赤彩を施され、底部外面に墨書があるが、文字については判別できなかった。２７－８は外面が赤彩を施され、体部は下位から丸みを持ち、口縁部端でやや外反する。底部外面は回転ヘラケズリさ



SK6
1．7.5YR3/3　暗褐色土
パウダー状のきめの細かい土
1～2mmのオレンジ粒･炭化物を含む
2．7.5YR3/2　黒褐色土
きめの細かいパウダー状の土
混入物はない　褐色の土をマーブル状に含む

SK8
1．7.5YR3/2　黒褐色土
粘質ややあり　しまりややあり
きめの細かいパウダー状の土
褐色土をマーブル状に含む

SK11
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土
粘質なし　しまりややあり
3層褐色土が少し混じる

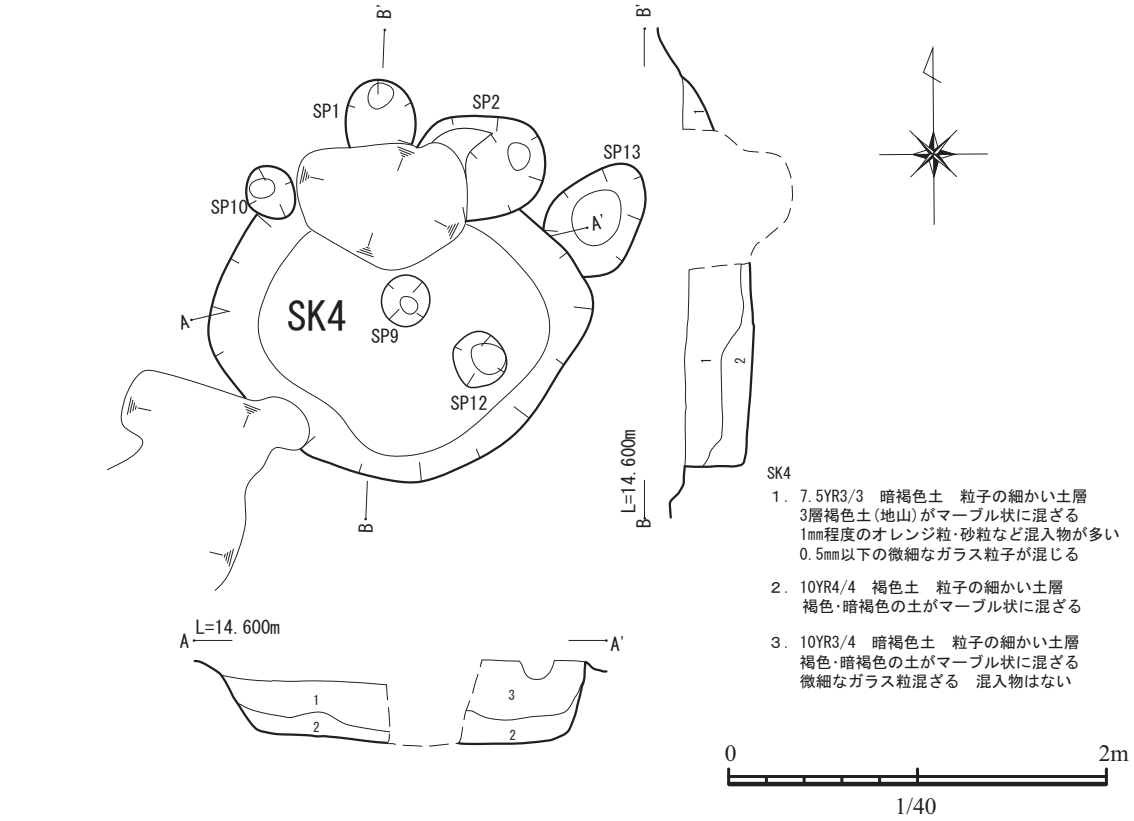
SD3
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質なし　しまりややあり
オレンジのチップをほんの少し含む
2．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質なし　しまりややあり
黄褐色土を中央部に少し含む

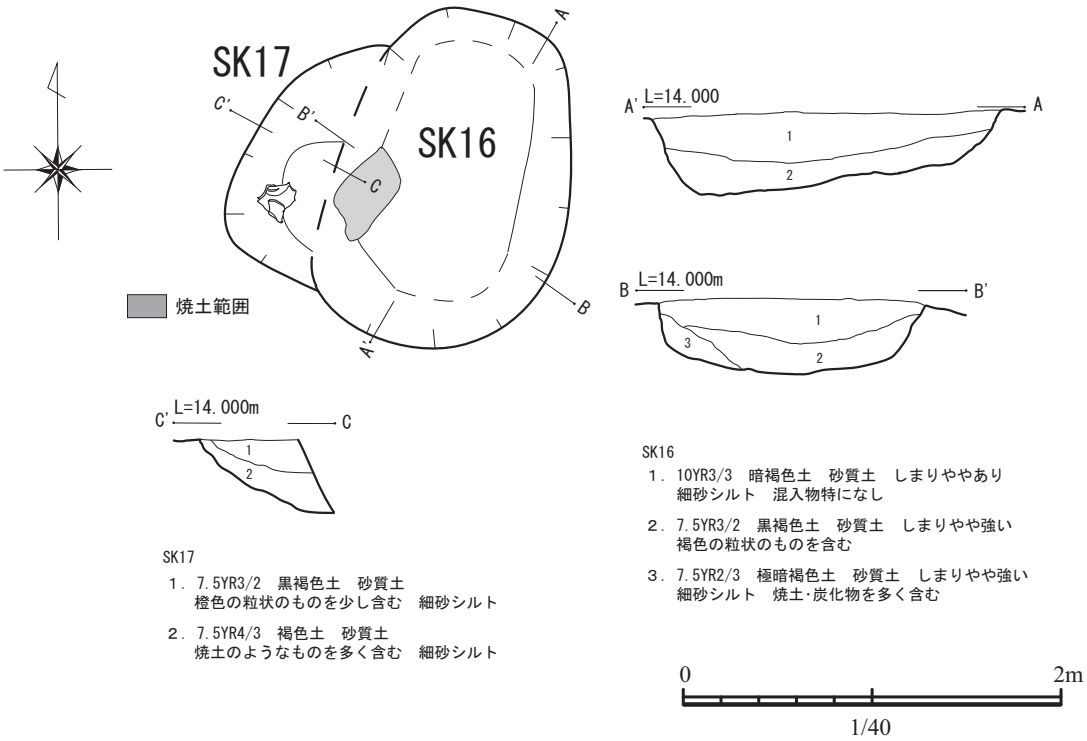
SK7
1．10YR2/2　黒褐色土　粘質ややあり　しまりややあり
きめの細かい土層　ボソボソしている
微細な白い粒子を含む

SK5
1．10YR2/2　黒褐色土　粘質ややあり　粒が細かくしまる
微細なガラス粒を含む　2～3mmのオレンジ粒･1mm程度の砂を含む
2．10YR3/4　暗褐色土　粒が細かく固くしまる　微細なガラス粒を含む
その他混入物なし　3層(地山）の土が混じる所がある

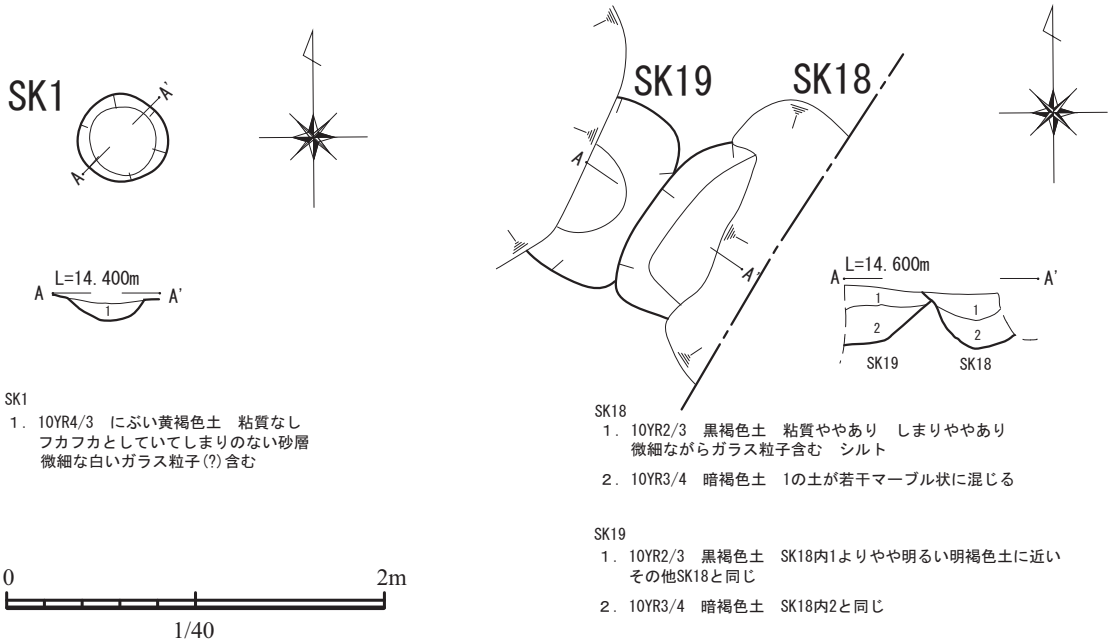
SK9
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質なし　しまりややあり
黒褐色土が若干混じる　砂岩の下付近に少し見られる

第２３図　ＳＤ３・ＳＫ５・ＳＫ６・ＳＫ７・ＳＫ８・ＳＫ９・ＳＫ１１平面・断面図





第２４図　ＳＫ４･ＳＫ１６･ＳＫ１７平面・断面図

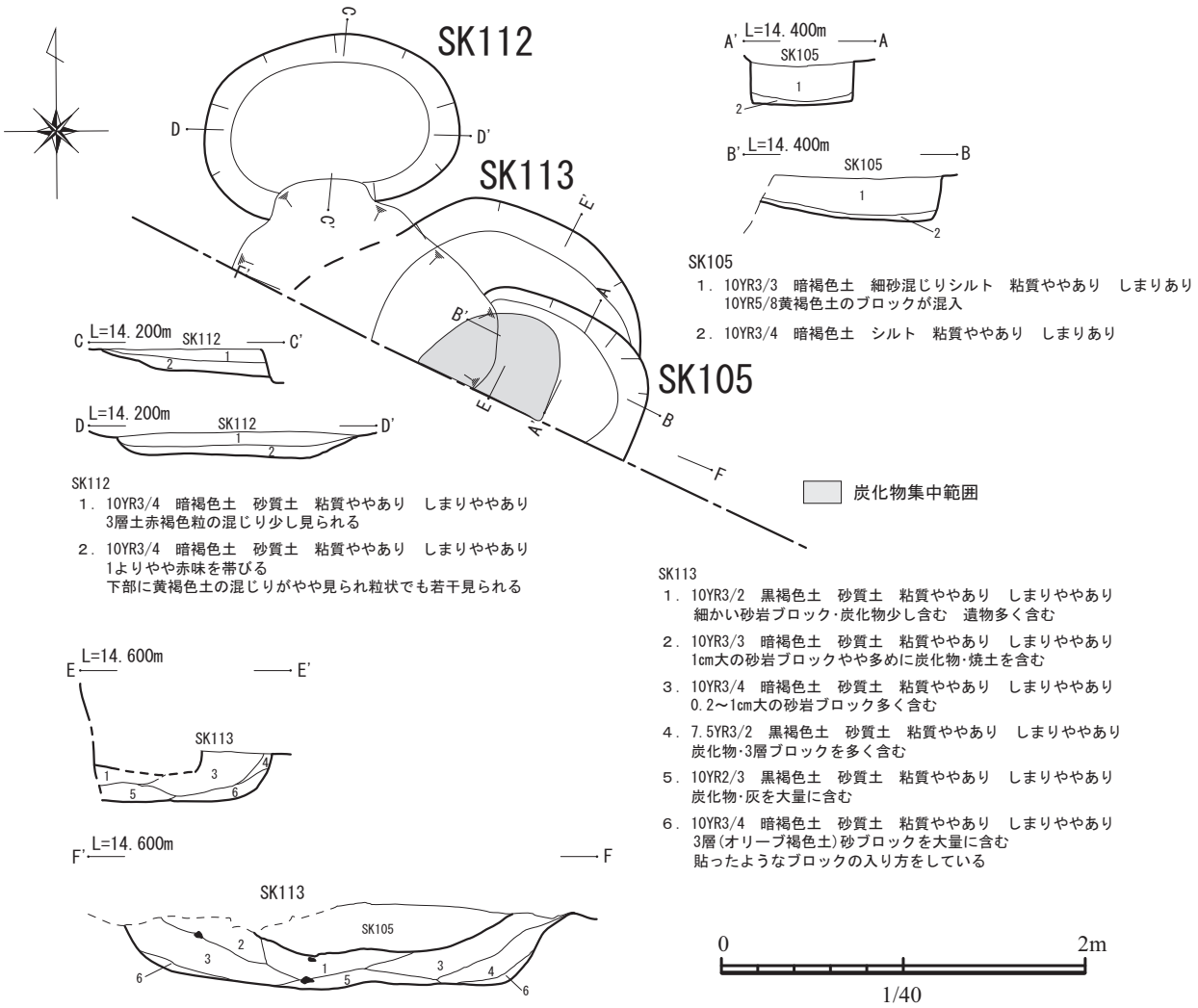


SK1
１．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘質なし
　　フカフカとしていてしまりのない砂層
　　微細な白いガラス粒子(?)含む

SK18
１．10YR2/3　黒褐色土　粘質ややあり　しまりややあり
　　微細ながらガラス粒子含む　シルト
２．10YR3/4　暗褐色土　1の土が若干マーブル状に混じる

SK19
１．10YR2/3　黒褐色土　SK18内1よりやや明るい明褐色土に近い
　　その他SK18と同じ
２．10YR3/4　暗褐色土　SK18内2と同じ

第２５図　ＳＫ１･ＳＫ１８･ＳＫ１９平面・断面図

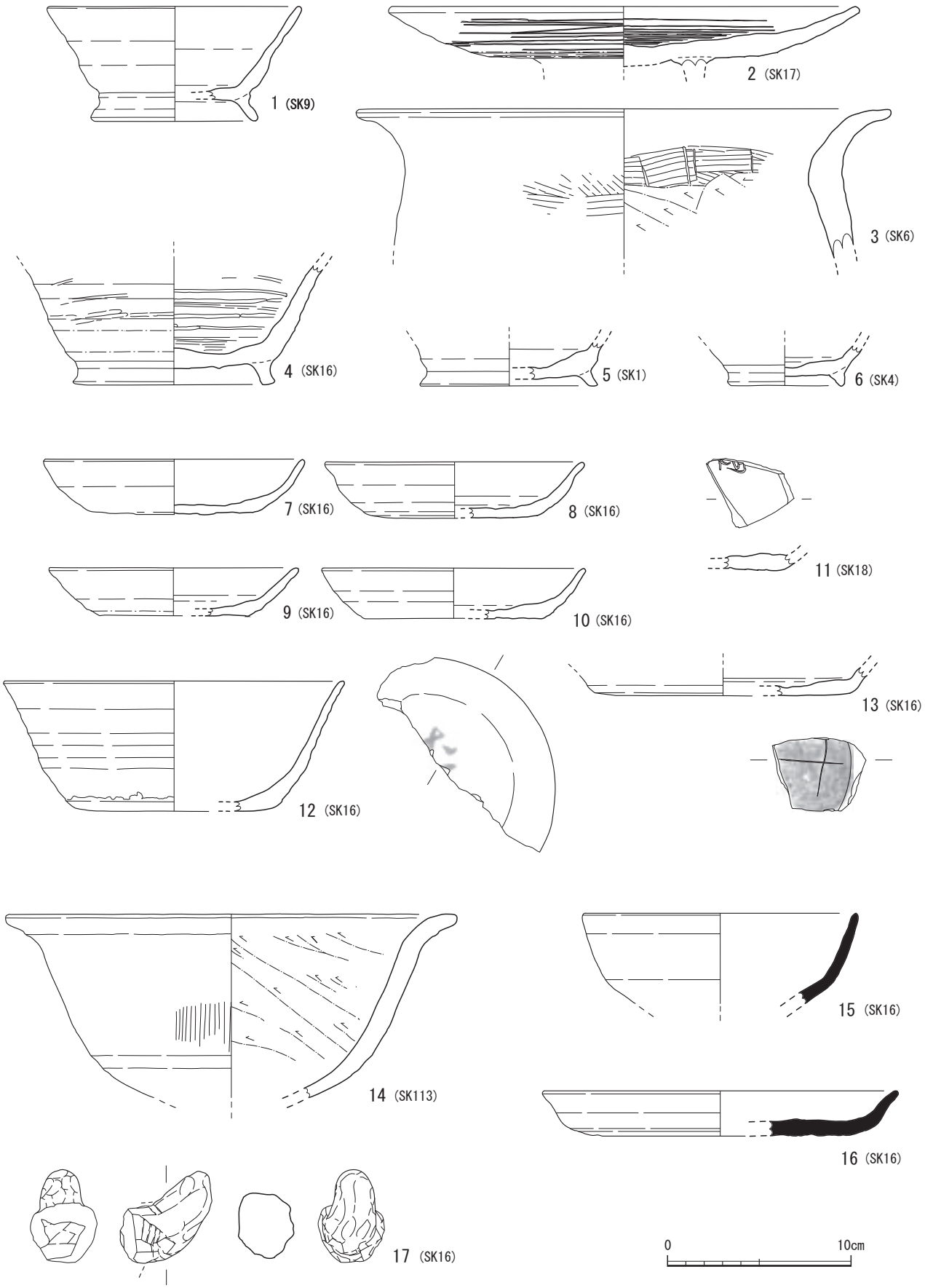


SK105
１．10YR3/3　暗褐色土　細砂混じりシルト　粘質ややあり　しまりあり
　　10YR5/8黄褐色土のブロックが混入
２．10YR3/4　暗褐色土　シルト　粘質ややあり　しまりあり

SK112
１．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　　3層土赤褐色粒の混じり少し見られる
２．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　　1よりやや赤味を帯びる
　　下部に黄褐色土の混じりがやや見られ粒状でも若干見られる

SK113
１．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　　細かい砂岩ブロック･炭化物少し含む　遺物多く含む
２．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　　1cm大の砂岩ブロックやや多めに炭化物･焼土を含む
３．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　　0.2～1cm大の砂岩ブロック多く含む
４．7.5YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　　炭化物･3層ブロックを多く含む
５．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　　炭化物･灰を大量に含む
６．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　　3層(オリーブ褐色土)砂ブロックを大量に含む
　　貼ったようなブロックの入り方をしている

第２６図 ＳＫ１１２・ＳＫ１１３・ＳＫ１０５平面・断面図



第２７図　６区出土遺物実測図（2）

れ、丁寧に仕上げられている。２７－９は体部が直線的に伸びる。

２７－４は比較的大型の椀で、内面に回転ヘラミガキが施される。高台は底部外面につき、断面形は長方形である。２７－１３は底部外面に×の刻印が入る。

２７－１５は形状から高杯の杯部と思われる。２７－１６は口縁部が外反する。

ＳＫ１７（第２４図）

３層上面で検出した。４５ｍエ・グリッドに位置する。ＳＫ１６に壊される。平面形は隅丸楕円形を呈し、長軸約１３３㎝、短軸は現況で約３５㎝、検出面からの深さ約２７cm を測る。埋２層中に焼土が出土する。ＳＫ１６埋３層中からも出土するため、火が使用された可能性がある。

また、埋２層からは土師器高杯（第２７図２）が出土する。口径が２５．２㎝と大型で、高杯というよりも脚付盤と呼べるようなものである。内外面ともヘラミガキを施され、赤彩で仕上げられている。

ＳＫ１８（第２５図）

３層上面で検出した。４７ℓア・グリッドに位置する。ＳＫ１９を壊し、撹乱に壊されるため、平面形、規模は不明である。現況では、長軸約９９㎝、短軸約４３㎝、検出面からの深さ約２８㎝を測る。

遺物は埋２層中より土師器杯の底部破片（第２７図１１）が出土した。内側に刻印が記されているが一部のみの残存であり、内容は不明である。

ＳＫ１９（第２５図）

３層上面で検出した。４７ℓア・エ・グリッドに位置する。ＳＫ１８、撹乱に壊されるため、平面形は不明である。現況では、長軸約９９㎝、短軸約４４㎝、検出面からの深さ約３２㎝を測る。

ＳＫ１０５（第２６図）

３層上面で検出した。４３ｍウ・グリッドに位置する。平面形は調査区外にかかること、撹乱に壊されていることからはっきりとはしないが、残存から推察すると、隅丸方形と思われる。長軸約９１㎝、短軸約６３㎝、検出面からの深さ約３３㎝を測る。

遺物は土師器の破片や当て具痕がある須恵器甕の破片等が出土した。

ＳＫ１１２（第２６図）

３層上面で検出した。４３ｍウ・グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。長軸約１３９㎝、短軸は撹乱に壊されているが現況で約７９㎝、検出面からの深さ約１４㎝を測る。

遺物は土師器の破片や須恵器甕の胴部破片が出土した。

ＳＫ１１３（第２６図）

３層上面で検出した。４３ｍウ・グリッドに位置する。撹乱、ＳＫ１０５に壊される。平面形は壊されているためはっきりとはしないが、遺構下端から楕円形と推察される。長軸約２３６㎝、短軸約９４㎝、検出面からの深さ約２７㎝を測る。埋４層、埋５層に炭化物、灰を含むことから、火が使用された、又は灰等を捨てられた可能性がある。

遺物は埋２層中に土師器鉢（第２７図１４）が出土した。２７－１４は、外面は回転ナデ、内面は口縁部が回転ナデ、体部はヘラケズリ調整される。

ＳＫ１（第２５図）

２層上面で検出した。４６ｋイ・グリッドに位置する。平面形は円形で長軸約４８㎝、短軸約４７㎝、検出面からの深さ約１０㎝を測る。

遺物は土師器椀（第２７図５）が出土した。高台は底部端に斜めにつき、体部は底部端から立ち気味に伸びると思われる。

溝跡

ＳＤ１（第４、２８図）

４１ｎア・イ・ウ・エ、４１ｏイ・ウ、４２ｎア・イ・ウ・エ、４２ｏア・イ・ウ・エ、４３ｍア・イ、４３ｎア・イ・ウ・エ、４３ｏエ、４４ｍア・イ、４４ｎウ・エ、４５ｍア・イ・グリッドに位置する。調査区を斜めに横切る溝で、位置や流れの方向から５区ＳＤ１４（『新屋敷遺跡１』第１３１図参照）につながる溝と考えられる。方位はＮ－３°－Ｅ、調査区外に広がるため規模は不明であるが、現況で幅１８ｍ以上、長さ４０ｍ以上を測る。完掘することはできなかった。

溝埋土上には、近現代の建物等の遺構は残存したが、それより以前の遺構は検出できなかったこと、また、古代の竪穴建物遺構が半分程壊されているものもあることから、溝が機能していた時期は５区ＳＤ１４の時期と同様、中世以降であり、白川へ流れ込む流路の可能性がある。

溝埋土上には建物の基礎と思われる栗石の配石が残存し、中島広足居跡と思われる建物基礎後もあることから江戸時代終末期までには埋没したと思われる。

トレンチの観察から、埋１～４層は埋土の土色、混入物の質からほぼ同時期の堆積と思われる。その下の層は砂の割合が多い黒～暗褐色土が層状に堆積する。トレンチは検出面から、一部約２．９ｍ（レベルは約１１．２３ｍ）まで掘り下げたが、溝の縁の部分は確認できたものの、底部までは確認できなかった。

遺物は埋１層まで掘削し、近代陶器や土師器、須恵器の破片等が多く出土した。

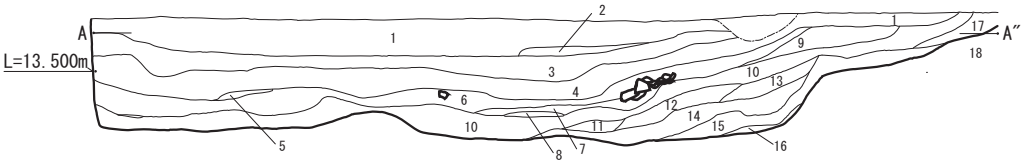
ＳＤ２（第２９、３０図）

４５ｋア・イ、４６ｋア・エ、４５ℓア・イ・ウ・エ、４６ℓア・エ、４５ｍア・イ・ウ・エ、４６ｍエ・グリッドに位置する。南東－北西方向の調査区を横切る溝であり、方位はＮ－６２°－Ｗ、溝の下端は南東から北西に向かって約２．９ｍ下降する。傾斜角度は約１３度である。東西は調査区外に伸びているため、長さは不明であるが、現況での３層上面での幅は約１２ｍ、長さは約１８ｍを測る。南東部はＳＤ４に壊される。

溝の南西側壁側上部から底部にかけては、砂岩層が６０～８０㎝程垂直に落ちており、人為的に削られたのではないかと考えられる。

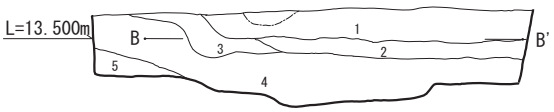
溝内の土は大きく９層に分けられ、最下部は幅約１．０ｍ、長さ６．４ｍの石敷の道路状遺構（ＳＦ１）が出土した。この溝自体が道路跡で、明確な硬化面は検出できなかったが、埋土８層上面から下層はしまりが強い。

以下、ＳＤ２埋土内に検出した遺構について記す。



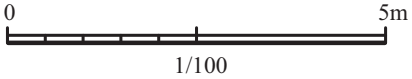
ＳＤ１土層注記（ A-A’ ）

１．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　1～5cmの大レキ･小レキ･炭化物･オレンジ色の粒を含む
２．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質あまりなし　しまりややあり　混入物がほとんど見られない
３．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質あまりなし　しまりややあり　1～3cmの小レキ含む　炭化物を含む
４．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　3よりも若干暗い色調　砂粒は細かい　粘質ややあり　しまりあり　1～3cmの小レキ含む
５．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　4に近いが混入物はほとんど見られない
６．10YR2/3　黒褐色土　4より砂粒は粗い　青灰色の砂岩ブロック　小レキを含む
７．10YR3/4　暗褐色土　砂粒は細かくサラサラとしている　しまりややあり　1cm大のレキを含む
８．5Y6/2　灰オリーブ色土　粘質あり　しまりなし　砂粒は細かい
９．10YR4/4　褐色土　砂粒は粗い　5～10cm大のオリーブ褐色･砂岩ブロックを含む　砂層　非常に乾燥しやすい
10．10YR3/4　暗褐色土　粘質ややあり　サラサラとくずれやすい砂層　砂岩ブロックをわずかに含む
11．10YR2/1　黒色土　粘質なし　しまりなし　粒の粗い砂層
12．10YR3/4　暗褐色土　褐色のブロック含む
13．10YR2/3　黒褐色土　粒の細かい砂層　サラサラしている　黒色でしまりのない砂層が間に入る
14．10YR2/2　黒褐色土　粒が粗くブロック状の土塊を含む　ややしまる砂層
14’14よりもやや砂質が強くほんの少し暗い色になる
15．10YR2/3　黒褐色土　粘質ややあり　しまりややある　粒が細かく5mm大のブロック状の土塊を含む
16．N2　黒色土　粘質なし　しまりなし　粒が細かい砂層　さらさらとしていてパウダー状　混入物のないきれいな層
17．10YR4/6　褐色土　粘質なし　しまりなし　粒が細かくサラサラとしている　混入物のないきれいな土層
18．2.5Y4/4　オリーブ褐色土　粘質ややあり　しまりあり　粒は細かくフカフカとしている土層
18’18よりもやや褐色に近くなる



ＳＤ１土層注記（ B-B’ ）

１．10YR3/3　暗褐色土　粘質ややあり　オレンジ粒　5mm大の炭化物　小レキ多く含む
２．10YR3/2　黒褐色土　粒の細かいシルト質砂層　粘質なし
３．10YR3/3　暗褐色土　粒の細かい砂質　粘質なし　微細な白い粒を含む　フカフカとやわらかい
４．10YR3/3　暗褐色土　粘質ややあり　オレンジ粒　5mm大の炭化物　小レキ含む
５．10YR3/3　暗褐色土　粘質ややあり　微細な白い粒　ガラス質の粒子含む　小レキを多く含む
褐色粘土質のブロック含む　砂岩ブロック含む



第２８図　ＳＤ１土層断面図（1/100）

道路状遺構

ＳＦ１（第３１図）

ＳＤ２最下部に径１５㎝以下の川原石、小石等を敷き詰めたＳＦ１が出土した。川原石、小石の上面には特に硬化面等は存在しないが、川原石、小石の埋め土は非常に固くしまっている。波板状の凸凹も検出できなかった。底部は岩盤を約１ｍ幅で掘り抜いてあり、径５㎜程の砂利が入り、拳大の石が敷き詰められている。敷石を掘削すると砂利の上層には鉄分の沈着が見られ、ガチガチに固まっている。ＳＦ１右側の掘方面で、ほぼ等間隔に浅いピット状の低まりがあるが、壁面の土留めに据えられた杭跡かどうかは分からない。敷石よりも南東側は、集石状遺構（後述）があり、それを外すと岩盤が２条の溝状に掘られていて、石が敷き詰められている状況は見られなかった。ＳＦ１をそのまま延長すると、ちょうど白川と直交するため、白川へ下りるために作られた道路の可能性も考えられる。

遺物はＳＦ１埋土中に須恵器椀（第３２図１）、（第３２図２）、（第３２図３）、（第３２図４）、（第３２図５）、土師器高杯の脚部（第３２図６）、須恵器高杯の脚部（第３２図７）が出土した。また、軒丸瓦（第３２図８）が１点出土した。

３２－１は外面が褐色、内面が橙色であり、逆三角形に近い台形状の高台が底部端につく。３２－２は高台が台形状で、端よりやや内側につく。３２－３は底部外面に灰釉がかかっていて、高台は大きく、外に開く形態である。３２－４は底部外面がフラットでなく、やや下側に出る。高台は長方形に近く端につく。３２－５も底部外面が丸く、高台は端につき形状は三角形に近い。３２－６、３２－７は器高が低めのようである。３２－８は、内区は複弁蓮華文、花弁数は８葉と思われる。中房内の蓮子、外区、周縁部は磨滅がひどくはっきりとしない。３２－３は７世紀後半、３２－１、３２－２、３２－４、３２－５、３２－７は８世紀中葉、後半のものと思われ、ＳＦ１の制作時期も８世紀後半ではないかと思われる。

集石状遺構（第２９図）

溝上流の左岸側、４５ℓイ・ウ、４５ｍウ、４６ｍウ・グリッドに多くの川原石が広く残存する。この石は径５～２０㎝、１㎡あたり最大２２１個、平均で約６２個出土した（一部南北方向に川原石が消失しているのはトレンチのため）。

川原石を含む埋土は、粘質があり、しまりの強い黒褐色土で、土師器、須恵器の大きな破片が多く出土する。石を掘り出すと下部は砂岩質の岩盤になっている。溝中央部付近の川原石は、左岸側の積まれた石が崩れたものと思われる。川原石を含む埋土中には須恵器破片が多く出土し、須恵器大甕の破片、横瓶の破片等が多く出土する。須恵器大甕で、接合し復元できたのは２個体であったが、同個体と思われる大甕の口縁部を集めると、少なくとも４個体は確認できた。

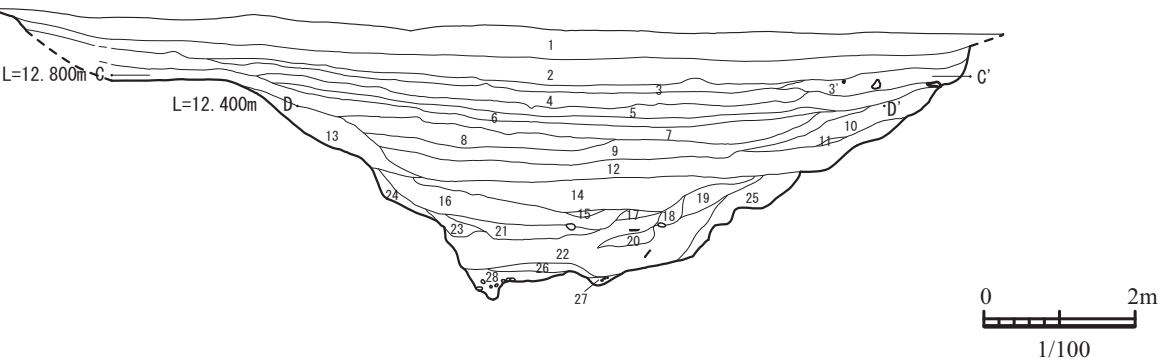
ＳＴ１（第３３図）

北西部右岸下流側埋土ＳＤ２中の８－１層付近で土壙墓と人骨が出土した。これはＳＤ２の掘削中に、頭蓋骨が出土したことから気づいたため、土壙墓が、どのレベルからの掘り込み等ははっきりしない。現況で、長径約２２０㎝、短径約１２９㎝、検出面からの深さ約８２㎝を測る。この土壙墓は、溝がある程度埋まった時に作られたものと考えられる。人骨は、頭位は南東で仰臥伸展葬である。人骨の右側の大腿骨の下から鉄製品１点が検出された。ほかの人骨の胸部から頭部にかけて、やや斜めに傾斜していることから土壙墓と思われる。

人骨の現地調査・取り上げ・分析は松下孝幸氏に依頼した。分析結果は本書「第５章」を参照されたい。

ＳＤ２から出土した遺物は埋３層より下層で、数多くの獣骨が出土した。（第３５図）種類はウシ・ウマが主で、部位は頭部、大腿部など多岐にわたるが、１体がそのまま出土するわけではなく、その部位が溝内の多

第２９図　ＳＤ２道路状遺構配置図及び最下点断面図



り
1mm大の炭化物を均一に大量に含む　（ SD2-1層 ）

m大の炭化物を含む　（ SD2-2層 ）

化物を少量含む

量に含む　（ SD2-5層① ）

量に含む　（ SD2-5層② ）

しまり強い
白色粒を含む
2-6層 ）

含む　間隙が入る　（ SD2-7層① ）

含む　間隙が入る　（ SD2-7層② ）

しまり強い
cm大の黄橙ブロックを大量に含む　間隙が入る

　しまりあり

り　しまり強い
含む　間隙が入る　（ SD2-8層① ）

粘土
含む　間隙が少し入る

　（ SD2-8層② ）

微細な白色粒を均一に含む
が入る

16. 10YR2/2　黒褐色土　粘土質　粘質強い　しまり強い
0.5～1cm大の炭化物･微細な白色粒を均一に含む　間隙が入る　（ SD2-8層③ ）

17. 10YR2/2　黒褐色土　シルト　粘質強い　しまり強い
微細な白色粒を均一に含む　鉄サビのような明赤褐色土がマーブル状に混じる

18. 10YR2/3　黒褐色土　粘土質　粘質強い　しまり強い
2～3mm大の炭化物･赤色粒を均一に含む　間隙が入る

19. 10YR2/3　黒褐色土　粘土質　粘質強い　しまり強い
2～3mm大の炭化物･5mm大の赤褐色ブロックを均一に多く含む　黄褐色ブロックも均一に含む
間隙が入る

20. 10YR2/3　黒褐色土　極細砂混じりシルト　粘質強い　しまり強い
5mm大の炭化物･赤褐色ブロックを多く含む
10cm大の10YR5/6黄褐色土の硬くしまった砂質ブロックを含む
5～15cm大の10YR5/2灰黄褐色粘土ブロックを含む

21. 10YR2/3　黒褐色土　シルト　粘質強い　しまり強い
2cm大の炭化物を少量含む　5YR4/8赤褐色土がマーブル状に混じる　微細な白色粒を均一に含む
間隙が入る　（ SD2-9層① ）

22. 10YR3/1　黒褐色土　細砂混じりシルト　粘質ややあり　しまり強い
5mm大の炭化物を均一に大量に含む　5YR3/6暗赤褐色土を粒状に均一に含む　（ SD2-9層② ）

23. 10YR2/3　黒褐色土　粘土質　粘質強い　しまりあり
2～3cm大の炭化物を少量含む　5mm大の炭化物が稀に含まれる　間隙が入る

24. 10YR3/4　暗褐色土　細砂混じりシルト　粘質強い　しまり強い
5mm大の炭化物･赤褐色粒を均一に大量に含む　間隙が入る

25. 10YR2/3　黒褐色土　シルト　粘質ややあり　しまり強い
1cm大の褐色ニガブロックを大量に含む　5mm大の炭化物･赤褐色粒を均一に多く含む

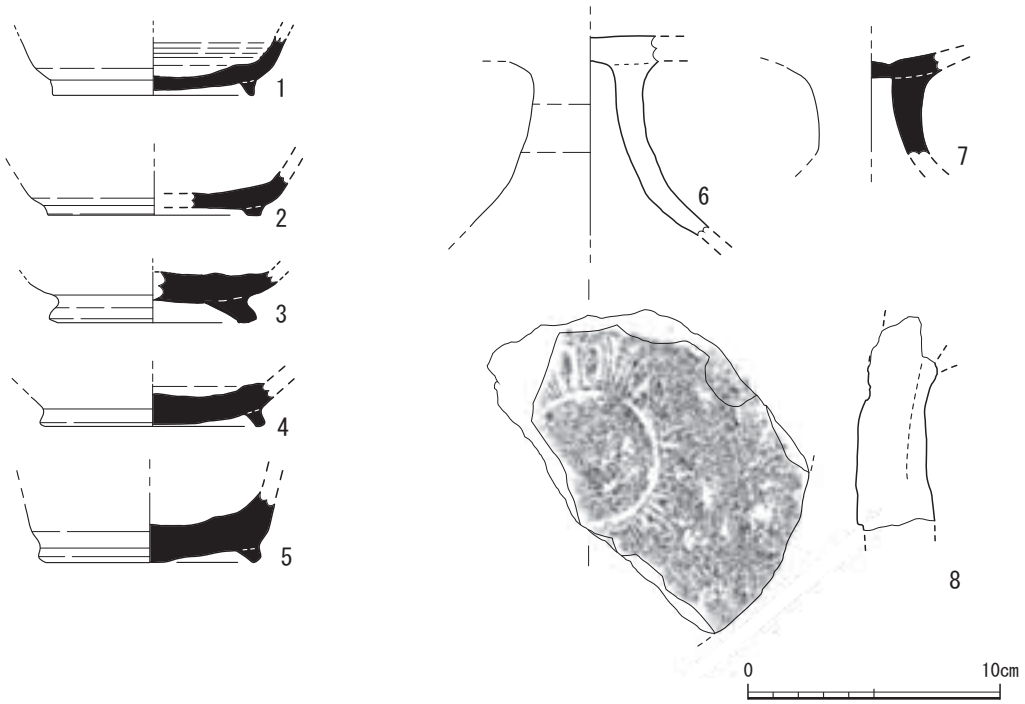
26. 10YR3/1　黒褐色土　細砂混じりシルト　粘質ややあり　しまり強い
22と同様に暗赤褐色土を粒状に含む　（ SD2-9層③ ）

27. 10YR2/2　黒褐色土　細砂混じりシルト　粘質ややあり　しまりあり　2～3cm大の砂利をを含む

28. 10YR2/1　黒褐色土　細砂混じり粘土　粘質強い　しまり強い
2～3cm大又は5cm大の砂利･レキを含む　非常に硬くしまる　（ SF1道路状遺構 ）

第３０図　ＳＤ２土層断面図（1/100）

第３１図　ＳＤ２-ＳＦ１平面・断面図



第３２図　６区出土遺物実測図〔ＳＦ１〕（3）

くの場所で出土したことから、解体後の廃棄の可能性が考えられる。また、獣骨の埋まっている土から、多くの土師器、須恵器が出土した。

土器は、ＳＤ２－１層中に須恵器椀（第３６図１４）、（第３６図１６）、須恵器蓋（第３６図１８）、土師器杯（第３６図４）、青磁椀（第３６図５）が出土した。

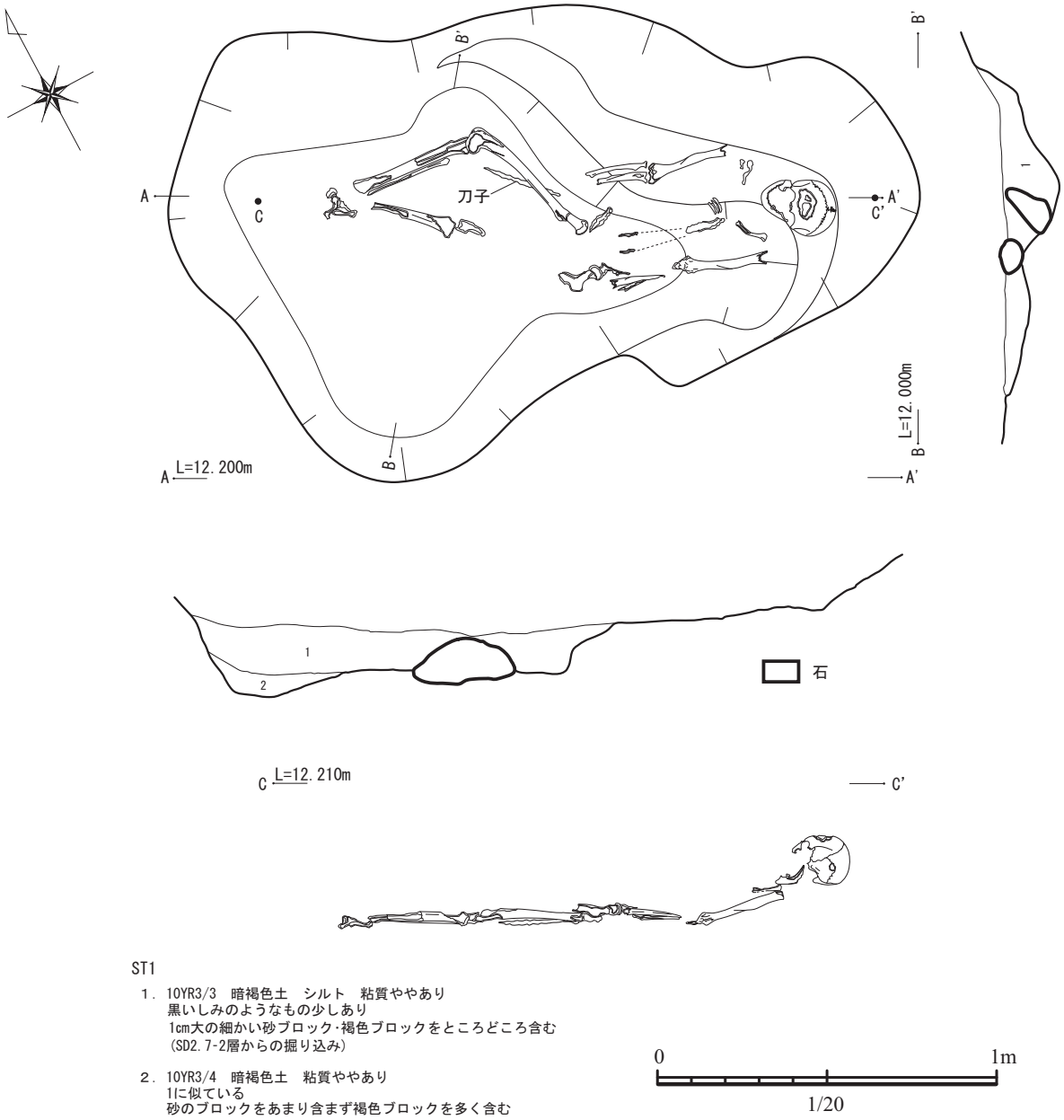
３６－１４は口縁部が外に開き、底部端にひし形状の高台がつく。３６－１６は高台が底部端からやや中央寄りにつく。３６－１８は輪状つまみがつき、体部の回転ヘラケズリや身受けの部分の内側の凹み、つまみの端部等丁寧なつくりである。

３６－４は底部に墨書が記されているが、薄くてはっきりとしない。

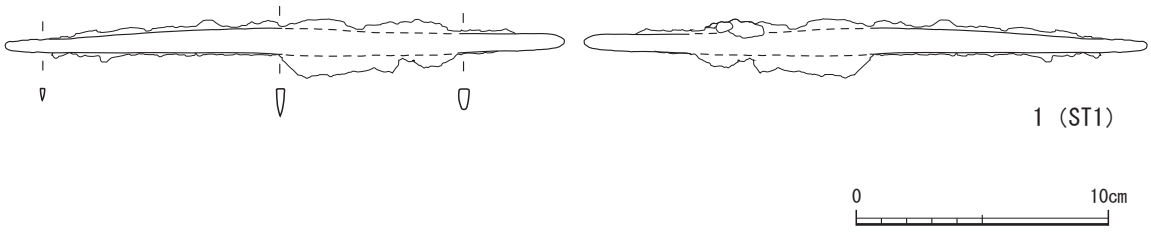
３６－５は越州窯系青磁椀で、全体に施釉されている。底部内面、高台畳付に目跡がつく。高台は細く、やや外向きである。体部は下位が丸い。ほとんど目立たないが、体部外面に縦にほんの少し凹みが見られる（Ⅲ類：太宰府市２０００年）。２つの破片が接合できたものであるが、一片は４６ℓア・グリッドの埋土１層中からで溝の落ち際にあたる。もう一片は４５ℓイ・グリッドの埋土６～７層中からで溝の中心付近にあたり、もう一片と比べて深さも深いことから、３６－５の廃棄時には中心部は深かったことが考えられ、溝が埋まってしまうまでは時間がかかったのではないかと推測される。３６－５は１０世紀後半から１１世紀中頃のものと思われるため、その頃も溝は埋まる途中であったのかもしれない。

ＳＤ２－２～３層中に、土師器杯（第３６図１）、（第３６図２）、（第３６図３）、須恵器椀（第３６図１３）、（第３６図１５）、（第３６図１７）、須恵器杯（第３６図６）、（第３６図８）、須恵器鉢（第３６図２０）、須恵器皿（第３６図９）、（第３６図１０）、（第３６図１１）、須恵器長頸壺（第３６図２２）土錘（第３６図２４）、（第４５図１７）、瓦質土器（第３６図１２）、布目瓦（第３６図２３）が出土した。

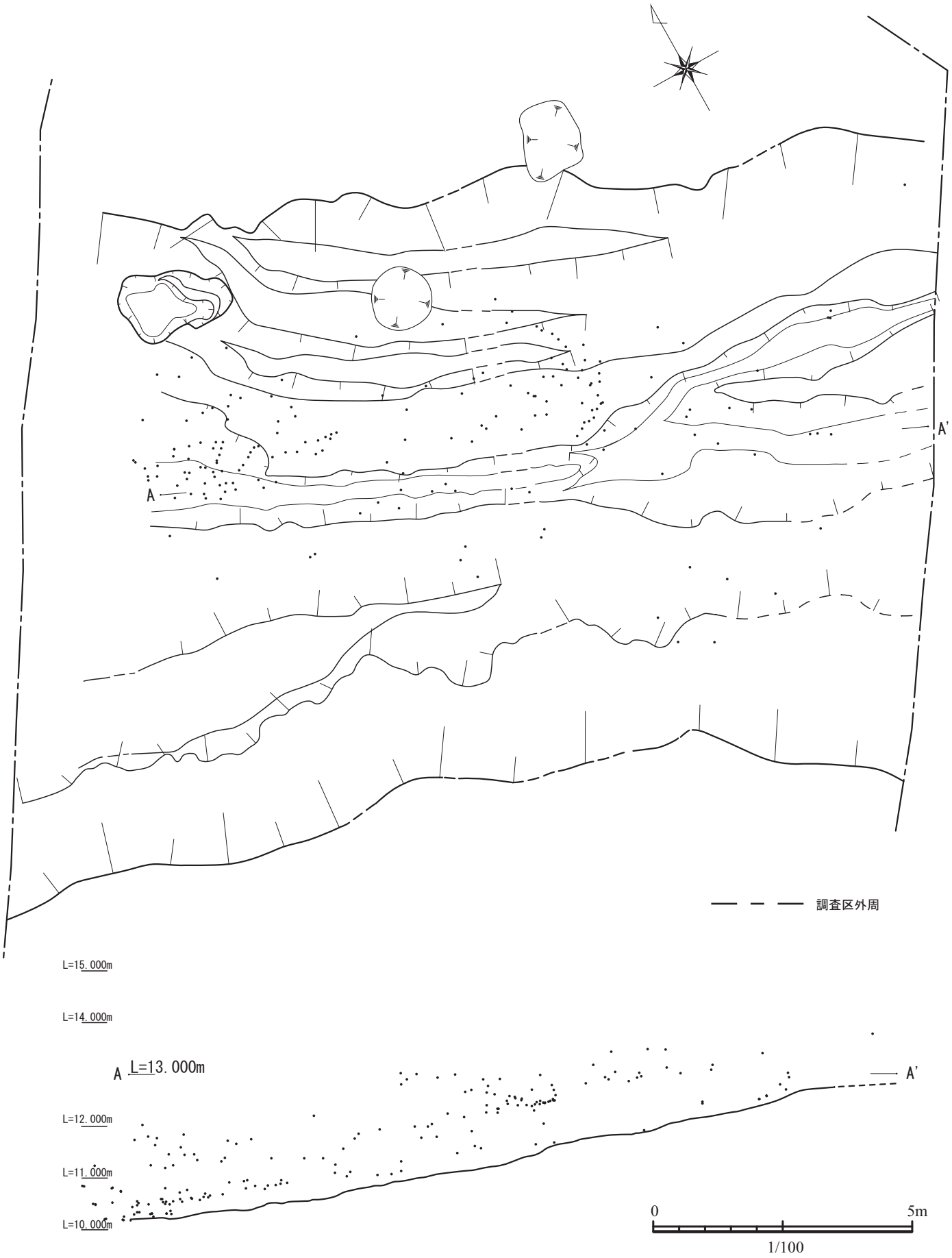
３６－１は体部がほんの少し内側に向く。３６－２は底部を含め内外面とも回転ヘラミガキされ、赤彩を施される。体部は直線的で開き気味である。３６－３は底部と体部の下半のみであるが、体部が直線的でやや立ち気味である。



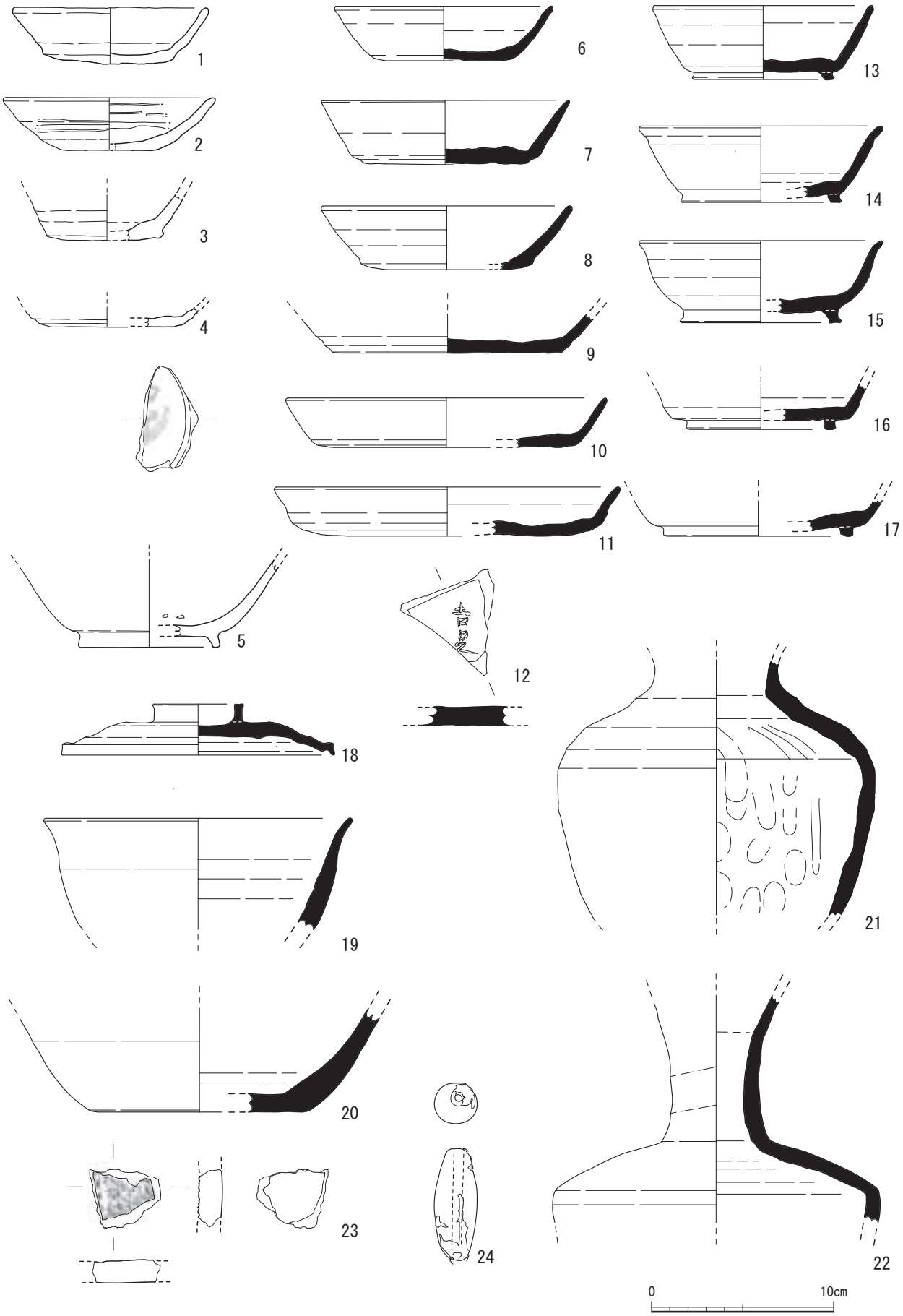
第３３図　ＳＴ１平面・断面図



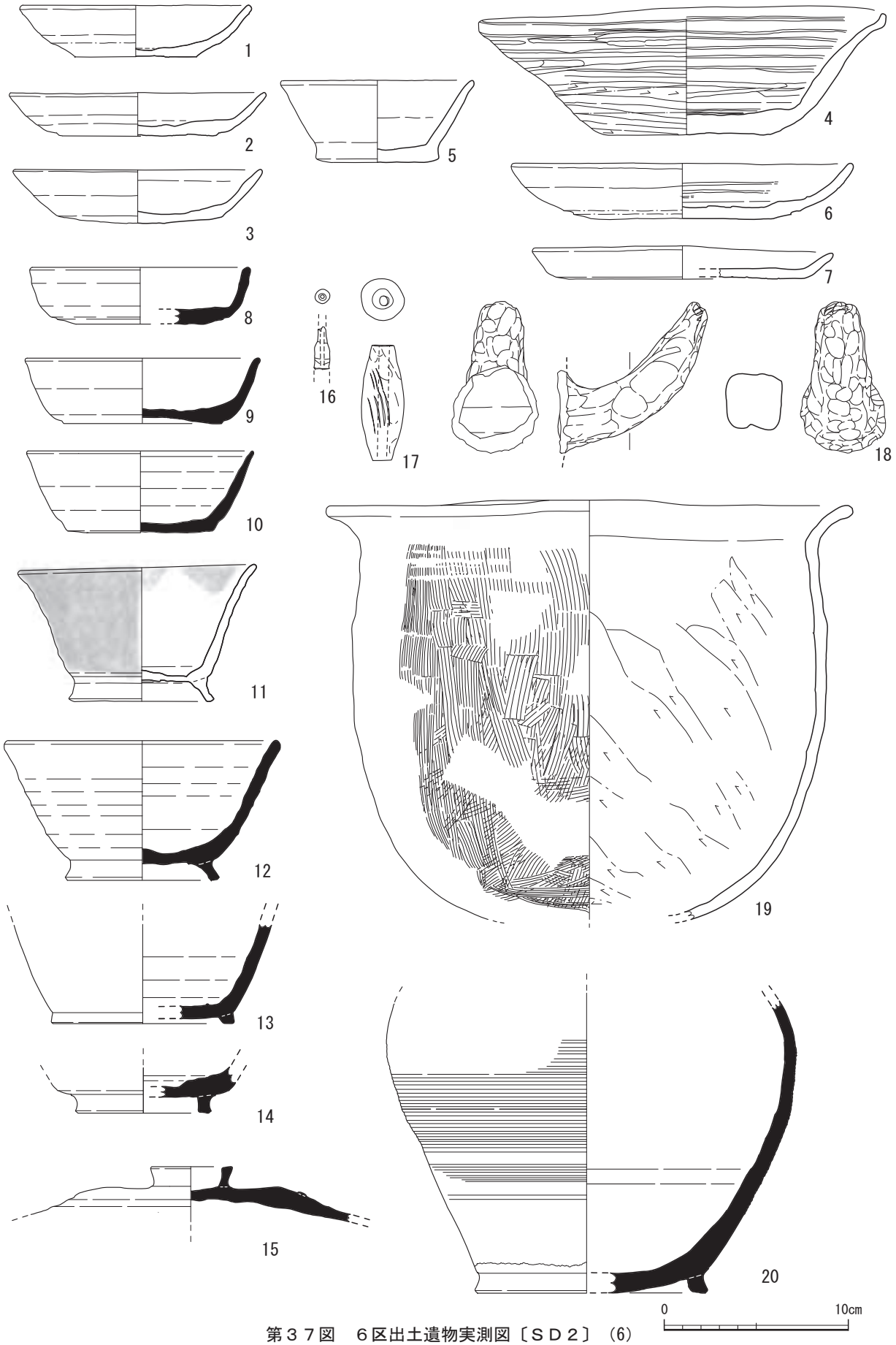
第３４図　６区出土遺物実測図（4）



第３５図　ＳＤ２獣骨出土分布図及び状況図



第３６図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（5）



第３７図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（6）

３６－１３は体部が直線的であり、高台の断面形はひし形で底部端よりやや内側につく。３６－１５は体部下部が丸みを持ち、口縁部は外反する。高台の断面形はひし形でやや内側から開くようにつく。３６－１７は底部のみであるが高台はやや内側につき、断面形は長方形に近い。

３６－６は体部が直線的でやや開き気味である。３６－８は体部が直線的で底部の厚さが薄いようである。

３６－２０は底部がＳＤ２－２層から出土しているが、体部はＳＩ１０３の埋２層から出土していることから、ＳＤ２が使われなくなって埋まっている時期に、ＳＩ１０３が廃棄されていることが推測される。

３６－１０は体部が直線的であり、また底部内面端と体部内外面は回転ナデが施される。３６－１１も１０と同様に回転ナデが施される。口縁部はやや外反する。３６－９は口縁部が残っていないが体部は直線的である。

３６－２２は口頸部が細長く、体部は肩が張り鋭角に曲がる。３６－１２は底部内面に「吉足」？と刻印されている。

ＳＤ２－４層からは須恵器杯（第３６図７）が出土する。体部が直線的で、斑状に灰オリーブ色の粗い付着物が見られる。

ＳＤ２－６層からは、須恵器杯（第３７図８）、（第３７図９）、（第３７図１０）、須恵器椀（第３７図１３）、須恵器蓋（第３７図１５）、須恵器壺（第３７図２０）、土師器杯（第３７図５）、土師器椀（第３７図１１）、土師器鉢（第３７図４）、土師器鍋？の把手（第３７図１８）が出土する。

３７－８は底部から体部にかけて灰釉がかかり、体部下部は回転ヘラケズリで仕上げ、口縁部端も丁寧な作りである。３７－９は外器面底部から体部にかけて斑状に灰オリーブ色の粗い付着物がみられ、口縁部端がやや外反する。３７－１０は体部下半でやや内湾するが、口縁部端でやや外反する。

３７－１３は底部端に台形状の高台がつく。３７－１５は輪状つまみがつく。３７－２０は底部端にやや外反する高台がつき、外面は回転ナデでカキ目調整が施される。

３７－５は底部端上面から体部が直線的に伸び、器高が高いため、やや立ち気味である。３７－１１は高台が細長く、底部端から斜めにつき、口径が底径に比べてさほど大きくないために器高が高く、体部は立ち気味である。外面と底部にススが付着する。

３７－４は口径が２２．１㎝と大きく、内外面とも回転ヘラミガキされ、赤彩を施される。

埋土７層からは須恵器椀（第３７図１２）、（第３７図１４）、土師器杯（第３７図１）、（第３７図２）、（第３７図３）、（第３７図６）、土師器皿（第３７図７）、土師器甕（第３７図１９）が出土する。

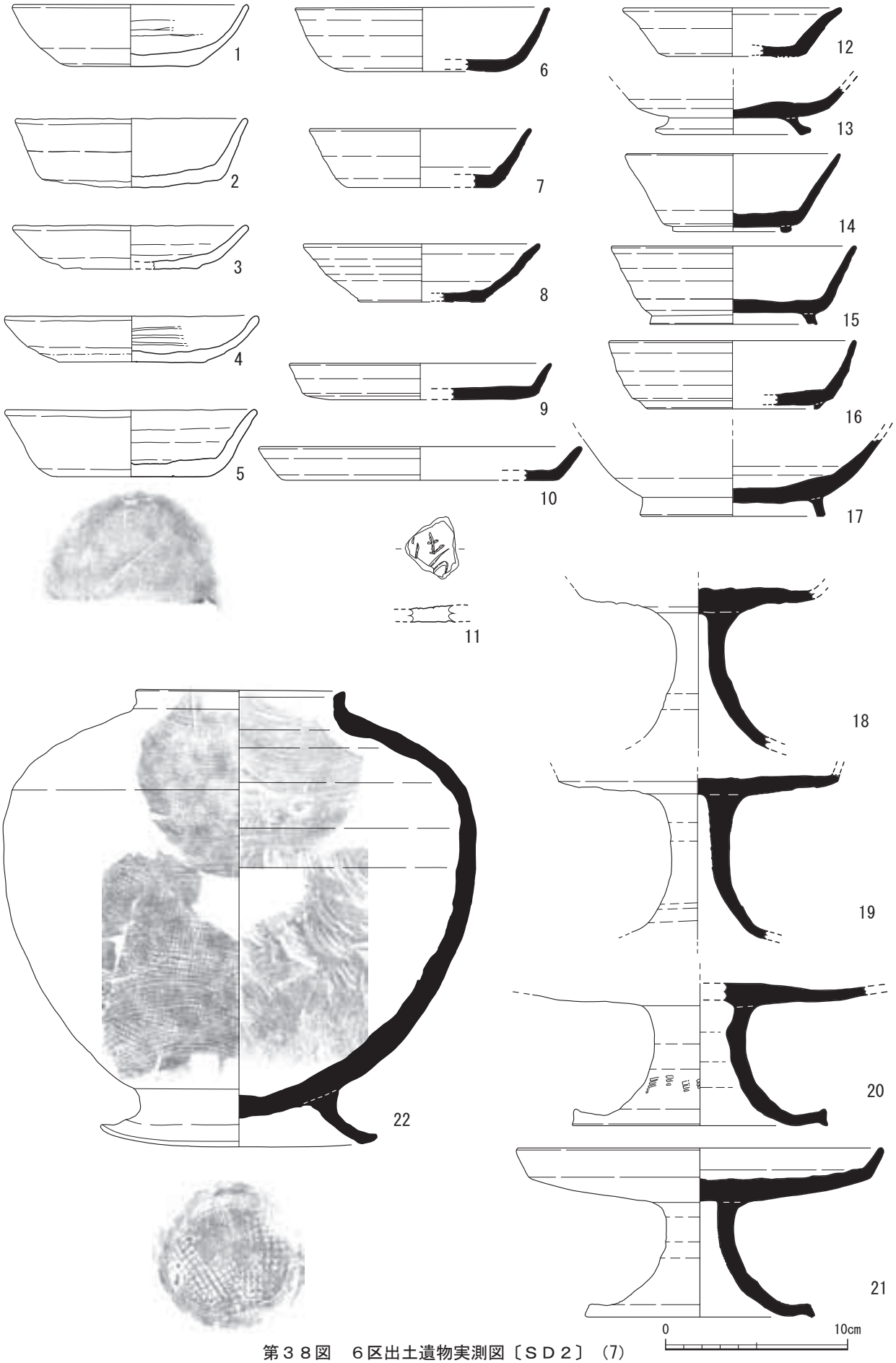
３７－１２は器高が高く体部が直線的である。高台は細長い長方形でやや外向きにつく。３７－１４は高台が底部端よりやや内側につき、形状は長方形で端部がやや外反する。

３７－１、２、３は内面、外面ともに赤彩を施される。体部は、口縁部に向かってほんの少し内湾するが、口径と底径の差が大きく器高も低いため開いている。３７－６は口径が約１８．４㎝と大きめの杯で内外面ともに赤彩を施され、内面に回転ヘラミガキされている。

３７－７も内外面とも赤彩を施される。

３７－１９は外面ハケメ、内面は右下から左上方向へヘラケズリされている。

ＳＤ２－６～８層（溝の東側は深さが浅いため、細かく分層できなかったが８層土に近い）からは、土師器杯（第３８図１）、（第３８図２）、（第３８図３）、（第３８図４）、（第３８図５）、須恵器杯（第３８図６）、（第３８図７）、（第３８図８）、須恵器皿（第３８図９）、（第３８図１０）、須恵器椀（第３８図１２）（第３８図１３）、（第３８図１４）、（第３８図１５）、（第３８図１６）、（第３８図１７）、須恵器高杯（第３８図１８）、（第３８図１９）、（第３８図２０）、（第３８図２１）、須恵器壺（第３８図２２）、須恵器大甕（第３９図１）、（第３９図２）、（第４０図１）が出土する。



第３８図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（7）

３８－１は内面、外面、外底面に回転ヘラミガキを施され、また赤彩も施されている。体部は内湾して口縁部に向かう。３８－２、５は体部が直線的に口縁部に伸び、口縁部付近で若干外反する。３８－３は底径と口径の差が大きく器高も低いため、体部が大きく開くように見える。９世紀後半頃のものと思われる。３８－４は内面が回転ヘラミガキされ、また、赤彩を施される。体部は開き気味で口縁部に向かってやや内湾する。

３８－６、７は外面には灰釉が一面にかかっていたと思われるが、擦れて一部しか残っていない。６は体部下半に丸みを持ち口縁部に向かって直線的に伸びる。７は６に比べると体部下半の丸みが少ない。３８－８は体部が直線的に外傾する。

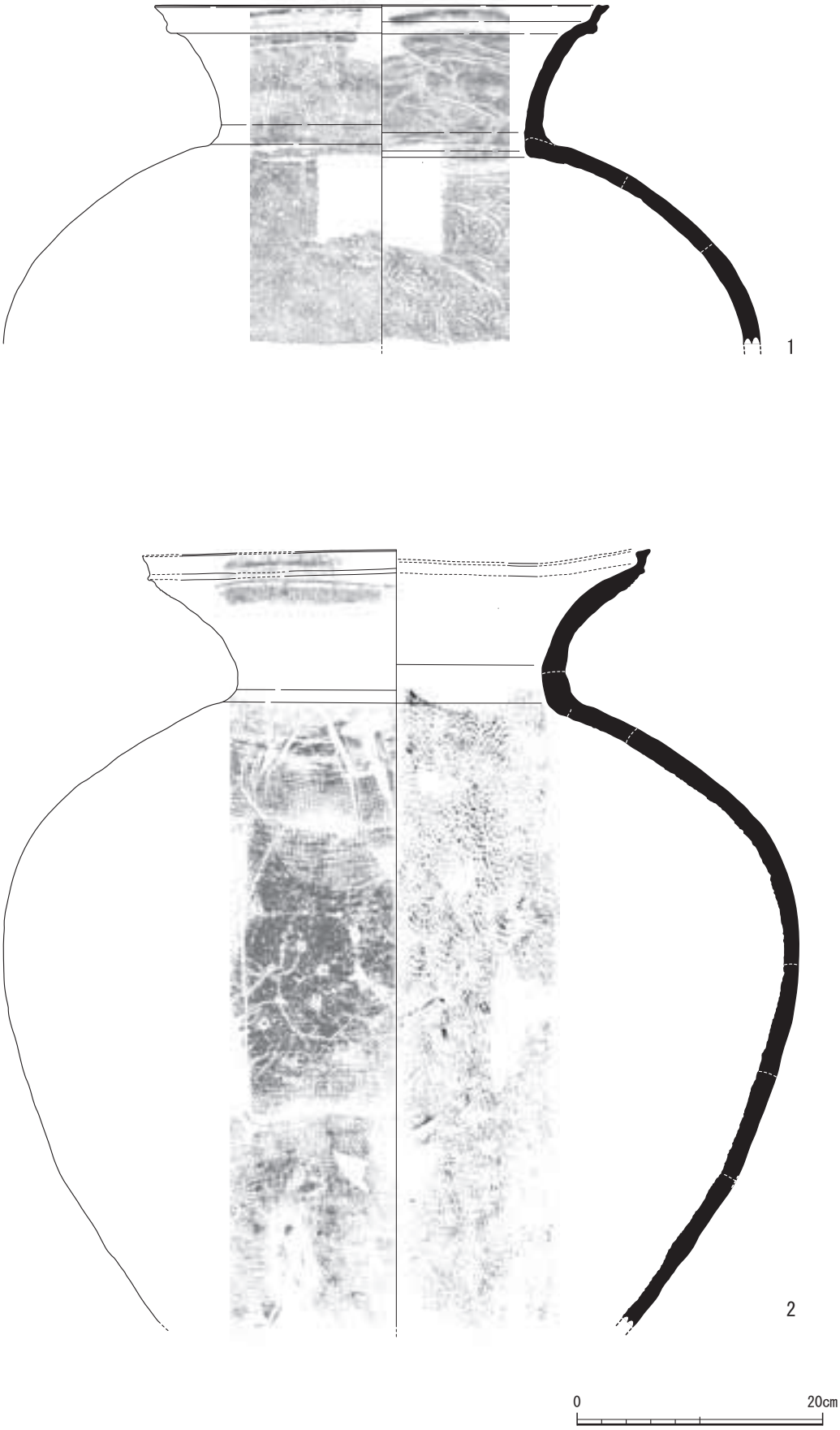
３８－９、１０ともに体部は直線的に口縁部に伸びているが、１０は９に比べるとやや開き気味で口縁部付近はわずかに外湾する。

３８－１２は高台が外れているが、底部に高台貼り付け跡が残る。体部は開き、口縁部付近で外湾する。３８－１３は高台が底部中央部付近に開き気味につく。７世紀後半のものと思われる。３８－１４、１５は外面に自然釉がかかり光沢を持つ。１４は外面がオリーブ黒色で、高台は低く、底部端よりやや中央寄りにつき、断面形は長方形である。体部は口縁部に向かって直線的に伸びているが、口縁部付近からやや外湾する。１５は外面が暗褐色で、底部端に断面形がひし形の高台がつく。体部は１４と同様であるが、１４より口径、底径が大きく、器高が低い。３８－１６は外面に一部自然釉がかかり光沢を持つ。外面は自然釉がかかったところはオリーブ黒色でかかっていないところは灰色である。高台は体部の延長のようにつく。体部はやや内湾しながら口縁部に伸びる。３８－１７は比較的大型の椀で高台は高く、体部下半は丸みを持っている。３８－１８、１９、２０はともに杯底部が平らであることから、２１と同じように杯部は径が大きく浅い盤の形態と思われる。脚部径は細いところで１８は２．６㎝、１９は３．２㎝、２０は５．０㎝、２１は３．８㎝、脚部の高さは１８が７．４㎝以上、１９は８．０㎝以上、２０は６．６㎝、２１は６．２㎝を測る。１８、１９は２０、２１に比べると高脚である。２０は脚の接着面は、杯部底部外面に同心円状の削り込みを行い、脚を貼り付けるように加工されている。

３８－２２はやや肩部が張った球形の器体に直立する短い口縁部と外側に開く高台がつく。外面は回転ナデ後、格子目文のタタキを行い横方向のハケメ調整を施す。内面は、下半は同心円文のタタキ、上半は回転ナデを施される。

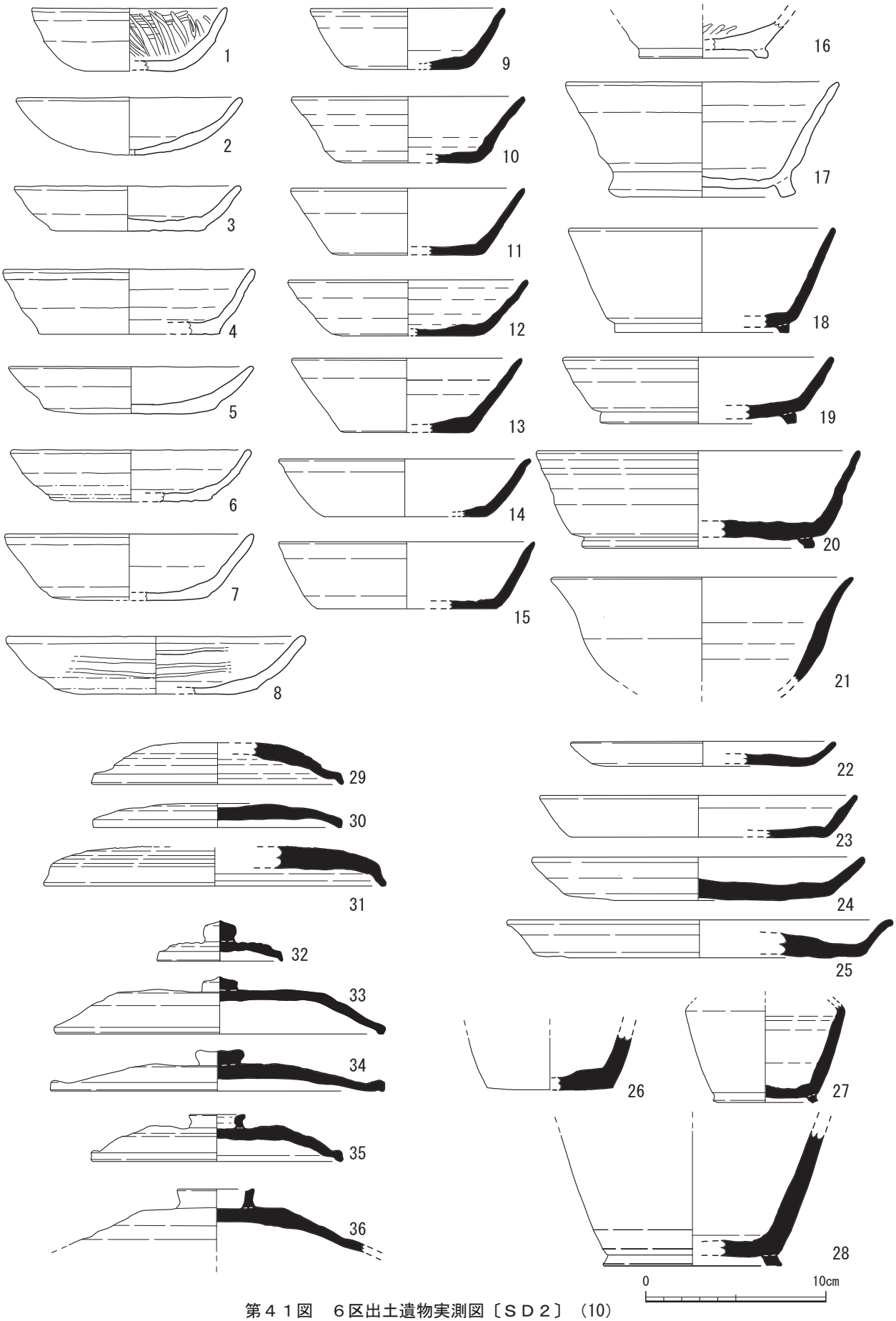
３９－１は口径が３６．９㎝と大きく、二重口縁状で屈曲部下に１条の波状文が巡る。外面は平行文のタタキ、内面は同心円文の当て具痕で下部の一部に平行文の当て具痕がある。３９－２は底部が消失しているが、口径４１．４㎝、器高６３．３㎝以上の須恵器大甕である。口縁部は二重口縁状で、３条の波状文が巡る。外面はヨコナデで、格子目文のタタキが入る。胴部上位に径８～１１㎝の円形の釉がかかっていないところが３ヵ所見られる。内面は同心円文の当て具痕が見られる。胴部上位から中位にかけて緑からオリーブ色の釉が厚くつく。４０－１は口径４９．７㎝、器高８３．８㎝の須恵器大甕である。口縁部は二重口縁で、波状文が入る。外器面、外底面はナデで、格子目文のタタキが入る。内器面は胴部下位に同心円文の当て具痕があり、中位から上位にかけて平行文が入る。全体的に歪み、胴部の膨らみが左右対称ではない。

ＳＤ２－８層からは土師器杯（第４１図１）、（第４１図２）、（第４１図３）、（第４１図４）、（第４１図５）、（第４１図６）、（第４１図７）、（第４１図８）、土師器椀（第４１図１６）、（第４１図１７）、土師器高杯（第４３図１）、土師器甕（第４３図２）、（第４３図３）、（第４３図４）、（第４６図１）、須恵器杯（第４１図９）、（第４１図１０）、（第４１図１１）、（第４１図１２）、（第４１図１３）、（第４１図１４）、（第４１図１５）、須恵器椀（第４１図１８）、（第４１図１９）、（第４１図２０）、（第４１図２１）、須恵器皿（第４１図２２）、（第４１図２３）、（第４１図２４）、（第４１図２５）、須恵器蓋（第４１図２９）、（第４１図３０）、（第４１図３１）、（第４１図３２）、（第４１図３３）、（第４１図３４）、（第４１図３５）、（第４１図３６）、須恵器壺？（第



第３９図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（8）

第４０図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（9）



第４１図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（10）

４１図２６)、(第４１図２７)、(第４１図２８)、砥石（第４６図６)、須恵器甕（第４２図１)、(第４２図２)、(第４２図３)、須恵器長頸壷（第４２図４)、(第４２図５)、(第４２図６)、須恵器横瓶（第４４図１)、(第４４図２)、(第４４図３）が出土した。

４１－１は黒色土器Ａで内面、外面ともにヘラミガキされ、内面と外面の口縁部から体部上半まで黒色である。体部は底部端から口縁部にかけて丸い。

４１－２は底部は丸底で口縁部にかけて丸い。４１－３は体部がやや内湾する。４１－４は体部が２、３に比べるとやや立ち気味である。４１－５は内面が体部から底部中心付近までなだらかである。４１－６は体部が開き気味であるが内湾しながら口縁部へ伸びている。４１－７は体部が口縁部に向かって直線的に伸びる。口縁部内面は若干外反する。４１－８は内外面底部とも回転ヘラミガキされ、赤彩を施される。

４１－１６は底部しか残っていないが、黒色土器Ａで内面がヘラミガキされる。高台は底部端につき断面形はひし形である。４１－１７は器高が高く、体部は底部から直線的に伸び、口縁部付近でやや外反する。高台は高さ約１㎝、幅約１㎝と大型で底部端と体部下位の境に少し外向きにつく。

４３－１は脚部しか残っていない。径は細いところで約４㎝を測る。内面にしぼり痕が残る。

４３－２、３、４、４６－１は外面がヨコナデ後、胴部は縦のハケメ、内面はヨコナデ後ヘラケズリ調整である。４３－３は外面に頸部との境から２㎝程下を、約１㎝の幅で外面一周をナデてハケメを消している。頸部は４３－２は「く」の字状で、４３－４、４３－３、４６－１の順にその屈曲は鈍くなる。

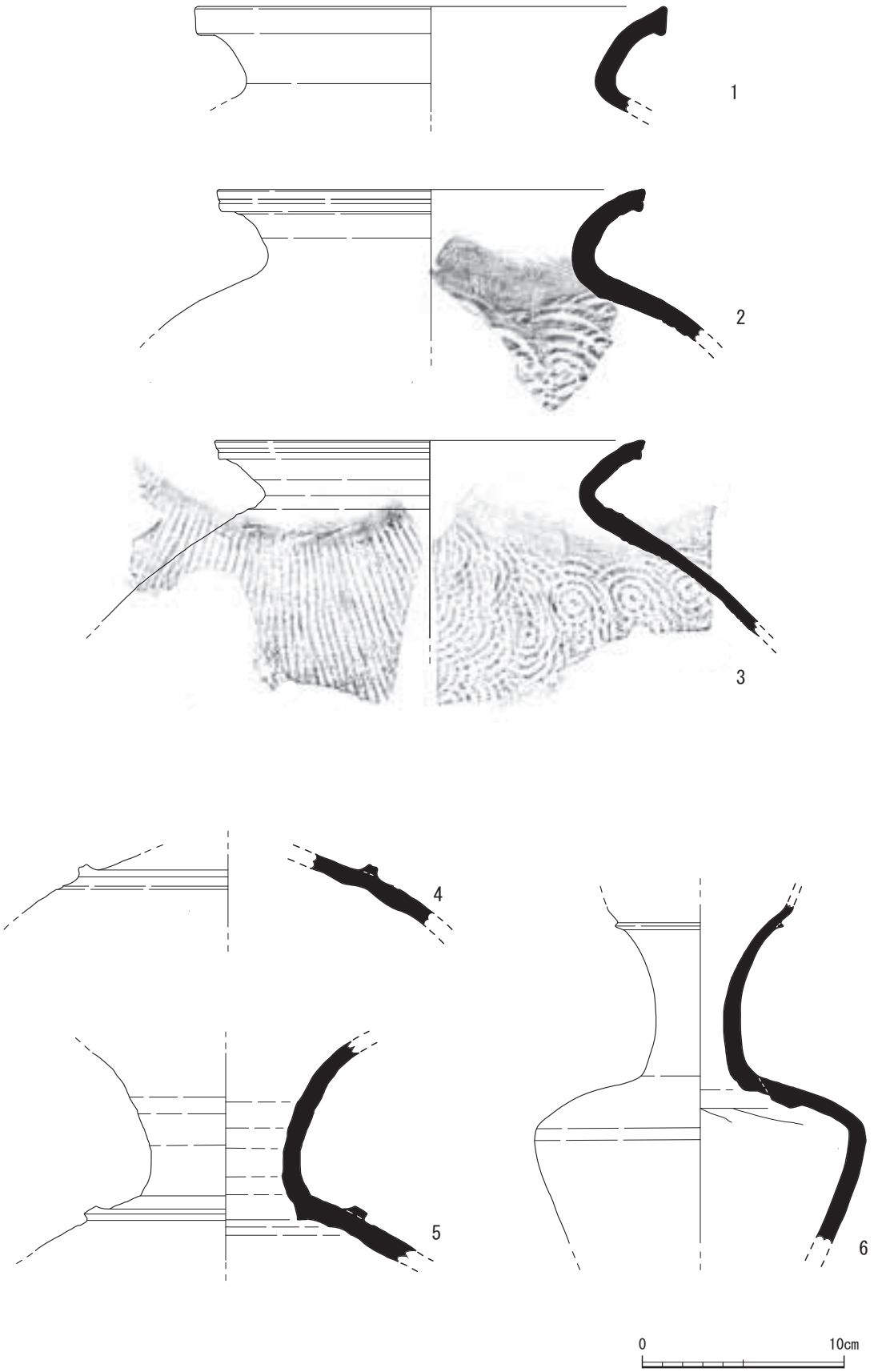
４１－１１、１２、１３は体部が直線的に伸びる。４１－９、１５は、この層位の須恵器杯よりも少し立ち気味で、口縁部が若干外反する。４１－１０は体部から口縁部にかけて外湾する。４１－１４は体部がやや内湾して口縁部に向かい口縁部端はやや外反する。

４１－１８は体部が直線的で高台は底部端につく。４１－１９は体部が直線的に伸び、高台は底部端よりほんの少し内側につく。４１－２０は１９より大型で、外面に自然釉がつく。体部は１８、１９に比べるとやや立ち気味である。高台は底部端よりやや内側につく。４１－２１は体部が口縁部付近で開き気味である。鉢に近い形態である。

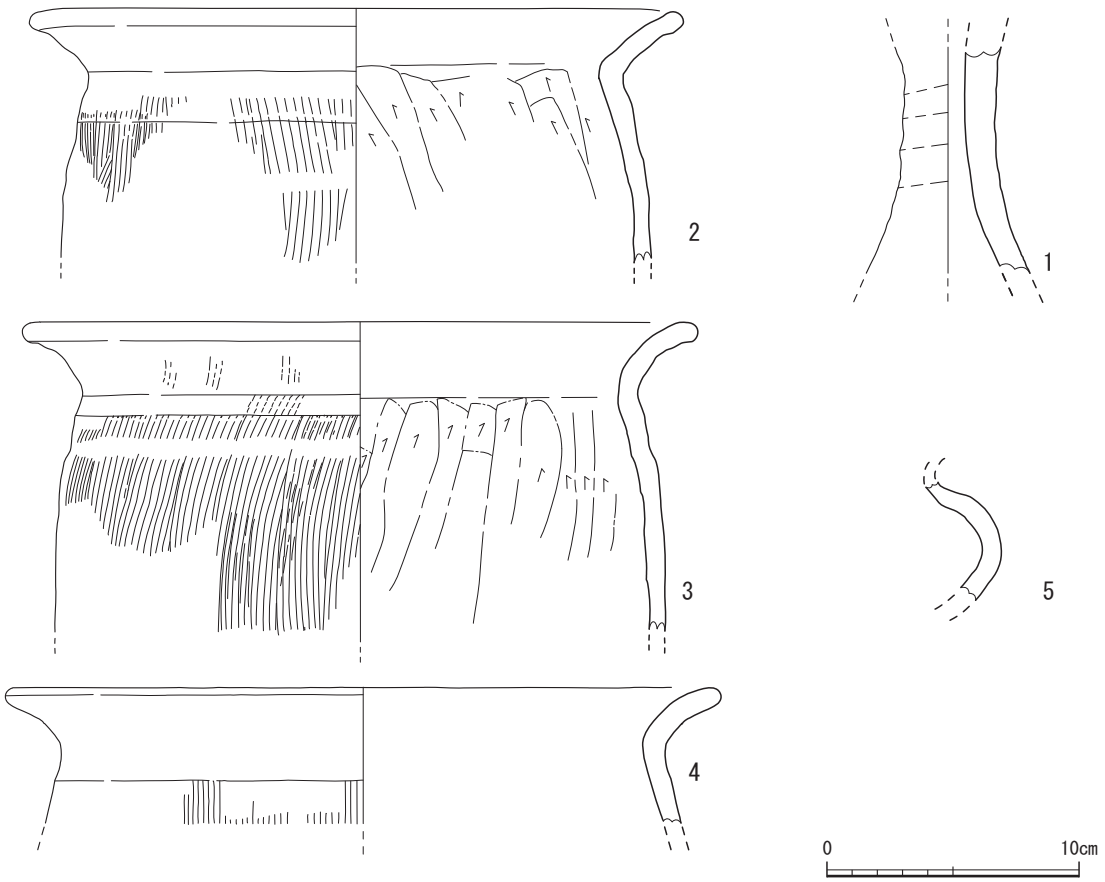
４１－２２は器高が低く、底部から体部にかけて丸みを持って立ち上がる。４１－２３は底部から体部にかけての屈曲がはっきりしている。４１－２４は口縁部に歪みがあり仕上げがやや雑である。４１－２５は内面に灰釉がかかる。底部から体部にかけての屈曲がはっきりしていて、口縁部は外反する。

４１－２９は口縁部端の断面形は三角形の形状を取る。口縁部付近に鉄分の沈着が見られる。天井部はやや丸みを持つ。つまみの有無は分からない。４１－３０は、口縁部端の断面形は三角形の形状をかろうじて呈し、端部内面の屈曲の稜線が不明瞭である。天井部は回転ヘラ切り後未処理である。つまみは持たない。器高は低く平たい形状である。４１－３１は口径が１９．０㎝と大型である。口縁部の断面形は三角形であり、下方へ伸びる口縁部端形状を取る。つまみの有無は分からない。平たい形状である。４１－３２は口径が７．０㎝と小型である。口縁部端の断面形は三角形の形状を取る。天井部には宝珠状のつまみを持つ。４１－３３は天井部に宝珠状のつまみがつき、天井部はやや丸みを持ち、体部は天井部端から少し折れて口縁部へ伸びている。口縁部端の断面形は三角形というより小さな長方形である。４１－３４は扁平な擬宝珠状のつまみを持ち、体部から天井部にかけてやや膨らむ形状である。口縁部端はやや厚く、内面に僅かな凹みがつく。４１－３５は天井部に輪状つまみがつき、口縁部端の断面形は大きく、しっかりとした三角形で内面に稜がつく。４１－３６は天井部に輪状つまみがつく。口縁部は欠損しているため分からない。須恵器蓋の口径は２９、３０、３５が約１４㎝、３１、３３、３４が約１８㎝前後で、３２の約７．０㎝を除いて、２つの法量に集約できる。

４１－２６、２７、２８ともに底径が５．８㎝～９．８㎝と小型である。４１－２７は底部端に断面形が長方形の高台がハの字形につく。胴部上位に肩部があり、外面、内面ともに回転ナデである。４１－２８は底部端



第４２図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（11）



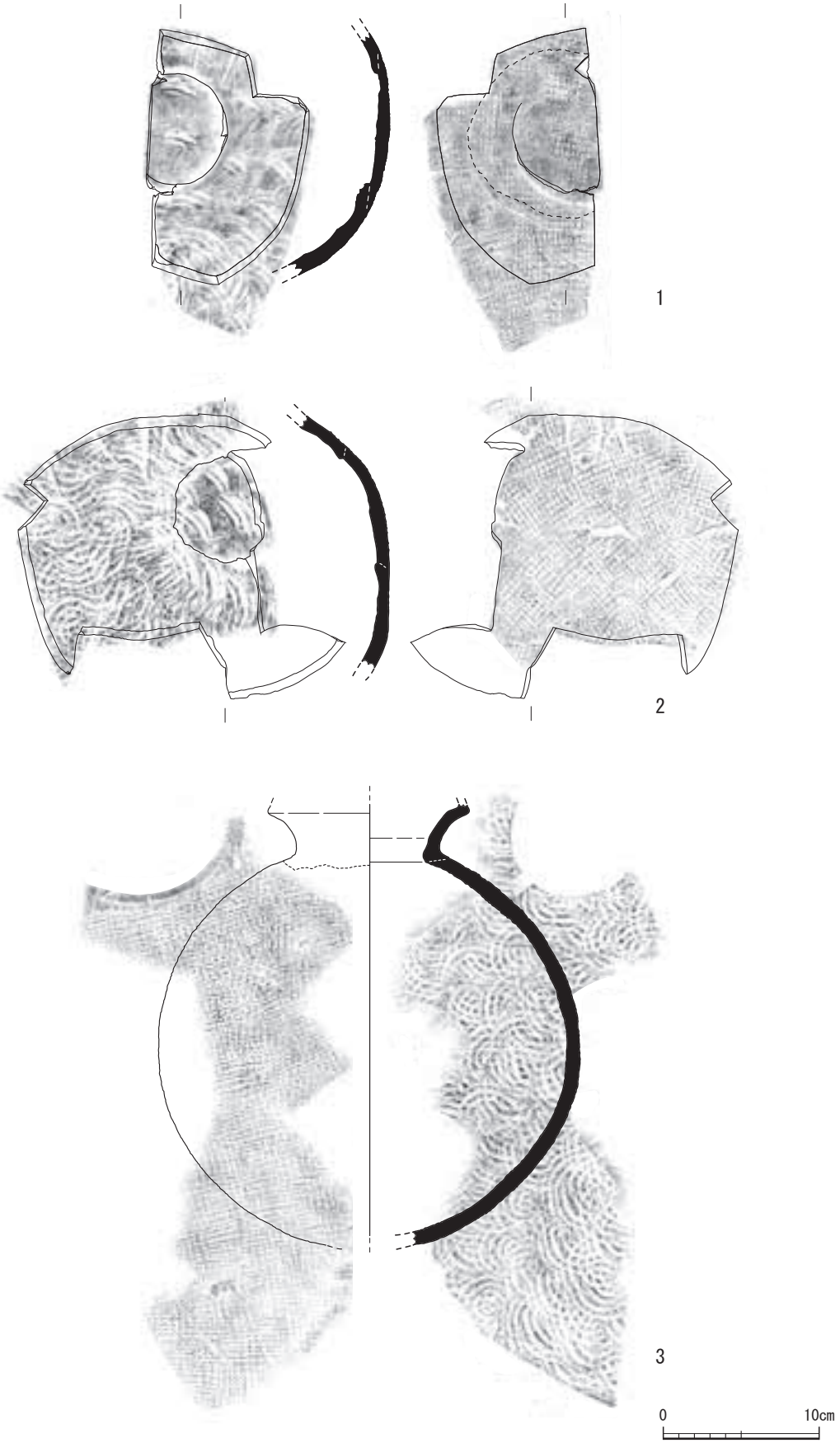
第４３図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（12）

に断面形がひし形の高台がハの字形につく。外面、内面ともに回転ナデ調整である。４１－２６は、外面、底部外面、内面が回転ナデである。

４２－１は口縁部と体部の境以外は欠損している。口縁部端の断面形は三角形の形状で厚くなる。内面、外面ともに回転ナデ調整で体部の境には内面が同心円文の当て具痕、外面は横方向のカキ目痕が見られる。４２－２、３も口縁部と胴部上位以外は欠損している。２は口縁部端が１と同様、断面形は三角形の形状で厚くなり、端部外面下位に沈線が入る。内面は灰釉がかかり、外面は回転ナデ調整である。胴部上位は内面が同心円文の当て具痕、外面は灰釉がかかる。３は口縁部端外面が平坦でその中央部に沈線が入る。２と異なり肥厚せず同じ厚みである。内面、外面ともに回転ナデ調整である。胴部上位には内面が同心円文の当て具痕、外面は平行文のタタキが見られる。

４２－４、５は長頸壷の胴部上位外面に凸帯がつく。４は外面、内面ともに回転ナデ調整であり、凸帯より約１．２㎝下側に沈線が入る。５は頸部内面と胴部外面に灰釉がかかり、頸部外面、胴部内面は回転ナデ調整である。４２－６は口縁部と底部は欠損している。細い頸部で口縁部との境に小さな凸帯がつく。胴部は肩が張り稜角を呈する。外面は回転ナデ、回転ヘラケズリ調整で、内面は回転ナデと工具痕が見られる。

４４－１、２は横瓶の胴部の横に張り出した部分である。内面から見ると蓋を貼り付けた痕が見られる。１では外面に蓋を接合後、格子目文のタタキを加え、蓋のつなぎ目のナデを行い、外周に沿うようにカキ目調整が施される。内面には同心円文の当て具痕、その後約１㎝の幅で１㎝程の間隔でナデ調整を施す。２では外面の格子目文のタタキの後、一部カキ目調整を施す。内面には１と同様に同心円文の当て具痕が見られる。１の胴部で蓋が当たる部分は、内面は回転ナデ調整を施す。４４－３は横瓶の頸部から胴部である。頸部が出てい



第４４図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（13）

る場所の胴部内面には、同心円文の当て具痕が残っていることから、頸部は、胴部の一部を丸くくり抜き、胴部外面に貼り付けられていることが分かる。外面は格子目文のタタキ痕、内面は同心円文の当て具痕が見られる。

ＳＤ２－８～９層は土師器杯（第４５図１）、（第４５図２）、土師器皿（第４５図３）、土師器高杯（第４５図４）、土師器把手（第４６図３）、須恵器杯（第４５図６）、（第４５図７）、須恵器椀（第４５図８）、（第４５図９）、（第４５図１０）、（第４５図１１）、（第４５図１２）、（第４５図１３）、（第４５図１５）、（第４５図１６）、須恵器甕（第４５図５）、（第４６図５）須恵器壷（第４５図１４）、土錘（第４５図１８）、紡錘車（第４５図１９）が出土した。

４５－１は底部外面に刻書があるが内容は分からない。４５－２は底部から体部にかけて丸く、やや外傾しながら口縁部に伸び、口縁部端では若干外反する。

４５－３は内外面ともに赤彩を施され、底部から体部下半の屈曲がはっきりとしていて、口縁部端で少し外反する。

４５－４は杯部の口径が２１．３㎝と大きく、杯部は盤の様相に近い。脚の内側以外はヘラミガキされ、また赤彩を施されている。

４５－６、７はいずれも体部は底部から直線的に口縁部に向かい、口縁部端でやや外反する。６よりも７は口径が大きく底径が小さいので、やや外傾が大きい。

４５－８は高台の断面形が平たい長方形で底部端よりやや内側につく。体部は口縁部に向かってやや内湾しながら伸びる。４５－９は外面に灰釉がかかり、光沢を持つ。内面も若干光沢を持つ。高台の断面形は台形で、底部端からやや内側につき、僅かに外方へ張り出している。体部は底部から口縁部に直線的に伸びるが、口縁部端で僅かに外反する。４５－１０は高台の断面形が台形で、底部端につく。体部は９と同様であるが、口縁部の外反が９より大きい。４５－１１は底部の断面形が平たい長方形で、底部端よりも内側につく。体部はやや立ち気味であり底部から口縁部にやや内湾して伸びる。４５－１２は底部のみである。高台の貼付位置が左右対称でなく、少しずれている。高台の断面形は台形で底端部よりやや内側につく。体部は底部端よりやや立ち気味に伸びるようである。４５－１３も高台の貼付位置がずれている。底部の断面形は台形でやや外に向いてつく。体部は１２よりもやや外傾して口縁部に伸びるようである。

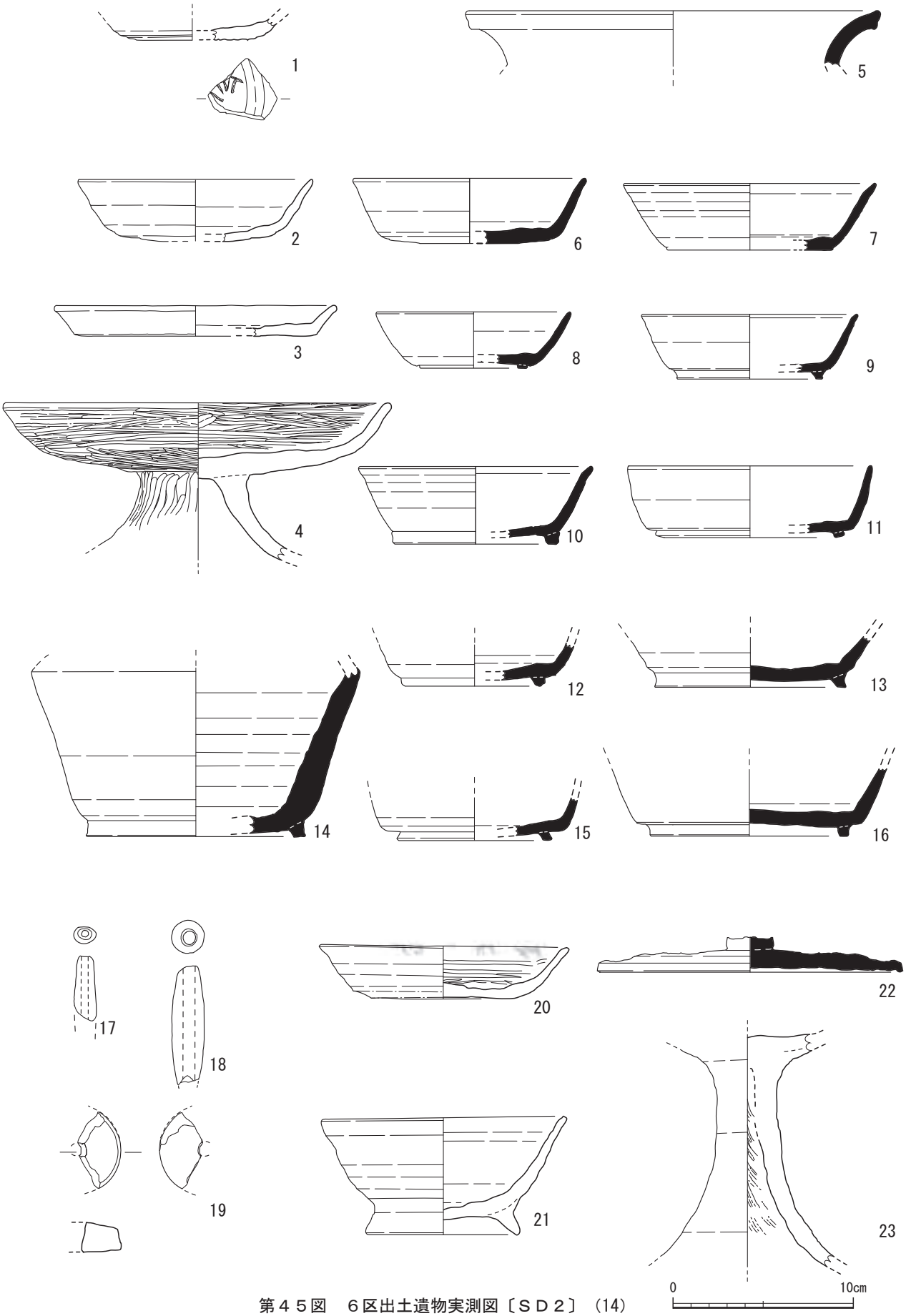
４５－１５、１６は高台が底部端よりやや内側につく。１５は高台の断面形がひし形でやや外を向く。体部は底部端より立ち気味に伸びると思われる。１６は高台の断面形が正方形であり、体部は１５よりも外傾して口縁部に伸びると思われる。

４５－５は甕の口縁部で、端部外面は平坦面である。４６－５は口径約４９㎝の大甕の口縁部である。口縁部は二重口縁状で上位内面は凹面をなす。口縁部下に波状沈線が２条巡る。外面はヨコナデ後ハケメ調整、内面はヨコナデと同心円文の当て具痕をナデている。

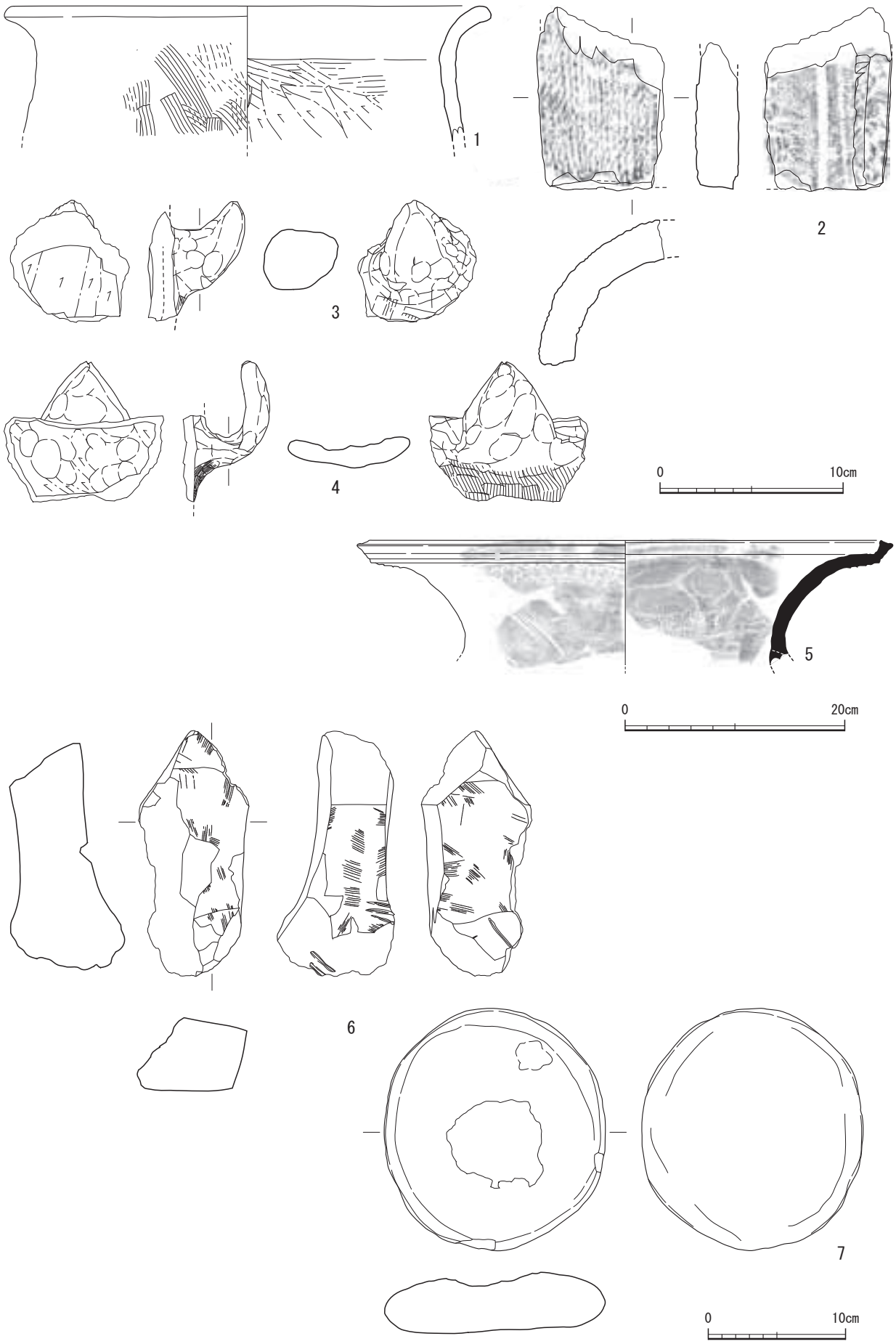
４５－１４は底部から胴部の残存であるが、胴部上端部外面は生きているので、ここが肩部の張り出しとなり屈曲すると考えられる。高台が底部端につき、断面形は台形である。内外面とも回転ナデ形成で外面には灰釉がかかる。

トレンチ８からは土師器椀（第４５図２１）、トレンチ１５からは土師器杯（第４５図２０）、層位は不明であるが、土師器高杯の脚部（第４５図２３）、土師器把手（第４６図３、４）、布目瓦（第４６図２）、凹石（第４６図７）が出土した。

４５－２１は器高が高く、大型の高台がつく。体部は直線的に口縁部に向かうが端でやや外反する。４５－２０は内面、外面ともに赤彩を施され口縁部にススが付着する。体部は底部から直線的に伸びるが、口縁部端でやや外反する。４５－２３は杯部底が残り、内部にしぼり痕が残る。



第４５図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（14）



第４６図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ２〕（15）

ＳＤ４（第４７図）

４６ｍエ、４６ℓア・グリッドに位置する。ＳＤ２埋３層上面で検出した。方向はＮ－７３°－Ｅである。北東側が調査区外であるため長さは分からないが、現況で約５．８ｍ、幅２１８～２７９㎝、検出面からの深さ約３３～４９㎝を測り、基底は約８㎝西側に下がっている。

最初、ＳＤ２－３層上面で検出した際に、ＳＤ２東側調査区壁際にやや黒っぽい溝が確認された。そこで、東側壁面にトレンチを入れると、多くの川原石と、土師器、須恵器の大きな遺物が出土した。そこで、範囲を決めて掘削すると、北側立ち上がり部分には硬化面のような土の固い部分が、南側の立ち上がりには川原石が多く出土した。北側の硬化面の範囲を追っていくと、幅１ｍ未満の筋状でＳＤ４に並走するように広がった。北側からその硬化面につながるような硬化面も出土した。南側の川原石の立ち上がりの外側にも北側と同様にＳＤ４に並走する硬化面が出土した。この状況から考えると両脇の連続する硬化面は、道路として意図したものではなく、ＳＤ４の両脇を通ることで硬化したものであると思われる。遺物も土師器、須恵器の大きな破片とともに獣骨が多く出土した。ＳＤ４脇に硬化面と立ち上がりを確認するためにトレンチを入れると、硬化面の下層にかなり硬い砂層が存在した。これはＳＤ４の下部でも確認できた。この層はレンズ状に堆積している。砂層を取り除くと厚さは全体的に２０㎝程度で、ＳＤ２の川原石の上に被さるような状態で黒褐色土が堆積していた。このことからＳＤ２の埋没後、川の氾濫等で硬い砂の層が形成され、その上に整地土、又は、自然堆積土が積もる。そしてＳＤ４を掘った後、機能時に連続硬化面が形成されたと推測する。

出土遺物は、ＳＤ４－１層からは須恵器椀、（第５２図６）、（第５２図４）、（第５２図２０）、須恵器高台付壷（第５２図５）、ＳＤ４－２層から土師器杯（第５２図１）、（第５２図１２）、土師器甕（第５２図２）、ＳＤ４－３～５層から土師器杯（第５２図１３）、ＳＤ４－４層から土師器椀（第５２図１６）、ＳＤ４－６層から、土師器椀（第５２図１４）、（第５２図１５）、須恵器杯（第５２図１７）、須恵器椀（第５２図３）、土師器かまど脚部（第５２図２４）、ＳＤ４－７層から土師器杯（第５２図９）、（第５２図１０）、土師器鉢（第５２図２２）、出土層位は分からないが、土師器杯（第５２図１１）、白磁椀（第５２図２１）が出土した。

５２－６、５２－４、５２－２０は高台が底部端よりやや中央よりにつく。６は高台の断面形が丸みを帯びた正方形で、底部から体部下半へはやや丸みを持っている。４は高台の断面形が台形であるが、やや三角形に近い。底部から体部下半は屈曲が６よりもはっきりしている。２０は高台の断面形が正方形であり、底部から体部への屈曲も４ほどではないが６よりもはっきりしている。

５２－５は底部が丸底で底部端に高台がつく。高台の断面形は正方形でやや外向きである。

５２－１は体部が外に開き気味で、口縁部端が外反する。５２－１２は外面、内面ともに回転ヘラミガキされ、赤彩を施されている。

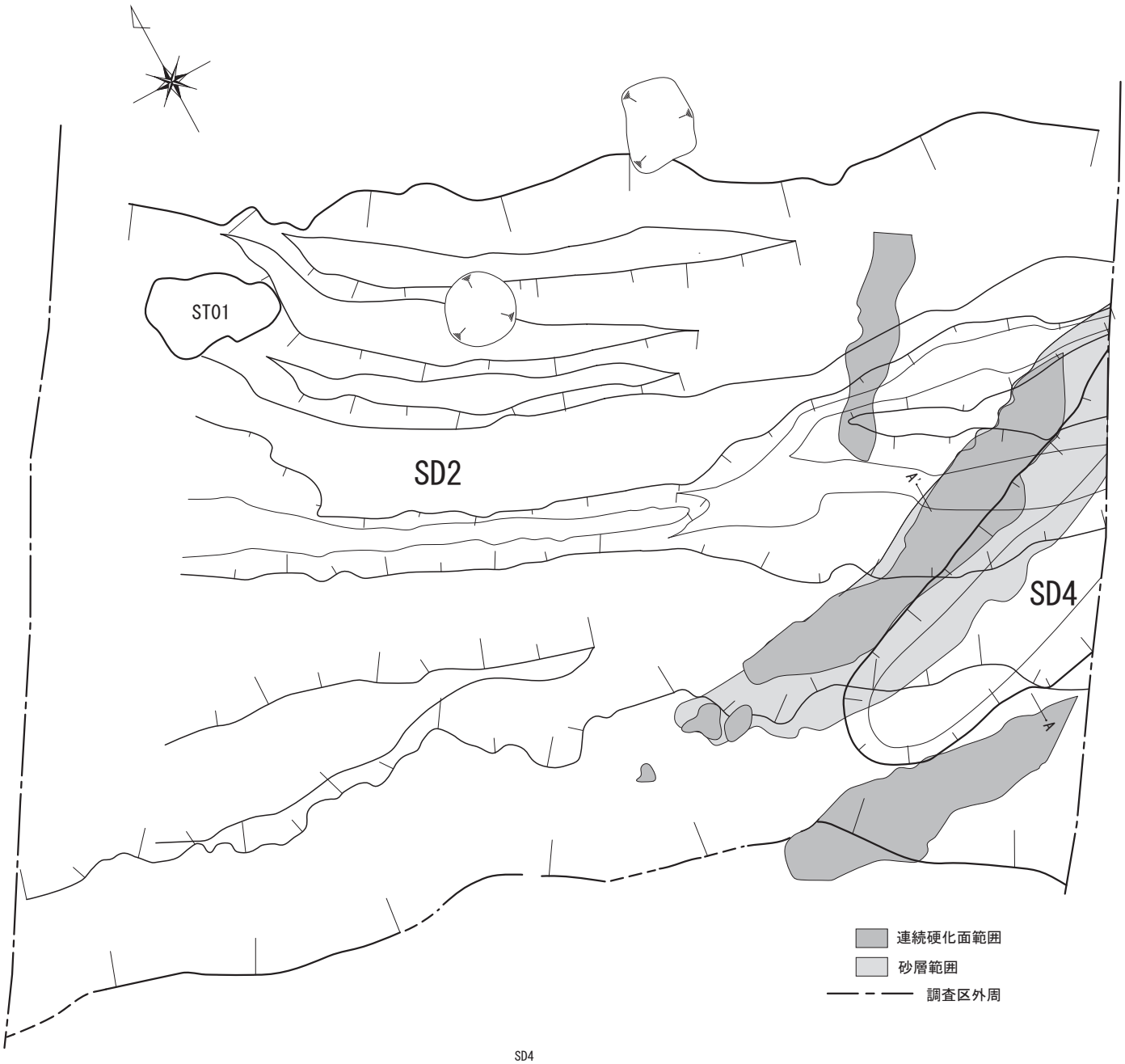
５２－２は、外面が口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ、内面はヨコナデ後ヘラケズリ調整をされる。口縁部は大きく外反し、上面は平坦になっている。口縁部端下部に１条の凹線が入る。

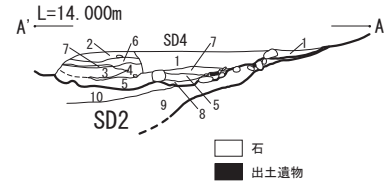
５２－１３は内外面が赤彩を施されている。

５２－１６は、内面は底部から体部下位、外面は体部が回転ヘラミガキされ、赤彩を施されている。底部から体部の屈曲は弱く、なだらかに体部へと向かうため底部端がはっきりしない。高台の断面形は正方形である。５２－１４も１６と同様に、底部から体部への屈曲がはっきりとしない。底部端というよりも、体部下位に断面形が台形状の高台が斜めにつく。５２－１５は高台の断面形は先が丸くなった三角形状で底部端につく。体部下位はやや開き気味である。

５２－１７は体部が直線的に伸びる。内外面ともにやや黄土色がかり、口縁部の一部に墨？の跡が残る。

５２－３は大型の椀である。底部端に高台がつき、その断面形は正方形である。体部は直線的に口縁部に伸び、口縁部端でやや外反する。





0　　5m

1/100

SD4

１．10YR3/4　暗褐色土　粒の細かい砂質土　粘質ややあり　しまりやや強い
　1mm以下のオレンジ粒を含む　土器を多く含む（SD4-1層）

２．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粒の細かい砂質土　粘質ややあり　しまりやや強い
　白ニガ土･オレンジ粒･1～2mmの炭化物を含む（SD4-3層）

３．10YR4/4　褐色土　砂質土　粘質ややあり　上層よりさらに硬くしまる砂質土層
　微細なガラス粒を含む　ラミナが見られる（SD4-6-①層）

４．10YR3/4　暗褐色土　粘質ややあり　しまりややあり
　上層に比べてやわらかい　微細なガラス粒を含む（SD4-5層）

５．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　非常に硬くしまる砂質土層
　粒が細かいラミナが見られる　３と同じ位固くしまる　微細なガラス粒を含む（SD4-6-②層）

６．10YR4/4　褐色土　粘質ややあり　硬くしまる砂質土層　硬化面（SD4-4層）

７．10YR2/3　黒褐色土　粘質あり　しまりややあり　シルト質土層　微細なガラス粒含む
　その他混入物なし（SD4-2層）

８．10YR2/3　黒褐色土　粘質あり　しまりあり　シルト質土層
　微細なガラス粒含むがその他混入物なし（SD4-7層）

９．10YR2/2　黒褐色土　粘質あり　しまりあり　粘土質　5～10mm大の炭化物を含む
　ボソボソとしている　微細なガラス粒含む（SD2覆土）

10．10YR3/4　暗褐色土　粘質あり　しまりあり　細砂シルト　ボソボソとしている
　微細なガラス粒子含む（SD2覆土）

第４７図　ＳＤ４平面・断面図

５２－９は内面、外面にススがつく。体部は底部端から若干外傾して伸び、口縁部で外反する。５２－１０は底部から体部下位にかけてはやや丸みを持ち、口縁部端でやや外反する。

５２－２２は外面にススが付着する。５２－１１は内外面に赤彩を施され、内面に回転ヘラミガキされる。

５２－２１は、胎土は乳黄灰色を呈し、緻密で精良である。釉色は乳白色で、表面はなめらかである。口縁部は小さな玉縁口縁で、直線的な体部に幅広の蛇の目高台を持つ。全面施釉後、高台畳付の釉を削る（Ｉ類：太宰府市２０００年)。８世紀末から９世紀前半の遺物と考えられる。

ＳＤ３（第２３図）

３層上面で検出した。４７ｋイ・グリッドに位置する。方向はＮ－６２°－Ｅである。南西側を撹乱で壊され、その先ははっきりとした長さは分からないが現況で長さ３ｍ、幅１０２～１２２㎝、検出面からの深さは約１６㎝を測る。基底は平坦である。北側でＳＫ９を壊す。

遺物は埋１層から土師器皿（第５１図３）が､埋２層から土師器杯（第５１図１)､(第５１図２)､土師器椀（第５１図４)、層位は不明であるが土師器椀（第５１図５)、土錘（第５１図６）が出土した。

５１－３は体部が直線的に伸びる。５１－１、５１－２は体部が底部側面からでなく底部上面端から口縁部に向かっている。１は口縁部端でやや外反する。５１－４は大型の椀で高台は高く脚状をなし、高台部端は丸い。体部は直線的に伸び、口縁部端でやや外反する。５１－５は、５１－４と似た特徴であるが、口縁部端での外反はやや弱い。遺物から、９世紀前半ごろの遺構と思われる。

ＳＤ５（第４図）

４３ｍ、４４ｍ、４５ｍ、４５ℓ、４５ｋ・グリッドの下層では旧河川と思われる土層が見られた。これは、ＳＤ２の北側の立ち上がりを探し、掘削を進めていった際に、ＳＤ２に続く側溝のようなものを検出し、トレンチを入れ土層と広がりを確認したところ、下部は黒色土であるが、上部は砂層で、遺物も見られないことからＳＤ１、ＳＤ２を掘る以前の旧河川ではないかと考えた。その後、ＳＤ２の立ち上がりを確認のため、トレンチ１５を掘って確かめたところ、粘土がやや混じるシルト層と砂層が交互に堆積する土層が確認できた。

旧河川は、ＳＤ２の壁面を確認するために掘ったトレンチや、撹乱等で土層を確認し、範囲を確定している。

旧河川（ＳＤ５）内の堆積は、上層から

① 黄褐色土層

② 黒褐色土層

③ シルトやや混ざり砂層

④ 粘土やや混じりシルト層と砂層が交互する

⑤ 砂礫層に白粘土ところどころ混じる

の特徴が見られる。

ＳＤ２の掘方で旧河川を切るところでは、壁面に３、４の特徴が見られ、旧河川を切らないところでは、新屋敷遺跡の基本層位が見られる。

尚、ＳＤ２に切られる事や旧河川範囲にＳＩ１０３やその他土坑がある事から古代には完全に埋まっていたと思われる。

ＳＤ６［７区ＳＤ１０］（第４８、４９図）

３層上面で検出した。ＳＤ２左岸側から南西側に調査区を縦断し、７区ＳＤ１０につながる溝である。方向はＮ－２９°－Ｅで、現在の白川の流れとほぼ同じである。現況で長さは６区で約１８ｍ、７区は約２７ｍであるが、ＳＤ６の端と、７区ＳＤ１０の端の距離は約８１ｍを測る。幅は１３９～１７０㎝、検出面からの深さは最深部で約８０㎝である。溝底のレベルは６区、７区を通して、やや起伏があるが、高いところで約１３．５ｍ、低いところで約１３．２ｍである。

ＳＤ６は、ＳＤ８、ＳＫ２７を壊し、ＳＤ７、ＳＫ１０に壊される。また、ＳＤ６を壊さないが、ＳＤ６埋土上に不明遺構ＳＸ２、ＳＸ３、ＳＸ４が残存する。７区ではＳＤ８に壊される。ＳＤ１０埋土上に竪穴建物ＳＩ９が残存する。

掘方面直上に黒い鉄分・マンガンと思われる沈着が見られ、その厚さは２～５㎝を測る。その沈着はＳＤ６溝一面に残存する。鉄分・マンガンと思われる沈着から水が溜まったところと考えられるが、何のための溝であるかは不明である。

最初、太平洋戦争中の防空壕の掘削の際、その壁面に黒いＵ字状の層と、その上の白っぽいしまりの弱い層が見られたことから、何か遺構があると気づいた。約６．２ｍ離れた調査区南西側壁面に土層の確認のためトレンチを入れた際にも、前述の黒い層が出土した。黒い層は上から見るとまるで樹木の表皮のようになっていたことから、風倒木ではないかと考えた。その後ＳＤ６掘削を進めていくうちに、風倒木の残存で表皮のみ残ることがあるのか、あるならば、倒れた木の状態での上半分の表皮は残らないのか、などの疑問が生じた。埋土を掘削し、黒いＵ字状の層を表出させると、黒い層はＳＤ２左岸まで延びていて、ＳＤ２の落ちから消滅している。このため、ＳＤ６はＳＤ２よりも古い溝、またはＳＤ２に水を流すための溝と考えられる。ＳＤ２よりも北側の調査区では同様の溝は検出できなかった。

幅約１．３ｍ、高さ約１８ｍのほぼ真っ直ぐな溝が風倒木の埋没からできたものとは考えにくいので、木樋ではないかと考えた。しかし木樋ならば木の継ぎ目があると考えられるが、黒い層の表面に継ぎ目が見当たらなかったことから、この黒い層は木質ではなく、鉄分・マンガンと思われる沈着ではないかという結論に至った。７区から出土のＳＤ１０もこの溝の延長と思われるが、ここでも木の継ぎ目は確認できなかった。鉄分・マンガンと思われるの沈着は水田跡に多く見られることから、この溝は長い期間、水路として活用されていたと考えられるが、はっきりとしたことは言えない。

遺物は、埋土中からＳＤ６清掃時、須恵器椀の底部（第５１図８）、ＳＤ１０埋土中からは、土師器甕の胴部（第５１図１１）が出土した。

５１－８は灰釉が体部下位外面と高台の接地部分にかかっている。高台は底部端になく、また、体部への立ち上がり部分が欠損しているため、器種は椀と言うよりも、高台付皿に近いと思われる。

５１－１１は甕の胴部から口縁部下位の残存で、胴部から口縁部の屈曲は「く」の字状である。外面は胴部がハケメ、口縁部がヨコナデ、内面はヨコナデ後ヘラケズリ調整されている。他に、須恵器、土師器の破片が出土した。

ＳＤ６調査の際、上層の黒褐色土、暗褐色土を掘削し、上述の白っぽい層の上面で、土坑Ｋ１、Ｋ２、柱穴Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ７、Ｐ８、Ｐ９を検出した。Ｋ１はＫ２を壊す。Ｋ１は平面形が楕円形で、長軸６３㎝、短軸５４㎝、検出面からの深さ約１０㎝を測る。埋土には鉄分・マンガンと思われる黒色ブロックと白色粒を多く含む。掘方は鉄分・マンガンと思われる沈着層までは達していない。Ｋ２の南側は、下層が薄く上層の黒褐色土が深くまで入っていたため、上層の掘削の際に一緒に掘ってしまい壊してしまった。そのため平面形、規模は不明である。現況で長軸９６㎝以上、短軸７１㎝、検出面からの深さ約１５㎝を測る。埋土は土層注記を漏らしたため詳細は不明であるが、記録写真から埋１層は暗褐色土に褐色土粒がややまじる。

SD6(C-C')
1．10YR3/3　暗褐色土　粘質あり　しまりややあり　炭化物少量含む　粘土
2．10YR3/3　暗褐色土　細砂混じりシルト　粘質ややあり　しまりあり
3．10YR3/4　暗褐色土　極細砂層　粘質ややあり　しまりあり
ラミナが少し見られる
4．10YR3/3　暗褐色土　極細砂層　粘質なし　しまり非常に強い　灰色がかる
ラミナが少し見られる
5．10YR3/2　黒褐色土　細砂層　炭化物少量含む　ラミナが少し見られる
6．注記漏れ
7．7.5YR3/2　黒褐色土　シルト　粘質あり　しまりややあり　2mm大の炭化物含む
1mm大の赤色粒含む
8．7.5YR2/3　極暗褐色土　極細砂層　粘質ややあり　しまりあり
2～3mmの炭化物･褐色ブロック少量含む
9．10YR3/4　暗褐色土　シルト　粘質ややあり　しまりなし　混入物なし

SD6(B-B')
1．10YR3/3　黒褐色土　細砂シルト　粘質ややあり　しまりややあり
2mm大の炭化物を微量含む　褐色土が混じる
2．10YR3/3　黒褐色土　細砂シルト　1より粘質は強い　しまりややあり
1～2mm大の白色粒を多く含む　炭化物を微量含む
3．10YR3/4　暗褐色土　極細砂シルト(粘土質)　粘質あり　しまりややあり
1～2mm大の白色粒を多く含む　炭化物を微量含む
4．10YR4/6　褐色土　シルト　粘質あり　しまりややあり　粘土質
1～2mm大の白色粒を少量含む
5．10YR3/4　暗褐色土　粘質あり　しまりあり　粘土
1mm大の炭化物含む
6．7.5YR2/2　黒褐色土　粘質あり　しまりややあり　粘土
7．10YR3/2　暗褐色土　シルト　粘質あり　しまりややあり　炭化物を微量含む
8．鉄分･マンガンと思われる層

SD6K1
1．7.5YR3/3　暗褐色土
砂質土　粘質やや強め

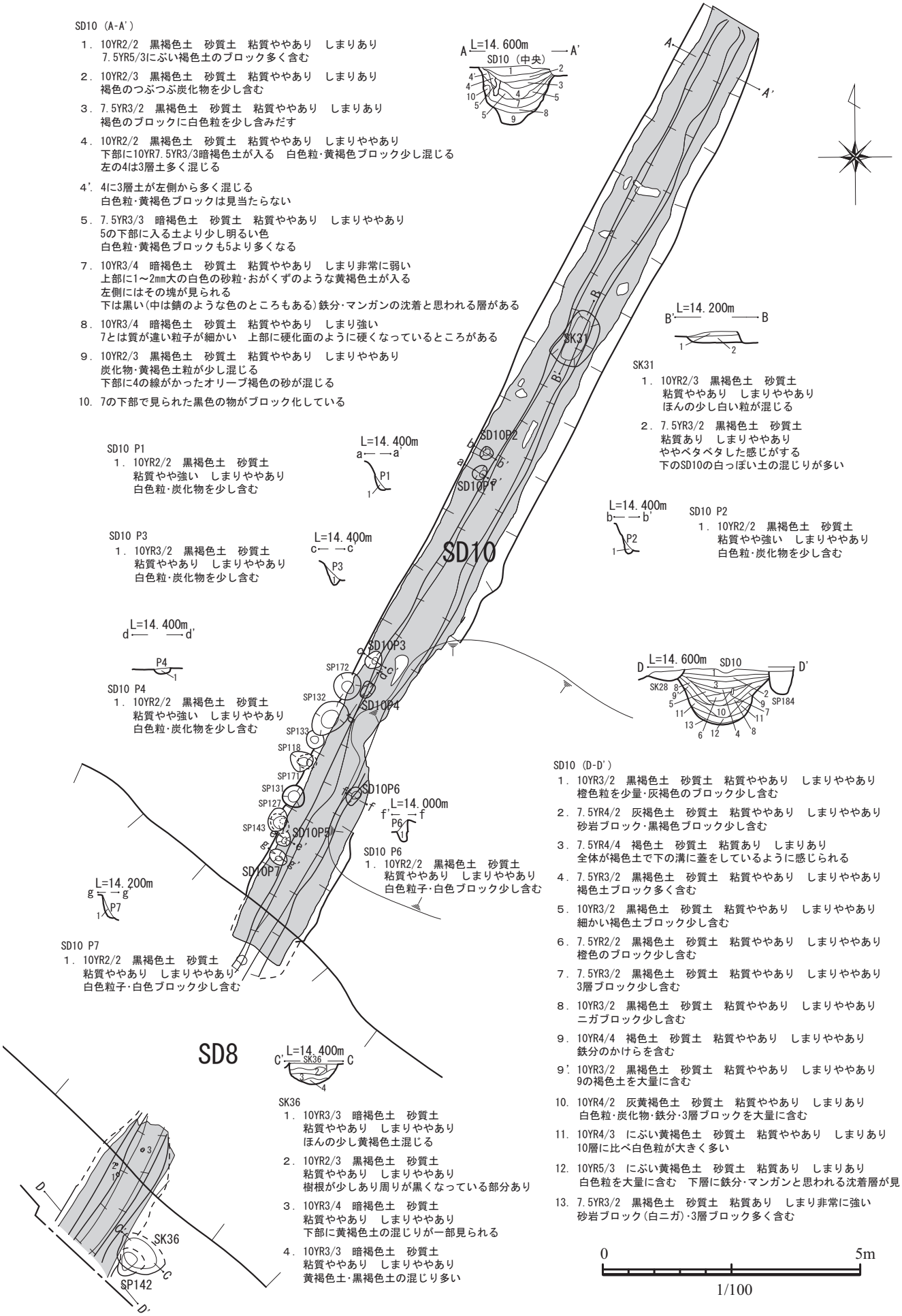
SD6Pit
1．7.5YR3/3　暗褐色土　シルト質土層
粘質ややあり　しまりなし
混入物特になし
2．10YR3/4　暗褐色土　シルト質土層
粘質ややあり　しまりなし
混入物特になし

SD6(A-A')
1．10YR3/3　暗褐色土　細砂混じりシルト　粘質ややあり　しまりややあり　少量炭化物含む
2．7.5YR2/3　極暗褐色土　シルト(粘土質)　粘質ややあり　しまりややあり
3mm大の炭化物･白い粒を含む　5YR5/8明暗褐色の焼土のようなものを含む
3．7.5YR3/3　暗褐色土　シルト　粘質あり　しまりあり　粘土　5mm大の白い粒　炭化物を含む
4．7.5YR4/4　褐色土　シルト　粘質あり　しまりややあり　1cm大の白色の小石　灰色の砂
明赤褐色の焼土のようなものを含む
5．7.5YR4/6　褐色土　灰色のシルト含む　粘質あり　しまりややあり
6．10YR3/4　暗褐色土　粘質あり　しまりややあり　炭化物少量含む　粘土
7．10YR4/4　暗褐色土　粘質あり　しまりややあり　5mm大の白い小石含む　粘土
8．5YR3/6　暗赤褐色土　灰色の粘土混じる　白色粒混じる　焼土のよう
9．10YR3/3　暗褐色土　粘質あり　しまりあり　混じりなし　細砂混じり粘土
10．10YR3/4　暗褐色土　粘質あり　しまりあり　細砂混じり粘土　白い粒少量含む
11．10YR2/3　黒褐色土　シルト　粘質ややあり　しまりややあり　べたっとした土
12．5YR1.7/1　黒色土　鉄分･マンガンの沈着　焼土のようなものが上部にある

SD6鉄分・マンガンと思われる沈着層範囲
SD6掘方時遺構上端

0　5m
1/100

第４８図　ＳＤ６平面・断面図



第４９図　７区ＳＤ１０平面・断面図

埋２層は下層の褐色土ブロックが多くまじる。Ｋ２の掘方は鉄分・マンガンと思われる沈着層を壊す。柱穴はＰ３－Ｐ２－Ｐ１で柱穴間約０．９ｍ、Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６で柱穴間約０．８ｍ、Ｐ１－Ｐ４で柱穴間約２．２ｍ、歪みはあるが柱穴が並ぶため、柵列の可能性がある。柵列の端にあたるＰ６とＰ３の距離は約５．７ｍである。柱掘方はほぼ平面円形であり、径２２～３２㎝を測る。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ５は柱穴底部が鉄分・マンガンと思われる沈着層直上であるが、Ｐ４、Ｐ６は鉄分・マンガンと思われる沈着層を掘り抜いている。土坑、柱穴内から遺物は出土しなかった。

７区では黒褐色上層の上面でＳＫ３１、黒褐色土を掘削し、白色、黄褐色土粒が多く混じる暗褐色土上面で柱穴Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ７を検出した。ＳＫ３１は平面形が楕円形で、長軸約１１２㎝、短軸約６９㎝、検出面からの深さ約２２㎝を測る。埋土は溝の上層の黒褐色土に近いがやや薄く白味がかる。柱穴はＰ１とＰ２、Ｐ３とＰ４、Ｐ５とＰ７が近接し、その３基の組がほぼ並ぶため、柵列の可能性がある。柱間はＰ１－Ｐ３間で約４．６ｍ、Ｐ３－Ｐ５間で約３．９ｍを測る。柱掘方はほぼ平面形が円形であり、径２７～３８㎝を測る。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ４は柱穴底部が鉄分･マンガンと思われる沈着層直上であるが、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ７は柱穴底部が鉄分･マンガンと思われる沈着層を掘り抜いている。柱穴内からは遺物は出土しなかった。

ＳＤ７（第５０図）

３層上面で検出した。４６ｊイ、４６ｋア・イ・ウ・エ、４６ℓエ・グリッドに位置する溝遺構である。ＳＤ６を壊す。また、上部にＳＣ１が残存し、一部壊される。長さ約１５ｍ、幅約９１㎝、検出面からの深さ約２２㎝を測る。方向はＮ－７２°－Ｅで、南西から見てやや右に湾曲する。南西端ではレベルが低くなるが、南西から北東に向かってレベルが低くなる。埋２層が砂質土で硬くしまり、鉄分の沈着も見られることから水路に使われたものと思われる。

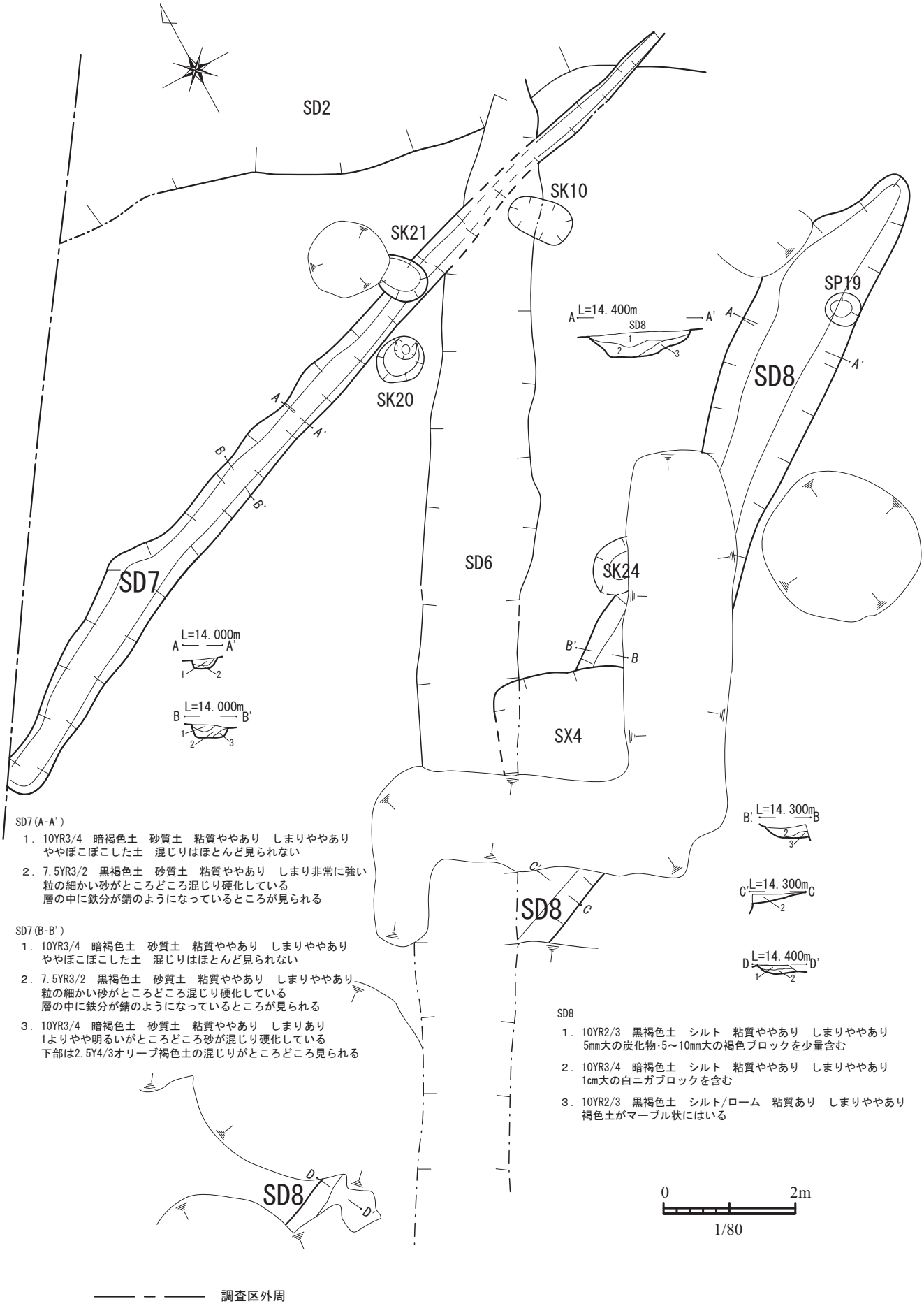
遺物は土師器の破片が出土したが、実測できるようなものはなかった。

ＳＤ８（第５０図）

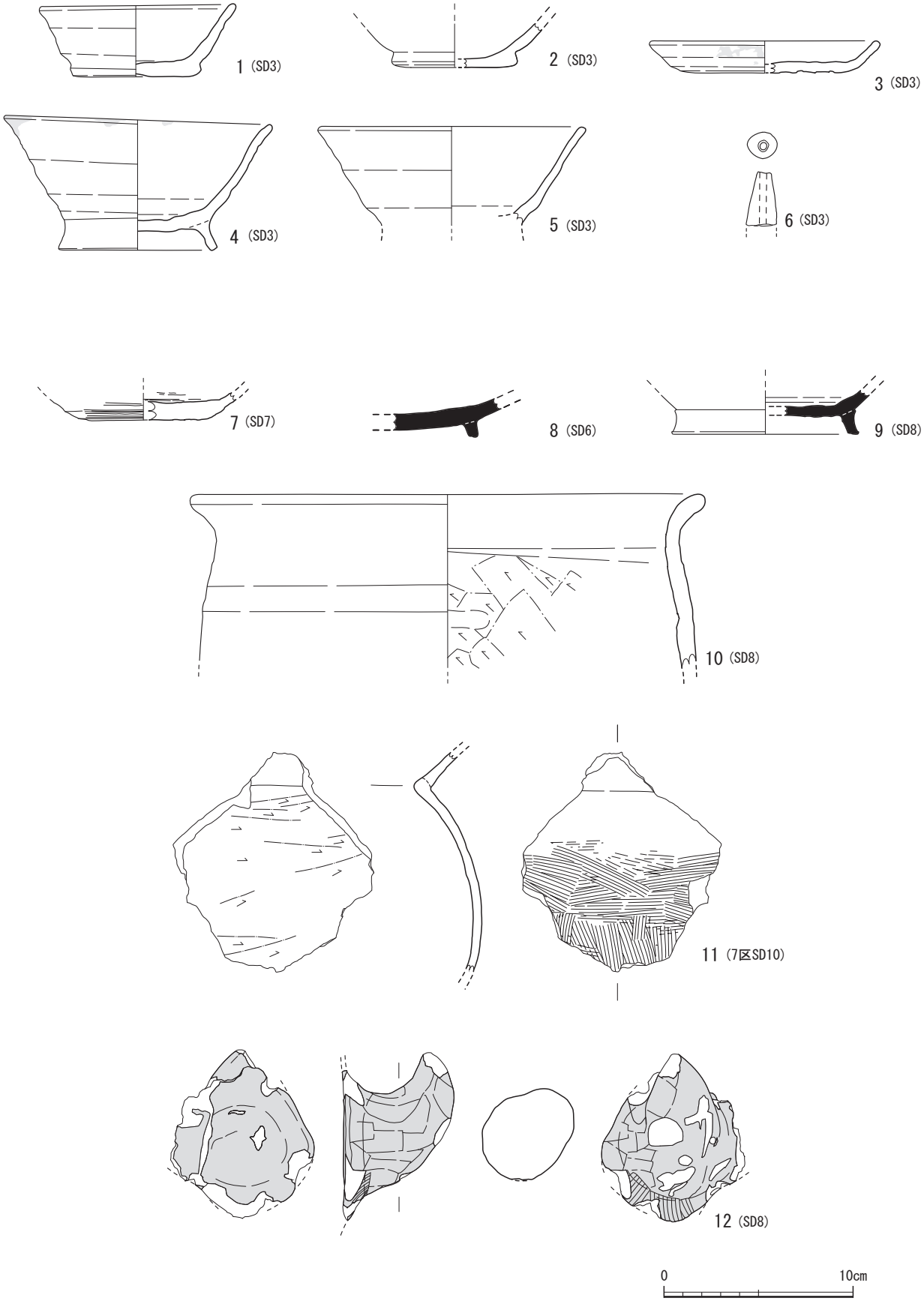
３層上面で検出した。４６ℓイ・ウ、４６ｋイ、４７ｋア・ウ・エ・グリッドに位置する遺構である。ＳＫ１３、ＳＸ４、ＳＸ３、ＳＸ２、ＳＤ６に壊される。長さ約１８．４ｍ、幅１２７～１５４㎝、検出面からの深さ約３８㎝を測る。方向はＮ－５７°－Ｅで、やや湾曲する。溝の底部はほぼ平坦であるが南西から北東に傾き、南西端と北東端の高低差は約４０㎝である。底部には鉄分等の沈着は見られなかった。距離的に近いＳＩ１の軸と平行であるため区画割の溝の可能性がある。

遺物は須恵器椀（第５１図９）、土師器の把手（第５１図１２）が出土した。

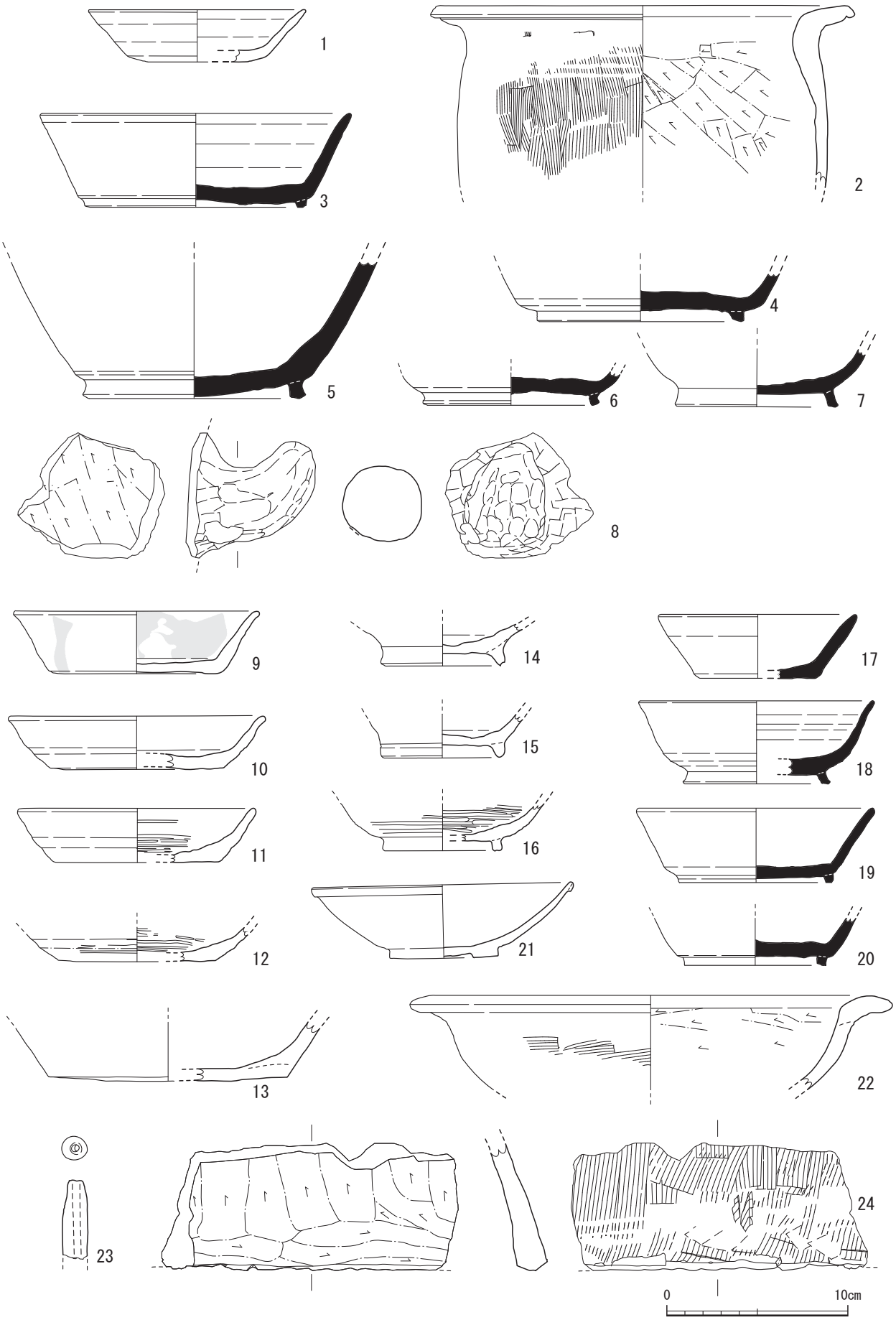
５１－９は高台の高さが１㎝と高く、端部はやや外側にはねる。５１－１２はＳＤ８埋１層から出土した。把手部分に黒の漆のようなものを内外面に塗られている。この黒色のものは、土師器の胴部の割れ目にも塗ってあることから壊れた土器の把手部分の二次使用と思われるが、どういう性格のものであるか不明である。他に土師器の破片が出土した。



第５０図　ＳＤ７・ＳＤ８平面・断面図



第５１図　６区出土遺物実測図（16）



第５２図　６区出土遺物実測図〔ＳＤ４〕（17）

畑畝

ＳＣ１（第５３図）

ＳＤ２付近で１層の下に一部青白色の砂層が入るが、その層の下から検出した。４６ｋア・イ・ウ・エ・グリッドに位置する畝の凸状態の遺構である。畝部分に、氾濫堆積層として青白色砂層が被り、畝の凸がそのまま残ったものと考えられる。凸状の畝は、大きく長いものが調査区外にかかるものも含めて６条、長さは他の遺構から壊されていないもので５．１１～６．０８ｍ、幅約５０㎝、高さは凹部から高いところで約１７㎝を測る。各々の間隔は下端間で約２０㎝である。方位はほぼ同じ方位を向き、Ｎ－５０°－Ｅである。配置はほぼ南東－北西方向に並ぶ。小さく短いものは４条あり、長さは７９～１１８㎝、高さは高いところで約５㎝を測る。方位はばらつきがあり、Ｎ－５８～７８°－Ｅである。畝の土をサンプリングし、ウオーターフローテーションを行うが、植物依存体は検出できなかった。

遺物は土師器、須恵器の破片が出土する。実測できたのは土師器杯の底部（第５４図１）である。５４－１は底部から体部下位にかけて丸く立ち上がる。

ＳＣ２（第５３図）

ＳＤ２－３層上面で検出した。４６ℓア・エ・グリッドに位置する凹状の畝遺構である。南東－北西方向（Ｎ－１２～３３°－Ｗ）の畝跡と、南西－北東方向（Ｎ－４０°－Ｅ）の畝跡とに分かれる。南東－北西の畝跡は４条で、配置はほぼ南西－北東に並ぶ。長さ１．７１～４．３１ｍ、幅約６０㎝の溝状である。検出面からの深さ１０～２２㎝を測る。各々の間隔は上端間で０．４７～１．０７ｍである。南西－北東の畝跡は２条で、配置はほぼ北西－南東に並ぶ。長さは１．８４ｍと１．９７ｍ、幅約２７㎝と４０㎝の溝状である。検出面からの深さは２条とも約８㎝を測る。間隔は上端間で約４４㎝である。２グループとも底部はほぼ平坦であるが、ＳＤ２の落ちる方向と同じで北西方向に下る。

遺物は土師器、須恵器の破片が出土する。実測できたのは須恵器椀（第５４図２）である。５４－２は高台が底部端にあり、高台の断面形は台形状である。底部から体部下位はやや立ち気味に立ち上がる。

不明遺構

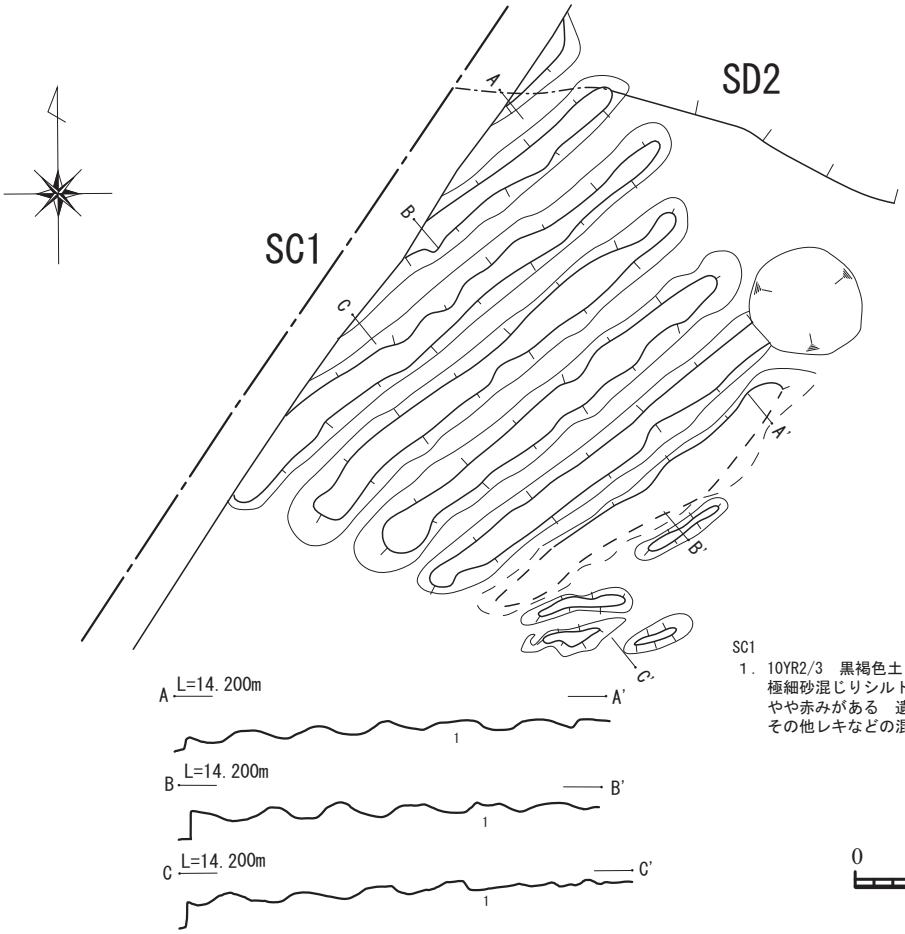
ＳＸ１（第５５図）

３層上面で検出した。４７ｋア・グリッドに位置する。北側のみが残存し、東、南、西側の一部が撹乱で壊されている。平面形は隅丸台形を呈し、現況では長軸約１６７㎝、短軸１６１㎝以上、検出面から掘方面までの深さ約６㎝を測る。柱穴等は検出できなかった。

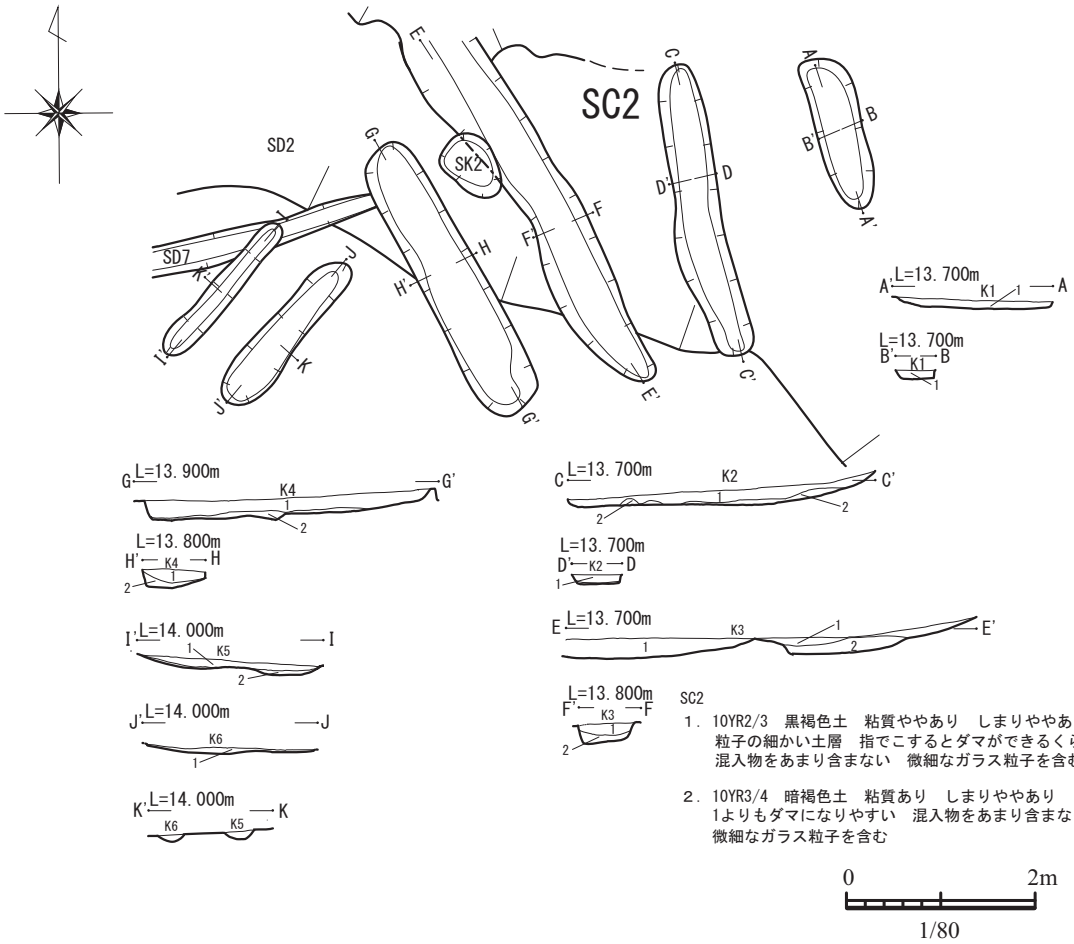
ＳＸ２（第５５図）

３層上面で検出した。４７ｋウ・グリッドに位置する。遺構の大部分を撹乱に壊され、部分的にしか残っていないため平面形は不明である。長軸約２０３ｍ、短軸は現況で１５５㎝以上、深さは検出面より約２０㎝を測る。発掘時、竪穴建物として調査したが、大部分が壊されているため、不明遺構とした。掘方面直上に硬化面が残存するため竪穴建物の可能性がある。柱穴等は検出できなかった。下層にＳＤ６、ＳＤ８が残存する。

遺物は土師器、須恵器の破片が出土した。



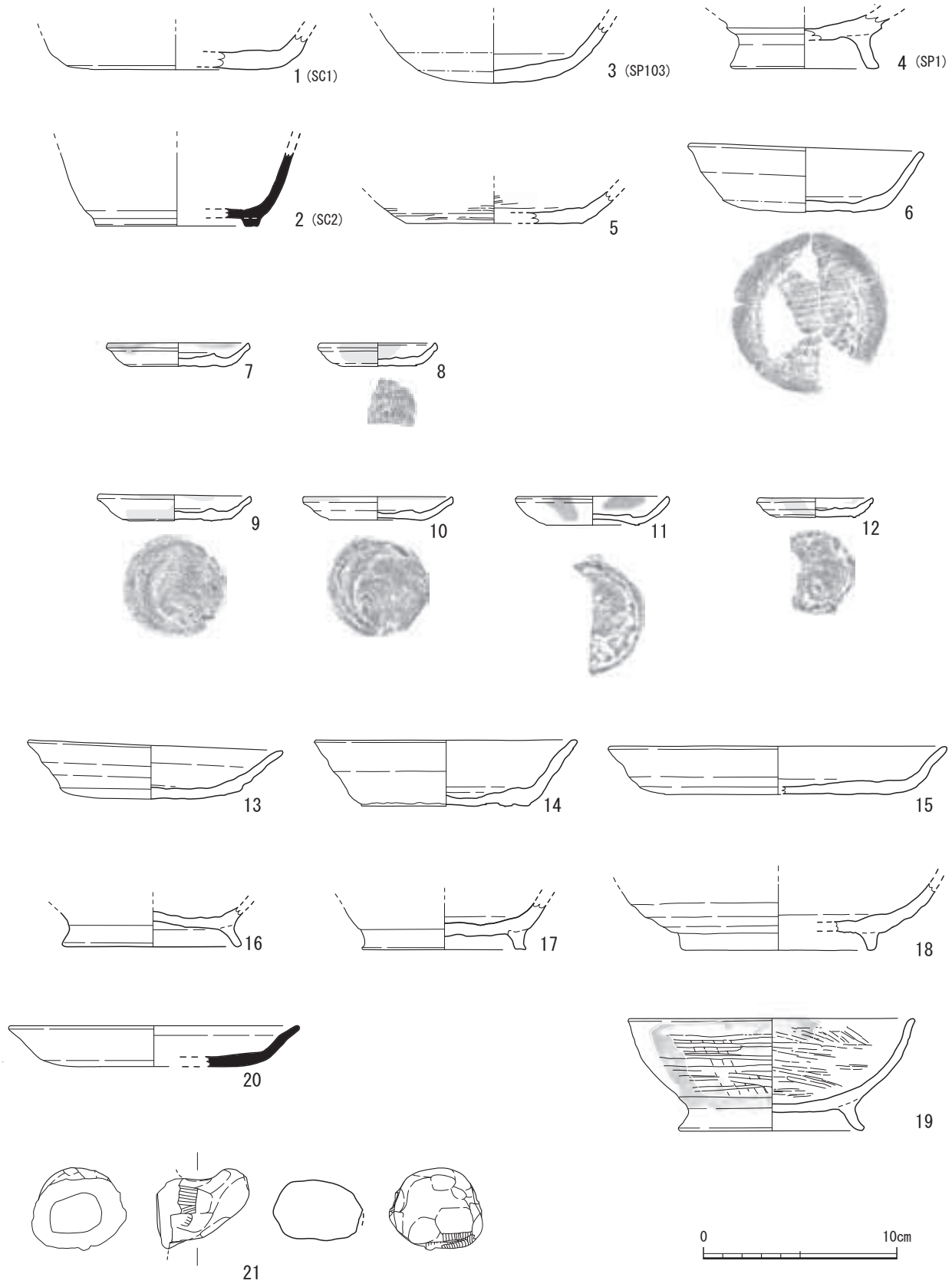
SC1
１．10YR2/3　黒褐色土　粘質ややあり
極細砂混じりシルト　微細なガラス粒子含む
やや赤みがある　遺物を多く含む
その他レキなどの混入物はない



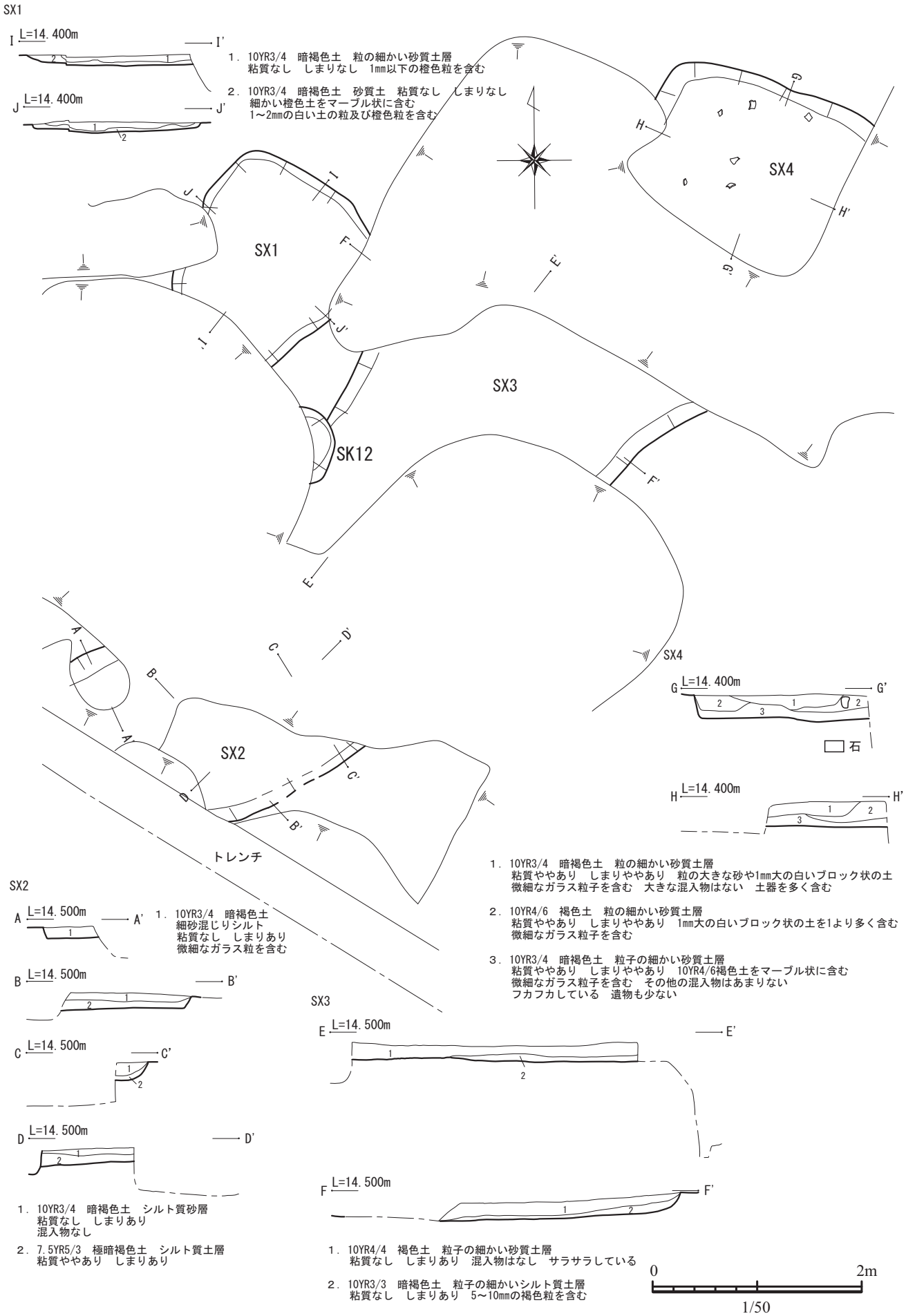
SC2
１．10YR2/3　黒褐色土　粘質ややあり　しまりややあり
粒子の細かい土層　指でこするとダマができるくらいの粘質
混入物をあまり含まない　微細なガラス粒子を含む

２．10YR3/4　暗褐色土　粘質あり　しまりややあり
1よりもダマになりやすい　混入物をあまり含まない
微細なガラス粒子を含む

第５３図　ＳＣ１･ＳＣ２平面・断面図



第５４図　６区出土遺物実測図（18）



第５５図　ＳＸ１･ＳＸ２･ＳＸ３･ＳＸ４平面・断面図

ＳＸ３（第５５図）

３層上面で検出した。４７ｋア・エ・グリッドに位置する。ほとんどを撹乱に壊され部分的にしか残存していないが、平面形はハの字形で北東側に若干開いている。現況で長軸約２．８ｍ、短軸約２．３ｍ、深さは検出面より約１５㎝を測る。

遺物は埋２層に土師器椀の底部（第５４図１６）が出土した。高台は底部端につき、高く脚状をなし、端部は丸い。他に土師器、須恵器の破片が出土した。下層にＳＤ６、ＳＤ８が残存する。

ＳＸ４（第５５図）

３層上面で検出した。４６ｋイ・４７ｋア・グリッドに位置する。平面形は方形で、東側、南側を防空壕に壊され、ＳＫ１３、ＳＤ８を壊す。現況では、南北約１．８ｍ、東西約２．０ｍ、検出面から掘方面までの深さ約２６㎝を測る。長軸はＮ－６６°－Ｗである。

機能面は、掘方面と思われるが、硬化面等が出土しないため、明確な根拠はない。柱穴等も検出できなかった。

遺物は埋２層より土師器杯（第５４図５）、（第５４図６）、土師器椀の底部（第５４図１７）が出土した。

５４－５は内外面を回転ヘラミガキされる。体部下位の状況から体部は開き気味であると思われる。５４－６は、底部外面は回転ヘラ切り後、底部端がナデ調整される。また板状圧痕が残る。体部は直線的に伸びる。

５４－１７は、高台は底部端につき断面形は台形である。他に土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。

遺構外出土遺物（第５４、５６図）

遺構外から出土した遺物については、特殊な遺物を除き、全体の形が分かるものを選択した。主に遺物包含層（１、２層）からの出土であるが、層序順には並べていない。詳細は、第３表　出土遺物観察表を参照して頂きたい。

トレンチ出土遺物（第９、１０、１１図参照）

トレンチ２（調査区西壁面沿い）より、灯明皿（第５４図７、８、９、１０、１１、１２）が４６ｋ・グリッド付近より出土した。底部は糸切り離しで、内外面にススの痕が残る。

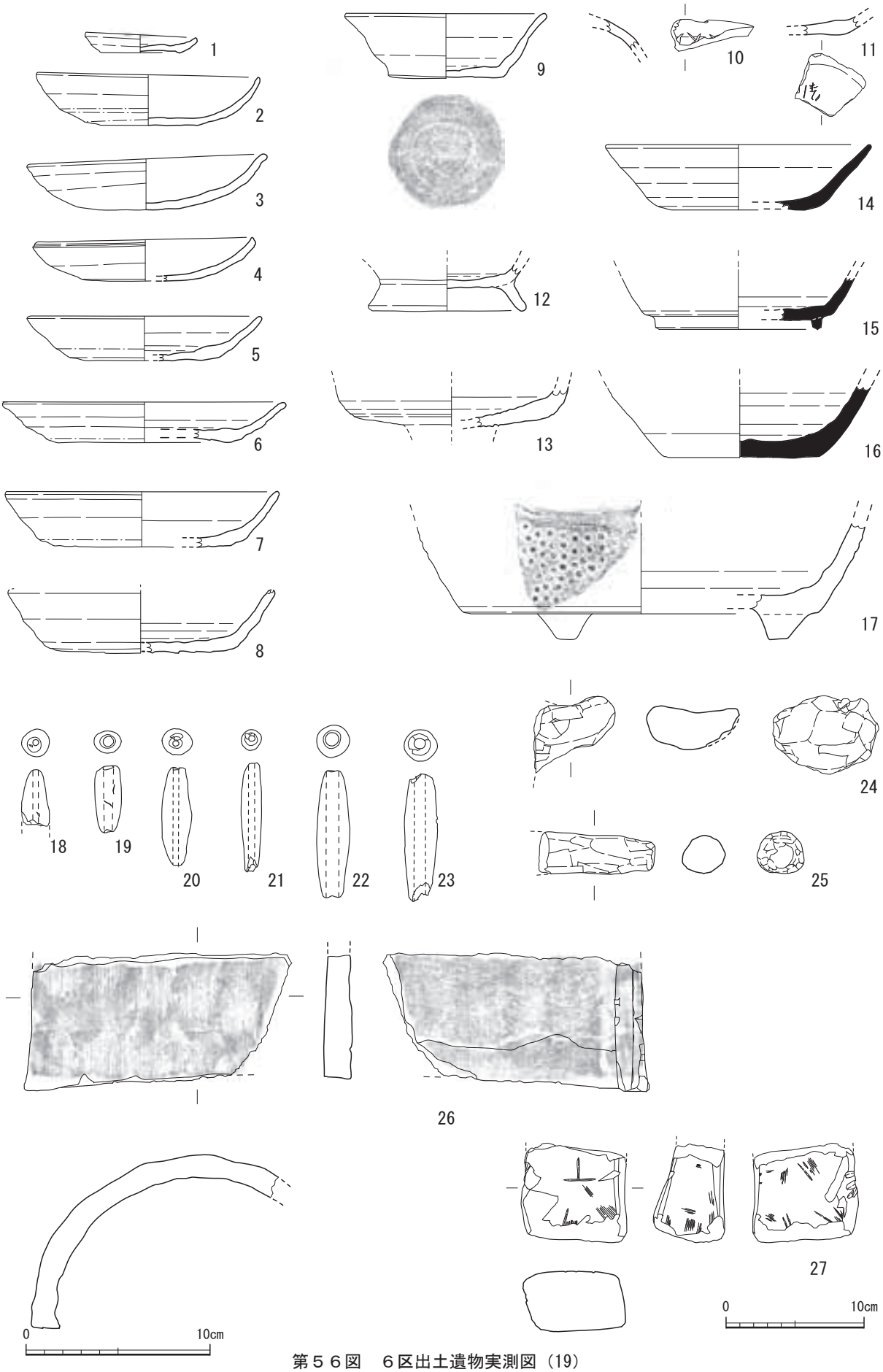
トレンチ８（調査区東壁面沿い）より、土師器杯（第５４図１４）、土師器椀（第５４図１９）、土師器皿（第５４図１５）が出土した。５４－１４は体部が底部端から口縁部に直線的に伸びる。５４－１５は体部が中位からやや外反する。５４－１９は底部外面を除く内外面に不定方向のミガキを施されている。高台は大きく、端部でやや外に開く。体部は底部端から口縁部まで内湾する。

トレンチ１５より土師器杯（第５４図１３）、土師器椀の底部（第５４図１８）、器種は不明であるが、土師器把手（第５４図２１）が出土した。５４－１３は底部端から体部が開き気味に口縁部に伸びる。５４－１８は高台の断面形が三角形に近い。濃淡はあるが内面一面にススが付着している。

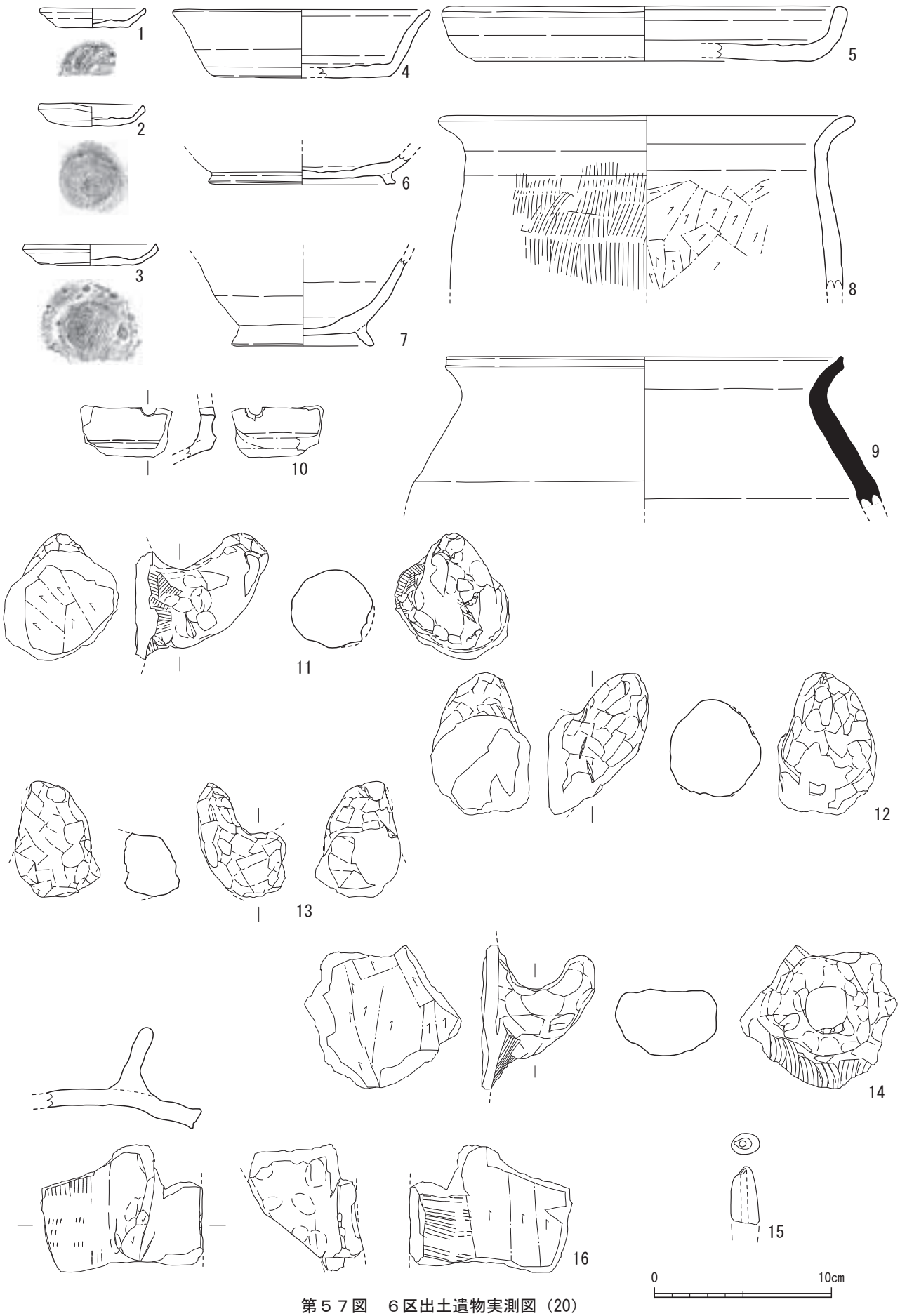
包含層出土遺物（第９、１０、１１、１２、１３図参照）

第５６図１は灯明皿で、４５ｍウ・グリッドから出土した。底部内面や口縁部に一部ススが付着する。

第５６図２、3、４、５、６、７、８、９は土師器杯である。２は４５ｍエ・グリッドより出土した。底部は丸く内湾しながら口縁部に伸びる。底部の内外面は黒いが、体部までは至っていない。３、４は４５ℓ・グリッドより出土した。３、４も２と同様に底部は丸く内湾しながら口縁部に伸びる。口縁部付近を除き内外面ともに黒い。３の口縁部はほんの少し外反する。４の口縁端は斜めにカットされ、その平坦部に、にぶい凹線



第５６図　６区出土遺物実測図（19）



第５７図　６区出土遺物実測図（20）

を有する。５、６、７は４５ℓア・グリッドより出土した。５は体部の外側への傾斜が大きく、底部端から口縁部に向かって直線的である。内外面に赤彩を施される。６も体部は外側への傾斜が大きく直線的である。口径が大きく器高が低いため皿に近い。７は体部が５、６に比べるとやや立ち気味である。内外面に赤彩される。８は４５ｍエ・グリッドより出土した。発掘時、口縁部端内側を削ってしまったため口縁部端が不確かであるが、７よりも体部がやや立ち気味であり、底部からの屈曲もよりはっきりしている。９は４７ｊア・グリッドより出土した。底部端から体部への屈曲がはっきりしていて、口径、底径の割に器高が高く、体部は中位から口縁部にかけてやや外反する。底部に板状圧痕が残る。９世紀中葉のものと思われる。

第５６図１０、１１は土師器に刻書が入る。１０は４６ｊイ・グリッドから出土した。器種は不明であるが、外面に×の一部と思われる刻書が３カ所入る。１１は４５ℓア・グリッドから出土した。杯の底部で外面に刻書が入る。何の文字かは解読できなかった。

第５６図１２は土師器椀の底部である。４６ℓア・グリッドより出土した。高台は高く、端部は丸い。底部端の体部の残りから、体部はやや立ち気味と思われる。

第５６図１３は土師器高杯の杯部で、４５ｋウ・グリッドから出土した。欠損のためはっきりしないが、底部外面中心に円形の凹線が４条入る。これは脚接合部と思われる。

第５６図１４は須恵器杯で４６ℓイ・グリッドより出土した。体部は底部端から口縁部に直線的に伸びる。

第５６図１５は須恵器椀で４６ℓエ・グリッドより出土した。高台は底部端よりやや内側につき、断面形は正方形である。

第５６図１６は須恵器壷の底部である。４５ｍウ・グリッドより出土した。

第５６図１７は瓦質で三足土器の底部である。

第５６図１８、１９、２０、２１、２２、２３は土錘である。１８は４６ℓエ・グリッド、１９、２２は４６ℓア・グリッド、２０は４５ℓウ・グリッド、２１は４５ｍイ・グリッド、２３は４５ｍウ・グリッドより出土した。

第５６図２４、２５は土師器の把手である。２４は４６ｍエ・グリッド、２５は４５ｍア・グリッドより出土した。

第５６図２６は布目瓦で、４８ℓエ・グリッドより出土した。

第５６図２７は砥石である。

第５７図６は土師器椀の底部で、４６ｍエ・グリッドより出土した。高台は底部端につき、断面形は平行四辺形である。

第５７図４は土師器杯で、表土剥ぎの際に採取した。内外面に赤彩を施され、底部中央部に穿孔が見られる。体部と底部端の境ははっきりしていて、中位から口縁部にかけて外反する。

第５７図７は土師器椀で、調査区東壁面より採取した。高台は底部と体部の境につき、高台高は高く、端部は丸い。

第５７図８は土師器甕の胴部から口縁部である。調査区南壁付近で出土した。外面はヨコナデ後ハケメ調整、内面は口縁部が回転ナデ、胴部がヘラケズリ調整である。

第５７図９は須恵器甕の胴部から口縁部である。調査区東壁付近で出土した。口縁部端は丸くなく、垂直にカットされている。外面はヨコナデ、内面は口縁部が回転ナデ、胴部は同心円文の当て具痕が見られる。

第５７図１６は土製品のかまどの庇部分で、４５ℓエ・グリッドより出土した。

第５７図１１、１２、１３、１４は器種が不明であるが、土師器の把手である。出土グリッドは不明である。

第５７図１５は土錘で４６ℓエ・グリッドより出土した。

第５７図１、２、３、５、１０は撹乱より出土した。５７－１、２、３は灯明皿で、底部に糸切り痕が見られる。３は糸切り痕の上に板状圧痕が残る。５７－５は焙烙、５７－１０は器種は不明であるが、穿孔を有する。

（２）近現代

ＳＢ２（第５８図）

０層上面で検出した。６区北部（４２ｍ・４２ℓ・グリッド）に位置する。表土剥ぎの際に出土した基礎部分で地表面（１５．０ｍ）より約５４㎝下より出土した。この調査区で検出したのは建物の一部であると思われる。ＳＢ２はＳＢ１のように地面を掘り込んで栗石を入れて搗いた地業だけでなく、地面に栗石を置いて搗き固めた地業のものも出土した。そのため、石は１段又は２段のものが多く、掘方が見られないものもある。礎石に使っていたと思われる石は全く残っていなかった。

プランについては、建物の一部と考えられるため、これも推定の域を超えないが、Ｋ５－Ｋ８－Ｋ１０－Ｋ１２とＫ７－Ｋ９－Ｋ１１はともに基礎間がほぼ２ｍであり、また列間もほぼ１．５ｍであるため、柱が並んでいたと思われる。約１ｍ離れて直行するＫ１－Ｋ２－Ｋ３－Ｋ４が約４ｍである。この列が庇となる可能性もある。

ＳＢ１（第５９、６０図）

表土剥ぎの際に近現代の基礎と思われる割栗石地業が出土した。割栗石地業はＳＢ１として報告する。

ＳＢ１は０層上面で検出した。６区中央部（４５ｋ・４５ℓ・４５ｍ・４６ｋ・４６ℓ・４６ｍ・グリッド）に位置する。地表面（約１５．２ｍ）より、約７０㎝下より出土した。割栗石地業は地面を掘り、栗石を敷きつめ、胴突き等で搗き固めてあった。建物はその上に礎石を置いて柱を立てた造りであると思われる。断面の観察からＳＢ１の割栗石地業の場では、切り込み砂利、目潰し砂利等の間隙充填ではなく、土を入れて間隙充填されているようである。また、瓦を根切り底に入れ、その上に栗石を入れてある地業も見られた。平面形は隅丸正方形のもの、細長い隅丸長方形、Ｔ字形、Ｌ字形のものがあるが、隅丸長方形のものは、礎石に石を切り出した角柱状のものを使っていた可能性がある。しかしながら、礎石と思われる石は全く残っていなかった。

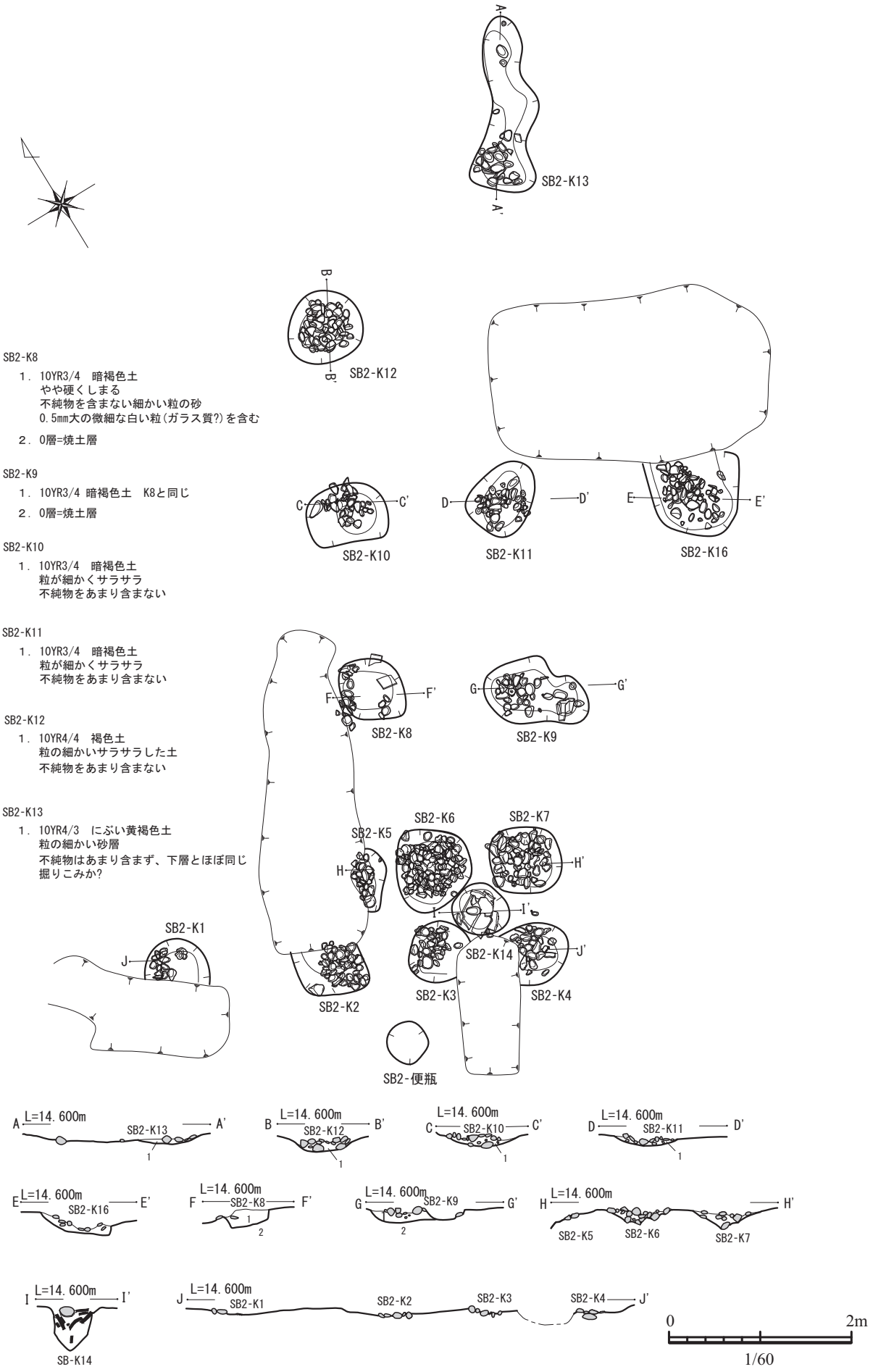
プランについて、その当時のことが分かる資料が少ないため推測の域を超えないが、建物の北東側はＫ０２－Ｋ０３－Ｋ０４－Ｋ０５、北西側はＫ０５－Ｋ０６－Ｋ１５－Ｋ２９－Ｋ２１、南西側はＫ２１－Ｋ１９－Ｋ２３、南東側がＫ２３－Ｋ１８－Ｋ１７－Ｋ１１－Ｋ０１－Ｋ１０－Ｋ０２と考えた。北東側Ｋ０２－Ｋ０５は約８ｍ、北西側Ｋ０５－Ｋ２１は約１２．５ｍ、Ｋ２１－Ｋ２３は約１０．５ｍ、Ｋ２３－Ｋ０２は約１２ｍを測る。

直線で並ぶ割栗地業は、Ｋ２８－Ｋ２４－Ｋ２５－Ｋ２６－Ｋ２７は約２ｍ間隔で並ぶ。この列の北西側には石列が見当たらないため、別の建物と思われる。

ＳＢ４（第６１、６２図）

ＳＤ１の埋土上で検出した。６区北東部（４１ｍ・４１ｎ・４２ｍ・４２ｎ・グリッド）に位置する。ＳＢ４もＳＢ２と同様に掘方が浅い地業や、掘方が見られない地業もある。ここでも礎石に使っていたと思われる石は残っていなかった。

プランについては、基礎がないところもあるが、北西側Ｋ１３－Ｋ１２－Ｋ１０－Ｋ９－Ｋ７、南西側Ｋ２－Ｋ３－Ｋ４－Ｋ５、南東側Ｋ５、北東側Ｋ１４で囲むラインと思われる。Ｋ１３－Ｋ３は約８．１ｍ、Ｋ２－Ｋ５は約８．１ｍを測る。井戸（ＳＥ１）は、周囲を栗石の地業で取り囲むように配置されている（Ｋ６）。上面の石は、井戸の四隅が空くように組まれ、上屋の柱を据えるのに都合の良いように組まれている。しかし、四隅の空きに柱を据えるための掘方、または根石を見つけることができなかった。井戸の北東側、南西側上面の石には約１０㎝四方の凹みが彫られており、そこにつるべなどを支える支柱が据えられていたと思われる。井戸の内部に使われている石は、内外面を曲面に成形され、一番上の石のすき間には漆喰が入れてあった。井



SB2-K8
1．10YR3/4　暗褐色土
やや硬くしまる
不純物を含まない細かい粒の砂
0.5mm大の微細な白い粒(ガラス質?)を含む
2．0層=焼土層

SB2-K9
1．10YR3/4 暗褐色土　K8と同じ
2．0層=焼土層

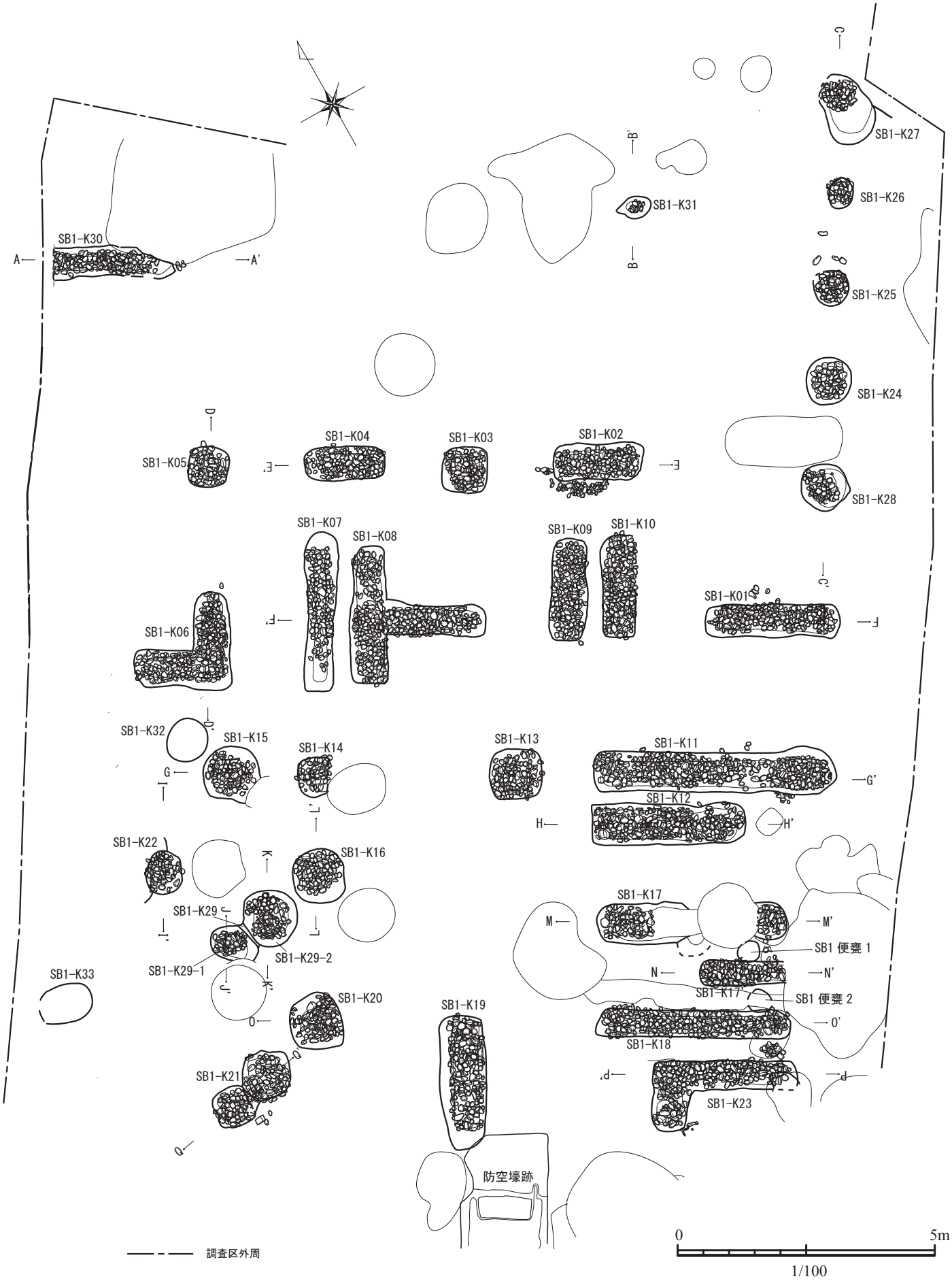
SB2-K10
1．10YR3/4　暗褐色土
粒が細かくサラサラ
不純物をあまり含まない

SB2-K11
1．10YR3/4　暗褐色土
粒が細かくサラサラ
不純物をあまり含まない

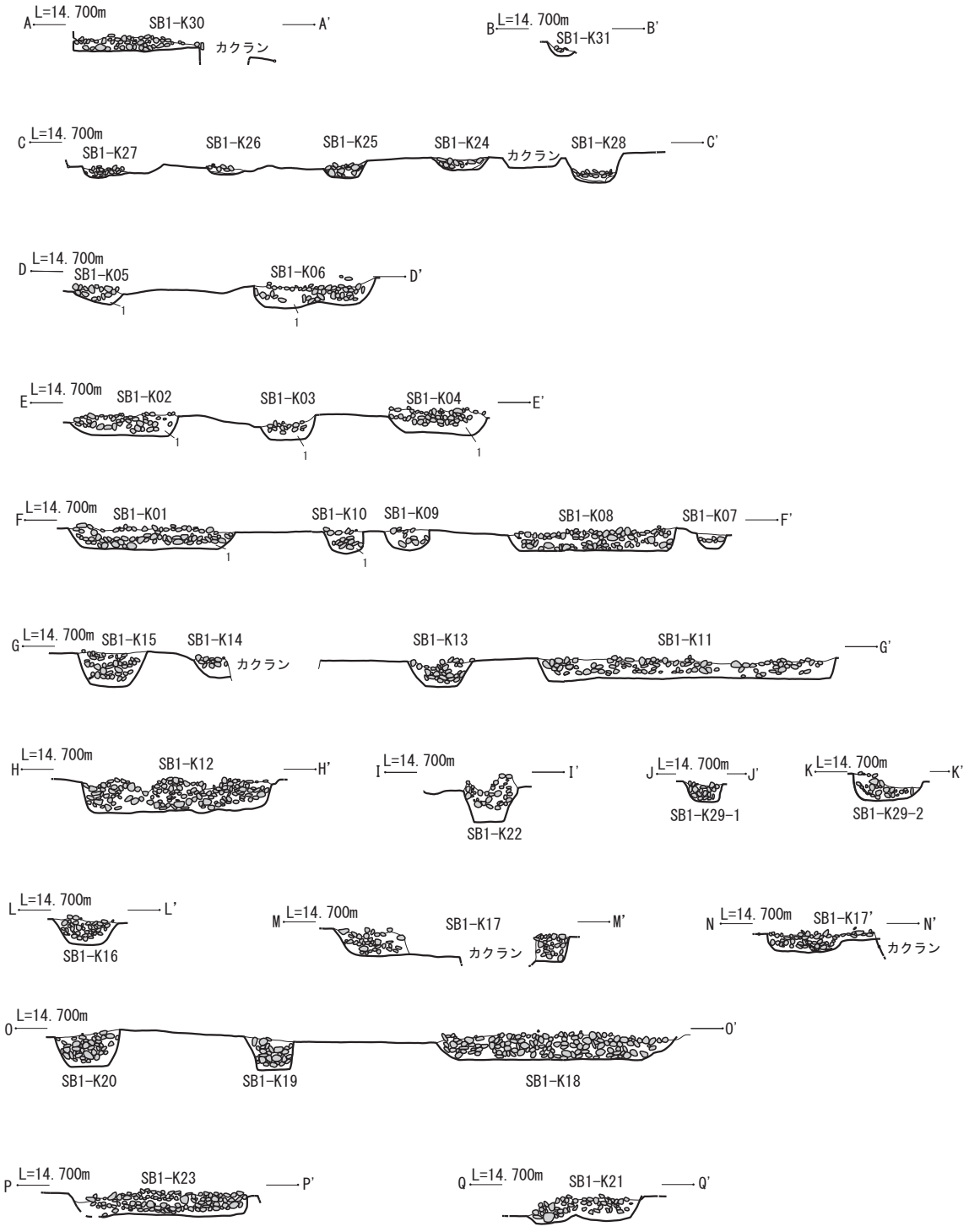
SB2-K12
1．10YR4/4　褐色土
粒の細かいサラサラした土
不純物をあまり含まない

SB2-K13
1．10YR4/3　にぶい黄褐色土
粒の細かい砂層
不純物はあまり含まず、下層とほぼ同じ
掘りこみか?

第５８図　ＳＢ２平面・断面図（1/60）



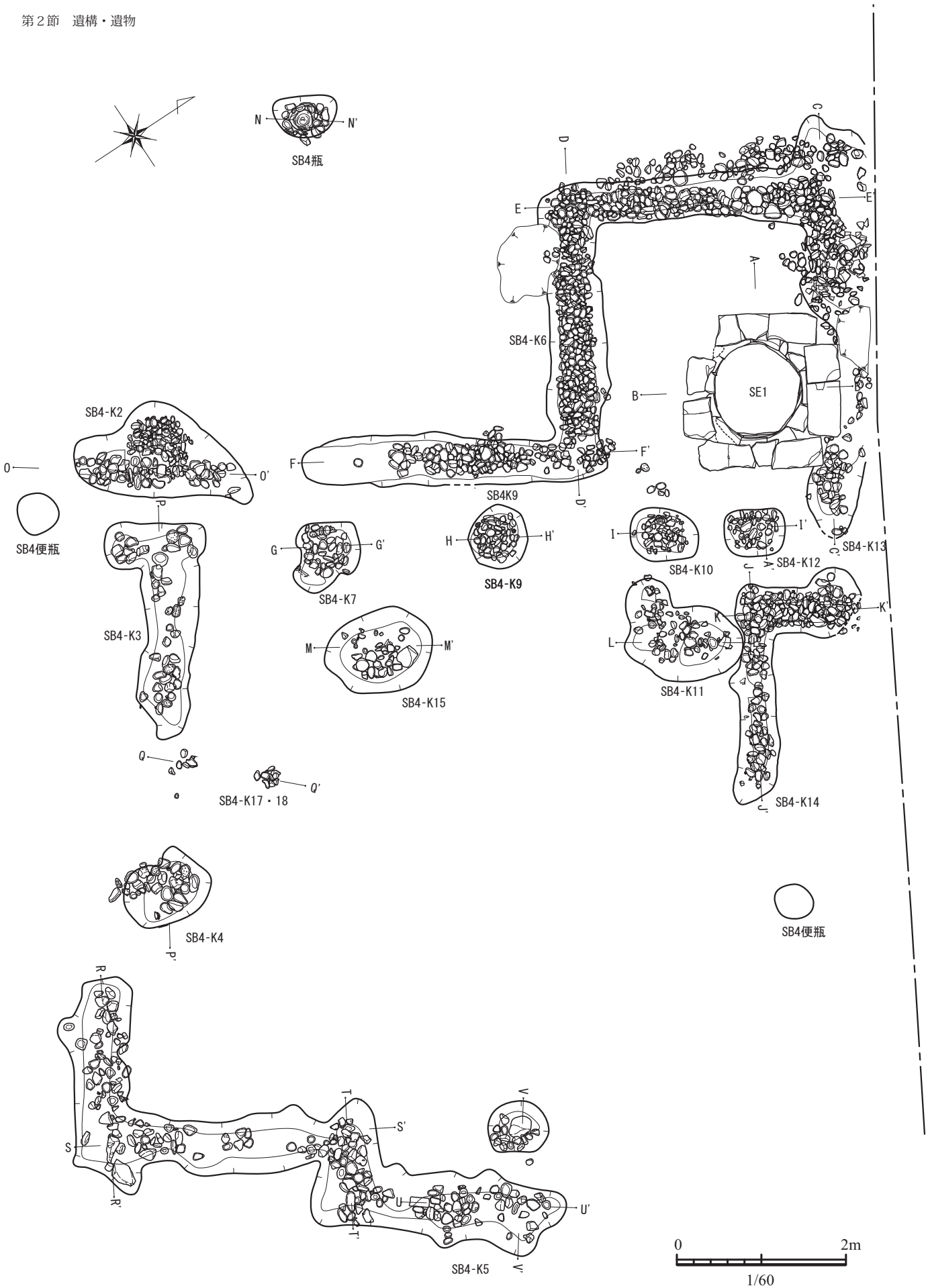
第５９図　ＳＢ１平面図（1/100）



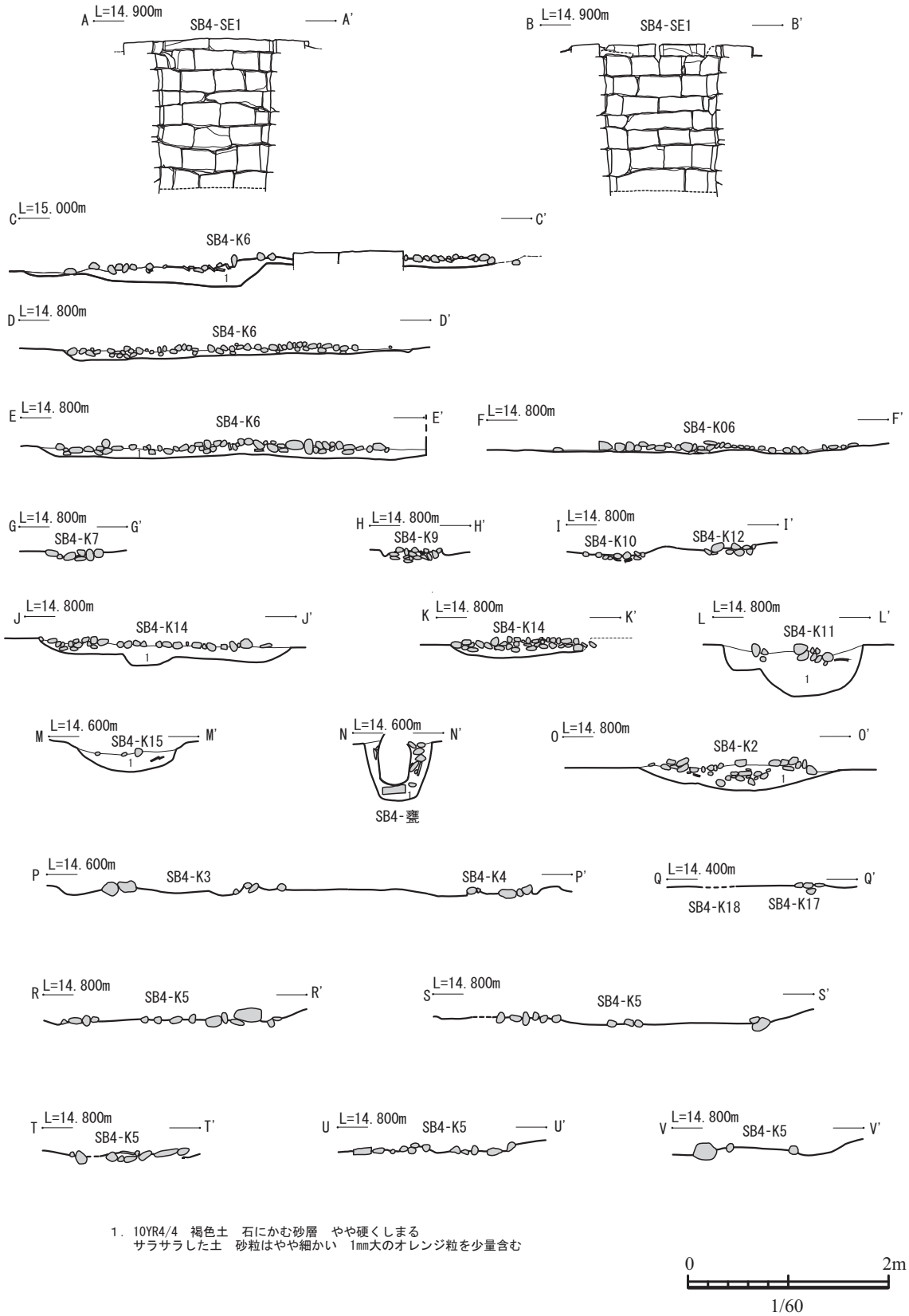
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりあり　0.5～1cm程度の炭化物･橙色土チップを多く含む
10YR5/6　黄褐色土　砂質土（1層の漸移層1'-④層）に掘り込んでいる
撹乱に近いところは①の下に砂をかんでいる

0　5m
1/100

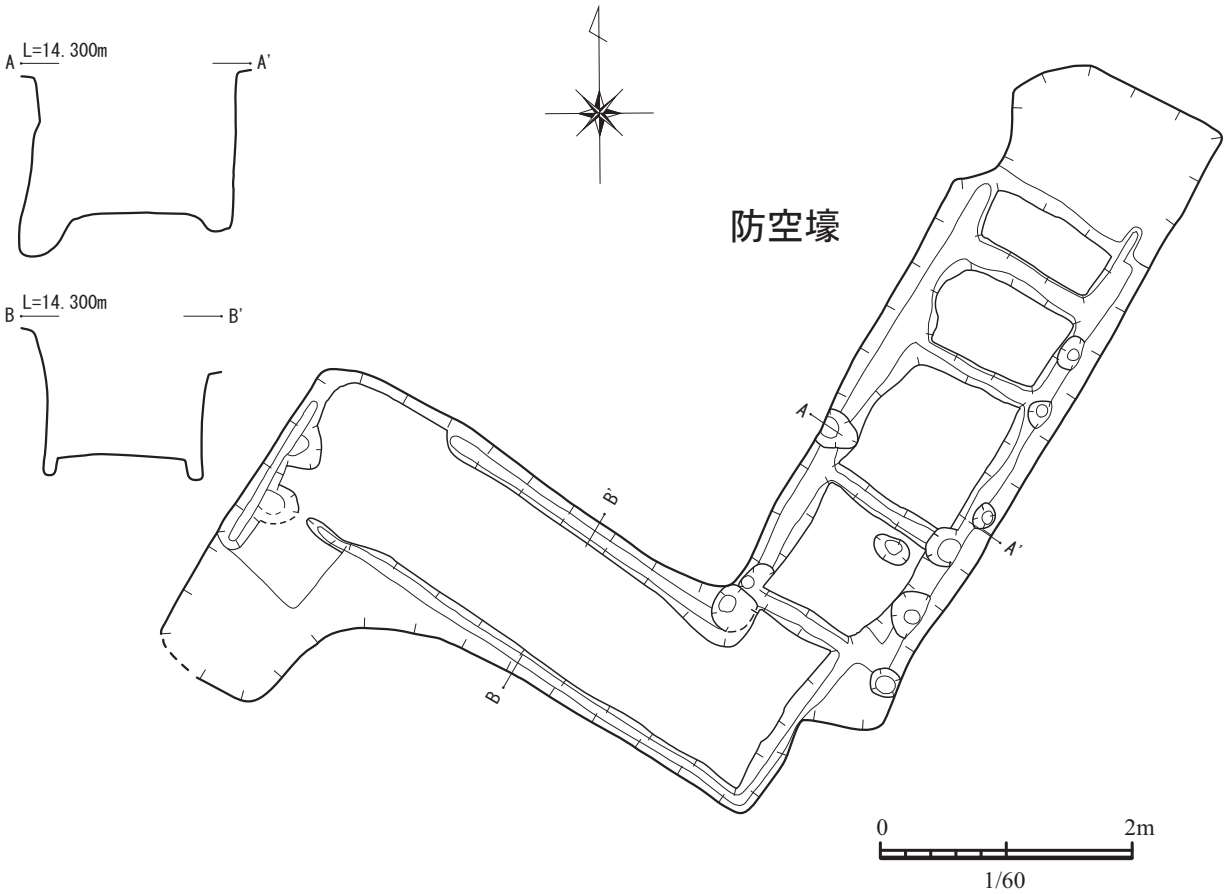
第６０図　ＳＢ１断面図（1/100）



第６１図　ＳＢ４平面図(1/60)



第６２図　ＳＢ４断面図（1/60）



第６３図　６区防空壕跡平面・断面図

戸内は約１．５m掘り下げたが、特に遺物等の出土はなかった。

ＳＢ３（第５図　６区中世以降主要遺構配置図、写真図版７参照）

表土剥ぎの際にＳＤ１埋土上にＳＢ３が出土した。ＳＢ３もＳＢ２、ＳＢ４と同様、掘方が浅い地業や、掘方が見られない地業もある。栗石の下にコンクリート片が入っているものもあったので、新しい遺構と判断し、位置を記す。ここでも礎石に使っていたと思われる石は残っていなかった。

防空壕（第６３図）

２層上面で検出した。４６ℓウ・４６ｋイ・４７ｋア・４７ｋエ・グリッドに位置する。平面形はＬ字形、幅約１．５mで南北方向に約６．４m、東西方向に約５．２m、検出面からの深さ約１１０㎝を測る。

底面壁側には壁際溝が掘られ、東側には床面に壁際溝に直行する溝が４条、柱穴が１１基、南側には直行する溝はないが、柱穴は２基検出された。壁際溝の幅は１２～３０㎝、深さは約１０～２０㎝である。この溝は、おそらく雨などが降った際に底面に溜まる水を壁際に逃がすためのものと思われる。柱穴の位置は基本的に壁際溝上にあるが、その間隔は一定ではない。壁際溝上に無いものもあるため、上に被せたものの状況によって柱を立てていると思われる。出入り口は斜めに掘られている。

２．７区

（１）古代

７区も６区同様、調査区の遺構は既存建物等により破壊を受けているものが多い。本来はもっと多くの遺構が存在していたと考えられ、検出した遺構も残存状況が悪いものが多い。

６区は調査面積約５３０㎡である。現状は標高約１５ｍで、地形は平坦である。６区との間には笹原外科胃腸科医院跡地、山下ビルがあり、約３２ｍ離れている。笹原医院跡地は試掘の結果、ビルの基礎で遺構は壊されていた。調査時、山下ビルはまだ取り壊されていなかったが、ビルの基礎によって遺構は壊されていると判断した。南側には大甲橋が架かる。

古代の遺構を概観すると、７区も白川に向かう切り通しの道路状遺構を含む集落跡と言えよう。竪穴建物１３軒、掘立柱建物１軒、大きな溝（道路状遺構、水路）２条を検出した。

以下、主要遺構について報告するが、他に土坑、小穴、柱穴など、これに漏れる遺構もある。その存在状況については古代遺構配置図（第６４、６５図）を参照していただきたい。

竪穴建物

ＳＩ１（第６６図）

３層上面より検出した、５２ｉウ･グリッドに位置する。南側の他は撹乱に壊され、残存は現況で南北約１．４ｍ、東西約１．１ｍ、検出面から掘方面までの深さ約２２㎝を測る。長軸はＮ－５３°－Ｗである。

機能面は、埋土のしまりの状態から埋１層の上面と思われるが、硬化面、柱穴等が検出できなかったため、はっきりとは言えない。

遺物は土師器の破片が数点出土した。

ＳＩ２（第６７図）

３層上面より検出した。５１ｈイ・ウ・グリッドに位置する。ＳＩ１２を壊し、西側と建物内を撹乱で壊される。ＳＩ１２との新旧関係は、ＳＩ２の角にＳＩ１２の壊されたかまど跡があり、粘土の散らばりが、ＳＩ２硬化面下にあることから、ＳＩ２が新しいと判断した。

南北約２．７ｍ、東西２．６ｍ、検出面から機能面までの深さ約１０㎝を測る。長軸はＮ－３７°－Ｗである。

機能面は掘方面上面で中央から北方向にかけて硬化面が残存している。この面で柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ３を検出した。位置から主柱穴と思われる。Ｐ３は撹乱内で検出したため残りが４分の１程度であり柱穴間は正確ではないが、Ｐ１－Ｐ３間は約１．６ｍ、Ｐ２－Ｐ３間は約１．５ｍである。

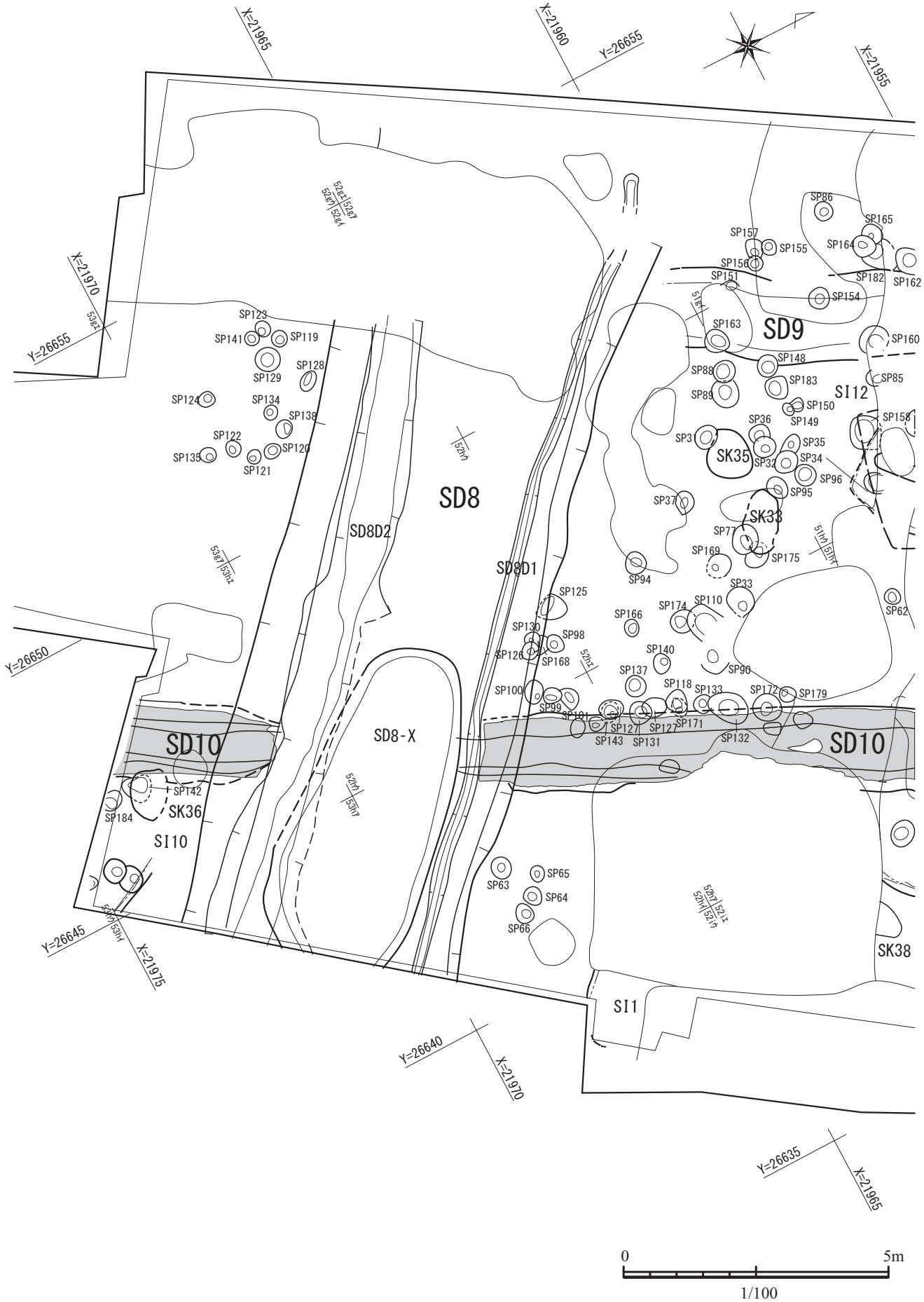
遺物は土師器、須恵器の破片が数点出土した。

ＳＩ１２（第６７図）

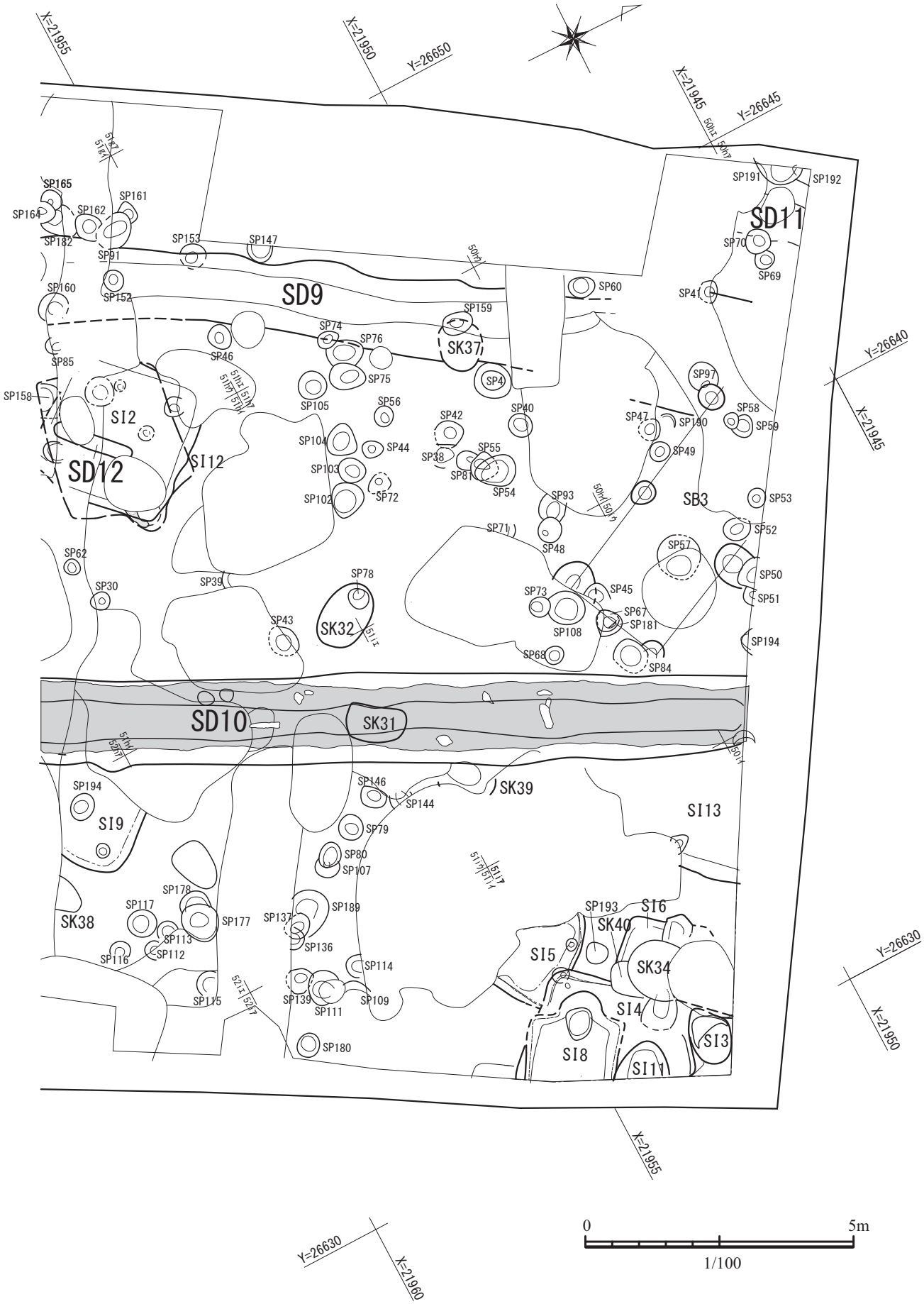
ＳＩ１２掘方面で検出した。５１ｈイ・ウ・グリッドに位置する。建物の床面をＳＩ２に削平され、残存はかまどのみである。建物のプランは、ＳＩ２掘方面に残った黒い埋土の跡を頼りに検出したため推定でしかないが、南北約２．４ｍ、東西約２．６ｍ、主軸はＮ－１０２°－Ｅである。土層断面も記録できなかった。

柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ３を検出したが、どの柱穴も位置的に主柱穴とは考えにくい。建物中央部に溝ＳＤ１２を検出したが、位置的に建物が機能していた以前の溝と考えられる。

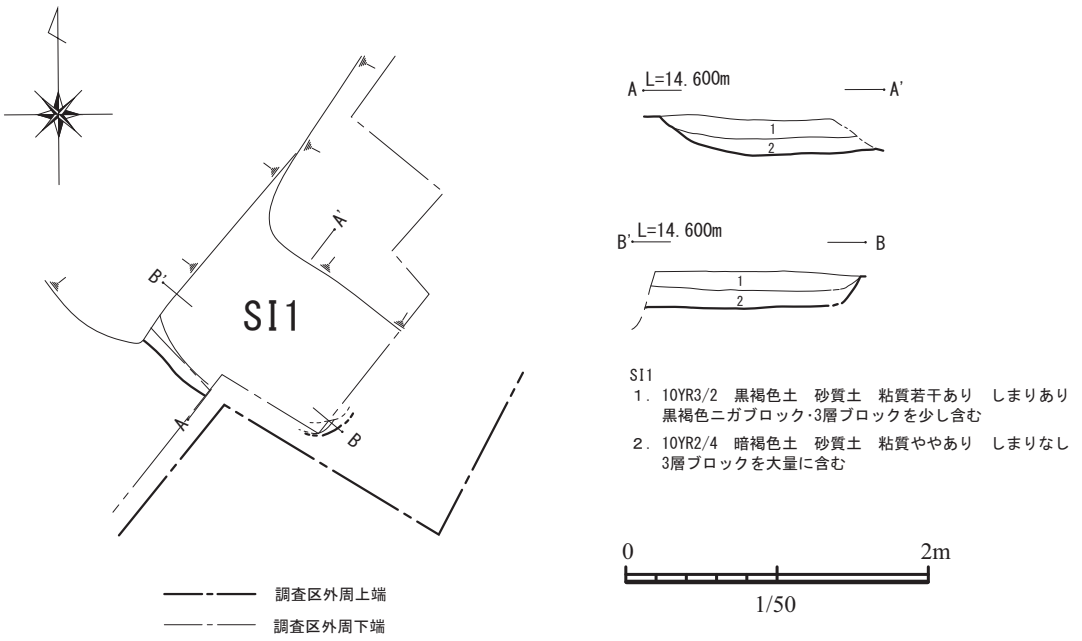
かまど跡は建物の東側に位置し、焚き口付近を撹乱で壊されている。焚き口から見て右側の軟質砂岩は残存し、原位置を保っているが、左側の砂岩は抜かれている。右側の砂岩は穴を掘って据えられた後、固定するために暗褐色土を入れているようである。焼成面はかまど埋１層で、焼土や炭化物が残存する。かまど袖は、削



第６４図　７区古代遺構配置図１（1/100）



第６５図　７区古代遺構配置図２（1/100）



第６６図　ＳＩ１平面・断面図

平を受け、粘土痕が少し残るだけである。

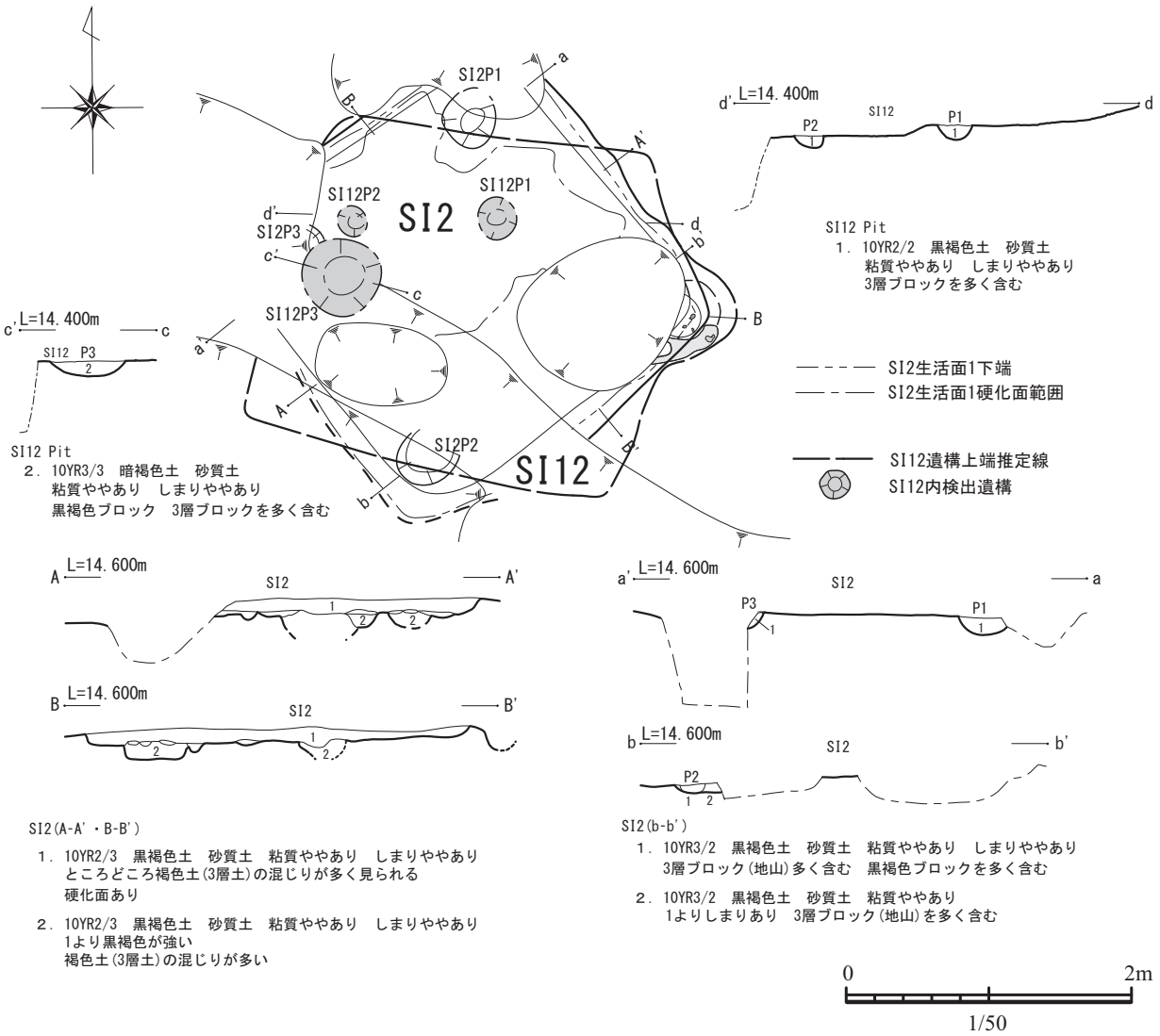
遺物はかまど埋１層中より土師器甕（第７４図９）の口縁から胴部の破片が出土した。外面はヨコナデ、ナデ調整、内面はヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ調整である。他に赤彩された土師器杯の口縁部の破片が１点出土した。

ＳＩ３（第６８図）

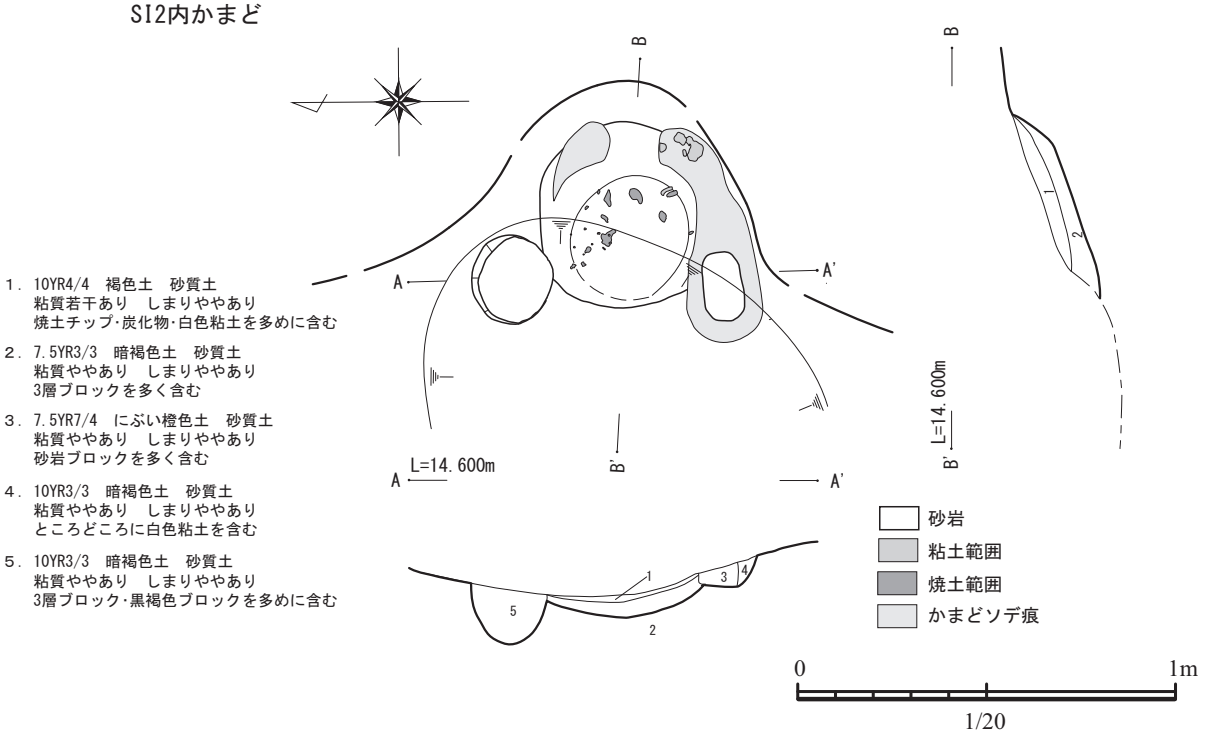
３層上面で検出した。５１ｉア・グリッドに位置する。上部は撹乱に壊される。ＳＩ４を壊す。周辺遺構との重複関係はＳＩ６→ＳＩ４→ＳＩ３（本遺構）（旧→新）である。ＳＩ４との新旧関係は、土層断面でＳＩ３かまど埋土が極暗褐色であり、ＳＩ４埋土の黒褐色土を切っていることからＳＩ３が新しいと判断した。かまど以外は調査区外であるため規模等は不明であるが、かまどの向きは東南東向きである。

壊されたかまどの上面には粘土が散乱する。かまどの焚き口から見て右側の軟質砂岩は、３層土を掘って埋めてあるので、袖石として原位置を保っていると思われる。他の軟質砂岩は掘って埋めている形跡がないため、原位置からずれていると思われる。かまど埋３層の上面に焼土をやや多めに含むことから焼成面はこの面と考えられる。壊されたかまど覆土に硬化面が２面残存した。なぜ硬化面が残存するのかは不明である。

遺物は、崩されたかまどの上部の埋土から、須恵器杯（第７４図５）、かまど埋１層から土師器鉢（第７４図８）が出土した。７４－５は体部が直線的に伸び、口縁部で外反する。７４－８は外面において胴部のハケメ調整の後、口縁部のヨコナデが、内面においては口縁部のヨコナデ後、ヘラケズリされている。他に土師器甕の破片等が出土した。



SI2内かまど



第６７図　ＳＩ２・ＳＩ１２平面・断面図

ＳＩ１１（第６８図）

３層上面で検出した。５１ｉア・グリッドに位置する。上部を近現代の建物の基礎として埋めてあった栗石に壊され、ＳＩ８、ＳＩ４を壊す。周辺遺構との重複関係はＳＩ４→ＳＩ８→ＳＩ１１（本遺構）（旧→新）である。ＳＩ８との新旧関係はＳＩ１１のかまど掘方が、ＳＩ８の機能面に残存する硬化面を壊すことからＳＩ１１が新しいと判断した。ＳＩ１１とＳＩ４の新旧関係は、ＳＩ４のかまどをＳＩ１１のかまどが壊すことから、ＳＩ１１が新しいと判断した。かまど跡以外は調査区外に広がるため、建物の規模等は不明であるが、かまどの向きは北西である。

壊されたかまど上面から粘土、軟質砂岩が出土した。焚き口から見て奥の軟質砂岩は埋３層に埋められた状態であるので原位置を保っていると思われる。他の軟質砂岩は断面で原位置かどうかは確認できなかった。焼成面は埋４層で焼土、灰が多く出土した。

遺物は赤彩をされた土師器杯の口縁部、土師器甕の胴部などの破片が出土した。

ＳＩ８（第６８図）

３層上面で検出した。５１ｉア・イ・グリッドに位置する。建物の一部は近現代の建物の基礎として埋めてあった栗石と、ＳＩ１１に壊され、ＳＩ４を壊す。ＳＩ４との新旧関係は、ＳＩ８のかまどがＳＩ４の掘方面を壊していること、ＳＩ８の掘方がＳＩ４の硬化面を壊すことからＳＩ８が新しいと判断した。

建物の東側は調査区外になるため、現況では南北約１．６ｍ、東西約１．２ｍ、検出面から機能面までの深さ約２３㎝を測る。主軸はＮ－５８°－Ｗである。

機能面は埋２層上面と思われるが、硬化面、柱穴は検出できなかった。

壊されたかまどが残存し、軟質砂岩が縦位置に置かれ埋まっていたことから袖石は原位置と思われる。焼成面はかまど埋２層で灰や粘土が出土した。

遺物は埋１層から土師器杯（第７４図１）が出土した。内面底部は回転ヘラミガキされる。体部下位は丸みを持ち、口縁部に直線的に伸びる。他に赤彩、ヘラミガキされた土師器杯の底部、土師器甕の破片、須恵器甕の破片が多く出土した。

ＳＩ４（第６８図）

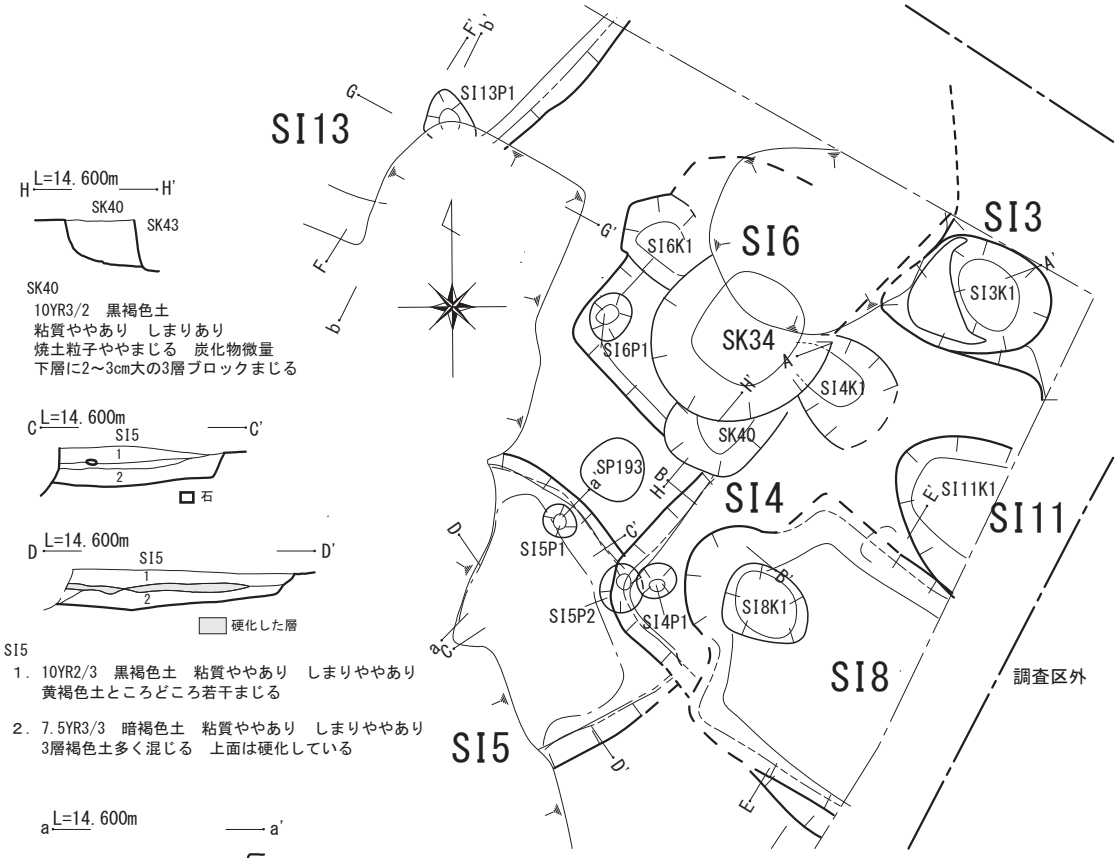
３層上面で検出した。５１ｉア・イ・グリッドに位置する。ＳＩ３、ＳＩ１１、ＳＩ８、ＳＫ３４、ＳＫ４０に壊され、ＳＩ５を壊す。ＳＩ４とＳＩ５の新旧関係は、検出の際、ＳＩ５埋土がＳＩ４埋土より明るく見えることと、撹乱壁面でＳＩ４がＳＩ５を壊すことが確認できたことから、ＳＩ４が新しいと判断した。

建物が北側、東側調査区外に広がるため、現況では、南北約３．５ｍ、東西約２．１ｍ、検出面から機能面までの深さ約１７㎝を測る。主軸はＮ－４６°－Ｗである。

機能面は埋２層上面で硬化面が一部残存する。この面で南西側角に柱穴Ｐ１を検出した。位置的にやや壁際によりすぎているが主柱穴の可能性がある。

壊されたかまどが残存し、軟質砂岩、粘土塊、焼土塊が出土したが、原位置を保っていないと思われる。焼成面は、焼土塊や焼土チップ等の混ざりが見られることから、かまど埋２層上面と思われる。

遺物は埋１層から土師器杯（第７４図２）、土師器甕（第７４図１０）、かまど埋土から土師器杯（第７４図３）が出土した。７４－２は内面と底部外面が回転ヘラミガキ調整され、内外面ともに赤彩を施される。体部下位は丸みを持ち、口縁部に向かって直線的に伸び、口縁部端で少し外反する。７４－３も７４－２と同様の特徴を持つが、７４－３は底部外面の他は回転ヘラミガキが施される。７４－１０は、外面はヨコナデ後ハケメ調整、内面はヨコナデ後ヘラケズリが施される。他に土師器甕の破片、須恵器甕の破片が出土した。



H L=14.600m H'

SK40
10YR3/2　黒褐色土
粘質ややあり　しまりあり
焼土粒子ややまじる　炭化物微量
下層に2～3cm大の3層ブロックまじる

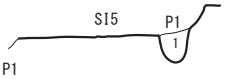
C L=14.600m C'

D L=14.600m D'

SI5
1．10YR2/3　黒褐色土　粘質ややあり　しまりややあり
黄褐色土ところどころ若干まじる

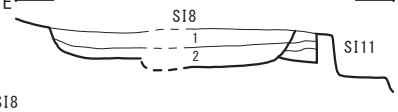
2．7.5YR3/3　暗褐色土　粘質ややあり　しまりややあり
3層褐色土多く混じる　上面は硬化している

a L=14.600m a'



SI5 P1
1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
3層ブロックを少し含む

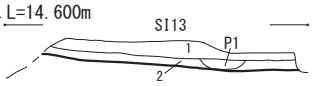
E L=14.600m E'



SI8
1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
オレンジチップところどころほんの少しまじる

2．7.5YR2/3　極暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり

F L=14.600m F'

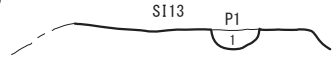


G L=14.600m G'

SI13
1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
橙色粒･炭化物少し含む

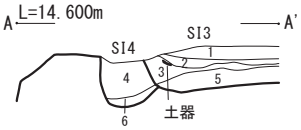
2．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
3層ブロック多く含む

b L=14.600m b'



SI13　P1
1．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
黒褐色ブロック･3層ブロック少し含む

A L=14.600m A'



SI3・SI4
1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
5～10mm大の黄褐色ブロック･砂岩の飛び散りを少し含む

2．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
1より若干暗い　橙色の砂が部分的に入る　やや硬化した部分あり

3．7.5YR2/3　極暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
粘土が多く入る　上部に硬化面が存在する

4．10YR2/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
砂岩の散らばりが1ヵ所ある　3層褐色土のまじり
下部にほんの少し見られる

5．7.5YR2/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
3層褐色土が左側に少しまじる

6．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
3層褐色土が多くまじる

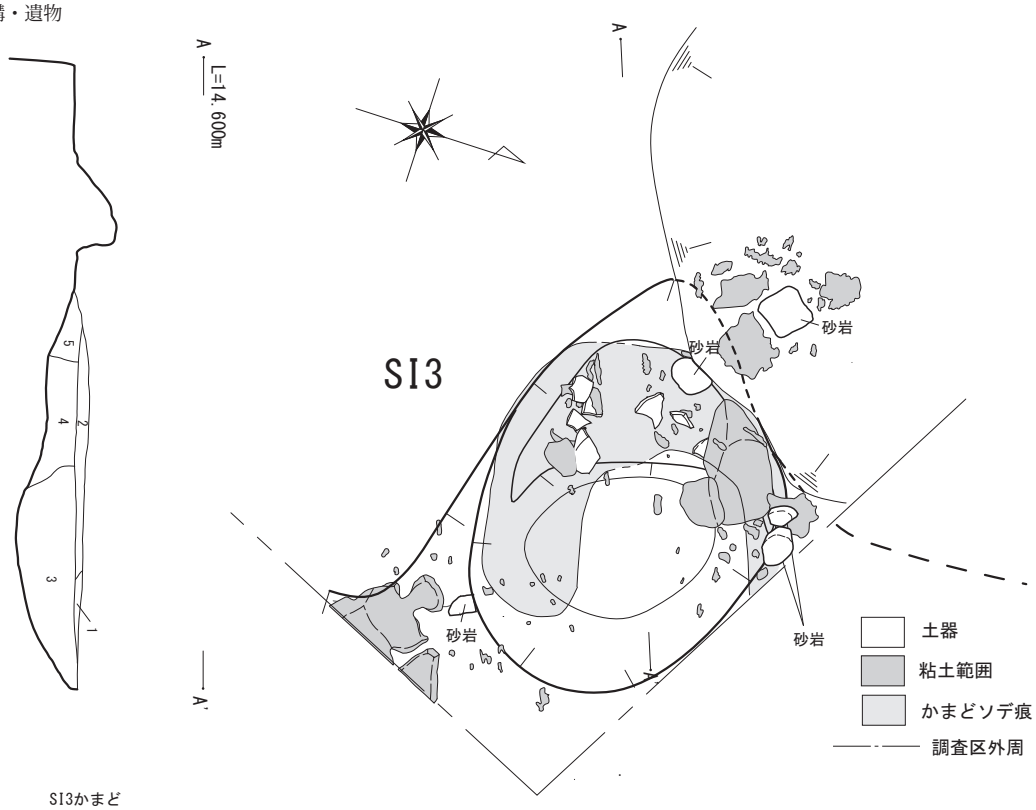
B L=14.600m B'

SI4
1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
黄褐色土粒まじる　3層土下部にまじる

2．7.5YR2/3　極暗褐色土　砂質土
3層褐色土まだらにまじる　貼床埋土

0　2m
1/50

第６８図　ＳＩ３・ＳＩ４・ＳＩ５・ＳＩ６・ＳＩ８・ＳＩ１１・ＳＩ１３平面・断面図



SI3かまど

１．10YR4/2　灰黄褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　粘土･焼土を少し含む

２．10YR4/2　灰黄褐色土　砂質土　粘質あり　しまりあり　白色の粘土を多く含む

３．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　上面はやや多めに焼土含む　下面は3層ブロックを多く含む

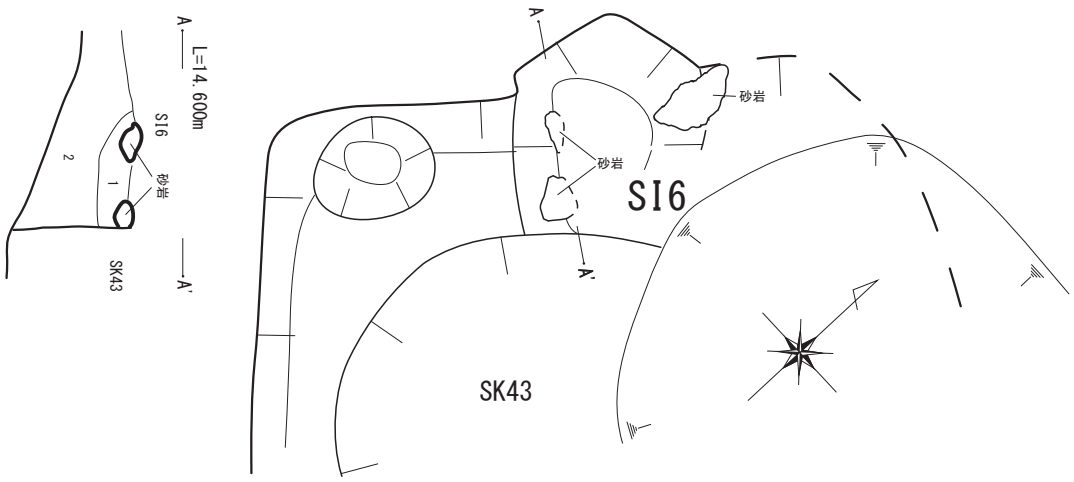
４．10YR4/3　にぶい黄褐色土　砂質土　粘質非常に強い　しまり非常に強い　白色の粘土を多く含む

５．10YR4/1　褐灰色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　焼土･灰をやや多めに含む

0　1m

1/20

第６９図　ＳＩ３かまど平面・断面図



SI6かまど

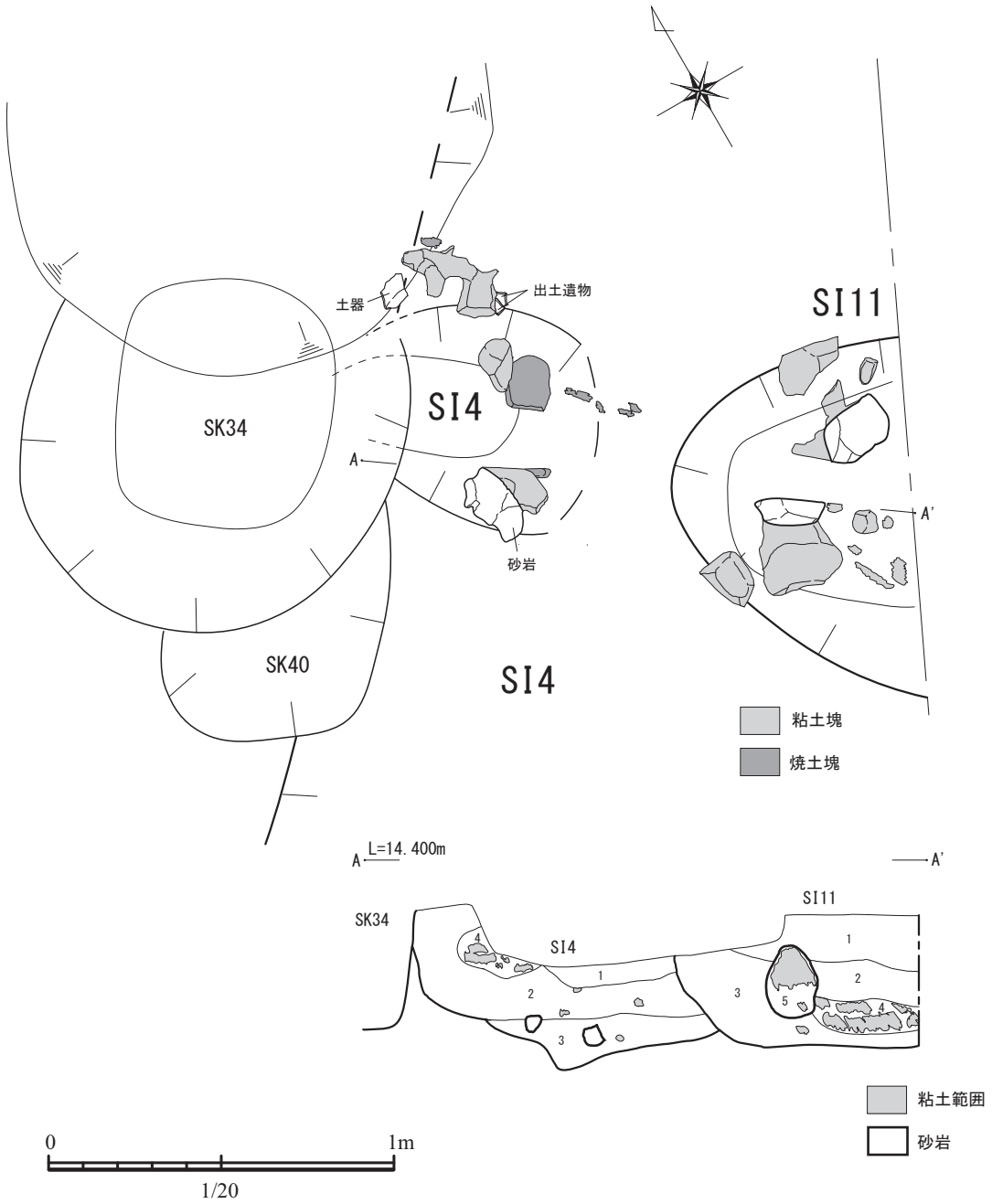
１．7.5YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり
　　しまりややあり　焼土を少し含む

２．7.5YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり
　　しまりややあり　下部に3層土褐色を多く含む

0　1m

1/20

第７０図　ＳＩ６かまど平面・断面図



SI4かまど

1．焼土の硬化

2．7.5YR2/3　極暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりあり
　焼土チップ粘土が散在する　SB2Kの影響で少ししまる

3．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりあり
　砂岩のまじり　3層褐色土のまじり少し見られる

4．10YR4/3　にぶい黄褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　粘土のくずれ　SI4かまどに付属する

SI11かまど

1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　5～10mm大の黄褐色土若干まじる

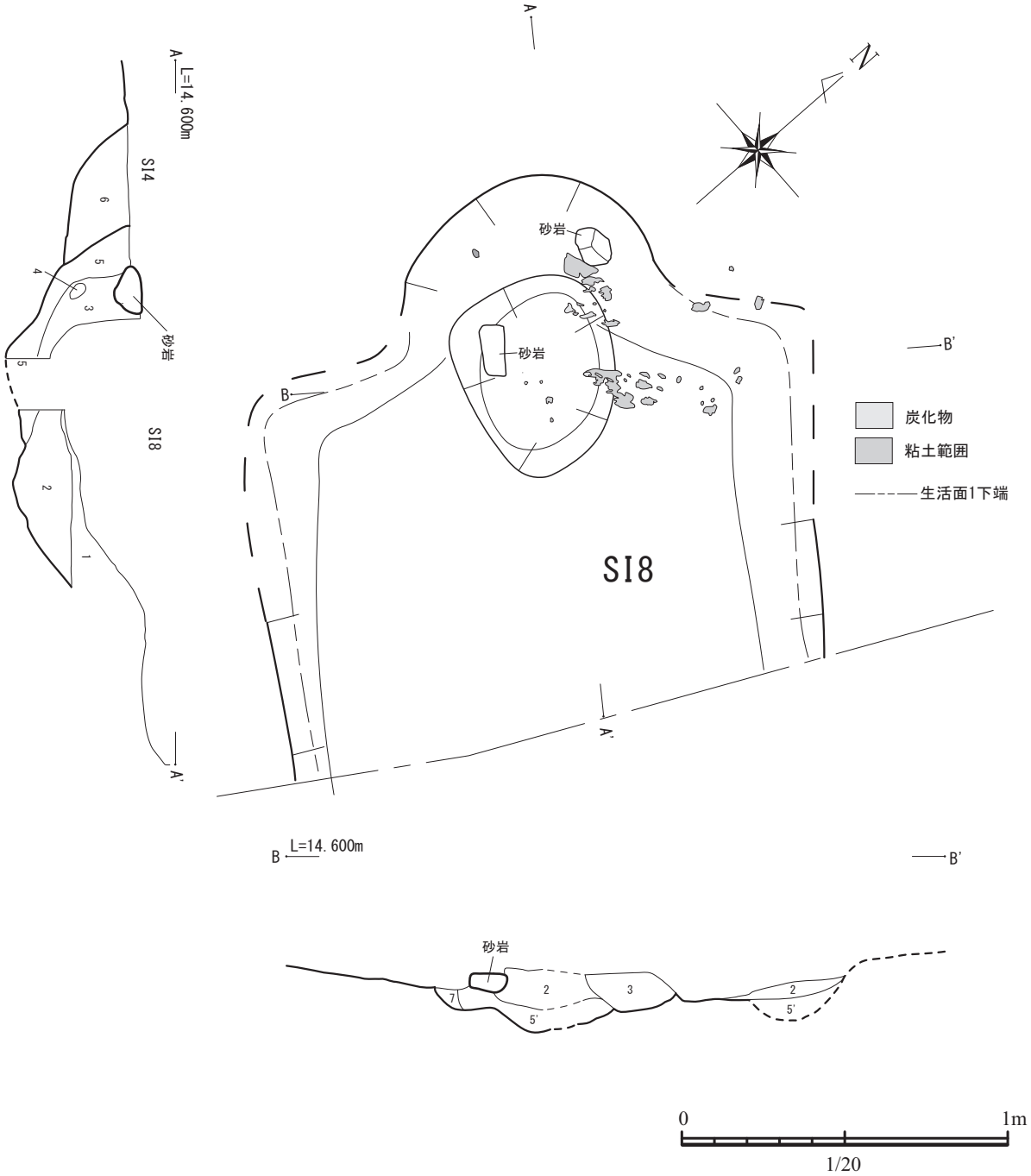
2．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりあり
　上面にニガブロックが存在　土のきめが細かくつるつるする感じ

3．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりあり
　1よりやや暗い　部分的に粘土が入る
　SB2Kの下はしまっているが左側はしまりが小さい

4．10YR4/3　にぶい黄褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　灰と焼土が多く見られる

5．軟質砂岩　下部は10YR2/3黒褐色土に焼土が多くまじる

第７１図　ＳＩ４・ＳＩ１１かまど平面・断面図



SI8かまど埋土
１．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　1～2mm大のオレンジチップ若干まじる
２．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　粘土･オレンジチップ少しまじる　基礎下のところは硬くしまっている
３．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　粘土3層褐色土が多くまじる
４．5YR4/4　にぶい黄褐色土　粘質ややあり　しまりややあり　ほんの少し黒いにごりが見られる
５．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　下の方は3層土のまじりが多い
５'．5下部より3層土のまじりは多くなる　貼床

SI4埋土
６．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　少し3層土がところどころまじる

第７２図　ＳＩ８かまど平面・断面図

ＳＩ６（第６８図）

３層上面で検出した。５１ｉア・グリッドに位置する。北側を撹乱、東側をＳＫ３４、ＳＫ４０に壊されるため、現況では南北約０．９ｍ、東西約１．１ｍである。検出面から掘方面までの深さ約１８㎝を測る。主軸はＮ－４３°－Ｗである。

硬化面は検出できなかった。柱穴は建物西側にＰ１を検出した。位置的に主柱穴の可能性がある。壊されたかまど跡を検出し粘土塊、砂岩が出土したが、原位置を保っていない。焼成面も焼土、灰等がほとんど出土しなかったため分からなかった。

遺物はかまど跡埋土から土師器椀（第７４図６）が出土した。高台は断面形が細い三角形で端部は丸い。体部は底部端から口縁部に向かって直線的である。他に土師器の破片が数点出土した。

ＳＩ５（第６８図）

３層上面で検出した。５１ｉア・イ・グリッドに位置する。東側をＳＩ４、西側を撹乱に壊される。残存で、南北約１．４ｍ、東西約１．１ｍ、検出面から機能面までの深さ約１３㎝を測る。長軸はＮ－３４°－Ｗである。

機能面は埋２層上面で、はっきりとした硬化面が出土する。柱穴はＰ１、Ｐ２を検出した。Ｐ１、Ｐ２とも建物の北東壁に近いため、主柱穴ではないと思われる。

遺物は赤彩を施され、ヘラミガキされた土師器杯の底部、土師器甕の破片、須恵器甕の破片などが数点出土した。

ＳＩ９（第７３図）

３層上面で検出した。５２ｉエ・５２ｈア・グリッドに位置する。建物の周囲を撹乱で壊され、東側と中央の一部のみ残存する。現況では、南北約１．８ｍ、東西約２．８ｍ、検出面から機能面までの深さ約１５㎝を測る。長軸はＮ－５７°－Ｗである。

機能面は埋２層上面で硬化面が残存する。この硬化面はちょうどＳＤ１０の上にも残っていることから、ＳＤ１０がＳＩ９よりも古く、ＳＤ１０埋没後にＳＩ９が建てられたと思われる。柱穴は機能面上では検出できなかったが掘方面でＳＰ１９４を検出した。ＳＰ１９４埋土とＳＩ９の貼床埋土は同じと思われたため、ＳＩ９を建てる際に埋められたと考えられる。

遺物は埋土内から土師器高杯（第７４図７）が出土した。杯部と脚部のつなぎ目の部分である。

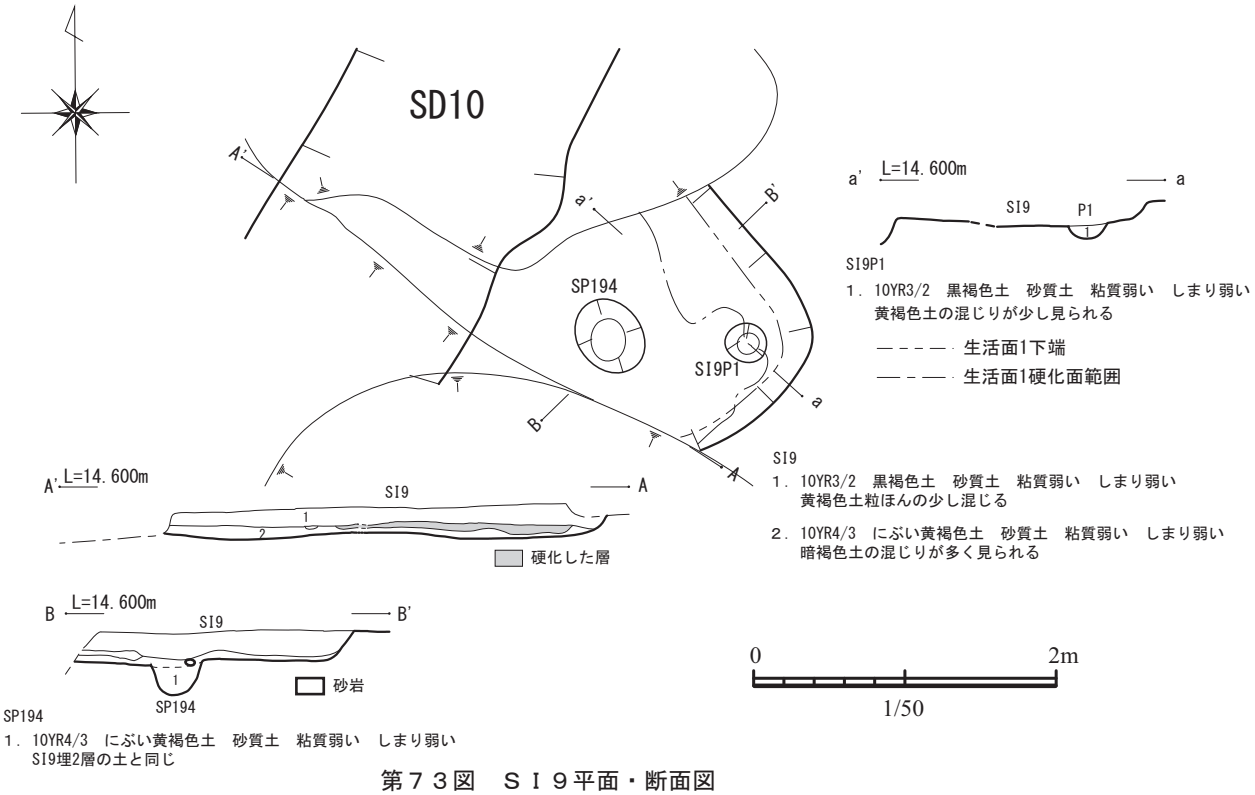
掘立柱建物

ＳＢ３（第７５図）

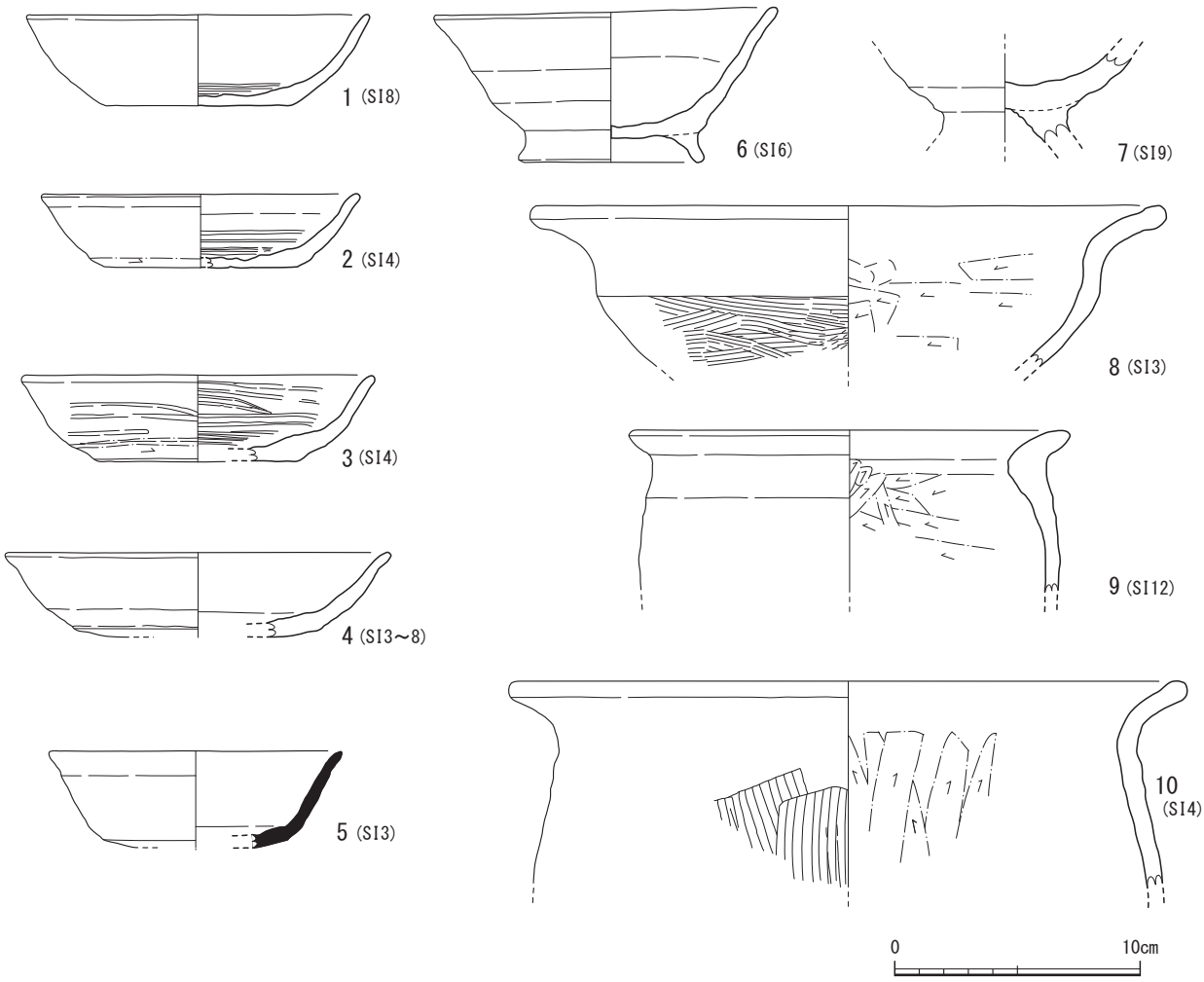
３層上面で検出した。５０ｉウ・５０ｈイ・５１ｉエ・グリッドに位置する。北側が調査区外になるため、現況では桁行２間以上、南西側柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３）が約４．３ｍ、梁行１間以上、南東側柱列Ｐ３－Ｐ４間では約１．９ｍを測る側柱建物である。桁行はＮ－２５°－Ｗである。

柱間は、桁行間はほぼ同じで約２．１ｍ、梁行約１．９ｍを測る。柱掘方は平面形が円形であり、径４６～８５㎝とばらつきがある。深さは検出面より２０～４０㎝を測り、下端レベルは一定でない。すべての柱穴に柱痕が残る。

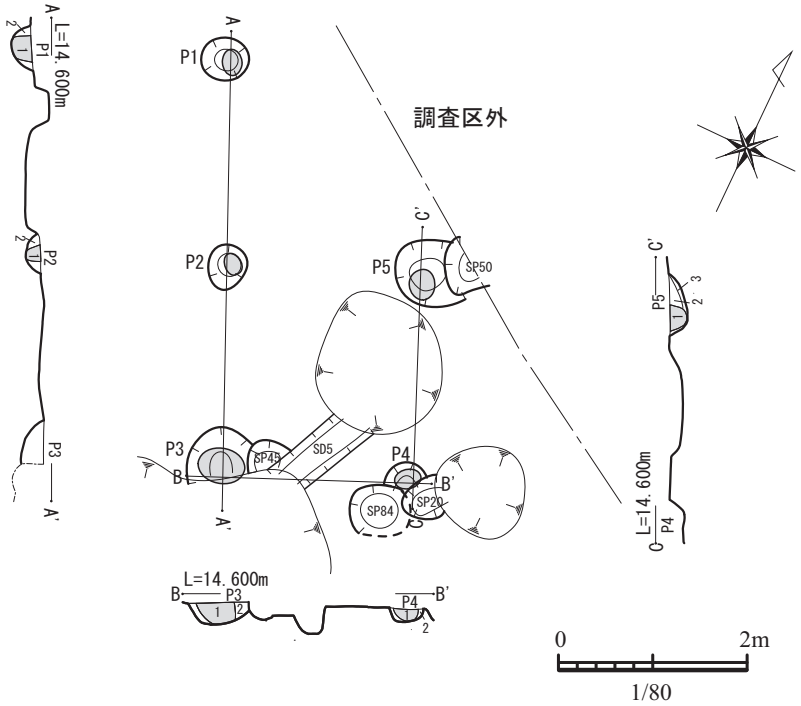
遺物は出土しなかった。



第７３図　ＳＩ９平面・断面図



第７４図　７区出土遺物実測図（1）



P1

1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　褐色ブロック･黒褐色ブロックを多く含む

2．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　3層ブロックを多く含む

P2

1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　褐色ブロック･黒褐色ブロックを多く含む

2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　3層ブロック･黒褐色ブロックを多く含む

P3

1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりあり
　褐色ブロック･黒褐色ブロックを多く含む

2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　3層ブロックを多く含む

P4

1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　褐色ブロック･黒褐色ブロックを多く含む

2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　3層ブロックを多く含む

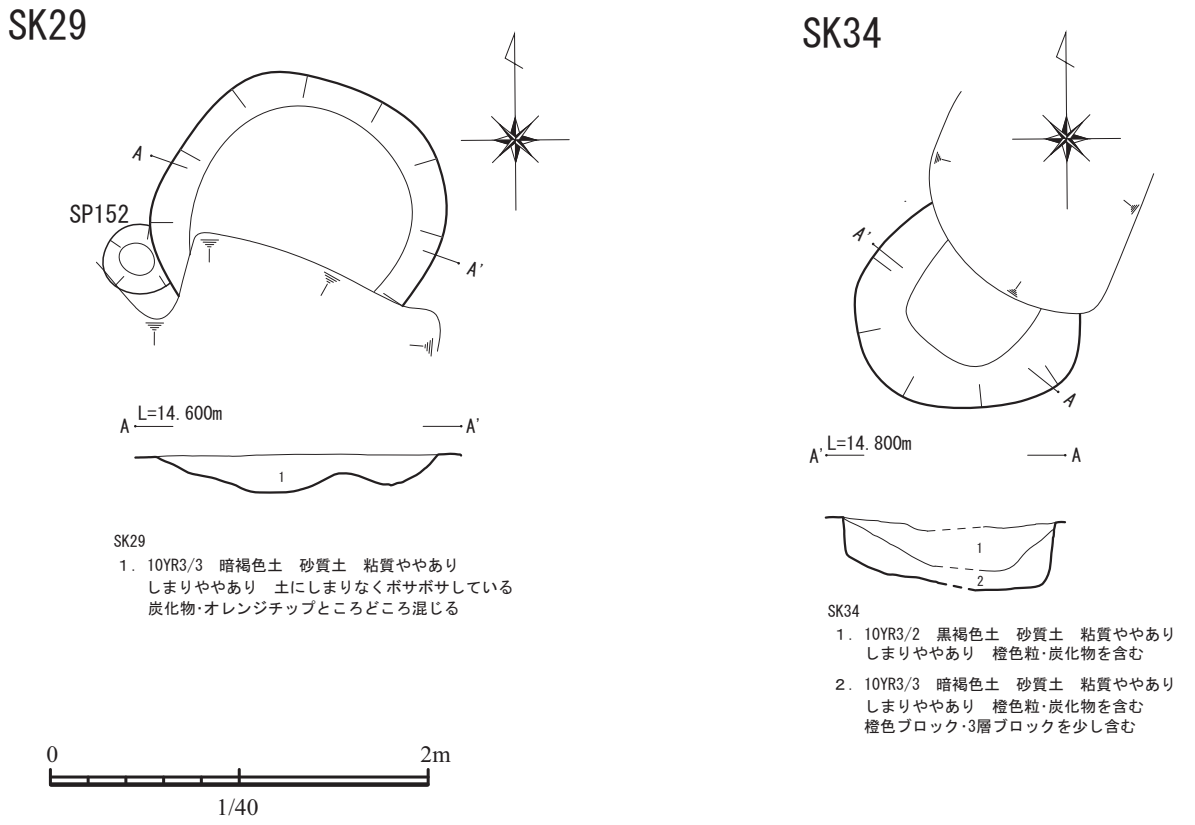
P5

1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　3層ブロック･黒褐色ブロックを多く含む　炭化物を含む

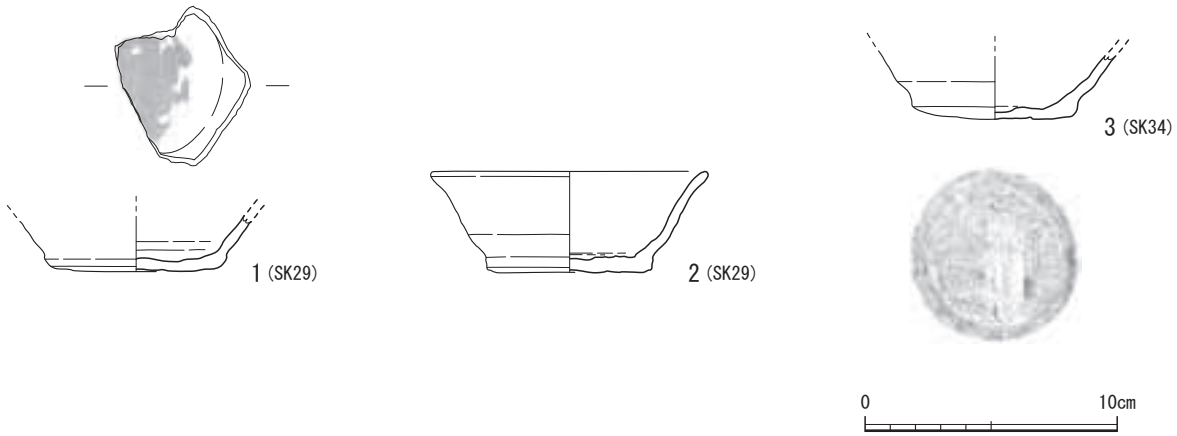
2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　3層ブロックを多く含む

3．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりあり
　3層ブロックを多く含む

第７５図　ＳＢ３平面・断面図



第７６図　ＳＫ２９・ＳＫ３４平面・断面図



第７７図　７区出土遺物実測図（2）

土坑

ＳＫ２９（第７６図）

２層上面で検出した。５１ｈウ・グリッドに位置する。南側は撹乱に壊されているが、平面形は隅丸正方形を呈し、長軸約１４９㎝、検出面からの深さ約２０㎝を測る。埋土は暗褐色土で炭化物や橙色粒がところどころ混じる。掘方面は平面でなく凹みが２つ並ぶ形状である。遺物は土師器杯（第７７図１）、（第７７図２）が出土した。どちらも体部は底部端斜め上につく。７７－１は底部内面にススが残る。７７－２は底部内面に凹線が丸く３重に入り、口縁部はやや外反する。

ＳＫ３４（第７６図）

３層上面で検出した。５１ｉア・グリッドに位置する。北東側を撹乱に壊され、ＳＩ４、ＳＩ６、ＳＫ４０を壊す。平面形は円形を呈し、長軸約１１８㎝、検出面からの深さ約３４cm を測る。埋土中に橙色ブロック、炭化物を含む。

遺物は土師器杯（第７７図３）が出土した。７７－１、７７－２と同様に底部が少し突き出し、体部は底部斜め上から伸びる。底部外面には板状圧痕がつく。

溝跡

ＳＤ７（第７８図）

３層上面で検出した。５２ｇア・イ・エ、５２ｈイ・ウ・エ、５３ｈ・ア・エ・グリッドに位置する。南東－北西方向の調査区を横切る溝であり、方位はＮ－５１°－Ｗである。東西は調査区外に伸びる溝であるため長さは不明であるが、現況では、３層上面での幅は約７．５ｍ、長さは約１６．３ｍ、検出面から機能面までの深さ約４８㎝を測る。ＳＫ２４、ＳＫ２７に壊され、ＳＩ１０を壊す。

機能面には硬化面等の残存はなかった。

遺物は埋土中に口縁部に雷文がある陶器の破片（第８１図１８）が出土した。他に土師器、須恵器、陶器の破片が出土する。

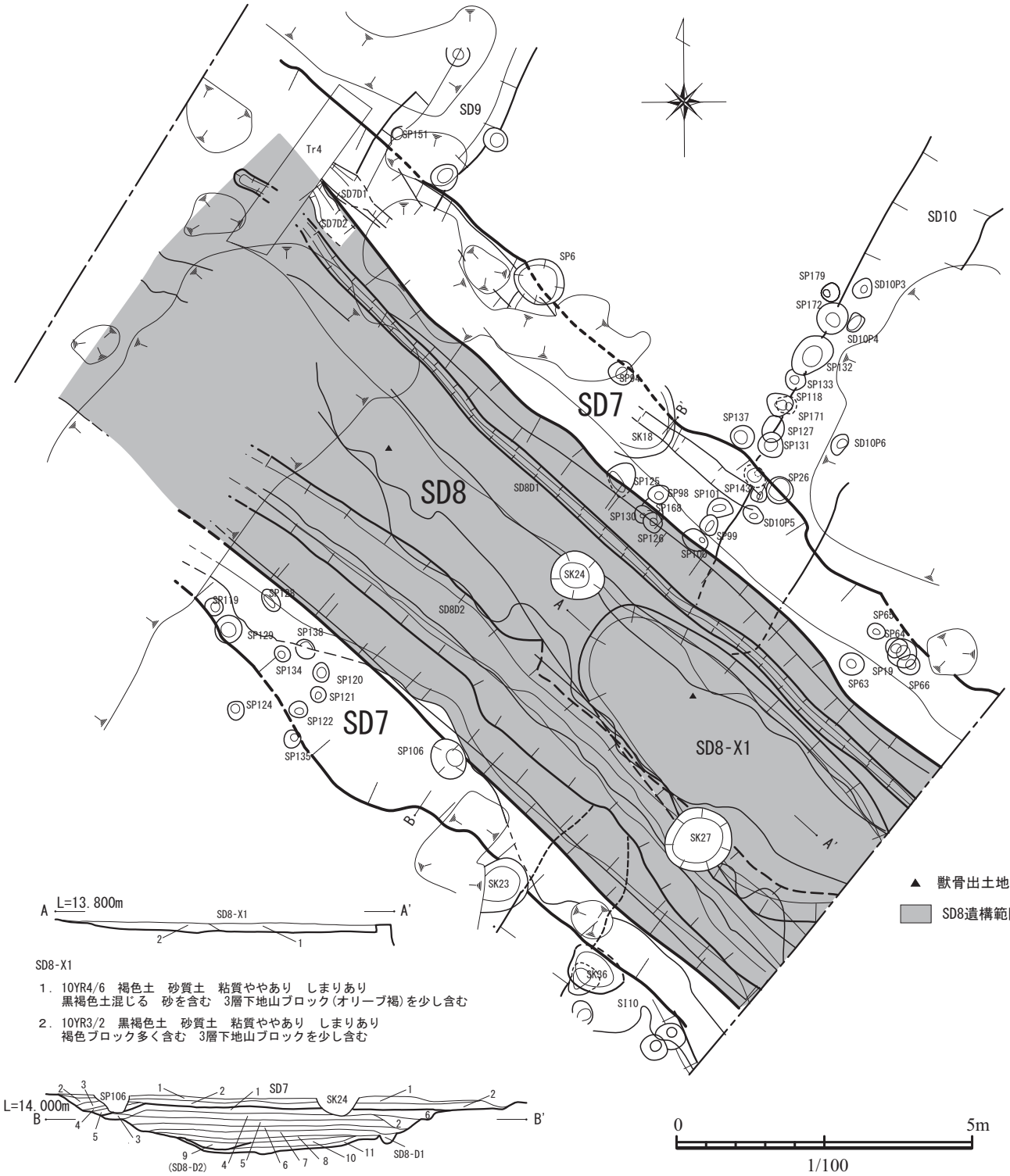
ＳＤ８（第７８、７９図）

ＳＤ７掘方面上で検出した。位置、方位等もＳＤ７と同様である。ＳＤ７掘方面での幅は約６．２ｍ、長さは約１６．３ｍを測る。ＳＤ１０を壊す。

機能面は２面確認できた。機能面１は埋１０層上面とＳＤ８－Ｘ１埋土上に硬化面１が出土したことから、この面と思われる。検出面からの深さ約５４㎝を測る。硬化面１は北西を上と見て溝の右側に沿うように残存する。機能面１では硬化面１の右端に溝Ｄ１、中央から左に溝Ｄ２が検出された。Ｄ１は幅約２８㎝、深さ約１９㎝、Ｄ２は幅約１０２㎝、深さ約１２㎝を測る。この硬化面１と溝Ｄ１、Ｄ２から、道路とその側溝であると考えられる。ＳＤ８―Ｘ１は長径約６．０ｍ、短径約２．９ｍ、検出面からの深さ約１５㎝を測る。埋土は黒褐色と褐色の砂質の強い土で、硬くしまる。Ｘ１を掘削すると、その底部にも硬化面２が形成されており、硬化面２は凹んでいることから、Ｘ１は道路使用面を平坦にするために低まりを埋めたものではないかと思われる。

機能面２はＤ２の下の埋１１層上面に硬化面３が出土したことから、この面と思われる。検出面からの深さ約７０㎝を測る。硬化面３は溝の左側に沿うように残存する。溝Ｄ１は側溝としてすでに存在していたのかどうかは不明である。

道路として使用していた側が、古い時代は左側を主に使用し、その後、道の補修など人為的なものか、雨な



SD8-X1

1．10YR4/6　褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりあり
　黒褐色土混じる　砂を含む　3層下地山ブロック(オリーブ褐)を少し含む

2．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりあり
　褐色ブロック多く含む　3層下地山ブロックを少し含む

SD7

1．10YR4/2　灰黄褐色土

2．10YR4/3　にぶい黄褐色土

SD8

1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　しまりややあり　3層ブロック
　黒褐色ブロックを多く含む

2．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　3層ブロック･黒褐色ブロックを含む
　3層下地山ブロックを少し含む

3．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　黒色ブロック･3層ブロックを多く含む

4．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　しまりややあり　橙色粒･炭化物を少し含む
　黒褐色ブロックを少し含む　3層ブロック含む

5．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　しまりややあり　橙色粒･炭化物を含む

6．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりややあり
　3層ブロック･黒褐色ブロックを多く含む　炭化物を含む

7．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　しまりややあり
　白色ブロック･橙色粒を含む

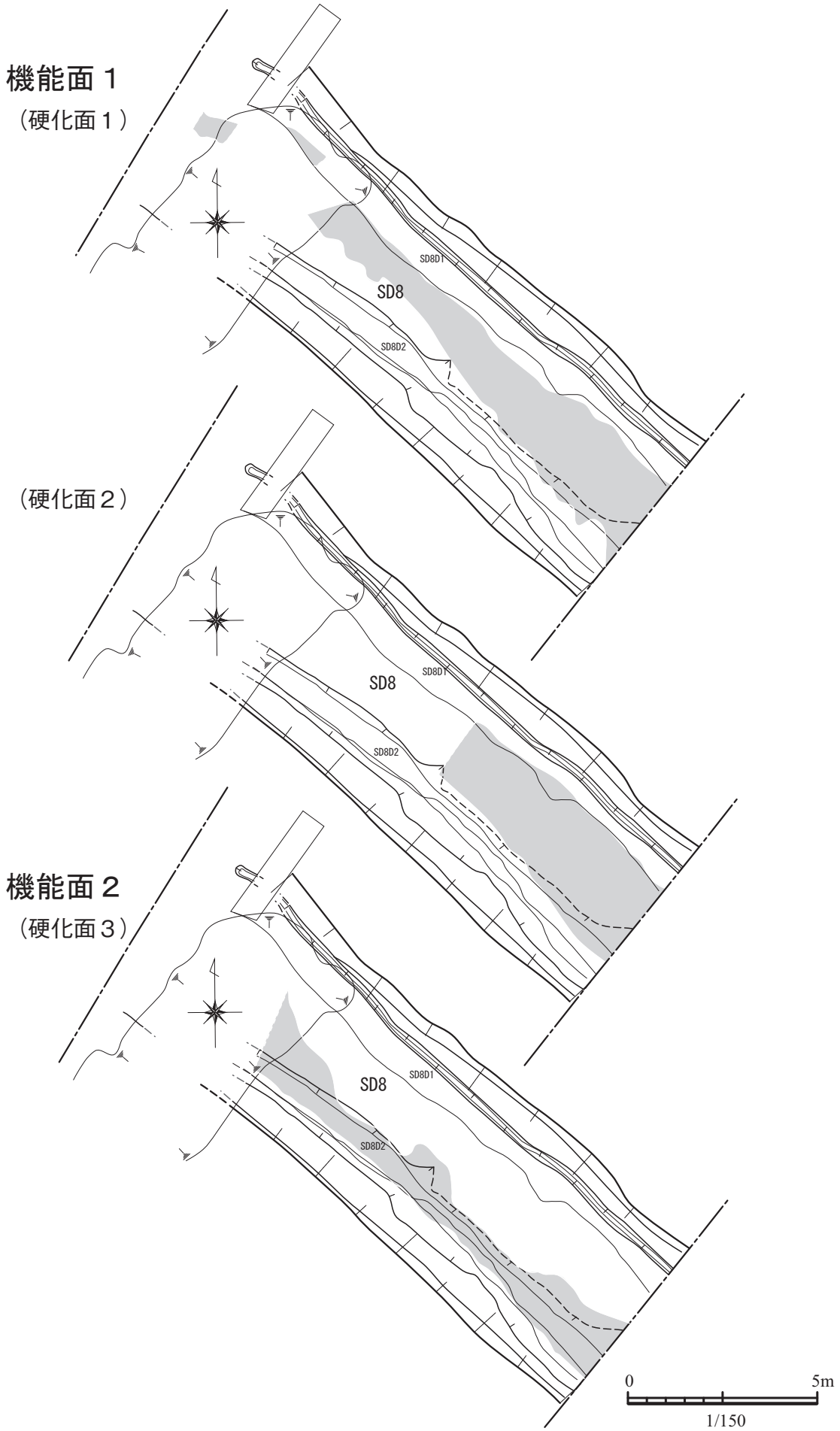
8．10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質土　しまりあり
　3層下地山ブロック･3層ブロックを含む

9．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　3層下地山ブロック･橙色ブロックを含む
　砂を含む

10．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　しまり強い　黒褐色ブロック･褐色ブロックを含む
　硬化面あり

11．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　しまり強い　3層下地山ブロックを含む
　砂を含む　硬化面あり

第７８図　ＳＤ７・ＳＤ８平面・断面図



第７９図　ＳＤ８内硬化面移行範囲図

どでの崩れのような自然現象のものかは不明であるが、土が入った後は、反対側の右側を主に使用していたと思われる。道路状遺構によく見られる波板状の凹凸は見られなかった。

遺物は埋１層より土師器の底部（第８１図６）、須恵器蓋（第８１図８）、須恵器甕の口縁部（第８１図１１）、瓦質土器（第８１図１２）、陶器（第８１図１９）が出土した。

８１－６は底部外面に墨書が残るが、解読できなかった。

８１－８は擬宝珠状のつまみを持ち、天井部と体部の境は稜をなし、天井径は小さい。口縁部端の断面形は三角形である。

８１－１１は口縁部が二重であるが開き気味である。屈曲部の上に凹線が、下に波状沈線が１条入る。８１－１２は外面に凸部があり、その下に波状沈線が３条巡る。

８１－１９は溝縁皿である。

埋１、２層から須恵器蓋（第８１図９）、瓦質土器（第８１図１３）が出土した。埋１１層から須恵器椀（第８１図１０）、軒丸瓦（第８１図１４）が出土した。

８１－１０は底部のみであるが、高台の外面をヘラケズリされた通称「萩尾型」椀と思われる。底部外面にはオリーブ灰色斑がつく。

８１－１４は文様の欠損がひどいため詳細は分からない。

他に土師器、須恵器、縄文土器の破片が多く出土した。

ＳＤ９（第８０図）

３層上面で検出した。５０ｈイ・５１ｈア・ウ・エ・５１ｇイ・グリッドに位置する。北東－南西方向の調査区を縦断する溝であり、方位はＮ－３３°－Ｅである。調査区北西側に伸びる溝であるため長さは不明であるが、現況では、幅約１．３ｍ、長さ約１６．７ｍ、検出面からの深さ約２６㎝を測る。ＳＤ７に壊される。

埋土は黒褐色土で白色粘土ブロックを少し含む。層の境や掘方面には硬化土、砂等も見当たらず、性格は不明である。

遺物は土師器杯（第８１図１）、（第８１図２）、（第８１図３）、（第８１図４）、（第８１図５）、土師器椀（第８１図７）、土師器甕（第８１図１５）、（第８１図１６）が出土した。

８１－１、８１－２、８１―５は、どちらも器高は高いが口径が小さいため体部の開きは小さい。体部は直線的である。１は内面と外面の一部にススが付着する。５は底部に板状圧痕が見られる。８１－３、８１－４は、器高はやや低いが口径は大きい。３は体部が直線的である。４は体部下半が丸みをおび、口縁部が外反する。

８１－７は高台が長く、大型である。

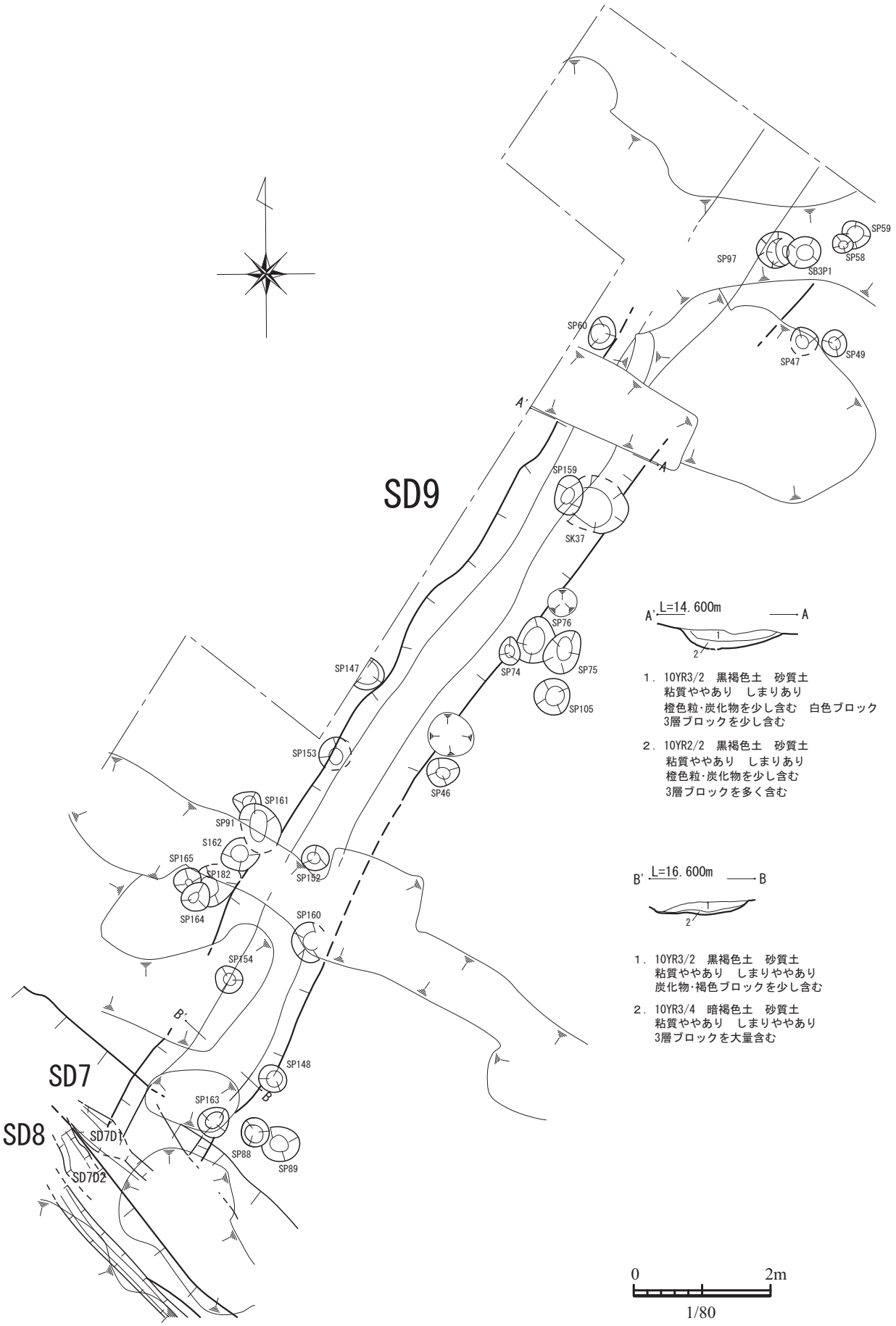
８１－１５は、外面はヨコナデ、内面はヘラケズリされている。８１－１６は、外面はハケメ、内面はヘラケズリされている。他に土師器の高台と底部のみの破片、底が突き出した杯の底部等が多く出土した。

ＳＤ１０（第４９図）

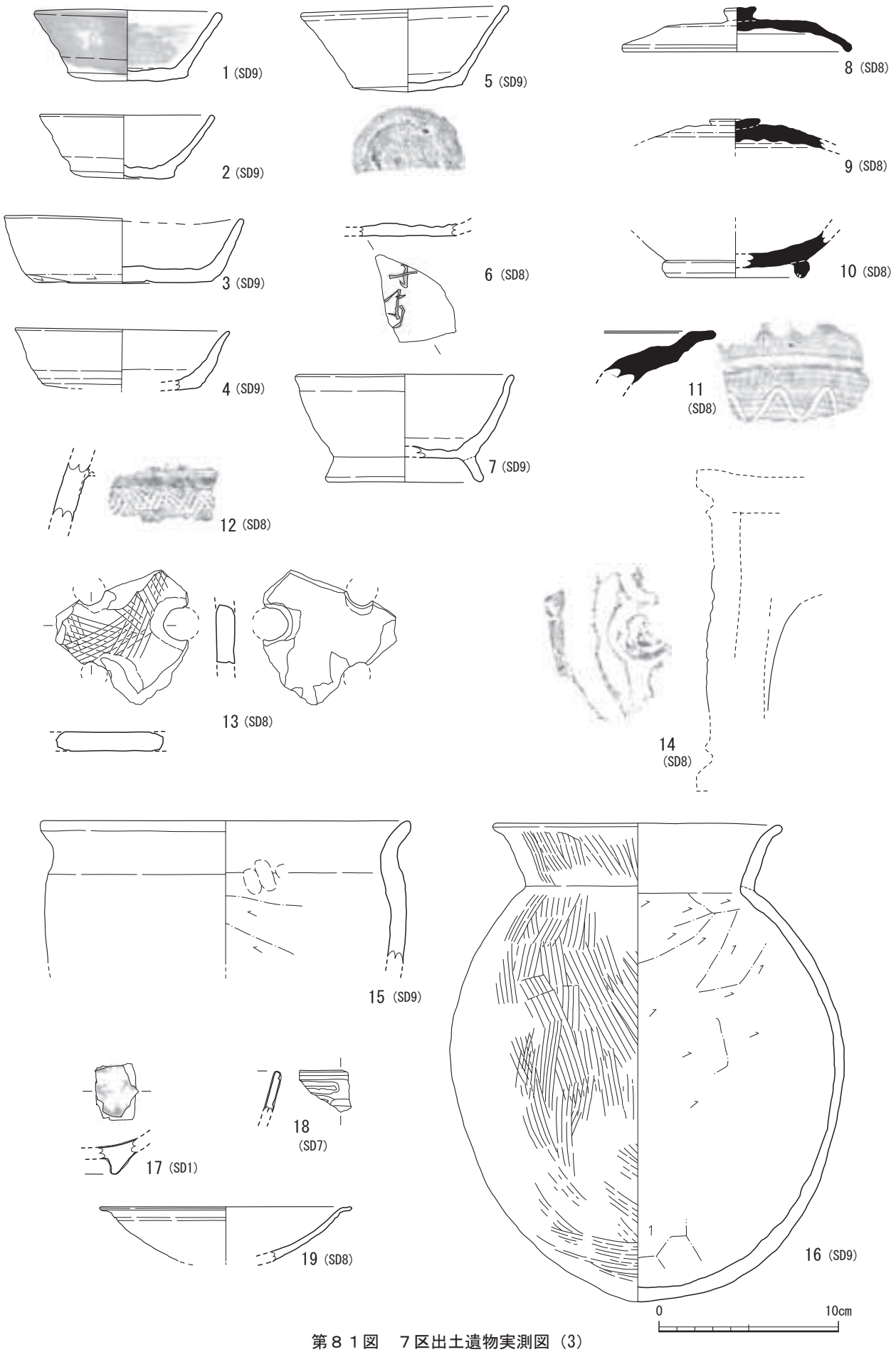
ＳＤ１０は６区ＳＤ６が南西方向に伸びた溝である。詳細は６区ＳＤ６を参照して頂きたい。

ピット出土遺物（第６４、６５図参照）

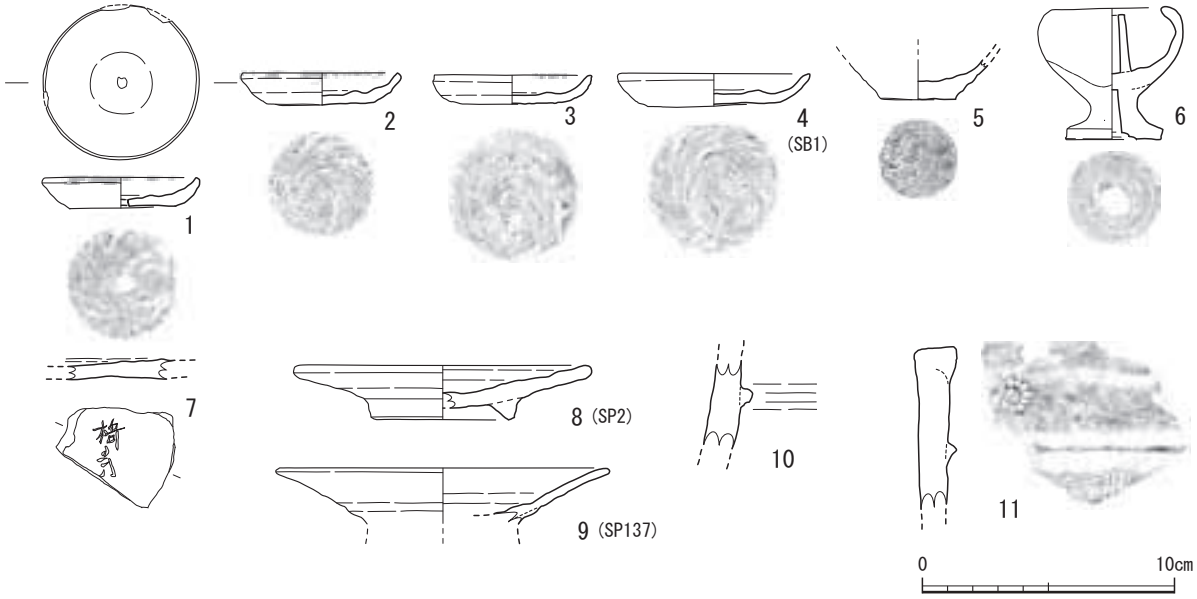
ＳＰ２より土師器托（第８２図８）が出土した。底部中央部でやや凹み、高台は底部中央付近につき断面形は三角形である。ＳＰ１３７からも土師器托（第８２図９）が出土した。底部中央部でやや凹む。高台は欠損しているため形状は不明である。内面、外面に赤彩を施される。



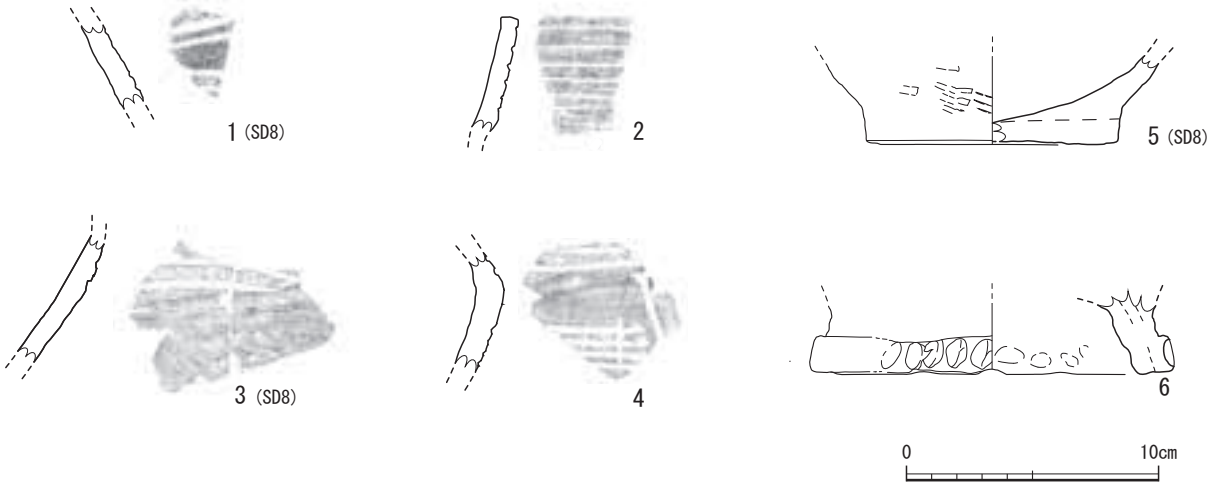
第８０図　ＳＤ９平面・断面図



第８１図　７区出土遺物実測図（3）



第８２図　７区出土遺物実測図（4）



第８３図　７区出土遺物実測図（5）

遺構外出土遺物（第６４、６５図参照）

第８２図１０、１１は瓦質土器、火鉢の破片である。１層５３ｈエ・グリッドより出土した。

第８２図１、２、３、４は土師器灯明皿である。底部外面には糸切り痕が見られる。１、２は撹乱、３、４は０層から出土した。

第８２図５は土師器杯である。底部径が３．０㎝と小さい。底部外面には糸切り痕が見られる。表土剥ぎの際に採取した。

第８２図６はひょうそくである。撹乱より出土した。

第８２図７は土師器の破片の底部に刻書文字が入る。刻書は木（きへん）に竒の字と寺の字と思われる。

縄文土器

６区、７区では縄文土器が出土したが、遺構は検出できなかった。遺構内で出土したもの、掘り下げの際に出土したものもある。

第８３図１、第８３図３、第８３図４は磨消縄文土器である。１、３は磨消縄文としか分からないが、４は鐘崎式土器で磨消が縦方向に入っているのが渦文の一部ではないかと思われる。１、３はＳＤ８埋土中から、４は撹乱内から出土した。

第８３図２は口縁部で横方向の沈線が入る。第８３図５は底部で、一部に条痕が残る。第83図６は脚台で外面に押捺文が入る。

（２）近現代

７区

ＳＢ１、ＳＢ２（第７図　７区中世以降主要遺構配置図、写真図版９参照）

０層上面で検出した。ＳＢ１は７区南側（５１ｇ・５１ｈ・５２ｇ・５２ｈ・５３ｇ・グリッド）に、ＳＢ２は７区北東側（５０ｉ・５１ｉ・グリッド）に位置する。隅丸長方形の比較的大きな地業は掘り込みが深いが、小型の隅丸方形の地業は掘り込みがなく、栗石を地面に置いて搗き固めたような地業である。

ＳＢ１は、Ｋ８－Ｋ９－Ｋ１１－Ｋ１４－Ｋ１６－Ｋ１８の列と、Ｋ５が約１０m離れて平行であるため、この向きに建っていたと思われるが、撹乱に壊されているためプラン等は不明である。ＳＢ２に関しては、建物の一部の地業の出土と思われるため、この建物もプラン等は不明である。ＳＢ地業に埋め込んである土には新しい磁器が混入していることから、大正、昭和の遺構と考えられる。

遺 物 観 察 表

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
17.1	10.1	3.2	ほぼ完形	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR6/6	橙5YR7/6	内底：スス付着?	図 10
(25.1)	—	5.9～	3/4	普通	ヨコナデ ヘラナデ	—	ヨコナデ ヘラケズリ	—	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙7.5YR7/4	内外面：スス付着	
(12.7)	—	5.5～	1/4以下	良好	ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ハケメ ヘラケズリ	—	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4		
—	—	17.8～	1/4以下	普通	ヨコナデ ナデ ハケメ	—	ヨコナデ ヘラケズリ ナデ	—	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/3		
(全長) 6.5	(全幅) 2.6	(孔径) 0.7	完形	—	—	—	—	—	—	—		—
(全長) 7.5	(全幅) 2.2	(孔径) 0.6	完形	—	—	—	—	—	—	—		—
—	—	14.3～	1/4以下	良好	ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ヘラケズリ	—	にぶい黄橙10YR7/3 オリーブ黒5Y3/1	にぶい黄橙10YR7/3 灰黄褐10YR4/2		図 10
(13.8)	(9.4)	4.7	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ	黄褐2.5Y5/3 暗褐7.5YR3/3	にぶい黄褐10YR5/4		
(13.6)	(9.1)	6.3	1/3	良好	回転ナデ	不明	回転ナデ	—	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	貼付高台	
(25.2)	—	3.3～	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラミガキ	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	ナデ	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6	内外面：赤彩	
(29.0)	—	8.2～	1/4以下	良好	ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ハケメ ヘラケズリ	—	浅黄2.5Y7/3	灰黄2.5Y6/2		
—	(11.0)	6.5～	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	橙5YR7/6 橙2.5YR7/6	橙5YR7/6 橙2.5YR7/6	貼付高台	
—	(9.6)	2.4～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい褐7.5YR6/3	灰黄褐10YR2/5	内面：スス付着 貼付高台	
—	6.4	2.2～	高台・底のみ	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰黄2.5Y7/2 にぶい橙5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4	貼付高台	
(14.0)	(8.6)	3.0	1/3	良好	回転ナデ ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	橙2.5YR6/6	内外面：赤彩 板状圧痕?	—
(14.0)	(9.0)	3.1	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙5YR7/4 橙2.5YR7/6	橙2.5YR6/6 にぶい黄橙10YR7/3	外面：赤彩	図 10
(13.6)	8.1	2.6	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙5YR7/4	橙5YR7/6		—
(14.2)	(10.0)	2.8	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6	内外面：赤彩 外底面：墨書	図 10
—	—	0.9～	底部破片	良好	—	回転ヘラ切り後ナデ	—	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	浅黄橙10YR8/3	内底面：刻字	図 11
(18.4)	(11.8)	7.1	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8	内外面：赤彩	
—	(13.8)	1.5～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/4	外底面：ヘラ記号あり	
24.2	—	10.0～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ ヘラケズリ	—	にぶい褐7.5YR5/4	明黄褐10YR6/6 黄褐10YR5/6	外面：スス付着	
(15.0)	—	4.9～	1/4以下	良好	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ5Y5/2	灰5Y6/1 灰オリーブ5Y6/2		
(19.2)	(15.6)	2.5	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰オリーブ5Y6/2	灰オリーブ5Y5/2		

法量(　)は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量(cm)			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
―	―	5.0～	把手のみ	良好	ナデ 工具ナデ?	―	工具ナデ	―	にぶい橙5YR6/4	橙5YR6/6	外面:スス付着	―
―	(8.0)	2.3～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	褐7.5YR4/4	橙7.5YR6/6	貼付高台	図 11
―	(8.4)	2.3～	1/4以下	良好	回転ナデ	ナデ	―	ナデ	褐灰10YR4/1	褐灰10YR4/1	貼付高台	
―	(8.2)	2.0～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	―	ナデ	灰白10Y8/2 オリーブ黒10Y3/2	灰5Y5/1	外面:釉薬 貼付高台	
―	(9.0)	1.7～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y6/1 灰7.5Y4/1	灰7.5Y6/1	貼付高台	
―	(8.8)	2.3～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	―	ナデ	灰5Y4/1 灰5Y6/1	灰5Y5/1	内外面:土中の鉄分?により変色している 貼付高台	
―	―	7.9～	1/4以下	良好	―	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	赤褐2.5YR4/6	明赤褐2.5YR5/6 にぶい赤褐2.5YR4/4	内外面:赤彩 外面:灰をかぶり一部変色している	
―	―	3.5～	1/4以下	良好	―	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	暗赤褐5Y3/3	黄灰2.5Y4/1		
(全長) 12.8～	(全幅) 12.7～	(厚み) 3.2	外1/8,内3/5	良好	笊	―	ナデ	―	暗灰N3/	暗灰N3/	磨滅、欠損が著しい	
(10.6)	(7.2)	3.1	1/3	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4 褐灰7.5YR4/1	にぶい橙7.5YR7/4 褐灰7.5YR4/1		
(11.3)	(5.4)	2.9	1/4以下	良好	回転ナデ ヘラケズリ 回転ヘラミガキ	回転ヘラ切り後ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	赤褐5Y4/6 橙5Y6/6	明赤褐5Y5/6		
―	(6.4)	2.5～	1/3以下	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙7.5Y6/4	にぶい橙7.5Y6/4		―
―	(8.1)	1.1～	1/4以下	普通	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3 橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6	内外面:赤彩 外面:墨書、圧痕	図 11
―	(7.8)	4.8～	1/4以下	良好	施釉	施釉	施釉	施釉	胎土 灰オリーブ5Y6/2	釉　オリーブ黄5Y6/3	内底:畳付、目跡 削出高台	図 12
(11.9)	(7.2)	3.0	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y4/1	灰5Y5/1		―
(13.5)	(8.9)	3.5	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	オリーブ黒10Y3/2 青黒5PB2/1 紫灰5RP6/1	オリーブ灰10Y4/1		図 12
(13.6)	(9.4)	3.5	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰黄2.5Y6/2	灰黄2.5Y6/2		
―	(12.6)	2.2～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y5/1	灰7.5Y5/1 灰オリーブ5Y5/2		―
(17.4)	(12.2)	2.7	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y5/1	暗灰黄2.5Y5/2		―
(18.8)	(15.6)	2.7	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y5/1	灰5Y6/1		図 12
―	―	1.1～	破片	良好	―	回転ヘラ切り後ナデ	―	回転ナデ ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	灰白7.5Y7/1	内底:刻字「吉足」?	
(12.0)	(7.6)	4.1	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	オリーブ灰2.5GY6/1	オリーブ灰2.5GY5/1	貼付高台	
(13.3)	(8.6)	4.2	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y5/1 オリーブ黒7.5Y3/1	灰7.5Y5/1	貼付高台	

法量(　)は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
(13.2)	(8.8)	4.5	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい赤褐5YR4/3 褐灰7.5YR5/1	褐灰7.5YR5/1	貼付高台 外面:自然釉	図 12
—	(8.2)	2.5～	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y5/1	灰7.5Y5/1	貼付高台	
—	(10.4)	1.9～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰白2.5Y7/1 黄灰2.5Y6/1	黄灰2.5Y6/1 灰黄2.5Y6/2	貼付高台	—
(15.0)	—	2.8	1/3	良好	ナデ、回転ナデ	—	ナデ	—	灰白5Y7/1	灰白5Y7/2	つまみ貼付	図 12
(16.7)	—	6.1～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	黄灰2.5Y6/1 黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y5/1		
—	(12.2)	5.7～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰褐5Y4/2	にぶい赤褐5Y4/3		
—	—	13.9～	1/4以下	良好	タタキ(格子目文)	—	布目痕後指ナデ	—	灰7.5Y6/1	灰7.5Y6/1	内面:指頭圧痕	
—	—	12.5～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰黄褐10YR5/2 黒褐10YR3/2	橙7.5YR7/6 灰黄褐10YR5/2	内面:2色の土で 縞模様になっている	
(全長) 3.3～	(全幅) 3.9～	(厚み) 1.4	破片	良好	布目痕	—	ナデ	—	灰7.5Y5/1	灰10Y6/1		—
(全長) 6.2～	(全幅) 1.4	(孔径) 0.5	ほぼ完形	—	—	—	—	—	—	—		—
(12.3)	(6.6)	2.8	1/2	良好	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	橙5YR6/8	橙5YR6/8	内外面:赤彩	図 12
(13.8)	(8.4)	2.4	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙5YR7/4 橙5YR6/6	にぶい橙5YR7/4 橙5YR6/6	内外面:赤彩	
13.3	9.0	2.9	1/3	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	にぶい褐7.5YR6/3	にぶい褐7.5YR6/3 黒褐7.5YR2/2	内外面:赤彩	
22.1	9.0	7.0	口縁1/4欠損	良好	回転ヘラミガキ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り後 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/6	外面:赤彩	図 13
(10.4)	(6.7)	4.5	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙5YR6/6	明赤褐5YR5/6 にぶい橙5YR6/4		
(18.4)	(10.4)	3.0	1/4	良好	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラ切り後ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐5YR6/5 淡橙5YR8/3	明赤褐5YR6/5	内外面:赤彩	
16.0	13.7	1.8	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐5YR5/6	内外面:赤彩	
(11.8)	(9.0)	3.1	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	褐7.5YR4/3	褐灰7.5YR4/1	外面:灰をかぶっている	
(12.6)	(8.6)	3.6	1/2	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	黒褐2.5Y3/1	黄灰2.5Y4/1	外面:灰をかぶっている	
(12.2)	(7.8)	4.4	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2		—
12.9	7.9	7.5	—	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	黄橙10YR8/6 橙5YR7/6	内外面:スス付着 貼付高台	図 13
(14.6)	(8.2)	7.6	1/3	良好	回転ヘラケズリ後 回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y6/2	貼付高台	
—	(9.9)	5.4～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y5/1 オリーブ黒5Y3/1	灰5Y5/1	貼付高台	
—	(7.4)	2.4～	1/4	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	工具ナデ	ナデ	にぶい赤褐5YR4/3	灰5Y4/1	貼付高台	
—	—	3.0～	1/2	良好	ナデ、回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰5Y6/1 オリーブ黄5Y6/3	灰オリーブ5Y6/2	つまみ貼付	
(全長) 2.4～	(全幅) 0.9～	(孔径) 0.2	1/3	—	—	—	—	—	—	—		—
(全長) 6.3	(全幅) 2.3	(孔径) 0.5	完形	—	—	—	—	—	—	—		—

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
—	—	8.2～	把手のみ	普通	工具ナデ ナデ	—	ナデ	—	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙5YR7/4	外面：スス付着	—
(28.2)	—	22.8～	口縁2/5～体1/6	普通	ハケメ ヨコナデ	—	ヨコナデ ヘラケズリ	—	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい橙7.5YR7/4		図 13
—	(12.7)	15.8～	1/2	良好	回転ナデ カキ目	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y6/1 オリーブ黒5Y3/1	灰5Y6/1		
(12.8)	(7.6)	3.4	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラミガキ	ヘラ切り後ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	橙5YR6/6	橙5YR6/6	内外面：赤彩	
(12.0)	(9.8)	3.8	1/2	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	外面：スス付着	
(13.0)	(7.4)	2.4	1/2	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	橙5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/3	外面：赤彩	
(13.8)	(8.2)	3.0	1/2	良好	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラ切り後ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙5YR6/6	橙5YR6/6	内外面：赤彩	図 14
(13.8)	(8.8)	3.7	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙5YR7/4	橙5YR6/6	内外面：赤彩 外底部：ヘラ記号あり	
(13.9)	(8.2)	3.5	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰N6/0	灰褐7.5YR4/2	内面：変色している	
(12.0)	(8.2)	3.2	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰N6/0 黒N2/0	灰N4/0		
(12.9)	(7.0)	3.2	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰オリーブ5Y5/2	灰オリーブ5Y5/2		
(14.2)	(12.4)	2.0	1/4	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y5/1		
(17.5)	(14.7)	1.9	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y6/1	灰5Y6/1		
—	—	0.9～	1/4以下	良好	—	ヘラ切り後ナデ	—	ナデ	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙5YR7/4	内底：ヘラ描きあり	
(11.8)	(8.0)	2.7	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰2.5Y6/1 暗灰黄2.5Y4/2	黄灰2.5Y6/1	貼付高台跡あり	
—	(8.5)	2.6～	1/4以下	良好	ヘラケズリ後 回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	黒N2/0	暗灰N3/0	貼付高台 底部：白くでこぼこしている	
(11.6)	6.5	4.3	2/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	オリーブ黒7.5Y3/1	灰7.5Y5/1	貼付高台 外面：自然釉あり	
(13.4)	8.2	4.3	2/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	暗褐10YR3/4	黒褐10YR3/2	貼付高台 外面：自然釉あり	
(13.4)	(9.6)	3.8	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y4/1 オリーブ黒5Y3/1	灰5Y4/1	貼付高台	
—	(10.2)	4.2～	1/4	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白7.5Y7/1	灰白7.5Y7/1	貼付高台	
—	—	8.8～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	ナデ	—	黄灰2.5Y6/1 黒褐2.5Y3/1	黄灰2.5Y6/1	外面：灰をかぶっている 内面：重ね焼きの跡あり	
—	—	9.0～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	回転ナデ 絞り痕	灰7.5Y5/1	灰白7.5Y7/1	内面：重ね焼きの跡あり	
—	(14.0)	7.8～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y5/1	外面：立ち上がり付近に一周する模様あり	図 15
(19.8)	(12.4)	9.3	1/2	良好	回転ナデ	回転ナデ後 不定方向のナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰10Y4/1	灰10Y5/1		
(11.4)	(15.2)	25.1(推定)	1/3	良好	回転ナデ タタキ(格子目文) カキ目	タタキ(格子目文)	回転ナデ タタキ(同心円文)	ナデ	灰4Y5/1	灰5Y5/1		

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
(36.9)	—	27.6～	1/4以下	普通	ヨコナデ タタキ（平行文）	—	ヨコナデ タタキ（同心円文、平行文）	—	灰白5Y7/1	灰白N8/ 灰白5Y7/1		図 15
(41.4)	—	63.3～	2/3	良好	ヨコナデ タタキ(格子目文)	—	ヨコナデ タタキ（同心円文）	—	灰白N7/	灰5Y4/1		巻頭
49.7	—	83.8	2/3	良好	ナデ タタキ(格子目文)	タタキ(格子目文)	ヨコナデ タタキ（同心円文、平行文）	タタキ(平行文)	暗赤褐5YR3/3	にぶい褐7.5YR5/3	やや酸化焼成	巻頭
(10.8)	(5.0)	3.5	1/3	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙7.5YR7/4 橙7.5YR6/6	黒7.5YR1.7/1	黒色土器 外面：赤彩	図 15
(12.4)	(6.4)	3.2	1/4以下	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4 灰白7.5Y8/2	にぶい橙7.5YR7/4 明褐7.5Y5/6	内外面：赤彩	
(12.6)	(8.2)	2.5	1/2	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	橙5YR6/6	橙5YR7/6	外面：赤彩	
(13.8)	(10.0)	3.6	1/4	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	橙5YR6/6	橙5YR6/6		
(13.4)	9.6	2.6	3/4	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい赤褐5YR5/3	にぶい赤褐5YR5/4		
(13.0)	(9.0)	2.9	1/2	良好	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	橙5Y6/6	橙5Y6/6	内外面：赤彩	
(13.5)	(8.6)	3.7	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6	内外面：赤彩	
(16.4)	(11.2)	3.2	1/4以下	良好	ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラ切り後ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙7.5YR7/6	橙5YR6/8	内外面：赤彩	
(10.6)	(7.0)	3.4	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y6/1	灰5Y6/1		—
(12.8)	(8.0)	3.2	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y6/1 オリーブ黒7.5Y3/1	灰7.5Y6/1		図 15
(12.8)	(8.4)	3.7	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y5/1	灰5Y5/1		
(13.2)	(8.4)	3.1	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1		—
(12.6)	(6.8)	4.1	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y5/1 灰白5Y7/1	灰白5Y7/1		図 15
(13.8)	(9.0)	3.2	1/4以下	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	灰白7.5Y8/1	灰白7.5Y8/1		—
(14.1)	(9.8)	3.7	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y6/1 灰白5Y8/1	灰白5Y8/1		図 15
—	(8.2)	2.0～	1/4以下	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙7.5YR7/6	黒7.5YR1.7/1	黒色土器A 貼付高台	
(15.0)	10.4	6.4	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい赤褐5YR5/4	明赤褐5YR5/6	内外面：赤彩 貼付高台	図 16
(14.6)	(9.8)	5.9	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰黄2.5Y6/2	灰黄2.5Y6/2	貼付高台	
(14.8)	(11.0)	4.0	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y6/1	貼付高台	
(17.8)	(12.9)	5.4	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y6/1 黒7.5Y2/1	灰7.5Y5/1	貼付高台	
16.4	—	5.8～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰5Y5/1	灰5Y5/1		
(14.6)	(10.6)	1.4	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y5/1	灰5Y5/1		—
(17.5)	(14.4)	2.4	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y5/1 オリーブ黒7.5Y3/1	灰7.5Y5/1 オリーブ黒7.5Y3/1		図 16
(18.2)	(14.2)	2.4	1/2	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	黄灰2.5Y6/1	灰白2.5Y8/1		
(21.2)	(17.7)	2.1	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰2.5Y4/1	黒褐2.5Y3/1	内面：灰をかぶっている	—

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
—	7.0	3.1～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y6/1 オリーブ黒7.5Y3/1	灰7.5Y6/1		図 16
—	(5.8)	5.4～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y6/1 灰7.5Y4/1	灰7.5Y6/1 灰7.5Y4/1	貼付高台	
—	(9.8)	7.5～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y6/1	灰5Y6/1	貼付高台	
(13.8)	—	2.3	1/3	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰5Y5/1	灰5Y5/2	内面：重ね焼きの跡あり 内面：灰をかぶっている	—
(13.8)	—	1.3	1/2	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰N5/	灰N5/		図 16
(19.0)	—	2.2	1/3	良好	回転ナデ	—	ナデ	—	褐7.5Y4/4	灰褐7.5Y4/2		
(7.0)	—	2.1	1/3	良好	ヨコナデ	—	ナデ	—	灰5Y6/1	灰白5Y7/1	つまみ貼付	
(18.2)	—	3.2	1/4以下	良好	回転ナデ	—	ナデ	—	灰N5/0	灰N5/0	つまみ貼付	
(18.6)	—	2.3	1/3	良好	回転ナデ	—	回転ナデ、ナデ	—	灰オリーブ5Y6/2	灰5Y6/1	つまみ貼付	
(13.8)	—	2.6	1/2	良好	回転ナデ	—	ナデ	—	黄褐2.5Y5/3	暗灰黄2.5Y4/2	つまみ貼付	
—	—	3.5～	2/3	良好	回転ナデ	—	ナデ	—	褐灰10YR4/1	にぶい黄褐 10YR4/3	つまみ貼付	
(23.0)	—	5.2～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	黒N2/0	黒N2/0 灰N4/0		
(21.2)	—	7.5～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ タタキ（同心円文）	—	暗赤褐5YR3/3	灰褐5YR4/2 にぶい赤褐5YR4/4		図 17
(21.8)	—	10.4～	1/4以下	良好	回転ナデ タタキ（格子目文）	—	回転ナデ タタキ（同心円文）	—	黒褐2.5Y3/1	灰5Y4/1	口縁部：一部変色	
—	—	3.6～	1/4以下	良好	回転ナデ、沈線	—	回転ナデ	—	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y5/1	貼付突帯	
—	—	10.9～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰5Y6/1 オリーブ黒5Y3/1	灰オリーブ5Y6/2 オリーブ5Y5/4	内外面：自然釉あり 貼付突帯	
—	—	16.8～	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	—	回転ナデ 工具痕	—	にぶい黄褐 10YR5/3	黒褐10YR3/2		
—	—	9.0～	1/4以下	良好	ナデ	—	絞り痕	—	にぶい赤褐5Y5/4	明赤褐5Y5/6	内外面：赤彩	—
(25.6)	—	10.1～	2/5	普通	ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ケズリ	—	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい黄橙10YR6/3		図 17
(26.2)	—	12.3～	2/5	普通	ハケメ ヨコナデ	—	ヨコナデ ヘラケズリ	—	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい橙7.5YR7/3 灰褐7.5YR6/2		
(27.8)	—	5.4～	1/4以下	良好	回転ナデ、ハケメ	—	回転ナデ、ナデ	—	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR7/4		
—	—	4.7～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	橙7.5YR6/6 橙5YR6/6	橙7.5YR6/6		—
—	—	16.5～	1/4以下	良好	タタキ(格子目文) カキ目	—	タタキ(同心円文)	—	灰7.5Y5/1	灰7.5Y5/1	蓋貼付	
—	—	16.1～	1/4以下	良好	タタキ(格子目文) カキ目	—	タタキ(同心円文)	—	灰7.5Y5/1	灰7.5Y5/1	蓋貼付	—
—	—	28.2～	1/4以下	良好	ナデ タタキ(格子目文)	—	ナデ タタキ(同心円文)	—	灰7.5Y5/1 黒7.5Y2/1	灰7.5Y6/1		—
—	(8.0)	1.2～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	橙5YR7/6	外底：ヘラ描きあり	図 17
(12.8)	(8.2)	3.4	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4 暗灰黄2.5Y5/2		—
(15.4)	(13.4)	1.7	1/4以下	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	橙5YR6/6	橙5YR6/6	内外面：赤彩	—

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
21.3	—	8.7〜	2/3	普通	ヘラミガキ	回転ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙7.5YR7/4 橙5YR6/6	橙5YR6/6	内外面：赤彩	図 17
(22.6)	—	3.1〜	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰褐7.5YR4/2	暗褐7.5YR3/3		—
(12.8)	(9.8)	3.6	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y4/1	灰7.5Y5/1		図 17
(14.0)	(9.2)	3.7	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		—
(10.7)	(6.0)	3.3	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰N5/0	灰N5/0	貼付高台	図 17
(11.9)	(8.0)	3.8	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	オリーブ黒7.5Y3/1	灰7.5Y5/1	貼付高台	
(12.8)	(9.2)	4.3	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰10Y4/1	灰10Y5/1	貼付高台	
(13.4)	(10.5)	4.0	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	暗灰N3/0 灰7.5Y5/1	灰7.5Y4/1	内外面：白い砂粒あり 貼付高台	
—	8.0	2.3〜	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y6/1	灰7.5Y6/1	貼付高台	
—	(10.6)	2.8〜	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y5/1	外面：土中の鉄分?により変色している 貼付高台	図 18
—	(12.2)	9.4〜	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y6/1 オリーブ黒5Y3/1	灰5Y6/1	外面：灰をかぶっている 貼付高台	
—	(8.6)	2.4〜	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰7.5Y5/1 オリーブ黒7.5Y3/1	灰7.5Y5/1	貼付高台	
—	(11.0)	3.7〜	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y4/1 オリーブ黒7.5Y3/1	灰7.5Y4/1	貼付高台	
(全長) 3.6	(全幅) 1.25	(孔径) 0.4	1/2	—	—	—	—	—	—	—		—
(全長) 6.6〜	(全幅) 1.8	(孔径) 0.7	ほぼ完形	—	—	—	—	—	—	—		—
(全長) 4.2〜	(全幅) 2.4〜	(厚み) 1.7	1/3	良好	ナデ 工具ナデ	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	—		—
13.5	7.9	3.0	完形	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り後 ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/3 橙2.5YR6/8	浅黄橙7.5YR8/3 橙2.5YR6/6	内外面：赤彩	図 18
13.3	8.3	6.6	3/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	橙5YR7/6	貼付高台	
—	(16.7)	1.8	1/4以下	良好	ヨコナデ	—	ナデ	—	灰7.5Y6/1	灰7.5Y6/1	つまみ貼付	
—	—	12.9〜	杯底の一部と脚上部	良好	回転ナデ	回転ナデ 絞り痕	—	ナデ	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6	外面：スス付着	
(26.6)	—	7.4〜	1/4	良好	ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ヘラケズリ	—	橙2.5YR7/6	にぶい黄橙10YR7/3		
(全長) 10.0〜	(全幅) 7.0〜	(厚み) 2.3	破片	良好	縄目タタキ	—	布目痕	—	灰白10YR8/2	にぶい黄橙10YR7/3		—
—	—	6.6〜	把手のみ	普通	ナデ 工具ナデ ハケメ?	—	ヘラケズリ	—	橙7.5YR7/6	にぶい黄橙10YR5/3		—
—	—	7.6〜	把手のみ	普通	工具ナデ ナデ、ハケメ	—	ヘラケズリ ナデ	—	にぶい橙7.5YR7/4	橙5YR7/6		—
(48.8)	—	11.3〜	1/4以下	普通	ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ タタキ（同心円文） ナデ	—	灰N6/	灰N4/		図 18

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
10.2	7.0	3.9	3/4以上	良好	回転ナデ ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	浅黄2.5Y7/3	板状圧痕	図 18
—	(6.4)	2.3～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	暗褐10YR3/3	にぶい黄褐 10YR5/3		
(12.0)	(9.5)	1.7	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙5YR6/4	橙5YR6/6	外面：スス付着	
13.9	8.4	7.2	口縁～体1/2 欠損	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙5YR6/4	内外面：スス付着 貼付高台	
(14.0)	—	5.2～	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	にぶい黄橙10YR7/3 にぶい橙5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3	高台貼付痕	図 19
（全長） 2.9	（全幅） 1.55	（孔径） 0.35	1/3	—	—	—	—	—	—	—		—
—	(7.0)	1.4～	1/4以下	良好	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい橙5YR7/4		—
—	—	2.0～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後回転ナデ	—	ナデ	黒褐10YR3/1	オリーブ褐2.5Y4/4	貼付高台	図 19
—	(9.8)	2.3～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y6/1	灰オリーブ5Y6/2	貼付高台	
(26.6)	—	9.2～	1/4以下	良好	ヨコナデ?	—	ヨコナデ ヘラケズリ	—	ススで不明	にぶい褐7.5YR6/3	内外面：スス付着	
—	—	11.6～	1/4以下	良好	ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ヘラケズリ、ナデ	—	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR6/3		
—	—	8.9～	把手のみ	良好	工具ナデ ナデ ハケメ	—	調整不明	—	黒N1.5/	黒N1.5/	黒色塗料前面塗布後 再利用か?	
(12.0)	(7.8)	2.9	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6		—
(22.4)	—	10.0～	1/4以下	良好	ハケメ ヨコナデ	—	ヨコナデ ヘラケズリ	—	浅黄橙7.5YR8/4 10YR8/3	にぶい橙7.5YR7/3	内外面：スス付着	図 19
(17.0)	12.2	5.2	2/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	暗灰黄2.5Y5/2	暗灰黄2.5Y5/2	貼付高台	
—	(11.4)	2.6～	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰10Y4/1 オリーブ黒10Y3/1	灰10Y4/1	貼付高台	
—	(12.4)	7.7～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後回転ナデ	ナデ、タタキ?	ナデ	灰白7.5Y7/1	灰7.5Y5/1	貼付高台	
—	9.8	1.8～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y5/1	灰7.5Y5/1	貼付高台	—
—	(9.0)	3.2～	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰黄褐10Y5/2 橙7.5Y6/6	灰黄褐10Y5/2 橙7.5Y6/6	貼付高台	図 19
—	—	6.9～	把手のみ	良好	ナデ 工具ナデ	—	ヘラケズリ	—	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/2	外面：スス付着	—
(13.4)	(9.6)	3.5	2/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 回転ナデ?	回転ナデ	回転ナデ	橙5YR7/6	灰黄2.5Y7/3	内外面：スス付着 赤彩?	図 19
(14.2)	(9.6)	3.0	口縁端一部・ 口縁1/6 底1/3残	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	橙5YR7/6	橙5YR7/6	外面：スス付着?	—
(13.0)	(9.5)	3.0	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後 回転ヘラケズリ	回転ヘラミガキ	ナデ	橙5YR7/6 赤褐10R5/4	にぶい褐7.5YR6/3	赤彩?	—
—	(8.6)	1.9～	1/4以下	良好	回転ナデ 回転ヘラミガキ	回転ヘラケズリ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	橙5YR6/6	橙5YR6/6		—
—	(13.2)	3.3～	1/4以下	良好	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	明褐灰7.5YR7/2	にぶい橙7.5YR6/4 橙2.5YR6/6	内外面：赤彩	—
—	(6.8)	2.3～	1/4	良好	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	橙5YR7/6	貼付高台	—
—	6.8	2.4～	底・高台のみ	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	にぶい橙7.5YR7/4	貼付高台	—

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
—	(6.6)	2.6～	高台・底の2/3	良好	回転ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	橙5YR6/6	橙5YR6/6	貼付高台	図 19
(10.7)	(6.4)	3.5	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰2.5Y5/1	暗灰黄2.5Y5/2	内外面：土中の鉄分?により変色している	—
(12.8)	(8.0)	4.6	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰7.5Y4/1 にぶい黄褐10YR5/3	灰7.5Y4/1 にぶい黄褐10YR5/3	貼付高台	図 19
(13.0)	(8.4)	4.1	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y5/1	灰7.5Y5/1	貼付高台	
—	(7.9)	2.6～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰7.5Y6/1	灰7.5Y6/1	貼付高台	—
(14.4)	(6.0)	4.1	1/4	良好	施釉	施釉 中央部・畳付：露胎	施釉	施釉 中央部露胎	胎土 灰白2.5Y8/1	釉 灰白5Y8/1		図 20
(26.7)	—	5.2～	1/4以下	良好	回転ナデ ハケメ	—	回転ナデ ヘラケズリ	—	ススのため不明	浅黄橙10YR8/3	外面：スス付着	図 19
(全長) 4.4～	(全幅) 1.4	(孔径) 0.4	1/2	—	—	—	—	—	—	—		—
—	—	7.1～	破片	良好	ハケメ 工具ナデ、ナデ	—	ヘラケズリ	—	橙5YR7/6 浅黄橙7.5YR8/4	橙7.5YR7/6		図 20
—	(11.2)	1.8～	1/4	良好	不明	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3		
—	(8.4)	3.8～	1/4以下	良好	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰5Y5/1	灰5Y5/1	貼付高台	
—	—	3.1～	底部 ほぼ完存	良好	回転ナデ	回転ヘラケズリ後 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	橙7.5YR7/6		
—	(7.7)	2.8～	1/3	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙5YR7/4 橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6	内外面：赤彩 貼付高台	
—	(9.1)	1.7～	1/4以下	良好	回転ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	回転ヘラミガキ	回転ナデ ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		—
12.0	8.3	3.6	3/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	浅黄橙7.5YR8/4 10YR8/4	浅黄橙7.5YR8/4 10YR8/3	板状圧痕	図 20
(7.2)	(5.6)	1.2	1/2	良好	回転ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	灰白2.5Y7/1	内外面：スス付着	
(6.0)	(4.0)	1.2	1/4	良好	回転ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3	内外面：スス付着	—
(7.8)	5.7	1.4	2/3	良好	回転ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3	内外面：スス付着	図 20
(7.7)	5.0	1.2	2/3	良好	回転ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	浅黄2.5Y7/3	にぶい黄橙10YR7/3	内外面：スス付着	
(7.8)	(4.8)	1.5	1/2	良好	回転ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	浅黄橙7.5YR8/4	内外面：スス付着	
5.8	4.2	1.0	3/4	良好	回転ナデ	糸切り	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/3 7.5YR7/4	内外面：スス付着	
(13.0)	(9.2)	(3.1)	1/2以上	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	浅黄橙7.5YR8/3	橙2.5YR6/6	内外面：赤彩	図 21
(13.4)	(8.6)	3.4	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 工具ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR6/6	橙5YR6/6		—
(17.4)	(14.3)	2.5	1/4	良好	回転ナデ	ヘラ切り後工具ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	橙5YR6/6 橙2.5YR6/6	内外面：赤彩	—
—	(8.8)	2.0～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後工具ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3	貼付高台	図 21
—	(8.5)	2.4～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	橙7.5YR7/6	にぶい橙7.5YR7/4	貼付高台	
—	(10.0)	3.4～	1/4以下	良好	ヨコナデ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙7.5Y6/4	褐灰7.5Y4/1	内面：スス付着 外面：赤彩 貼付高台	
(14.6)	(9.6)	5.8	1/4	良好	回転ヘラミガキ 回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙5YR6/4 橙2.5YR6/6	明赤褐2.5YR5/6	内外面：スス付着 内外面：赤彩 貼付高台	

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
(14.7)	(11.4)	2.1	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰5Y5/1 灰N5/0	灰5Y5/1 灰N5/0		図 21
—	—	4.1～	把手のみ	良好	ナデ ハケメ 工具ナデ	—	調整不明	—	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3		—
6.0	4.3	1.1	1/2	良好	回転ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	橙5YR7/6	内外面：スス付着	図 21
12.0	5.3	2.9	2/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙5YR7/4		—
12.7	—	3.1	1/2以上	良好	回転ナデ	工具ナデ? ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	浅黄2.5Y7/3 暗灰N3/	にぶい黄橙10YR7/3 暗灰N3/		図 21
11.7	6.5	2.4	3/4	良好	回転ナデ 工具ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	ナデ?	浅黄橙7.5YR8/3 暗灰N3/	にぶい黄橙10YR7/2 暗灰N3/		—
(12.4)	(8.2)	2.4	1/4以下	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4 橙2.5YR6/6	スス付着? 内外面：赤彩	—
(15.2)	(10.6)	2.2	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	橙2.5YR6/6 にぶい黄橙10YR7/3	橙5YR6/6		図 21
(14.8)	(11.2)	3.0	1/4以下	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6 にぶい黄橙10YR7/3	全面：赤彩	—
(14.4)	(10.0)	3.4～	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	橙5YR7/6		図 21
(10.8)	6.3	3.5	口～体3/4 欠損	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙7.5YR7/6	にぶい橙7.5YR7/4	簾状圧痕	
—	—	1.6～	破片	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	橙5YR6/6	橙5YR6/6	外面：ヘラ描文あり	
—	—	1.0～	1/4以下	良好	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	浅黄橙7.5YR8/4	外底：ヘラ描きあり	
—	(8.6)	2.5～	高台1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙5YR7/6	橙5YR7/6	高台貼付	
—	—	2.2～	杯底の1/4 残存	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	脚接合痕	
(14.4)	(8.8)	3.7	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰2.5Y4/1 黄灰2.5Y6/1	暗灰黄2.5Y5/2		
—	(9.0)	2.8～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2		図 22
—	8.4	3.8～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10Y6/3 灰白5Y7/1	にぶい黄橙10Y6/3		
—	(16.2)	6,3～	1/4以下	良好	型押し	—	回転ナデ	—	黄灰2.5Y4/1 黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y4/1 灰黄橙10YR5/2		
(全長) 3.1～	(全幅) 1.5	(孔径) 0.3	1/2	—	—	—	—	—	—	—		—
(全長) 3.6	(全幅) 1.45	(孔径) 0.6	完形	—	—	—	—	—	—	—		—
(全長) 5.3	(全幅) 1.6	(孔径) 0.3	完形	—	—	—	—	—	—	—		—
(全長) 5.9	(全幅) 1.1	(孔径) 0.35	ほぼ完形	—	—	—	—	—	—	—		—
(全長) 6.9	(全幅) 1.8	(孔径) 0.7	完形	—	—	—	—	—	—	—		—
(全長) 6.9	(全幅) 1.8	(孔径) 0.6	ほぼ完形	—	—	—	—	—	—	—		—
—	—	4.2～	把手のみ	良好	工具ナデ ナデ	—	—	—	浅黄橙10YR8/3 にぶい橙7.5YR7/4	—		—
—	—	2.3～	把手のみ	良好	ヘラナデ ナデ	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	—		—

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
（全長） 7.4～	（全幅） 14.5～	（厚み） 1.3	破片	良好	縄目タタキ	―	布目痕	―	灰5Y5/1	灰N4/　灰N6/		図 22
(5.9)	(4.2)	1.1	1/4	良好	回転ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR7/4		―
5.8	5.0	1.3	完形	良好	回転ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙10YR8/4	浅黄橙10YR8/4	内面：スス付着	図 22
7.4	6.0	1.2	1/2	良好	回転ナデ	糸切り	回転ナデ	ナデ	浅黄橙10YR8/4	浅黄橙10YR8/4	板状圧痕	
(14.2)	(10.0)	3.9	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/8	底部穿孔? 全面：赤彩	
(22.0)	(19.2)	3.1	2/5	良好	回転ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙10YR8/3	全面：スス付着	―
―	10.6	1.7～	底部ほぼ 完存	良好	回転ナデ	ヘラ切り後 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙5YR7/4	橙5YR6/6	外面：スス付着	―
―	8.0	5.0～	底3/4 体1/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙5YR6/3 にぶい黄橙10YR7/3	灰黄褐10YR6/2	貼付高台	図 22
(23.2)	―	9.8～	1/4以下	良好	ヨコナデ後ハケメ	―	回転ナデ ヘラケズリ	―	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙5YR6/4	内外面：スス付着	
(22.2)	―	8.5～	1/4以下	良好	ヨコナデ タタキ(格子目文)	―	ヨコナデ タタキ(同心円文)	―	橙5YR6/6	橙5YR6/6		―
―	―	2.8～	破片	良好	回転ナデ ヘラケズリ ナデ	―	回転ナデ	―	にぶい橙7.5YR6/4	橙5YR7/6	外面：スス付着 穿孔あり	―
―	―	7.1～	把手のみ	良好	ナデ ハケメ 工具ナデ	―	ヘラケズリ	―	にぶい橙7.5YR7/4	浅黄橙7.5YR8/4	外面：スス付着	―
―	―	8.0～	把手のみ	良好	ナデ 工具ナデ	―	ナデ?	―	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3 にぶい黄橙10YR7/3		―
―	―	6.5～	把手のみ	良好	工具ナデ ナデ	―	工具ナデ	―	にぶい褐10YR6/3	にぶい褐10YR6/3		―
―	―	8.1～	把手のみ	良好	ナデ 工具ナデ ハケメ	―	ヘラケズリ	―	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙7.5YR7/4		―
（全長） 3.3～	（全幅） 1.6	（孔径） 0.4	1/2	―	―	―	―	―	―	―		―
―	―	7.2～	破片	良好	ナデ ハケメ	―	ナデ ハケメ ヘラケズリ	―	浅黄橙7.5YR8/4	浅黄橙7.5YR8/3 淡橙5YR8/4		図 22

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
（全長）13.6	（全幅）8.2	（厚み）4.0	完形	—	—	—	—	—	—	—	安山岩	図 10
（全長）16.0	（全幅）12.2	（厚み）5.1	完形	—	—	—	—	—	—	—	チャート	
（全長）13.4〜	（全幅）7.0〜	（厚み）6.4〜	欠損品	—	—	—	—	—	—	—	流紋岩	図 18
（全長）13.3	（全幅）12.1	（厚み）3.4	完形	—	—	—	—	—	—	—	安山岩	
（全長）7.3〜	（全幅）7.7	（厚み）5.2	欠損品	—	—	—	—	—	—	—	砂岩 受熱あり	図 22

法量（cm）			重量	焼成	調整				色調		備考	写真図版
長さ	幅	厚さ			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
（全長）13.4〜	（全幅）2.1	0.25	24.0g	—	—	—	—	—	—	—		巻頭
（全長）—	（全幅）—	0.4	7.6g	—	—	—	—	—	—	—		巻頭
（全長）22.2	（全幅）1.1	0.4	42.4g	—	—	—	—	—	—	—	裏面：骨付着	巻頭

法量(　)は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量(cm)			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
(14.0)	7.6	3.7	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	内外面:スス付着	図 23
(13.0)	(8.0)	3.0	1/4以下	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6	内外面:赤彩	
(14.2)	(8.5)	3.5	1/4	良好	回転ナデ 回転ヘラミガキ 回転ヘラケズリ	ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ	にぶい橙7.5YR7/4	橙5YR7/6	内外面:スス付着	
(15.8)	(10.2)	3.5～	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	橙2.5YR6/6		
(12.0)	(7.4)	3.9～	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y7/1		
(14.0)	7.6	6.3	1/2	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	貼付高台	
—	—	3.6～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		
(25.4)	—	6.5～	1/4以下	良好	ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ヘラケズリ	—	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい橙7.5YR6/4	内外面:スス付着	
(18.0)	—	6.6～	1/4以下	良好	ヨコナデ ナデ	—	ヨコナデ ナデ ヘラケズリ	—	にぶい橙5YR7/4	にぶい褐7.5YR6/3	外面:スス付着	
(27.0)	—	8.4～	1/4以下	良好	ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ヘラケズリ	—	橙5YR6/6	にぶい橙7.5YR7/4		
—	(6.8)	2.2～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	橙2.5YR6/6	内底:スス付着	
(11.0)	(6.6)	4.0	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3		
—	(6.6)	2.5～	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	浅黄橙10YR8/4	にぶい黄橙10YR7/3	底部:板状圧痕	
10.5	6.7	4.0	ほぼ完形	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3 にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	内外面:スス付着 底部:板状圧痕	
9.8	5.8	3.6	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	橙5YR7/6	底部:板状圧痕	
13.4	10.0	3.8	ほぼ完形	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り後 回転ヘラケズリ ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	橙7.5YR7/6		図 24
(12.0)	(8.8)	3.3～	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	—	橙2.5YR6/6 にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		
(11.6)	(6.0)	4.8	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙5YR7/6	橙5YR7/6	底部:圧痕あり	
—	—	0.7～	1/4以下	良好	—	回転ヘラ切り後 ナデ	—	回転ナデ ナデ	橙5YR7/6	にぶい橙5YR7/4	外底:墨書	
(12.2)	(8.8)	6.0	1/3	良好	回転ナデ	不明	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4	貼付高台	
(12.8)	—	2.5	1/2	良好	回転ヘラケズリ 回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	灰N5/	灰N5/	つまみ貼付	
—	—	1.7～	1/4以下	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	—	回転ナデ	—	灰7.5Y6/1	灰オリーブ5Y6/2	つまみ貼付	
—	(8.2)	(2.6)	1/4以下	良好	回転ナデ	不明	—	ナデ	灰白N7/	灰白5Y7/1	貼付高台	

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

ｲﾞ№.	法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
	―	―	2.9～	1/4以下	良好	ヨコナデ カキ目 波状文	―	ヨコナデ	―	灰5Y6/1	灰オリーブ5Y6/2		図 24
	―	―	3.3～	1/4以下	良好	ヨコナデ 波状文	―	ナデ	―	灰5Y5/1	暗灰N3/		
	（全長） 7.5～	（全幅） 7.4～	（厚み） 1.1	1/4以下	良好	櫛目? ハケメ?	―	ナデ	―	黄灰2.5Y6/1	灰黄2.5Y6/2	穿孔あり	
	（全長） 5.8～	（全幅） 6.2～	（全高） 8.7～	1/4以下	良好	工具ナデ	―	ヘラケズリ	―	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4		
	20.6	―	8.0～	1/4以下	良好	ヨコナデ ナデ	―	ヨコナデ ヘラケズリ	―	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	内面：指頭圧痕 内面：スス付着	
	（16.2）	―	26.7	1/2	良好	ヨコナデ ハケメ ナデ	―	ヨコナデ ヘラケズリ ナデ	―	灰褐7.5YR4/2	にぶい褐7.5YR5/3		
	―	―	2.0～	1/4以下	良好	施釉	施釉	施釉	施釉	（胎土） 浅黄橙7.5YR8/6	（釉） 灰白10Y8/1	貫入あり	
	―	―	2.3～	1/4以下	良好	施釉	―	施釉	―	（胎土） 灰白5Y7/1	（釉） 明緑灰7GY7/1	貫入あり	
	（14.0）	―	3.1～	1/4以下	良好	施釉	―	施釉	―	（胎土） 灰白N8/	（釉） 灰白5Y7/1		
	6.2	4.2	1.2	ほぼ完形	良好	回転ナデ	糸切り	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙5YR7/4	内外面:スス 底部:穿孔?	図 25
	6.3	4.3	1.3	ほぼ完形	良好	不明	糸切り	不明	不明	橙5YR7/6	にぶい橙5YR7/4	口縁：スス付着	―
	6.3	4.8	1.2	ほぼ完形	良好	回転ナデ	糸切り	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	内口縁：スス付着	―
	7.6	5.2	1.4	2/3	良好	回転ナデ	糸切り	回転ナデ	回転ナデ	橙5YR7/6	橙5YR7/6		図 25
	―	3.0	1.6～	1/4	良好	回転ナデ	糸切り	回転ナデ	回転ナデ	橙5YR7/6	灰白10YR8/2		
	4.0	3.8	5.3	完形	良好	施釉	糸切り 回転ナデ? 露胎	施釉	施釉	（胎土） 赤10R5/6	（釉） 黒褐5YR3/1	外底：露胎	
	―	―	0.8～	1/4以下	良好	―	ナデ	―	回転ナデ ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	橙5YR6/6	内面：赤彩? 底部：ヘラ描き	
	（11.8）	（5.8）	2.2	1/3	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	貼付高台	
	（13.2）	―	2.2～	1/4以下	良好	回転ナデ	―	回転ナデ	―	橙2.5YR6/6	にぶい橙2.5YR6/4	内外面：赤彩 内面：スス付着?	―
	―	―	3.5～	1/4以下	良好	ヨコナデ	―	ヨコナデ	―	灰10Y5/1	灰黄褐10YR6/2	貼付突帯	図 25
	―	―	6.5～	1/4以下	良好	ヨコナデ	―	工具ナデ ハケメ?	―	灰N4/	灰N4/	貼付突帯 外面：印文、櫛描文?	

法量（　）は復元値。焼成は良好、良、普通、やや良、不良の5段階に分ける。

法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
―	―	3.3～	1/4以下	良好	磨消縄文 ヘラミガキ	―	ヘラミガキ	―	オリーブ黒7.5Y3/1	褐灰10YR4/1		図 25
―	―	4.5～	1/4以下	良好	ヘラミガキ、沈線	―	ナデ	―	にぶい褐7.5YR5/3	にぶい赤褐5YR5/4	外面：スス付着?	
―	―	5.0～	1/4以下	良好	磨消縄文 ヘラミガキ?	―	ヘラミガキ?	―	黄灰2.5Y4/1	黄褐2.5Y5/3		
―	―	4.7～	1/4以下	良好	磨消縄文 ヘラミガキ	―	ヘラミガキ	―	暗灰黄2.5Y5/2	にぶい黄橙10YR6/4		
―	(10.0)	3.5～	1/4以下	良好	条痕 ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR7/3	底部：圧痕あり	
―	(12.4)	2.8～	1/4以下	良好	ヨコナデ 押捺文	ナデ	ナデ 指頭圧痕	―	にぶい黄橙10YR6/3 橙2.5YR6/6	にぶい黄橙10YR6/3 橙2.5YR6/6		

第５章　　自然科学分析調査報告

熊本市新屋敷遺跡出土の古代人骨

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
松下孝幸・松下真実

はじめに
資料
所見
　A　埋葬姿勢
　B　人骨の形質
考察
要約

図１　遺跡の位置（1/25,000 ）
図２　人骨の残存図（アミかけ部分）
図３　新屋敷ＳＴ－１人骨出土状況

表１　出土人骨一覧
表２　年齢区分
表３　脳頭蓋計測値
表４　上腕骨計測値
表５　大腿骨計測値
表６　脛骨
表７　推定身長値
表８　脳頭蓋
表９　上腕骨
表 10　橈骨
表 11　大腿骨
表 12　脛骨
表 13　推定身長値
表 14　中央周の比
表 15　形態小変異

熊本市新屋敷遺跡出土の古代人骨

松下孝幸*・松下真実**

【キーワード】：熊本県、古代人骨、土壙墓、超短頭型、柱状大腿骨、扁平脛骨、高身長

はじめに

熊本市新屋敷1丁目に所在する新屋敷遺跡の発掘調査が白川の拡幅工事に伴って2009年（平成21年）におこなわれ、埋葬遺構から古代に属する人骨が1体出土した。

新幹線工事と熊本駅周辺整備事業に伴う発掘調査によって、二本木遺跡群から古代と中世に属する古人骨の出土例が増加している。2003年（平成15年）に熊本市教育委員会が調査をおこなった二本木遺跡群の第18次調査区から古代に属する人骨が1体出土した（松下、2005）。この人骨は溝から出土した四肢骨の骨片にすぎなかった。2006年（平成18年）におこなわれた第28次調査においても古代末の人骨が2体が出土したが、これは大腿骨片と歯のみであった（松下・他、2008a）。熊本県教育委員会が2005年（平成17年）度と06年（平成18年）度に実施した二本木遺跡群（合同庁舎跡）の調査でも12世紀初頭の人骨が1体出土しており、08年（平成20年）度の合同庁舎跡における発掘調査では10世紀後半の人骨が出土した。また、2008年度の二本木遺跡群（さつま荘跡）における発掘調査でも10世紀代の人骨が検出されているが、この人骨は古代人骨としては珍しく保存状態が良好で、特筆すべきは、この男性被葬者の推定身長が164.97cm（Pearson式）の高身長であること、大腿骨には縄文前期人なみの柱状性（骨体中央断面示数125.93〔右〕、145.83〔左〕）が認められたことである。古代人骨の保存状態は一般的に悪いものが多く、形質所見を明らかにすることができるものはきわめて少ないので、このような特徴が古代人の時代的特徴であるのかはまだ明確ではない。

2008年（平成20年）度におこなわれた二本木遺跡群第40次調査区F地点からは、頭を甕に入れ、おそらくは両足も左右別々に甕に入れていたものと推測される、10世紀末～11世紀に属する人骨が出土している。また、同じ年に二本木遺跡群第41次調査区からは11世紀頃の古代末に属する人骨が1体出土している。この人骨は長頭型であり、低顔で、歯槽性突顎を示す男性骨であった。

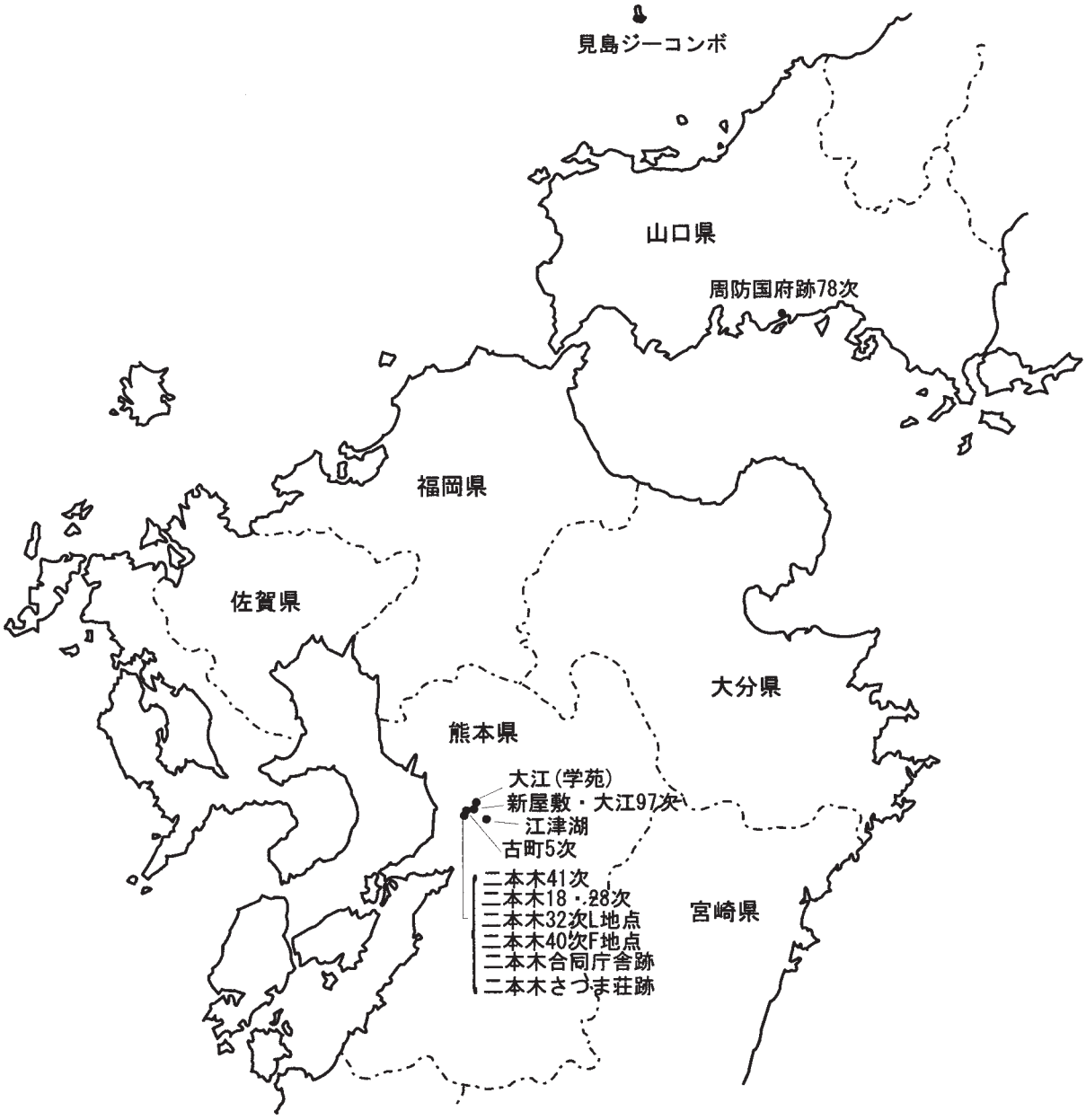
2009年（平成21年）度は二本木遺跡群第11次調査区1区から2体、3区からは1体の古代人骨が出土した。

その他に、2005年（平成17年）度には、大江遺跡群第97次調査区から9世紀後半の男性人骨（松下、2007b）が、古町遺跡第5次調査区では10世紀初頭に属する男性人骨が多くの副葬品（土師器など）を伴って出土したが、ともに保存状態は著しく悪いものであった（2007a）。また、大江（学苑）遺跡群（松下、2006）と江津湖遺跡群では平安時代の火葬骨が出土している。

今回出土した人骨の保存状態は古代に属する人骨としては比較的良好で、現場では埋葬姿勢を明らかにすることができ、また人骨については人類学的観察や計測が可能で、興味ある所見も得られ

---

* Takayuki　MATSUSHITA、** Masami　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕



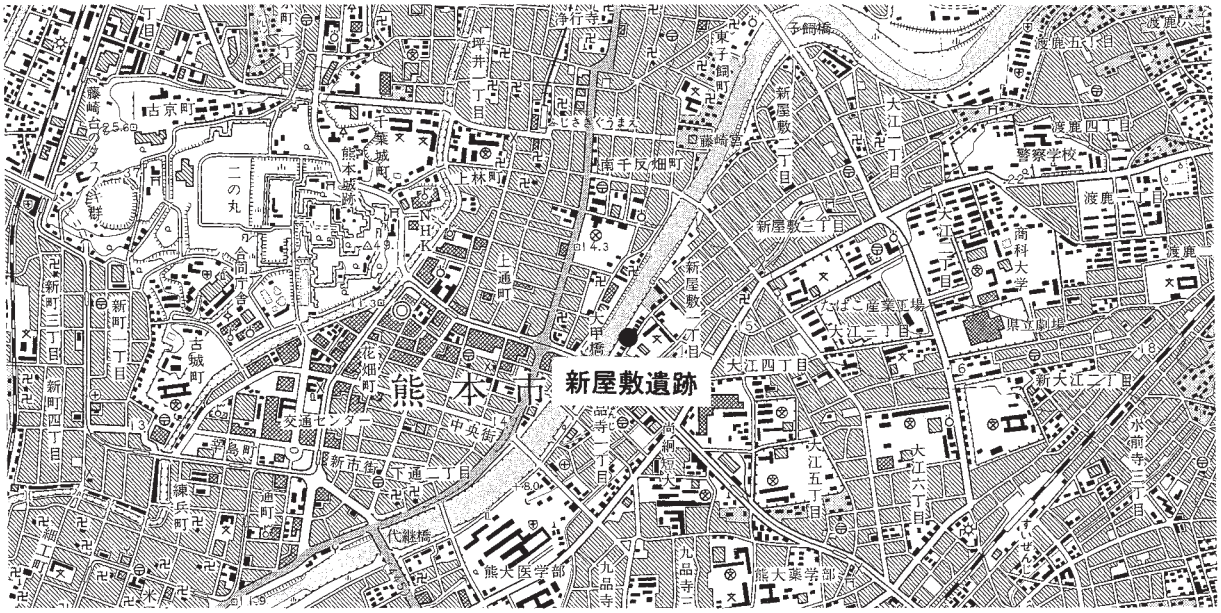


図１　遺跡の位置（1/25,000）

(Fig.1 Location of the Shinyashiki site, Kumamoto City, Kumamoto Prefecture)

たので、その結果を報告しておきたい。

資　料

本遺跡から検出されたのは１体の熟年の男性骨である。保存状態は、比較的良好で、観察や計測をおこなうことができた。本人骨は、８～９世紀に造られたとみられる溝の中（埋土）から出土しており、遺構の検出状況からこの土壙墓は溝がある程度埋まった時に造墓されたと推測されている。従って、この人骨は８世紀から９世紀（古代）に属する人骨と考えられる。なお、年齢区分に関しては表３を参考にされたい。

計測方法は、Martin-Saller（1957）によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

人骨の整理・復元・保存処理などは、磯部美恵子、松下玲子、中野江里子が担当した。

表１　出土人骨一覧（Table 1. List of skeletons）

人骨番号	性別	年齢	備考 (頭位、埋葬姿勢、推定身長値)
ＳＴ－０１	男性	熟年	南東頭位、仰臥伸展葬、165.34cm

表２　年齢区分　(Table 2. Division of age)

年齢区分		年　　齢	
未成人	乳児	1 歳未満	
	幼児	1 歳～ 5 歳	（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6 歳～ 15 歳	（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16 歳～ 20 歳	（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21 歳～ 39 歳	（40 歳未満）
	熟年	40 歳～ 59 歳	（60 歳未満）
	老年	60 歳以上	

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

所　見

ＳＴ－０１人骨（男性・熟年）

Ａ　埋葬姿勢

埋葬遺構は土壙墓。埋葬姿勢は仰臥。頭位は南東。肘関節は両側とも伸展状態であった。膝関節は、右側はやや曲げていたが（約 160 度）、右側は伸展状態だったと思われる。

残存していたのは、頭蓋、下顎骨、左側の鎖骨、右側の肩甲骨、両側の上腕骨と前腕の骨。両側の寛骨、両側の大腿骨と脛骨、右側の腓骨、両側の足の骨（足根骨と中足骨の一部）、椎体と肋骨の一部である。保存状態は一般的に悪く、骨質はきわめて脆弱である。頭蓋は脳頭蓋のみで、顔面頭蓋は欠損していた。顔面が上を向いた状態で検出された。このような状態で検出されることは珍しい。たいてい顔面は前を向いた状態のことが多い。それは頭蓋の下をやや高くして、顔を起こしたようにして、埋置するからである。このように顔を上にした状態で埋置することは珍しいといえ

る。鎖骨は左側のみが検出できた。径はやや細い。右側の肩甲骨を確認することができたが、ほとんど骨粉状態である。上腕骨は両側とも残存していたが、骨端はほとんど残存していない。三角筋粗面の発達は良好で、骨体の径もやや大きい。橈骨、尺骨は両側とも骨体が残存していたが、保存状態はともに悪い。寛骨は腸骨の一部を確認することができたが、これも骨粉状態である。大腿骨は両側とも残存していた。左側は発掘調査の際に骨体が破損していたが、右側はほぼ完全に残存しており、最大長を現場で計測することができた。右側大腿骨最大長は 447mm もあり、長さは長い。粗線の発達も良好である。脛骨も両側の骨体が残存しており、その長さは長く、骨体は扁平である。腓骨は右側しか残存していなかった。骨体はやや細い。足根骨と中足骨の一部も残存していたが、骨質はもろく、骨粉状態に近い。また、椎体が骨粉様態で、肋骨は３本、これも痕跡的に残存していたに過ぎない。

なお、副葬品として右側の大腿骨の下から鉄製品１点が検出された。

現場で、人骨の検出状況から、木棺があったのか、なかったのかを検討してみた。人骨は、水平状態で検出されておらず、胸部から頭部にかけてやや斜めに傾斜している。すなわち上半身がやや起きた状態で検出された。木棺に埋納されていれば、遺骨は水平状態で検出されるはずで、上半身が斜めに起き上がることはない。たとえ木棺内で遺体の上半身部分の下に敷物を敷いて、上半身を起こして安置したとしても、遺体の下に敷いたものが土でない限り、傾斜状態を保つことはあり得ない。木棺の中に土を入れることは想定しがたい。従って、人骨の検出状況から、埋葬遺構は土壙墓だったと思われる。

Ｂ　人骨の形質

各人骨の残存部は図２に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

１．頭蓋

(1) 脳頭蓋

前頭骨右側部、右側側頭骨の一部などを欠損しているが、脳頭蓋の残りは比較的良好である。骨壁はやや厚い。外後頭隆起の発達は良好で、乳様突起も大きい。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は左右とも認められない。縫合は、三主縫合の内板はすべて癒合閉鎖している。外板では縫合が明瞭であるが、部分的には癒合が進んでいる。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が 161mm、頭蓋最大幅は 153mm で、頭蓋長幅示数は 95.03 となり、頭型は超短頭型（ultrabrachykran）である。バジオン・ブレグマ高は計測できない。高径は高そうである。また、頭蓋水平周は 494mm、横弧長は 313mm で、脳頭蓋の径は大きいものではない。

(2) 顔面頭蓋

上顎骨、頬骨、下顎骨が残存していたが、顔面を復元することができない。眉上弓の隆起は弱い。鼻根部の様態は不明である。下顎骨の径はやや大きいが、高径は低く、下顎枝の幅は広そうである。角前切痕が認められ、下顎角は外反していたようである。また、歯槽は大部分が閉鎖している。

２．歯

上下両顎の歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／	／	／	⑤	④	／	／	／	①	／	／	④	⑤	／	／	／
8	❼	6	5	4	3	❷	❶	❶	❷	❸	❹	❺	❻	❼	8

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存／：不明、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

第三大臼歯は歯根が残存したにすぎないので、歯の咬耗は不明である。また、歯の咬合形式も不明である。

3．四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していたが、肩甲骨はほとんど骨粉状態であった。

①上腕骨

左右とも骨体が残存していたが、左側の方が保存状態はよい。三角筋粗面はよく発達しており、骨体も太い。

計測値は、中央最大径が 22mm（右）、22mm（左）、中央最小径は 17mm（右）、18mm（左）で、骨体断面示数は 77.27（右）、81.82（左）となり、骨体の扁平性は弱い。骨体最小周は 61mm（左）、中央周は 65mm（右）、67mm（左）で、骨体は大きい。

②橈骨

両側の骨体が残存していたが、左側の保存状態が良好である。径はやや大きく、扁平で骨間縁の発達は良好である。

③尺骨

骨体の径は大きい。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。寛骨は腸骨の一部を確認することができたが、これも骨粉状態であった。

①大腿骨

長さは長い。両側の骨体を取り上げる事ができた。保存状態は比較的良好である。骨体の径はそれほど大きくはないが、右側は骨体両側面が後方へ著しく突出しているので、矢状径が大きく、骨体は柱状を呈している。また、骨体上部はかなり扁平である。

計測値は、現場で計測できた最大長が 447mm（右）で、長さはかなり長い。骨体中央矢状径は 29mm（右）、27mm（左）、横径は 23mm（右）、25mm（左）で、骨体中央断面示数は 126.09（右）、108.00（左）となり、右側はとくに粗線や骨体両側面の後方への発達が良好である。骨体中央周は 82mm（右）、83mm（左）で、骨体は細い。また、骨体上横径は 30mm（左右）、骨体上矢状径は 21mm（左右）で、上骨体断面示数は 70.00（左右）となり、骨体上部はかなり扁平である。

②脛骨

脛骨も長い。両側の骨体を取り上げることができた。右側骨体の保存状態は良好である。径は大きく、骨体は扁平で、ヒラメ筋線の発達はよくないが、骨体後面にはかなり鋭い稜線が走っている。骨体の断面形はこの時代としては珍しく、両側ともヘリチカのⅣ型を呈している。

計測値は、中央最大径が 34mm（右）、中央横径は 21mm（右）で、中央断面示数は 61.76（右）となり、骨体は扁平である。骨体周は 85mm（右）、最小周は 75mm（右）で、骨体は太い。

③腓骨

左右の骨体が残存していたが、保存状態は著しく悪い。骨体はやや大きく、扁平である。

４．推定身長値

現場で右側大腿骨の最大長を計測することができた。その大腿骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ 165.34cm（Pearson、右）、165.31cm（藤井、右）となり、高身長である。

５．性別・年齢

外後頭隆起の発達が良好で、乳様突起も大きく、四肢骨の径が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は、三主縫合の内板がすべて癒合閉鎖し、外板はまだ明瞭であるが、部分的に癒合が始まっていることから、年齢は熟年と思われる。

考　察

計測ができた脳頭蓋、上腕骨、大腿骨、脛骨について周辺の人骨と比較検討してみた

１．脳頭蓋

表３は男性の脳頭蓋の比較表である。本古代人の頭蓋長幅示数は 95.03 となり、頭型は超短頭型である。古代人骨は保存状態が悪いものが多く、頭型がわかる例はほとんど存在しない。かろうじて、熊本市の二本木遺跡群から出土した 12 世紀後半の頭蓋は頭型が明らかで、この例の頭蓋長幅示数は 70.05 で、頭型は長頭型である（春日地区 11 次調査１区、S021 人骨、男）。一般的に古代人の頭型は中世に向けて、次第に長頭型に傾き始めると予想される。二本木の例はすでに長頭型になっているが、おおむねこのような長頭化の流れに沿っていると考えられる。しかし、本例は短頭型、過短頭型を通り越して、超短頭型で、個体変異と考えるには少し無理がある。表３には参考までに主な中世人の例を掲げているが、頭型はおおむね長頭に近い中頭型か、長頭型であり、本例の特異性が際だっている。ちなみにこの頭蓋長幅示数 95.03 が、鹿児島県種子島の広田の 89.4、沖縄県北谷町伊礼原Ｃ（SK-1、縄文晩期、男）の 91.12 をも凌駕していることは驚きである。

２．上腕骨

表４は男性上腕骨の比較表である。本例の中央周は 67mm である。これを古代人と比較してみると、二本木とジーコンボよりは小さい。しかし、熊本県の中世人と比較してみると、二本木、玉名平野条里跡に次いで大きい。骨体断面示数は 81.82 で、この示数値は二本木 S-004 に一致し、ジーコンボに次いで大きく、骨体の扁平性は弱い。

３．大腿骨

表５は男性大腿骨の比較表である。骨体中央周は 82mm で、表５では最小値を示しており、骨体の径は小さく思える。しかし、骨体両側面の後方への延伸は強く、骨体中央断面示数は 126.09 となり、この示数値は縄文早・前期人並みで、表５では最大値となり、同じ傾向が認められる二本木・さつま荘跡と大差ない。また、上骨体断面示数は 70.00 で、表５では最小値を示し、骨体上部は著しく扁平である。

4．脛骨

表６は男性脛骨の比較表である。骨体周は 85mm で、表６では花岡木崎 S-12、二本木合同庁舎跡 S-040 に次いで大きく、骨体の径はやや大きい。中央断面示数は 61.76 となり、表６では最小値で、骨体は縄文人並みに、かなり扁平である。

5．推定身長値

表７は男性の推定身長値の比較表である。古代人では推定身長値を算出できるものが存在しないので、中世人と比較してみた。本例の大腿骨からの推定値は 165.34cm で、この時期の身長としてはかなりの高身長値で、表７では最大値である。

表3　脳頭蓋計測値（男性、mm）(Table 3. Comparison of male calvarial measurements and indices)

		新屋敷 古代 熊本県 熊本市 （松下・他）	二本木・春日 中世 熊本県 熊本市 （松下・他）	尾　窪 中世人 熊本県 城南町 （内藤）		吉母浜 中世人 山口県 下関市 （中橋・他）		由比ヶ浜南 中世人 神奈川県 鎌倉市 （松下）		鎌倉材木座 中世人 神奈川県 鎌倉市 （鈴木・他）	
		ST-01	S021	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	161	187	6	184.33	16	181.8	79	184.43	170	184.2
8.	頭蓋最大幅	153	131	1	138	17	136.2	85	138.28	164	136.5
17.	バジオン・ブレグマ高	–	–	4	136.50	17	139.4	61	138.11	96	137.2
8/1	頭蓋長幅示数	95.03	70.05	1	77.09	16	74.9	79	75.05	164	74.2
17/1	頭蓋長高示数	–	–	4	74.80	16	76.8	58	74.59	94	75.0
17/8	頭蓋幅高示数	–	–	1	99.28	17	102.5	61	99.78	93	99.8
1+8+17/3	頭蓋モズルス	–	–	1	151.33		–	59	153.40		–
23.	頭蓋水平周	494	–	2	513.00	16	517.2	71	524.80	151	516.9
24.	横弧長	313	–	1	310.00	17	313.8	81	310.83	127	309.4
25.	正中矢状弧長	–	–	5	384.40	17	377.5	62	379.56	111	373.7

二本木・春日＝二本木春日第11次調査区1区

表4　上腕骨計測値（男性、右、mm）(Table 4. Comparison of measurements snd indices of male right humeri)

		新屋敷 古代 熊本県 熊本市 （松下・他）		二本木（1） 古代人 熊本県 熊本市 （松下・他）	二本木（2） 中世人 熊本県 熊本市 （松下・他）	ｼﾞｰｺﾝﾎﾞ 平安人 山口県 萩市 （松下・他）	大江111次 中世人 熊本県 熊本市 （松下・他）	花岡木崎 中世人 熊本県 芦北町 （松下・他）	玉名平野条里跡 中世 熊本県 玉名市 （松下・他）
		ST-01		S-040	S-004	72号墳1	1号	S-12	SK-03
5.	中央最大経	22	(左)	23(左)	22	24	21	22(左)	23
6.	中央最小径	18	(左)	18(左)	18	20	15	16(左)	18(左)
7.	骨体最小周	61	(左)	65(左)	64	67	–	61(左)	63
7(a).	中央周	67	(左)	70(左)	68	73	62	65(左)	68(左)
6/5	骨体断面示数	81.82	(左)	78.06(左)	81.82	83.33	71.43	72.73(左)	61(左)

二本木（1）＝二本木・合同庁舎跡
二本木（2）＝二本木・合同庁舎跡2区

表5　大腿骨計測値(男性、右、mm)(Table 5. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		新屋敷 古代 熊本県 熊本市 （松下・他）	二本木41次 古代人 熊本県 熊本市 （松下・他）		二本木（1） 古代人 熊本県 熊本市 （松下・他）	二本木（3） 古代人 熊本県 熊本市 （松下・他）	ｼﾞｰｺﾝﾎﾞ 平安人 山口県 萩市 （松下・他）		ｼﾞｰｺﾝﾎﾞ 平安人 山口県 萩市 （松下）
		ST-01	1号		S-040	S-003	16号墳	72号墳1	155号墳A
1.	最大長	447	–		–	–	–	–	–
2.	自然位全長	–	–		–	–	–	–	–
6.	骨体中央矢状径	29	–		28	34	–	26(左)	28
7.	骨体中央横径	23	–		27	27	–	27(左)	25
8.	骨体中央周	82	–		87	98	–	83(左)	83
9.	骨体上横径	30	30	(左)	31	–	31	29	28
10.	骨体上矢状径	21	22	(左)	24	–	24	21	24
8/2.	長厚示数	–	–		–	–	–	–	–
6/7	骨体中央断面示数	126.09	–		103.70	125.93	–	96.30(左)	112.00
10/9	上骨体断面示数	70.00	73.33	(左)	77.42	–	77.42	72.41	85.71

二本木（1）＝二本木・合同庁舎跡
二本木（3）＝二本木・さつま荘跡

表6　脛骨(男性、右、mm)(Table 6. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

		新屋敷 古代 熊本県 熊本市 （松下・他）	二本木（1） 古代人 熊本県 熊本市 （松下・他）	二本木（3） 古代人 熊本県 熊本市 （松下・他）	二本木・春日 中世人 熊本県 熊本市	二本木（2） 中世人 熊本県 熊本市 （松下・他）	塚　原 中世人 熊本県 城南町 （内藤）	大江111次 中世人 熊本県 熊本市 （松下・他）	花岡木崎 中世人 熊本県 芦北町 （松下）
		ST-01	S-040	S-003	S-021	S-004	1号	1号	S-12
8.	中央最大径	34	32(左)	32	28	31	25	30	32
9.	中央横径	21	23(左)	21	18	20	20	23	24
10.	骨体周	85	87(左)	84	74	81	75	83	89
10b.	最小周	75	81(左)	−	−	−	−	75	79(左)
9/8	中央断面示数	61.76	71.88(左)	65.63	64.29	64.52	80.00	76.67	75.00

二本木・春日＝二本木春日第11次調査区1区
二本木（1）＝二本木・合同庁舎跡
二本木（2）＝二本木・合同庁舎跡2区
二本木（3）＝二本木・さつま荘跡

表7　推定身長値（男性、右、cm）(Table 7. Comparison of estimated male statures)

		新屋敷 古代 熊本県 熊本市 （松下・他）	立　石 中世人 大分県 宇佐市 （内藤）		花岡木崎 中世人 熊本県 芦北町 （松下・他）	尾窪 中世人	尾窪 中世人	尾窪 中世人	尾窪 中世人	尾窪 中世人	尾　窪 中世人 大分県 （内藤）	
		ST-01	n	M	S-12	No.1	No.2	No.6	No.31	No.39	n	M
Pearsonの式	上腕骨	−	1	152.25	−	−	−	152.25	−	−	1	152.25
	橈骨	−		−	−	−	−	−	−	−		−
	大腿骨	165.34	1	158.01	162.15	161.02	156.60	156.13	162.71	155.75	5	158.44
	脛骨	−	1	(154.70)	−	−	159.21	−	−	−	1	159.21
藤井の式	上腕骨	−	1	151.92	−	−	−	−	−	−		−
	橈骨	−		−	−	−	−	−	−	−		−
	大腿骨	165.31	1	155.68	161.11	−	−	−	−	−		−
	脛骨	−		−	−	−	−	−	−	−		−

要　約

熊本市新屋敷１丁目に所在する新屋敷遺跡の発掘調査が、2009年度（平成21年度）におこなわれ、古代に属する人骨が１体出土した。保存状態は古代人骨としては比較的良好で、人類学的観察や計測をおこない、次のような興味ある所見を得た。

1. 今回の発掘調査で出土した１体の人骨は古代（８～９世紀）に属する熟年・男性骨である。
2. 埋葬遺構は土壙墓で、埋葬姿勢は仰臥で、肘関節も膝関節もおおむね伸展状態であった。
3. 副葬品は右側の大腿骨の下から検出された鉄製品１点のみである。
4. 頭蓋長幅示数は95.03となり、頭型は超短頭型である。
5. 上腕骨はやや太く、三角筋粗面の発達も良好であるが、骨体の扁平性は弱い。
6. 大腿骨は長く、骨体は細いが、骨体中央断面示数は126.09（右）となり、骨体両側面の後方への発達はきわめて良好で、骨体上部はきわめて扁平である。
7. 脛骨の径も大きく、骨体はかなり扁平である。
8. 大腿骨からの推定身長値は165.34cmで、高身長である。
9. 本古代人は、頭型が超短頭型で、大腿骨には縄文早・前期人並みの柱状性がみられ、骨体上部がかなり扁平で、脛骨には強い扁平性が認められ、高身長であったが、このような特徴を示す古代人はもとより中世人でも見あたらない。二本木（さつま荘跡）S-003の大腿骨は骨体が著しく太く、柱状性の強い大腿骨で、これも古代人である。古代人の保存状態はこれまで悪いものが多かったので、その特徴が明らかではなかったが、古墳人や中世人からは予想もできなかった特徴が次第に明らかになりつつある。このような特徴がどの程度普遍性をもつのか、これから検討していく必要がある。

とくに超短頭型がどのようにして獲得されたのか、あるいは招来されたのかは、かなり重要である。

今後の課題は多い。

謝辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会の皆様に感謝致します。

参考文献

1. Martin-Saller，1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag，Stuttugart：429-597.
2. 松下孝幸、1980：熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺Ⅰ（熊本県文化財調査報告第 45 集）：145-159.
3. 松下孝幸・他、1983：山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。見島ジーコンボ古墳群（山口県埋蔵文化財調査報告 73）：32-36.
4. 松下孝幸、1985：山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－。山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ：83-90.
5. 松下孝幸、2001：熊本県深田村灰塚遺跡出土の中世人骨。灰塚遺跡（Ⅱ）（熊本県文化財調査報告第 197 集）：239-245.
6. 松下孝幸、2004：熊本県西合志町船入遺跡出土の中世人骨。船入遺跡　一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の調査（熊本県文化財発掘調査報告第 217 集）：91-97.
7. 松下孝幸、2005：熊本市二本木遺跡群第 18 次調査出土の古代・近世人骨。二本木遺跡群Ⅰ－第 18 次調査区発掘調査報告書－：41-46.
8. 松下孝幸、2006：熊本市大江（学苑）遺跡群出土の平安時代火葬骨。大江遺跡群Ⅱ（熊本県文化財調査報告第 231 集）：80-84.
9. 松下孝幸、2007a：熊本市古町遺跡第 5 次調査区出土の平安時代人骨。熊本市埋蔵文化財調査年報第９号：148-152.
10. 松下孝幸、2007b：熊本市大江遺跡群第 97 次調査区出土の平安時代人骨。大江遺跡群Ⅵ（―第 97 次・第 106 次調査区発掘報告書 -）：114-117.
11. 松下孝幸、2007c：熊本市二本木遺跡群第 26 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群Ⅲ－二本木遺跡群第 26 次調査区発掘調査報告書－：126-129.
12. 松下孝幸、2007d：熊本市二本木遺跡群第 13 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群Ⅱ－二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書－：381-393.
13. 松下孝幸、2007e：熊本市二本木遺跡群第 27 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群Ⅳ（二本木遺跡群第 27 次調査区発掘調査報告書）：79-84.
14. 松下孝幸・他、2008a：熊本市二本木遺跡群第 28 次調査区出土の古代・中世以降人骨。二本木遺跡群Ⅴ〔二本木遺跡群第 28 次調査区（E~I･K･L･P 地点）発掘調査報告書〕〔熊本駅西土地区画整理事業にともなう発掘調査報告（２）〕：178-183.
15. 松下孝幸・他、2008b：熊本市神水遺跡群第 41 次調査区出土の中世人骨（歯）。神水遺跡Ⅹ（第 41 次調査区発掘調査報告書）（都市計画道路船場・神水線建設に伴う埋蔵文化財調査報告９）：103-105.
16. 松下孝幸・他、2009：熊本市大江遺跡群第 111 次調査区出土の中世人骨。熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成 20 年度－：117-124.

17. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群 41 次調査区出土の古代人骨。（投稿中）

18. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群（合同庁舎）出土の古代・中世人骨。（投稿中）

19. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群 40 次調査区Ｆ地点出土の古代・中世人骨。（投稿中）

20. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区出土の古代・中世人骨。（投稿中）

21. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区３区出土の古代・中世人骨。（投稿中）

22. 松下真実・他、熊本市二本木遺跡群（合同庁舎２区）出土の古代・中世人骨。（投稿中）

23. 故松野茂・他、1970：熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌、44：999-1016.

24. 永井昌文、1965：荒尾市淨業寺中世人骨について。淨業寺と小代氏（荒尾市文化財報告第１集）：51-53.

25. 内藤芳篤、1973：人骨。尾窪－熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査（熊本県文化財調査報告 12）：62-78.

26. 内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾５号墳出土の人骨について。塚原（熊本県文化財調査報告第 16 集）：317-322.

27. 内藤芳篤・他、1978：杉谷遺跡出土の中世人骨。大園山・杉谷遺跡（熊本県荒尾市文化財調査報告第３集）：116-122.

表8　脳頭蓋(mm)(Calvaria)

		新屋敷 ST-01 男性
1.	頭蓋最大長	161
8.	頭蓋最大幅	153
17.	バジオン・ブレグマ高	–
8/1	頭蓋長幅示数	95.03
17/1	頭蓋長高示数	–
17/8	頭蓋幅高示数	–
1+8+17/3	頭蓋モズルス	–
5.	頭蓋底長	–
9.	最小前頭幅	99
10.	最大前頭幅	123
11.	両耳幅	125
12.	最大後頭幅	112
13.	乳突幅	103
7.	大後頭孔長	–
16.	大後頭孔幅	–
16/7	大後頭示数	–
23.	頭蓋水平周	494
24.	横弧長	313
25.	正中矢状弧長	–
26.	正中矢状前頭弧長	–
27.	正中矢状頭頂弧長	122
28.	正中矢状後頭弧長	114
29.	正中矢状前頭弦長	–
30.	正中矢状頭頂弦長	104
31.	正中矢状後頭弦長	103
29/26	矢状前頭示数	–
30/27	矢状頭頂示数	85.25
31/28	矢状後頭示数	90.35

表9　上腕骨(mm)(Humerus)

		新屋敷 ST-01 男性
1.	上腕骨最大長(右)	–
	(左)	–
2.	上腕骨全長(右)	–
	(左)	–
3.	上端幅(右)	–
	(左)	–
3(1).	横上径(右)	–
	(左)	–
4.	下端幅(右)	–
	(左)	–
5.	中央最大径(右)	22
	(左)	22
6.	中央最小径(右)	17
	(左)	18
7.	骨体最小周(右)	–
	(左)	61
7(a).	中央周(右)	65
	(左)	67
8.	頭周(右)	–
	(左)	–
9.	頭最大横径(右)	–
	(左)	–
10.	頭最大矢状径(右)	–
	(左)	–
11.	滑車幅(右)	–
	(左)	–
12.	小頭幅(右)	–
	(左)	–
12(a).	滑車幅および小頭幅(右)	–
	(左)	–
13.	滑車深(右)	–
	(左)	–
14.	肘頭窩幅(右)	–
	(左)	–
15.	肘頭窩深(右)	–
	(左)	–
6/5	骨体断面示数(右)	77.27
	(左)	81.82
7/1	長厚示数(右)	–
	(左)	–

表10　橈骨(mm)(Radius)

		新屋敷 ST-01 男性 (左)
1.	最大長	–
1b.	平行長	–
2.	機能長	–
3.	最小周	–
4.	骨体横径	15
4a.	骨体中央横径	15
4(1).	小頭横径	–
4(2).	頚横径	–
5.	骨体矢状径	11
5a.	骨体中央矢状径	11
5(1).	小頭矢状径	–
5(2).	頚矢状径	–
5(3).	小頭周	–
5(4).	頚周	–
5(5).	骨体中央周	43
5(6).	骨下端幅	–
3/2	長厚示数	–
5/4	骨体断面示数	73.33
5a/4a	中央断面示数	73.33

骨(mm)(Tibia)

	新屋敷 ST-01 男性
脛骨全長(右)	–
(左)	–
脛骨最大長(右)	–
(左)	–
脛骨長(右)	–
(左)	–
顆距間距離(右)	–
(左)	–
最大上端幅(右)	–
(左)	–
上内関節面幅(右)	–
(左)	–
上外関節面幅(右)	–
(左)	–
上内関節面深(右)	–
(左)	–
上外関節面深(右)	–
(左)	–
最大下端幅(右)	–
(左)	–
下端矢状径(右)	–
(左)	–
中央最大径(右)	34
(左)	–
栄養孔位最大径(右)	–
(左)	33
中央横径(右)	21
(左)	–
栄養孔位横径(右)	–
(左)	21
骨体周(右)	85
(左)	–
栄養孔位周(右)	–
(左)	86
最小周(右)	74
(左)	–
中央断面示数(右)	61.76
(左)	–
栄養孔位断面示数(右)	–
(左)	63.64
長厚示数(右)	–
(左)	–

表13 推定身長値(cm)(Stature)

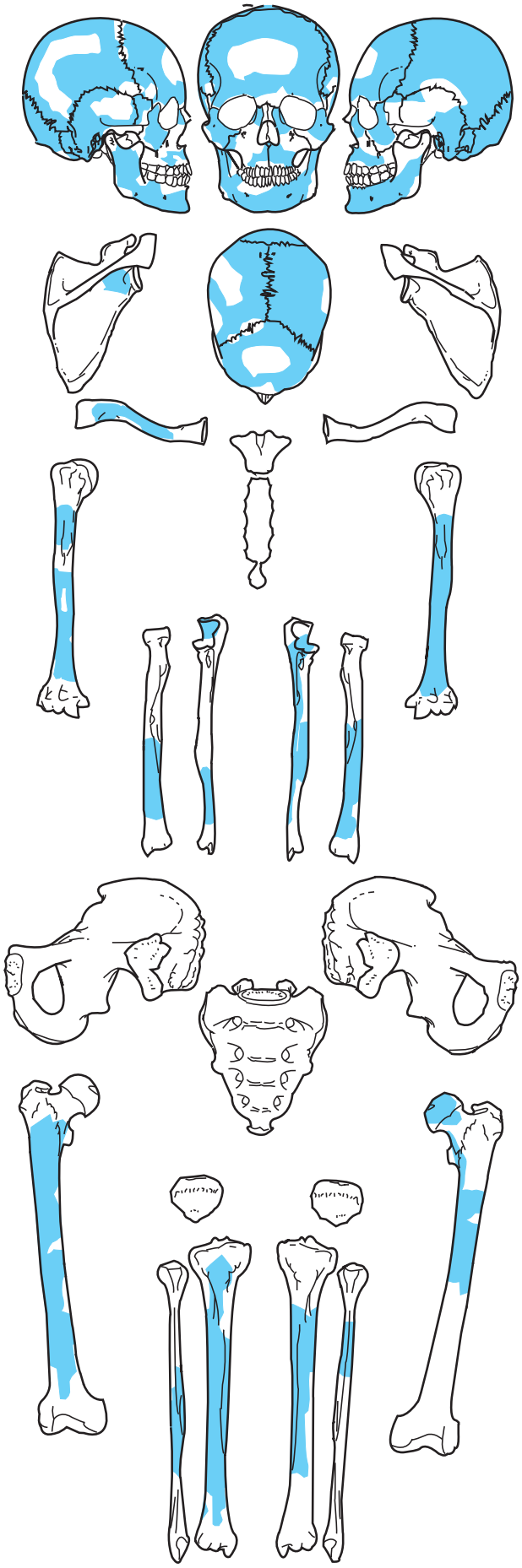
			新屋敷 ST-01 男性
Pearsonの式	上腕骨	(右)	–
		(左)	–
	橈骨	(右)	–
		(左)	–
	大腿骨	(右)	165.34
		(左)	–
	脛骨	(右)	–
		(左)	–
藤井の式	上腕骨	(右)	–
		(左)	–
	橈骨	(右)	–
		(左)	–
	大腿骨	(右)	165.31
		(左)	–
	脛骨	(右)	–
		(左)	–

表14 中央周の比(男性)

		新屋敷 ST-01 男性
橈骨/尺骨	(右)	–
	(左)	–
橈骨/上腕骨	(右)	–
	(左)	64.18
鎖骨/上腕骨	(右)	–
	(左)	–
上腕骨/大腿骨	(右)	79.27
	(左)	80.72
上腕骨/脛骨	(右)	76.47
	(左)	–
脛骨/大腿骨	(右)	103.66
	(左)	–
腓骨/脛骨	(右)	–
	(左)	–

表15 形態小変異(Non-metoric crania variants)

	新屋敷 ST-01 男性 右	左
1. Medial palatine canal(内側口蓋管)	/	/
2. Pterygospinous foramen(翼棘孔)	/	/
3. Hypoglossal canal bridging(舌下神経管二分)	/	/
4. Clinoid bridging(床状突起間骨橋)	/	/
5. Condylar canal absent(顆間欠如)	/	/
6. Tympanic dehiscence,Foramen of Huschke(＞1mm)(フシュケ孔、鼓室骨裂孔)	/	–
7. Jugular foramen bridging	/	/
8. Precondylar tubercle	/	/
9. Supra-orbital foramen(incl.frontal foramen)(眼窩上孔)	/	/
10. Accesory infraorbital foramen(副眼窩下孔)	/	/
11. Zygo-facial foramen absent	–	–
12. Aural exostosis(外耳道骨腫)	–	–
13. Metopism(前頭縫合)	–	
14. Os incae(インカ骨)	–	
15. Ossicle at the lambda(ラムダ小骨)	–	
16. Parietal notch bone(頭頂切痕骨)	/	/
17. Transverse zygomatic suture(＞5mm)	/	/
18. Asterionic ossicle	–	–
19. Occipitomastoid ossicle	–	–
20. Epipteric ossicle	/	/
21. Frontotemporal articulation	/	–
22. Biasterionic suture(＞10mm)	–	–
23. Mylohyoid bridging(顎舌骨筋神経溝骨橋)	/	–
24. Accessory mental foramen(副オトガイ孔)	/	/
25. Mandibular torus(下顎隆起)	/	–
26. 滑車上孔(上腕骨)	/	–



新屋敷ST-01（男性・熟年）

図２　人骨の残存図（アミかけ部分）

(Fig. 2 Regions of preservasion of the skeleton. Shaded sreas are preserved.)

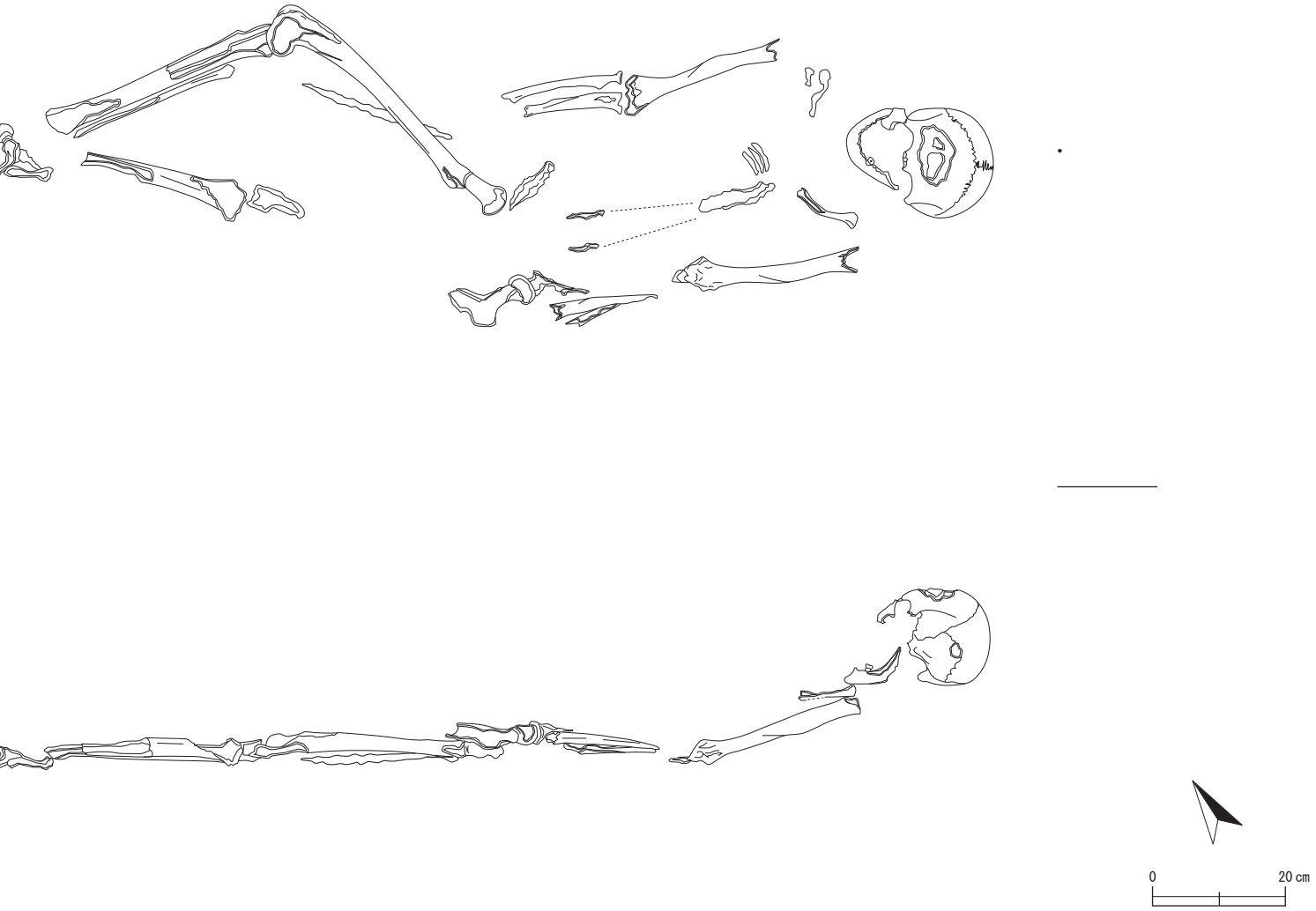
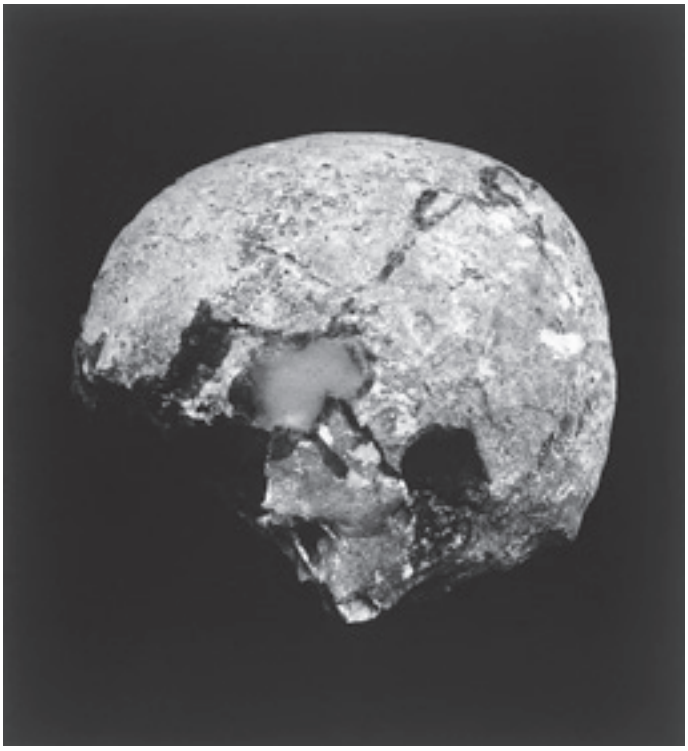


図３　新屋敷ST-1人骨出土状況図

頭蓋上面（Superior view of the skull）

頭蓋正面（Frontal view of the skull）



頭蓋側面（Lateral view of the skull）

新屋敷　ST-01（男性・熟年）

(The Shinyashiki ST-01, mature male)

ower limb）

上肢骨（Bones of the upper limb）

新屋敷　ST-01（男性・熟年）

（The Shinyashiki ST-01, mature male）

第６章　まとめ

古代

今回の調査で注目される遺構は６区ＳＤ２、６区ＳＤ６（７区ＳＤ１０）、７区ＳＤ８、６区ＳＣ１であろう。まとめとして４遺構についての自分なりの考察とともに、主要遺構の時期について書きたい。

６区ＳＤ２

ＳＤ２はもともと白川方向へ向かう、切り通しの石敷き道路状遺構であったと思われる。その構築の時期は石敷きの固定のために入れられた土から出土した遺物から８世紀後半であろう。

川原石の集石状遺構について、位置は溝左岸上流で、高さは３層上面から約１～１．５ｍ程下がったところが集石状遺構となっている。溝を渡るため、道路状遺構へ下りるため、護岸のため、単に川原石を捨てたものとも考えられる。しかし、石を固定するために入れられた土の層から、これまで新屋敷遺跡で出土していない須恵器大甕が４個体出土すること、多くの獣骨が出土することからも、道路状遺構廃絶後は、溝全体が何らかの祭祀遺構であった可能性がある。集石状遺構よりも後年の遺構と思われるが、溝がある程度埋まった状況での遺構と思われる土壙墓が、溝内の北西部から出土する。

集石状遺構の崩れた石が、道路状遺構の石敷きの直上ではなく、２０～５０㎝程上の層から出土していることから、集石状遺構の崩れは、道路を使わなくなってから後であると思われる。

ＳＤ２の埋没は、遺物が底面だけでなく埋土の上層からも出土することから、ある程度時間がかかって埋没したと考えられる。集石状遺構が埋まった土にＳＤ４が掘られる。ＳＤ４沿いに連続硬化面があることから、通路であったと思われるが、ＳＤ４については何のための溝かは分からない。

６区ＳＤ６（７区ＳＤ１０）

ＳＤ６は底面、側面に鉄分・マンガンと思われる沈着層が残ることから、長い期間、水路として使われていたものと考えられる。ＳＤ２より北側には確認できず、南西方向は７区の調査区端まで直線に伸びていることから、南西側からの水の取り入れと考えられる。南西側から取り入れられた水はどこへ行くのだろうか。ＳＤ２へ流れていったとも考えられるが、ＳＤ２の右岸側に水の流れで浸食された跡は見られなかった。このため、ＳＤ６がＳＤ２に壊されると考えている。ＳＤ２より北側には伸びていないことからＳＤ２から壊される以前はどのような流れであったのだろうか。

底面は凸凹もあるがほぼ平坦であるため、水の流れは弱いか溜まっていた可能性がある。鉄分・マンガン層のすぐ上にある黄褐色埋土は、これまでの新屋敷遺跡の調査で見たことのない土であった。この土はＳＤ６を流れる水とともに入ってきたのであろう。黄褐色埋土中には遺物は出土しないため、機能していた時期はよく分からない。ＳＤ６埋土上にも遺構が残存することからも比較的古い溝と思われる。当時の灌漑施設であろうか。

７区ＳＤ８

道路としての使用と思われ、硬化面が３面残っていた。硬化面は道路一面に広がらないため、時期によって片側ずつの使用であったようである。

７区ＳＤ８は白川に向かう方向に伸びている。６区ＳＤ２も白川に向かうが、道路状遺構は白川向きに下っている。しかし、ＳＤ８は比較的平坦で下ってはいない。白川が古代にどのような流れであったのか不明であるが、急に行き止まりになるのであろうか。それとも、白川の流れが今と異なり、ＳＤ８はまだ先に伸びるの

であろうか。

道路硬化面を形成している土内に「萩尾型」と思われる須恵器椀が出土した。硬化面土内に他に年代を示唆できる遺物が出土しなかったこと、６区ＳＤ６を壊すことから、時代を８世紀前半と特定することをためらった。

６区ＳＣ１

畝の状態で残存していたのは珍しいと思われる。残念なのはウォーターフローテーションで植物依存体が検出できなかったことである。何らかの植物が育てられていたのか分かれば、当時の食生活についての一端を垣間見ることができたと思う。３層上面でＳＤ７が検出されたことと、ＳＣ１はＳＤ２が埋まったあとまで使われているものであることから、古代でも比較的新しい時期ではないかと思われる。

主要遺構の時期

今回出土した古代遺構は、大きく３つの時期に分けられるようである。時期について、出土遺物、重複関係から竪穴建物と溝、畑についてまとめると下記のようになる。同時期とまとめている遺構についても、重複関係があり、同時に機能していたわけではない。

・７世紀後半～８世紀前半

６区ＳＤ８　６区ＳＤ６（７区ＳＤ１０）（前の時期の可能性あり）

・８世紀中葉～後半まで

６区ＳＩ１０６　６区ＳＩ１０４　７区ＳＤ８道路状遺構（前の時期の可能性あり）

この頃までに６区ＳＤ６（７区ＳＤ１０）は埋没したのではないか。

・８世紀後半から９世紀初頭

６区ＳＩ１０２　６区ＳＤ２内道路状遺構

・９世紀前半・中葉以降

６区ＳＤ２集石状遺構　集石状遺構が崩れ埋没した後６区ＳＤ４

７区ＳＩ６　７区ＳＩ５　７区ＳＩ４　７区ＳＩ８　７区ＳＩ１１　７区ＳＩ３　７区ＳＩ９

６区ＳＣ１　６区ＳＣ２　６区ＳＤ２内ＳＴ１（畑と土壙墓はＳＤ２埋没がある程度進んだ頃の遺構と思われる）

・時期不明　６区ＳＩ１　６区ＳＩ１０１　６区ＳＩ１０３　７区ＳＩ１　７区ＳＩ１２　７区ＳＩ２

なお掘立柱建物７区ＳＢ３については、出土遺物が年代を示唆する物でなかったため不明である。

近現代

６区北側付近は以前、江戸時代末期の国学者中島広足居跡が建っていた場所である。中島広足については、白川小に保存してある「国学者中島広足旧居」の案内板の記載内容を紹介する。

「国学者中島廣足旧居」

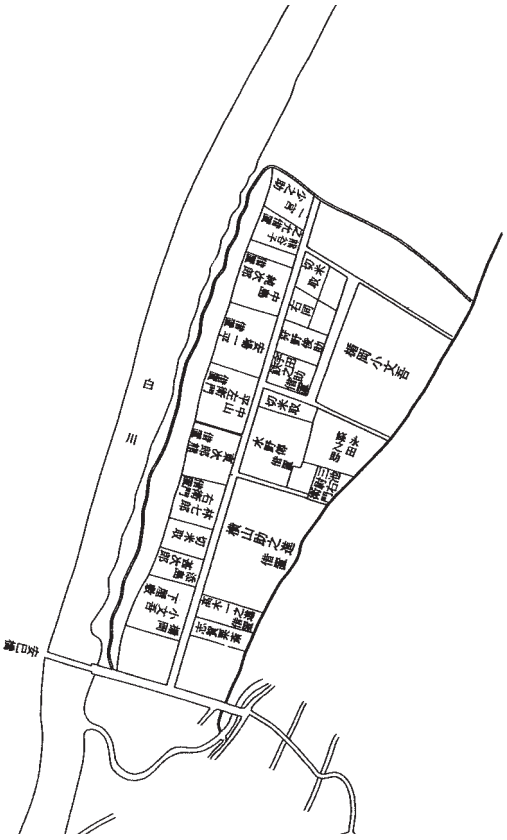
中島廣足（１７９２～１８６４）は通称を嘉太郎と言い、食禄２００石の細川藩士である。１１歳で家を継いだが、病のため２４，５歳のとき隠居して家を妹婿に譲り、以来長瀬真幸について国学を学び日本的な大家となった。

のち長崎に住んで家塾を開くこと２０年余におよび、安政４年（１８５７）には門弟達に招かれて大阪に移り、文名をもって天下に知られた。文久元年（１８６１）には細川藩から懇望されて帰国し、国学師範となった。そのとき賜ったのがこの新屋敷の家である。墓は万日山上に建っている。

熊本市

幕末の古地図「熊本所分絵図　飽田　託摩之内屋敷絵図」では、中島広足の名はなく、同姓の中島純次郎の名が残っていた。「肥後細川藩拾遺：新・肥後細川藩侍帳」のＨＰで、中島純次郎は広足の子孫であることが分かった。

ゼンリン熊本市住宅地図（１９７６）では、調査区に以前建っていた武田氏宅に中島広足旧居と括弧書きしてあり、それが４２ｍ・ｎ、４３ｍ・ｎグリッド付近であることから、ＳＢ２が中島広足居の基礎の可能性が考えられる。しかし、明治１０年５月に熊本で発行された熊本焼場方角図では、新屋敷は西南戦争での焼失地域であることから、建て替えられたと考えられ、ＳＢ２が居の基礎部分とは言いづらい。



熊本所分絵図　飽田　託摩之内屋敷絵図

古地図は、デフォルメされているため縮尺等は分からないが、中島純次郎の居は、安巳橋が架けられて広がった新屋敷の武家屋敷の北側であることから、武家屋敷の北への広がりは５区付近まででではなかろうか、と思われる。しかし、安巳橋が架けられた安政４年（１８５７）は幕末であり、それ以降に建てられた武家屋敷は明治から平成にかけての宅地開発によって壊されている可能性が高く、判別するのは難しい。

太平洋戦争中の遺構であるが防空壕が出土した。戦争の歴史の一端として報告させていただきたい。

今回の報告でも多くの不明な点、疑問点が残った。過去の調査報告を振り返り、また、今後の調査報告を待ち、改めて検討していきたい。

参考文献

建設省河川局　２０００　「白川水系河川整備基本計画」

熊本市新熊本市史編纂室　１９９６　「新熊本市史　史料編　第一巻　考古資料」

網田龍生　１９９４　「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会

網田龍生　１９９４　「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究Ⅳ－熊本大学文学部考古学研究室創設２０周年記念論文集－』　龍田考古会

網田龍生　２００３　「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ－熊本大学文学部考古学研究室創設３０周年記念論文集－』龍田考古会

網田龍生　１９９３　「古代肥後の土器」『大江遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会

美濃口雅朗　１９９４　「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会

木村元浩　２００２　「大江遺跡群」　熊本県文化財調査報告第２１１集

馬場正弘　２００６　「大江遺跡群Ⅲ」　熊本県文化財調査報告第２３２集

松本健郎他　１９８０　「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」熊本県調査報告第４８集　熊本県教育委員会

美濃口雅朗・諸富国博　２００７　「大江遺跡群Ⅵ」　熊本市教育委員会

網田龍生・美濃口雅朗・金田一精・林田和人・岩谷史記　２００７　「二本木遺跡群Ⅱ」　熊本市教育委員会

網田龍生・美濃口雅朗　１９９９　「新屋敷遺跡第１次調査区」「新屋敷遺跡第４次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１０年度―』熊本市教育委員会

林田和人　２００３　「新屋敷遺跡第１１次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１３・１４年度―』熊本市教育委員会

網田龍生　２００４　「新屋敷遺跡第２次調査区」「新屋敷遺跡第１２次調査区」「新屋敷遺跡第２７次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１５年度―』熊本市教育委員会

松村真紀子　２００５　「新屋敷遺跡第１３次調査区」「新屋敷遺跡第１６次調査区」「新屋敷遺跡第３４次調査区」「新屋敷遺跡第３５次調査区」「新屋敷遺跡第３６次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１６年度―』熊本市教育委員会

岩谷史記　２００６　「新屋敷遺跡第４１次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１７年度―』熊本市教育委員会

美濃口雅朗　２００７　「新屋敷遺跡第２６次調査」「新屋敷遺跡第３３次調査」「新屋敷遺跡第４２次調査」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１８年度―』熊本市教育委員会

美濃口雅朗　２００８　「新屋敷遺跡第１５次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１９年度―』熊本市教育委員会

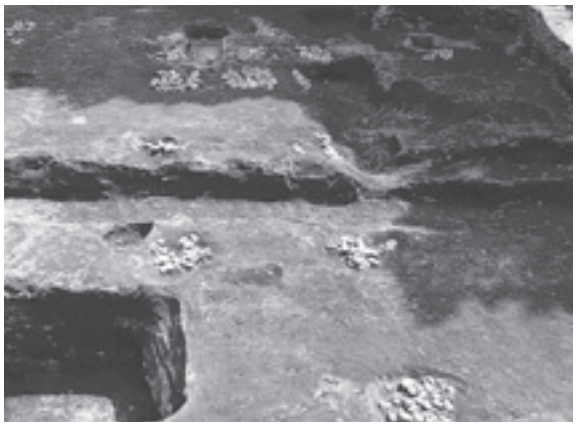
美濃口雅朗　２０１０　「新屋敷遺跡第４７次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成２１年度―』熊本市教育委員会

豊崎晃一　２０１２　「新屋敷遺跡第４８次調査区」『熊本市の文化財　第１２集　熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成２３年度―』熊本市教育委員会

文化庁編　２０１０　『発掘調査のてびき』　同成社

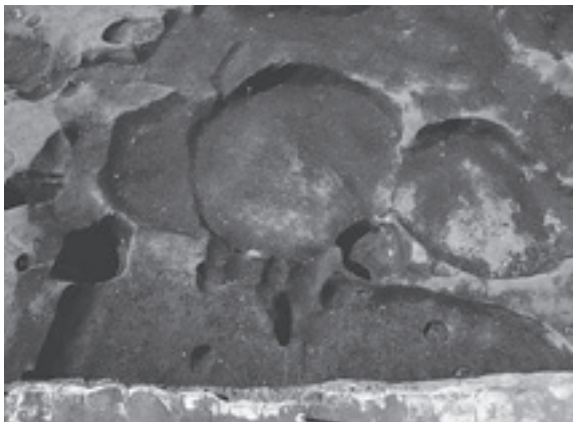
写 真 図 版

図版１


６区建物基礎地業跡ＳＢ２出土状況（北東から）

６区ＳＩ１硬化面出土状況

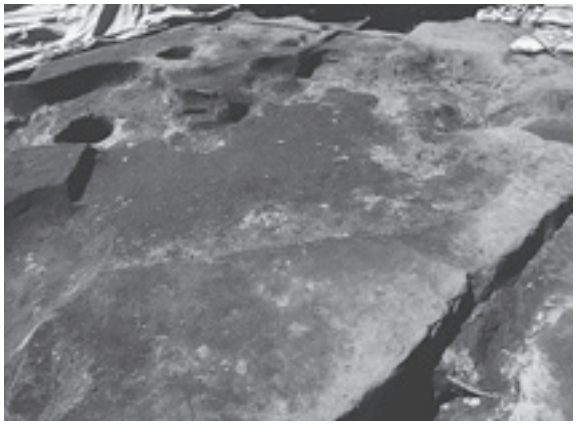
６区ＳＩ１かまど粘土残存状況

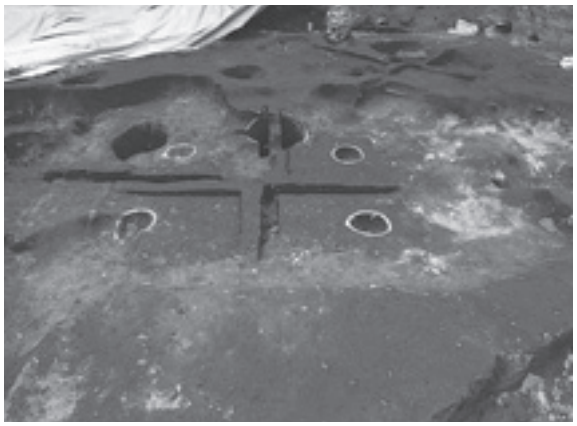

６区ＳＩ１完掘状況

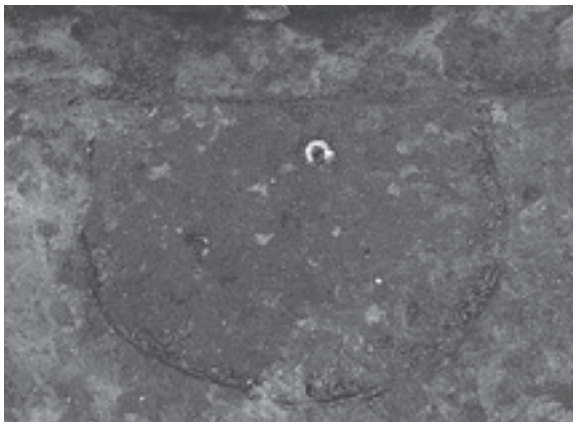
６区ＳＩ１０１完掘状況

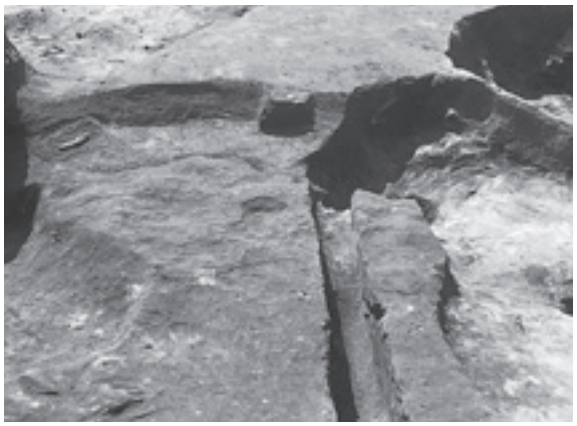
６区ＳＩ１０２硬化面出土状況

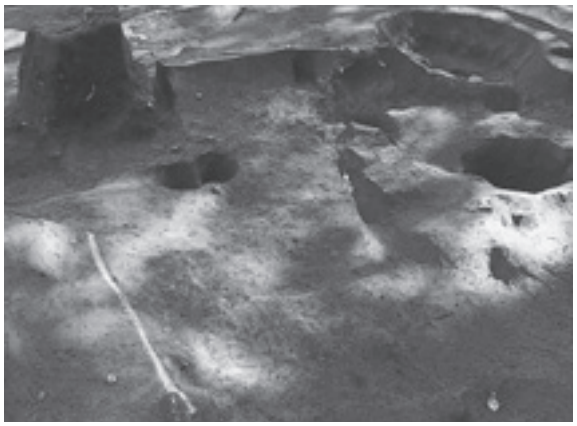
６区ＳＩ１０２かまど内遺物・粘土出土状況


６区ＳＩ１０２完掘状況


６区ＳＩ１０４機能面完掘状況

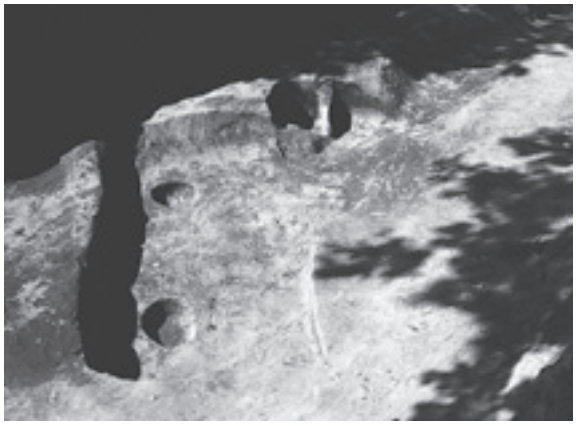

６区ＳＩ１０４鉄製品出土状況


６区ＳＩ１０６硬化面出土状況

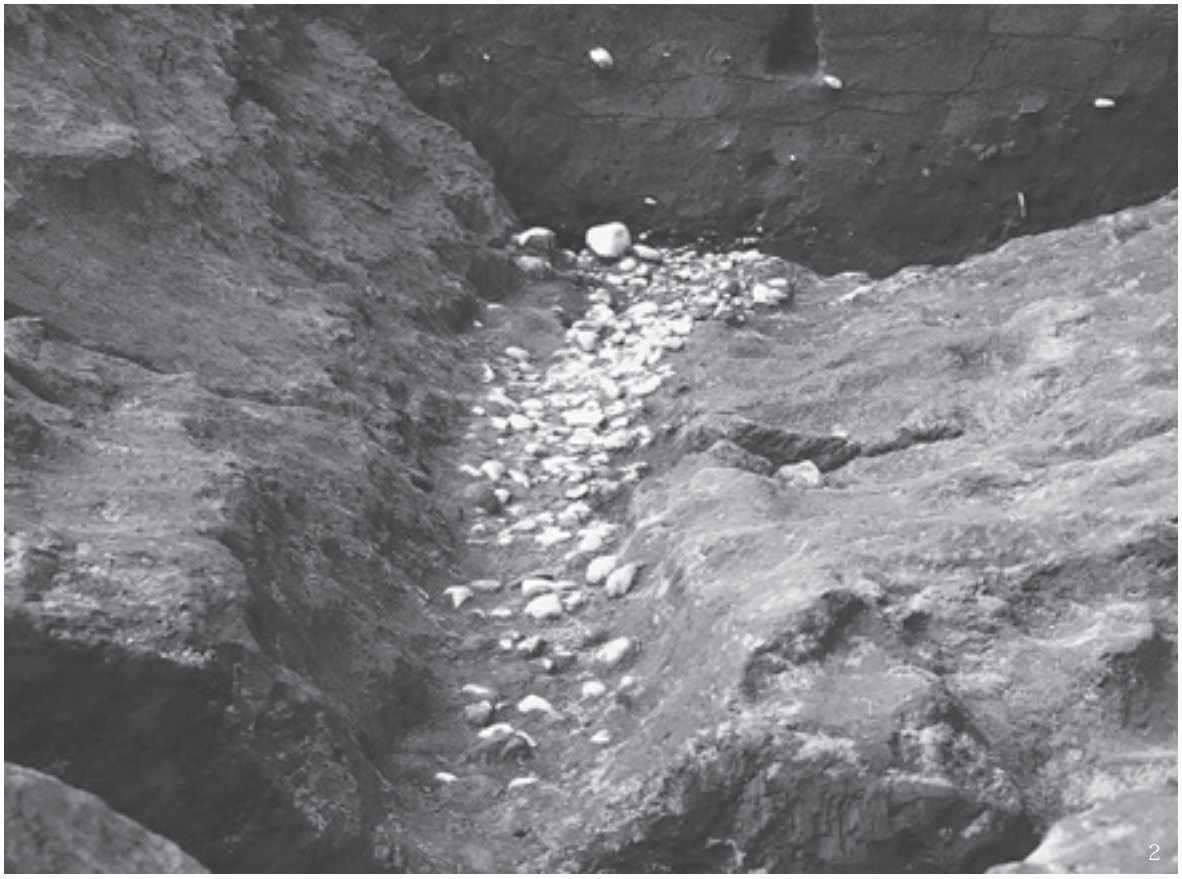

６区ＳＩ１０６完掘状況

６区ＳＩ１０３硬化面出土状況

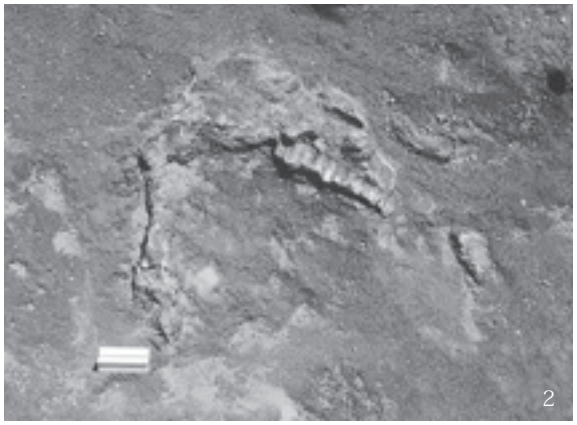
６区ＳＩ１０３かまど粘土残存状況

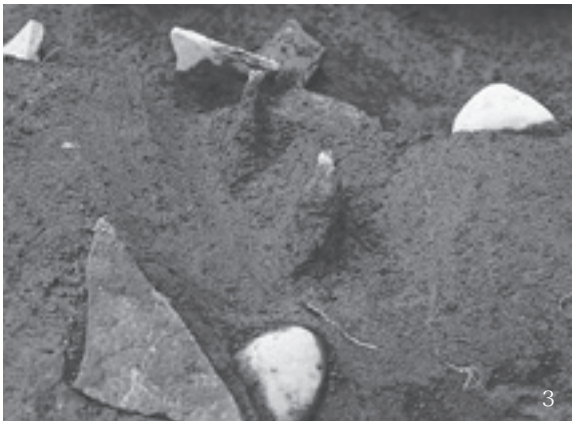

６区ＳＩ１０３完掘状況

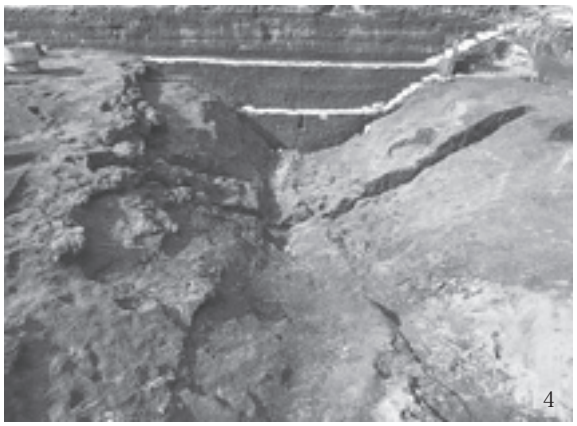
図版３



６区ＳＤ２内道路状遺構ＳＦ１出土状況　１．遠景（西より）２．近景（東より）

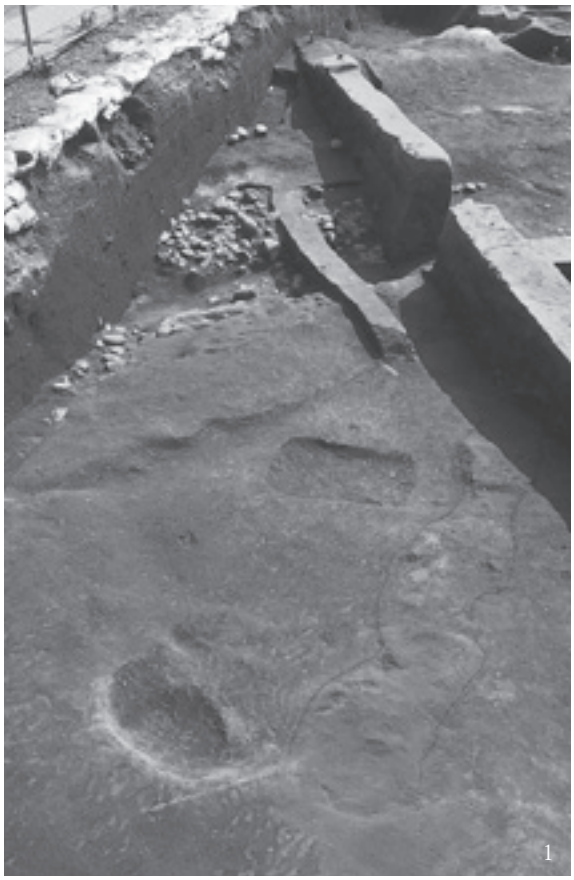


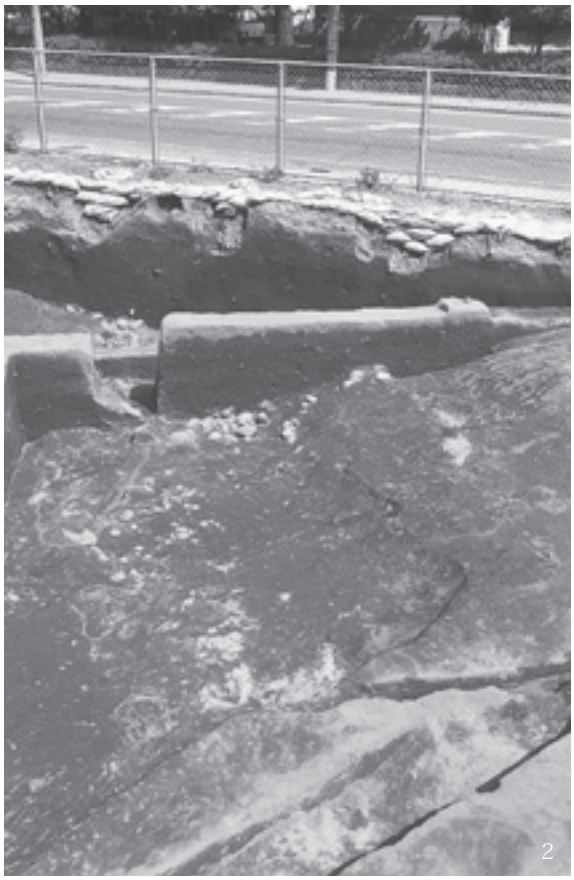




１．６区ＳＤ２内土壙墓ＳＴ１人骨出土状況
２．６区ＳＤ２埋土内獣骨出土状況
３．６区ＳＤ２埋土内遺物出土状況
４．６区ＳＤ２内道路状遺構検出状況（東より）

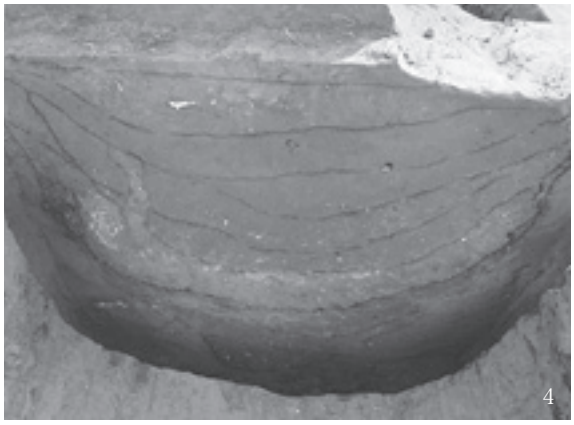
図版５





６区ＳＤ４付近連続硬化面出土状況　１．（北から）２．（南西から）

６区ＳＤ４完掘状況

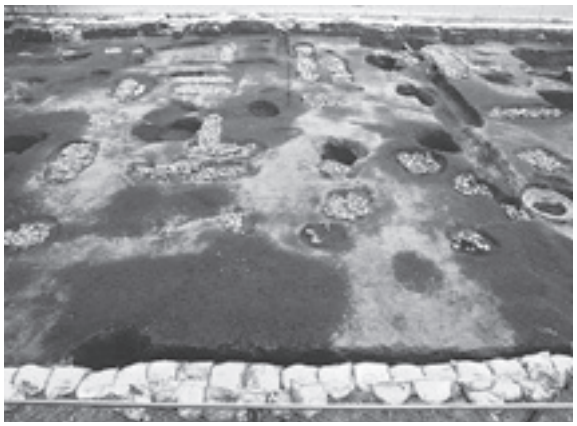


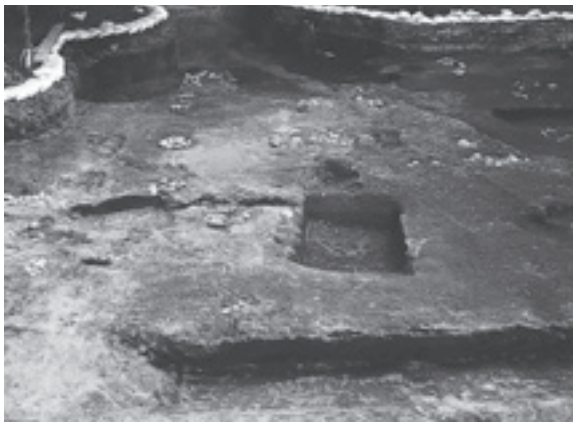
１．６区ＳＤ６鉄・マンガン層出土状況（南西から）
２．７区ＳＤ１０（６区ＳＤ６）鉄・マンガン層出土状況
（北東から）
３．６区ＳＤ６内柵列完掘状況
４．７区ＳＤ１０（６区ＳＤ６）土層断面

図版７

６区畝状遺構ＳＣ１出土状況

６区畝状遺構ＳＣ２検出状況


６区建物基礎地業跡ＳＢ１出土状況（北西から）


６区建物基礎地業跡ＳＢ３出土状況（北東から）

６区建物基礎地業跡ＳＢ４出土状況（南西から）

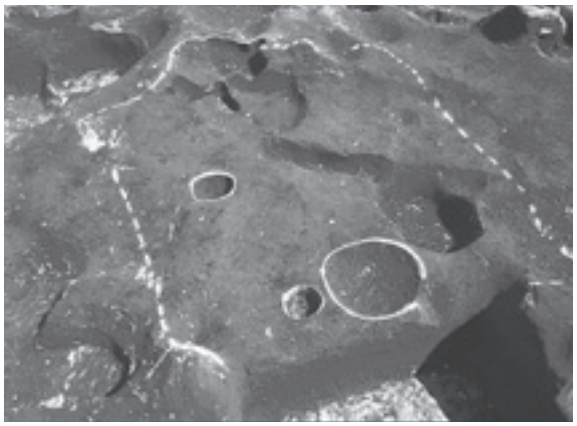
６区建物基礎地業跡ＳＢ４内井戸ＳＥ１出土状況(南から)

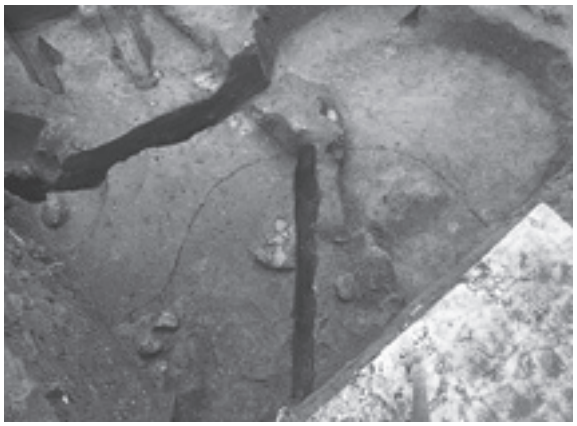
６区防空壕跡完掘状況（北東から）

７区ＳＩ２硬化面出土状況

７区ＳＩ２機能面完掘状況

７区ＳＩ１２かまど土層断面


７区ＳＩ１２完掘状況


７区ＳＩ３かまど出土状況

７区ＳＩ１１かまど粘土出土状況

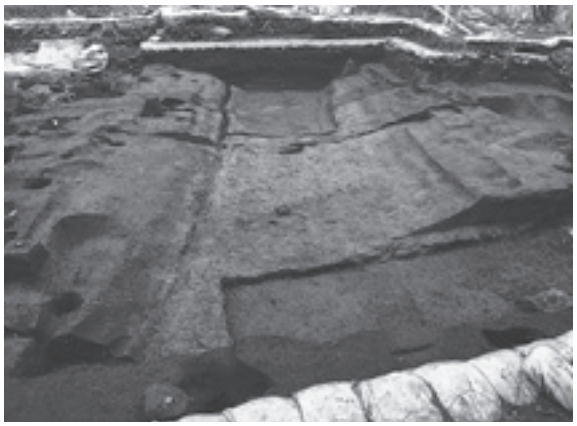
７区ＳＩ８完掘状況

７区ＳＩ４かまど粘土残存状況

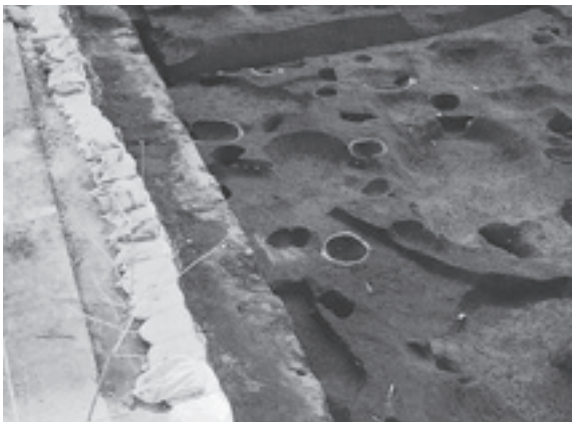
７区ＳＩ５硬化面出土状況

７区ＳＩ３～ＳＩ８・ＳＩ１１・ＳＩ１３完掘状況

７区ＳＩ９硬化面出土状況



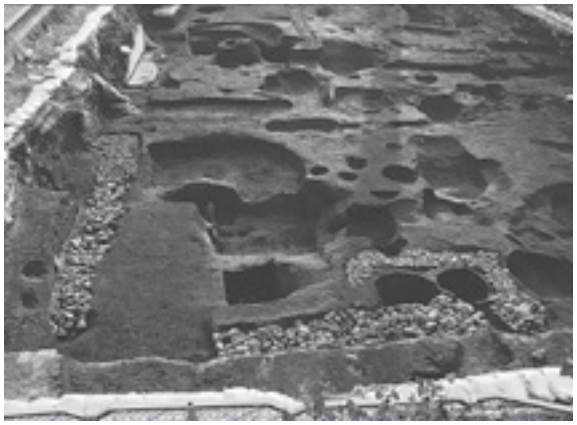
７区ＳＤ８内道路状遺構初期機能面出土状況



７区掘立柱建物ＳＢ３完掘状況

７区ＳＤ９完掘状況

７区建物基礎地業跡ＳＢ１出土状況



７区建物基礎地業跡ＳＢ２出土状況

７区井戸ＳＥ１出土状況

21-1

21-9
21-8

27-4

21-2

27-1

27-4（内）

21-3

27-2

27-6

21-4

27-2（底）

27-8

21-10

27-3

27-10

21-7

27-5

27-10（底）

図版11

27-11

32-1

32-6

27-12

32-2

32-7

27-13

32-3

32-8

27-14

32-3（底）

36-1

27-15

32-4

36-2

27-16

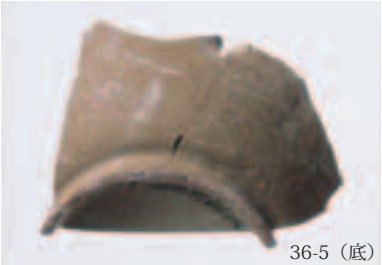
32-5

36-4

36-5

36-13

36-20


36-5（底）

36-14

36-21

36-7

36-15

36-22

36-8

36-16

37-1

36-11

36-18

37-2

36-12

36-19

37-3

図版13

37-4

37-9

37-19

37-4（底）

37-11

37-20

37-5

37-12

38-1

37-6

37-13

38-1（底）

37-7

37-14

38-2

37-8

37-15

38-3

38-4

38-9

38-14

38-5

38-10

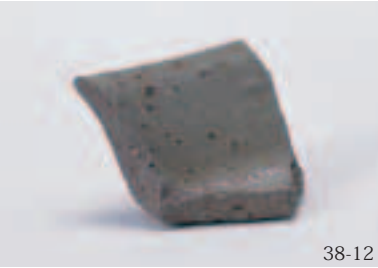
38-15

38-5（底）

38-11

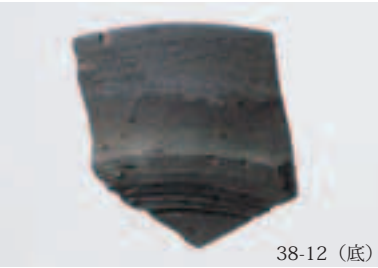
38-16

38-6


38-12

38-17

38-7


38-12（底）

38-18

38-8

38-13

38-19

図版15

38-20

41-3

41-7

38-21

41-4

41-10

38-22

41-5

41-11

39-1

41-6

41-13

41-1

41-8

41-15

41-2

41-8（底）

41-16

41-17

41-24

41-32

41-18

41-26

41-33

41-19

41-27

41-34

41-20

41-28

41-35

41-21

41-30

41-36

41-23

41-31

42-1

図版17

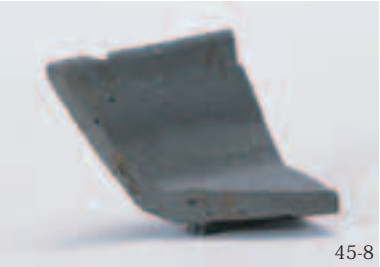
42-2

43-3

45-6

42-3

43-4


45-8

42-4

44-1

45-9

42-5

44-1（外）

45-10

42-6

45-1

45-11

43-2

45-4

45-12

45-13

45-22

46-6

45-14

45-23

46-7

45-15

46-1

51-1

45-16

46-1（外）

51-2

45-20

46-5

51-3

45-21

46-5（外）

51-4

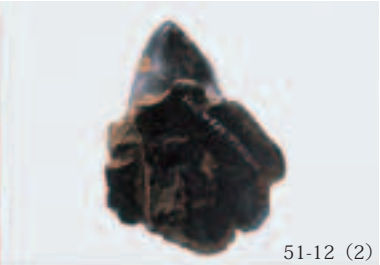
図版19

51-5

51-12（1）

52-7

51-8


51-12（2）

52-9

51-8（底）

52-2

52-16

51-9

52-3

52-18

51-10

52-4

52-19

51-11

52-5

52-22

52-21（左）

54-4

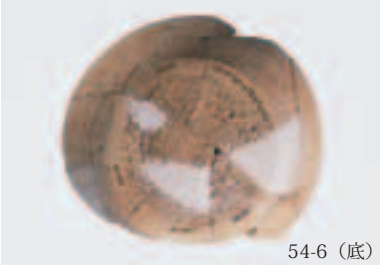
54-10

52-21（右）

54-6

54-10（底）

52-24

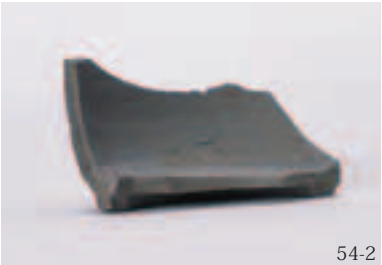

54-6（底）

54-11

54-1

54-7

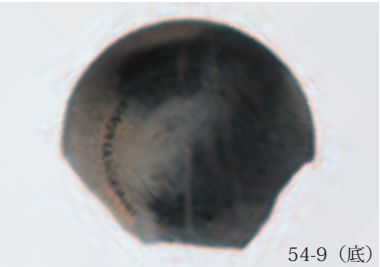
54-11（底）


54-2

54-9

54-12

54-3


54-9（底）

54-12（底）

図版21

54-13

56-1

56-10

54-16

56-3

56-11

54-17

56-6

56-12

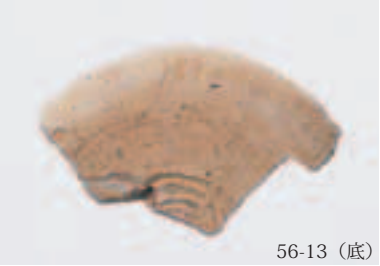
54-18

56-8

56-13

54-19

56-9


56-13（底）

54-20

56-9（底）

56-14

56-15

57-2

57-8

56-16

57-2（底）

57-16

56-17

57-3

未 22-1

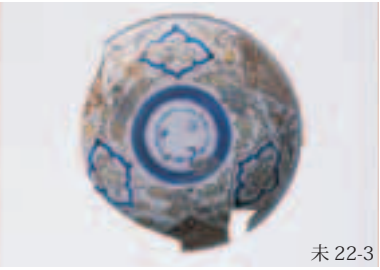
56-26

57-3（底）

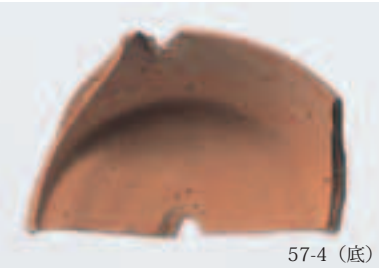
未 22-2

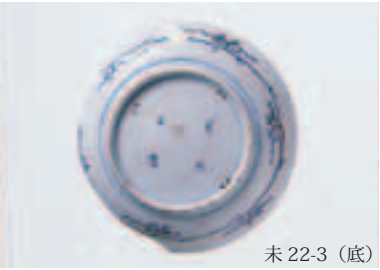
56-27

57-4


未 22-3

57-7


57-4（底）


未 22-3（底）

図版23

74-1

74-7

77-2

74-2

74-8

77-3

74-3

74-9

77-3（底）

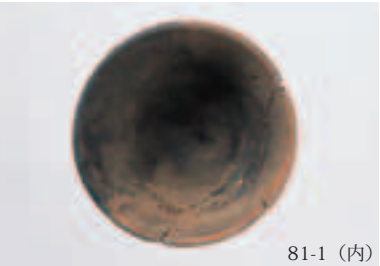
74-4

74-10

81-1

74-5

77-1


81-1（内）

74-6

77-1（内）

81-2

81-3

81-8

81-14

81-4

81-9

81-15

81-5

81-10

81-16

81-5（底）

81-11

81-17

81-6

81-12

81-18

81-7

81-13

81-19

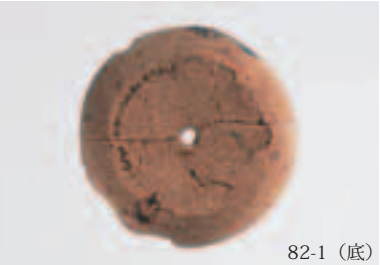
図版25

83-1

82-1

82-7

83-2


82-1（底）

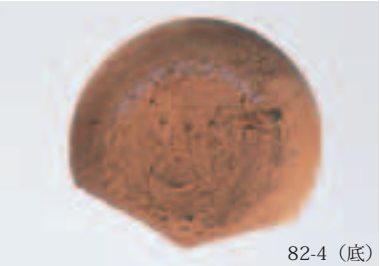
82-8

83-3

82-4

82-10

83-4


82-4（底）

82-11

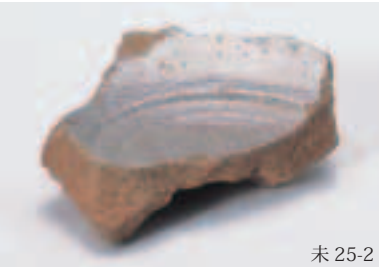
83-5

82-5

未 25-1

83-6

82-6


未 25-2

あとがき

新屋敷遺跡２の報告書が完成しました。

今回の発掘では、暑い中、作業員さんとともに大溝を調査しました。大溝は、掘り進めるなかで、わからないことを勉強し、調査員どおしで話し合い、また多くの方々にいろいろなご助言をいただき調査することができました。

今回の調査区でも埋蔵文化財の調査、整理をとおして、多くの感動、発見がありました。

この報告書が、地域の歴史を探るための基礎資料として、埋蔵文化財に対する理解と保護に役立てれば幸いです。

発掘調査作成時、整理報告書作成時とたいへん多くの方にご指導、ご協力をいただきました。おかげで何とか調査から報告書の作成まで行うことができました。本当にありがとうございます。

最後に、本文中で触れることができなかった実際の作業に携わられた方々の名前を記して、感謝の意を表したいと思います。（敬称略・五十音順）

発掘調査

今村明美　岡本久三夫　河野義勝　後藤まや　柴田やよひ　田上次敏　田上利子　土島安臣
中村孝昭　早田咲百合　松本晋治　三宅幸生　宮嶋徹　宮本厚　森川征子　森川護　森田登
森本敏夫

整理報告書作成

古閑知子　坂本貴美子　立石美代子　田中さつき　永山邦子　村田千穂　結城あけみ

報告書抄録

ふりがな	しんやしきいせき
書名	新屋敷遺跡２
副 書 名	国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第２８６集
編著者名	水上　正孝・前田　佳代子
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒８６２－８６０９　熊本県熊本市中央区水前寺６丁目１８番１号 TEL ０９６－３８３－１１１１（代）
発行年月日	２０１３年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しんやしきいせき 新屋敷遺跡	くまもとけんくまもとし 熊本県熊本市 ちゅうおうくしんやしき 中央区新屋敷 ちょうめ １丁目	201	282	32° 80’ 23″	130° 71’ 60″	20090514 ～ 20100331 20111108 ～ 20111129	６区 約1,470㎡ ７区 約530㎡	国土交通省白川河川改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新屋敷遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 柵跡 土坑 溝状遺構 道路状遺構 畑跡 土壙墓	古代須恵器 古代土師器 陶磁器	

要約	新屋敷遺跡は白川中流域左岸に位置する。今回の調査区は自然堤防上に立地する。白川河川改修工事に伴い、平成２１、２３年度に熊本県教育委員会が発掘調査を実施した。 主に古代の竪穴建物１８軒、掘立柱建物１棟を検出した。竪穴建物の時期は８世紀～９世紀に位置づけられる。出土遺物から、特に８世紀後半～９世紀中葉の建物が多い。掘立柱建物の時期は特定できなかった。調査区を横断する溝が検出され、底面に石敷きの道路状遺構が残存する。これは切り通しの道路であり、白川方向に向かって下がっている。この溝は、上流の集石状遺構、須恵器大甕、獣骨、土壙墓等の出土等から道路が廃絶時、または、その後、祭祀的な遺構へと変化し埋没していったと思われる。また、古代の畑跡、水路、道路状遺構等を検出した。

平成２５年３月３１日　印刷
平成２５年３月３１日　発行

新　屋　敷　遺　跡　2

熊本県文化財調査報告第２８６集

国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

編集・発行　熊本県教育委員会

〒 861-8007　熊本市北区龍田弓削１丁目４番 12 号
印刷　ホープ印刷株式会社

発 行 者　：　熊本県教育委員会
所　　属　：　教育総務局文化課
発行年度　：　平成２４年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 286 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 新屋敷遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日